築館町文化財調査報告書第18集

鰻沢遺跡

ーふるさと農道緊急整備事業に係る町道木戸2号線改良工事に伴う発掘調査報告書ー

平成17年 2 月

築館町教育委員会

築館町文化財調査報告書第18集

鰻　沢　遺　跡

ーふるさと農道緊急整備事業に係る町道木戸２号線改良工事に伴う発掘調査報告書ー

平成17年２月

築館町教育委員会

西区　SI10住居跡（北から）

西区　SI10住居跡炉土器埋設部（西から）

西区　SI106・SI108住居跡炉（南から）

鰻沢遺跡出土縄文土器

序

築館町には、旧石器時代から近世に至るまでの遺跡が54箇所確認されております。わたくしたちの祖先が残してくれた、文化遺産を後世に伝えていくことが、現在、生活を営んでいる我々に課せられた大きな使命であります。

鰻沢遺跡は、昭和49年の春に開田工事を行った際発見されました。当時としては、県北地方において縄文時代中期の集落跡の発見例はほとんどなく、大変貴重であるということから、土地所有者の埋蔵文化財に対する理解により、竪穴住居跡１軒のみ発掘調査し、その他の遺構については水田の区画を一部変更し、土盛りを行い保護することになりました。

本書は、鰻沢遺跡内に介在する町道木戸２号線の改良工事に伴う発掘調査の成果を収録しております。調査の結果、縄文時代と奈良～平安時代の集落跡が発見され、当時の人々の生活の一部を知ることのできる貴重な資料を得ることが出来ました。

最後になりましたが、発掘調査から本書の発行まで御協力を賜りました関係機関各位には、心から感謝申し上げます。

平成17年２月

築館町教育委員会
教育長　久　我　竹五郎

目　　次

第一章　はじめに …… 1
　Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 1
　Ⅱ　鰻沢遺跡周辺の遺跡について …… 1

第二章　調査に至る経緯と調査の方法 …… 3
　Ⅰ　調査に至る経緯 …… 3
　Ⅱ　調査の方法と経過 …… 3

第三章　基本層序 …… 12

第四章　発見した遺構と遺物 …… 13
　Ⅰ　縄文時代 …… 13
　Ⅱ　古　代 …… 74
　Ⅲ　中世以降及び時期不明の遺構 …… 87
　Ⅳ　昭和49年度調査の住居跡 …… 88

第五章　考　　察 …… 90

第六章　まとめ …… 104

引用・参考文献 …… 104

付　表

写真図版

例　　言

1．本書は築館町が計画したふるさと農道緊急整備事業に係る町道木戸２号線整備事業に先立って平成14年度に実施した発掘調査報告書である。

2．調査は築館町教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が協力した。

3．測量にあたっては、調査区西南端に設けた第X系国家座標X＝－140848、Y＝18736を原点とした３mグリッドを設定して行った。

4．本書における土色の記述には、「新版標準土色帳」（小山・竹原：1996）を用いた。

5．本書における第１図は国土地理院発行の1/25,000の地形図を複写して使用した。

6．本書における第２図、第66図は築館町都市計画図1/2,500の地形図をもとに作成した。

7．本書の作成に当たっては、調査員全員の協議の後、土器などの実測は千葉直樹、三浦　実、執筆は第一章　三浦　実、第二章　千葉長彦、第三章、第四章～六章を千葉直樹が行い、千葉直樹が編集した。

8．遺構番号は通し番号で各遺構に付した。報告書の作成に際して、発掘調査時に登録した遺構番号に欠番が出たが、原図の番号をそのまま本書に使用した。

9．遺構の種別については次の略号を使用して区別した。

竪穴住居跡（SI）、掘立柱建物跡（SB）、土壙（SK）、溝跡（SD）、井戸跡（SE）、炉跡・焼面（SX）、小穴（Pit）

10．平面図の柱穴の数字は底面の標高を表す。

11．坂戸遺跡の調査成果については、迫町教育委員会のご厚意により掲載させていただいた。報告書は平成16年度刊行予定である。

12．発掘調査及び整理・報告書の作成に際して以下の方々と関係機関から指導・助言を賜った。（五十音順・敬称略）

小野寺祥一郎、菅野智則、坂本真弓、佐藤信行、東北歴史博物館、迫町教育委員会、福島県文化財センター白河館、古川市教育委員会、宮城県多賀城跡調査研究所

調　査　要　項

遺 跡 名：鰻沢遺跡　（宮城県遺跡地名表記載番号41018、遺跡記号：DP）

所 在 地：宮城県栗原郡築館町字萩沢木戸

調査原因：ふるさと農道緊急整備事業に係る町道木戸２号線改良工事

調査主体：築館町教育委員会

調査協力：宮城県教育庁文化財保護課

調査期間：確認調査　平成12年12月１日～12月18日

平成13年10月９日～10月10日、２月９日

事前調査　平成14年６月10日～11月５日

調査対象面積：約4700㎡

調査面積　　：約1350㎡

調 査 員：

［確認調査］（平成12年度）千葉長彦（築館町教育委員会）

（平成13年度）千葉長彦（築館町教育委員会）

天野順陽、千葉直樹（宮城県教育庁文化財保護課）

［事前調査］千葉長彦、中鉢琢也、芳賀雅子（築館町教育委員会）

真山　悟、後藤秀一、佐久間光平、天野順陽、白崎恵介、千葉直樹

（宮城県教育庁文化財保護課）

第一章　はじめに

Ⅰ　遺跡の位置と環境

鰻沢遺跡は、栗原郡築館町字萩沢木戸地内に所在し、縄文時代中期から後期、奈良、平安時代の遺跡として周知されている（第１図）。

栗原郡には奥羽山脈から東に派生する陸前丘陵の一部である築館丘陵が発達している。築館丘陵は、築館町内を東流する迫川やその支流によって開析され、いくつかの小丘陵に分岐し樹枝状の地形を形成している。これらの丘陵の一つに東西に細長く延びる独立丘陵があり、その丘陵上に本遺跡は立地している。町の中心部からは、東に約2.5kmの位置にあたる。

第１図　遺跡の位置

遺跡の立地する丘陵は東西約1.2㎞、南北約250mで東西に長く、高いところで標高25～30mあり、東に向かって緩やかに傾斜して低くなる。遺跡は、丘陵中央部の平坦面に位置しており、丘陵西部から本遺跡付近までは比較的平坦な地形であるが、本遺跡東端部からは東に向かって緩やかに傾斜して低くなる。丘陵の南北は本遺跡付近で一旦約100mの幅に狭まる（第３図）。

Ⅱ　鰻沢遺跡周辺の遺跡について

築館町には現在53ヶ所の遺跡が確認されている。ここでは、本遺跡周辺の主な遺跡について説明する。築館町の東に位置する伊豆沼・内沼の周辺には、本遺跡の他に町外の遺跡も含め、築館町嘉倉貝塚（佐藤・三好：2003、天野：2003）、木戸遺跡（森：1980）、佐内屋敷遺跡（森：1983）、照越台遺跡、玉荻台遺跡、砂子崎貝塚、横須賀貝塚、浄土遺跡、若柳町敷味貝塚（伊藤：1965）、迫町倉崎貝塚（阿部：1990）、唐木崎貝塚（阿部：1990）、糠塚貝塚、志波姫町宇南遺跡（斉藤：1979）などの縄文前期から晩期の多くの集落跡や貝塚が分布している（第２図）。これらは北上川下流域に分布する内陸淡水産貝塚群の北部にあたり、標高20～30mの緩やかな丘陵や段丘上に立地している。

嘉倉貝塚は、縄文時代前期後葉～晩期、弥生時代前期および古代の遺跡で、本遺跡の東約1.7㎞に位置し、本遺跡よりも一段下がった丘陵上に立地している。平成11～12年に宮城県教育委員会、平成13～14年に築館町教育委員会がそれぞれ調査を行った。その結果、竪穴住居跡が100軒以上、掘立柱建物跡、土壙墓等が検出されている。主な時期は大木５～７a式期で、特に大木６～７a式期には広場を中心とした環状集落の形態を呈している。古代の遺構では８世紀後半から９世紀前半頃と考えられる竪穴住居跡14軒が検出されている。

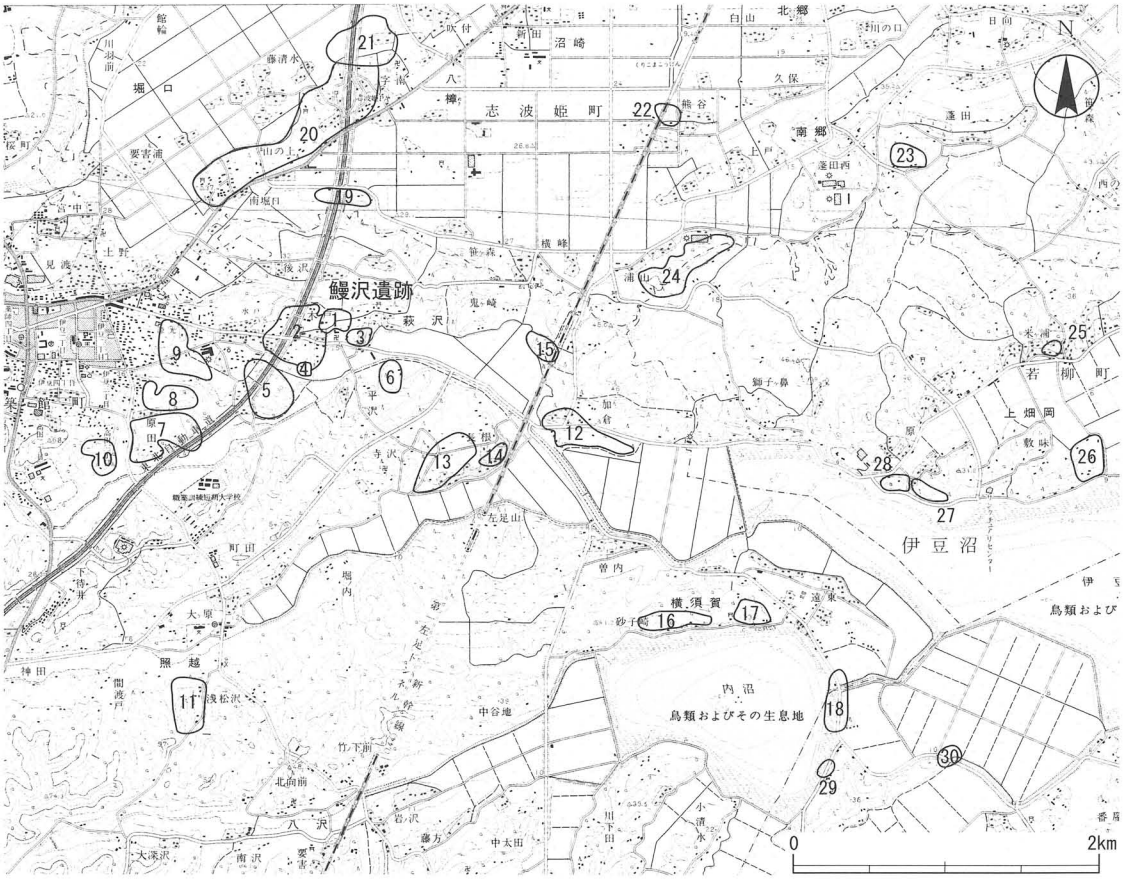
木戸遺跡は、縄文時代中期および古代の遺跡で、本遺跡と同じ丘陵上に立地し、西に隣接する。昭和51～52年にかけて宮城県教育委員会によって調査が行われ、竪穴住居跡３軒、竪穴遺構５基、焼土遺構１基、土壙２基が検出されている。このうち、竪穴住居跡１軒が大木８b式期のものである。また、８

世紀と考えられる竪穴住居跡が１軒検出されている。

佐内屋敷遺跡は、縄文時代中期および古代の遺跡で、本遺跡がある丘陵と谷を挟んで南側の丘陵上に立地している。昭和52年に宮城県教育委員会によって調査が行われ、竪穴住居跡38軒の他、土壙、合口甕棺、鍛冶遺構が検出されている。このうち竪穴住居跡２軒が大木８b式期のものである。残り36軒の竪穴住居跡は８世紀と９世紀中葉以降のものである。

本遺跡の東隣には中・近世の城館である萩沢城跡がある（栗原郡教育會：1918、紫桃：1973）。東西80m、南北100mの平山城形式で、南は崖に面し、北には空濠が巡っていたと考えられている。

また、北約３㎞の丘陵上には、７～８世紀の集落跡である志波姫町御駒堂遺跡、山の上遺跡があり、さらに北２㎞には、平成15年に国史跡に指定された古代城柵の伊治城跡がある。



No.	遺跡名	立地	時代	No.	遺跡名	立地	時代	No.	遺跡名	立地	時代
1	**鰻沢遺跡**	丘陵麓	縄文中、古代、中世	11	照越城跡	丘陵	中世	21	宇南遺跡	段丘	縄文前・晩、弥生～近世
2	木戸遺跡	丘陵	縄文中、古代	12	照越台遺跡	丘陵斜面	縄文中～晩、古墳、古代	22	熊谷遺跡	段丘	縄文、古代
3	萩沢城跡	丘陵	中世、近世	13	玉荻台遺跡	丘陵	縄文中～晩、古代	23	城内古墳	自然堤防	古墳後
4	木戸平沢遺跡	丘陵麓	縄文	14	嘉倉貝塚	丘陵	縄文前～晩、弥生、古代	24	浦山館跡	丘陵	中世
5	佐内屋敷遺跡	丘陵	縄文中、弥生、奈良、平安	15	嘉倉館	丘陵	中世	25	米ケ浦遺跡	丘陵斜面	縄文晩
6	小倉館	丘陵		16	砂子崎遺跡	丘陵斜面	縄文晩	26	敷味貝塚	丘陵	縄文後～晩
7	原田遺跡	丘陵	縄文中、古代	17	横須賀貝塚	丘陵麓	縄文晩、弥生	27	原貝塚	丘陵	縄文晩
8	源光遺跡	丘陵	古代	18	浄土遺跡	湖沼岸	縄文中・晩、弥生	28	平館跡	丘陵	中世、近世
9	下萩沢遺跡	丘陵	古代	19	山ノ上遺跡	段丘	縄文、古代	29	浄土遺跡（迫町）	丘陵	縄文中・晩、弥生、古代
10	高田山遺跡	丘陵	縄文、古代	20	御駒堂遺跡	段丘	縄文、弥生、古墳～近世	30	砂崎遺跡（迫町）	沖積平野	縄文中～晩、平安

第２図　遺跡の位置と周辺の地形

第 二 章　調査に至る経緯と調査の方法

Ⅰ．調査に至る経緯

鰻沢遺跡は、昭和49年春の開田工事の際に多くの遺物が出土したことで発見された遺跡である。この際、古川工業高等学校に在職していた三宅宗議氏らと宮城県教育庁文化財保護課が発掘調査を実施し、竪穴住居跡９軒を発見した。発見した住居跡は土盛りして保存することで地権者から了承が得られたため、同年５月３日～16日の期間でこのうち１軒を精査した。調査の結果、遺跡は縄文時代中期末の集落跡で、発見された住居跡は複式炉を有する住居跡であることが確認された（宮城県教育委員会：1975)。

平成10年にふるさと農道緊急整備事業が示され、平成12年に、鰻沢遺跡の範囲内を通る町道木戸２号線の整備事業が計画された。これを受けて、築館町役場建設課、築館町教育委員会と宮城県教育庁文化財保護課が対応について協議を行い、計画路線内における遺構の有無や遺跡の広がりを把握するための確認調査を行うことになった。

平成12年12月、本遺跡の東に位置する工事区間の終点区域の平坦部に任意のトレンチを設定し、重機により表土を除去後、遺構確認調査を行った。調査の結果、遺構等は確認されなかった。平成13年２月、本遺跡の西側に位置する木戸遺跡との間の工事区間について、町道部分を重機によりアスファルト及び砕石を除去した後、道路拡幅部分に関して遺構確認調査を行った。調査の結果、遺構等は確認されなかった。平成13年10月、昭和49年に調査された周辺の道路拡幅部分にトレンチを設定し、宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て、遺構確認調査を行った。調査の結果、古代の竪穴住居跡４軒、溝跡５条、土壙、柱穴等が確認され、道路敷設予定地内での遺跡の範囲は、遺構が集中するX=－140854、Y=18736付近からX=－140791、Y=18916（第Ⅹ系国家座標）のおよそ250m区間であると推定された。

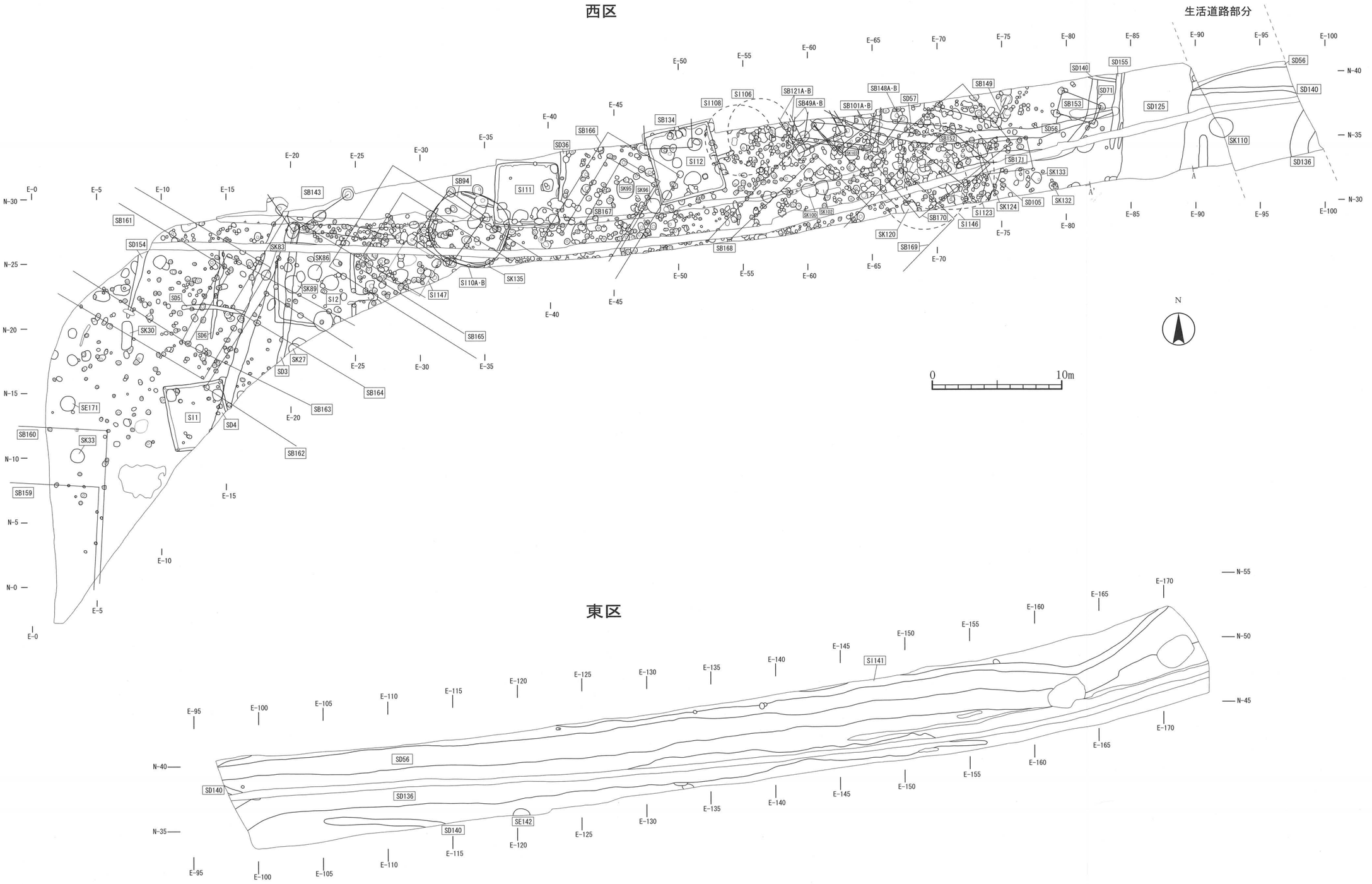
以上の調査成果を基に再度建設課と協議を行った結果、遺構が確認された区間に関しては、事前調査を実施することになった。

Ⅱ．調査の方法と経過

調査は、平成14年６月10日～11月５日に実施した。平成14年６月10日から、この範囲について重機により表土を除去し、地山面で遺構確認を行った。調査区は遺跡の南の民家に続く幅約７ｍの生活道路部分から西を西区、東を東区として設定した（第３、４図)。この生活道路部分については、長期に分断することや迂回道路を設けることが難しいことから、道路工事時に確認調査を行うこととした。調査区は、東西に延びる丘陵の平坦部にあり、調査前は現道部分と水田、畑、休耕地になっていた。西区のある部分は、本来は南から北に向かって緩やかに傾斜して低くなる地形であったと考えられるが、削平によって調査区南側に広がる水田面より大きく下がっている。東区のある部分は調査区西側から東側に向かって緩やかに傾斜して低くなっている。

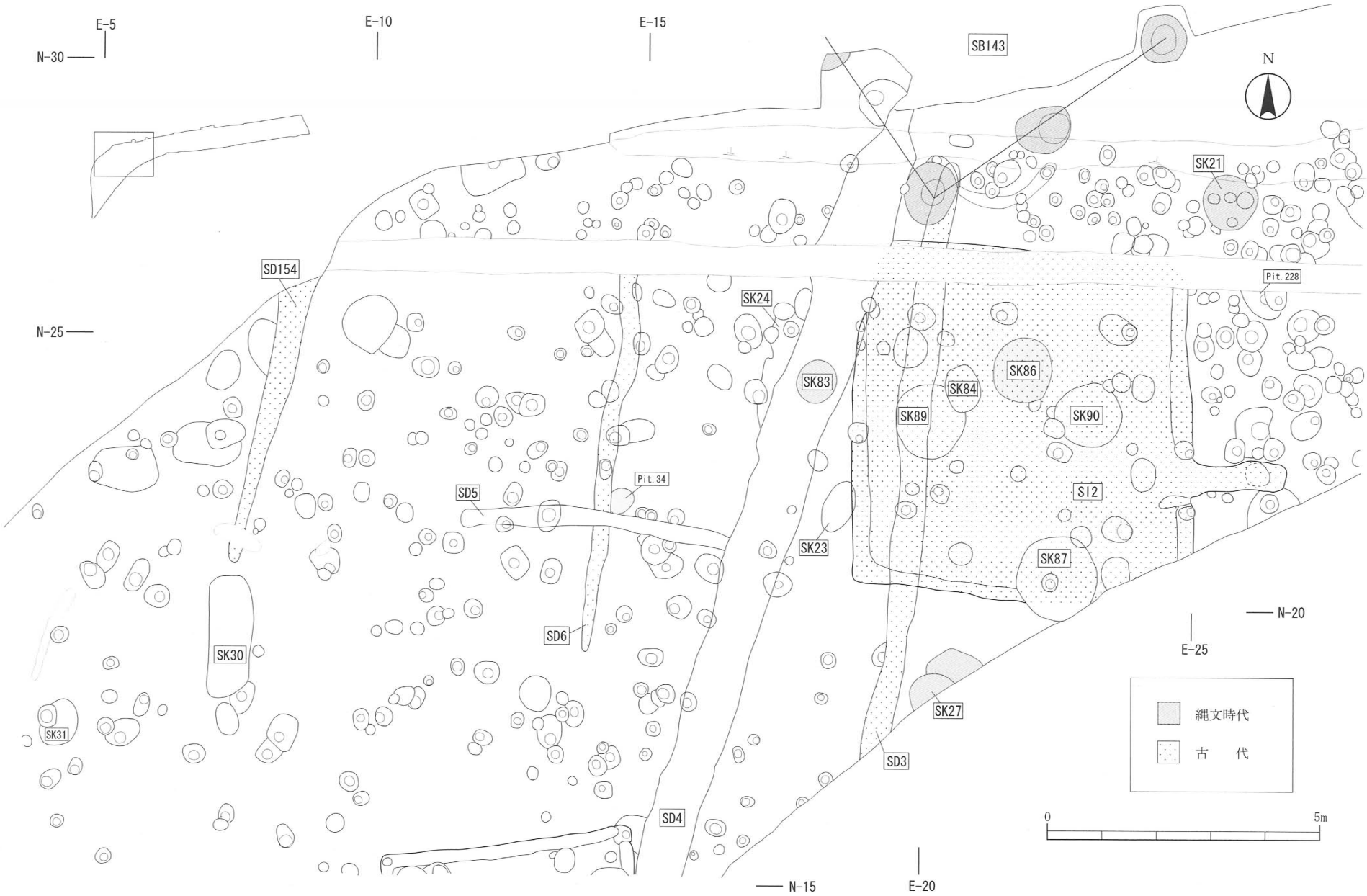
表土を除去し、遺構確認を行った結果、西区では竪穴住居跡、溝跡、土壙など多数の遺構が検出さ

第３図　鰻沢遺跡の調査区配置図（1/2,500）

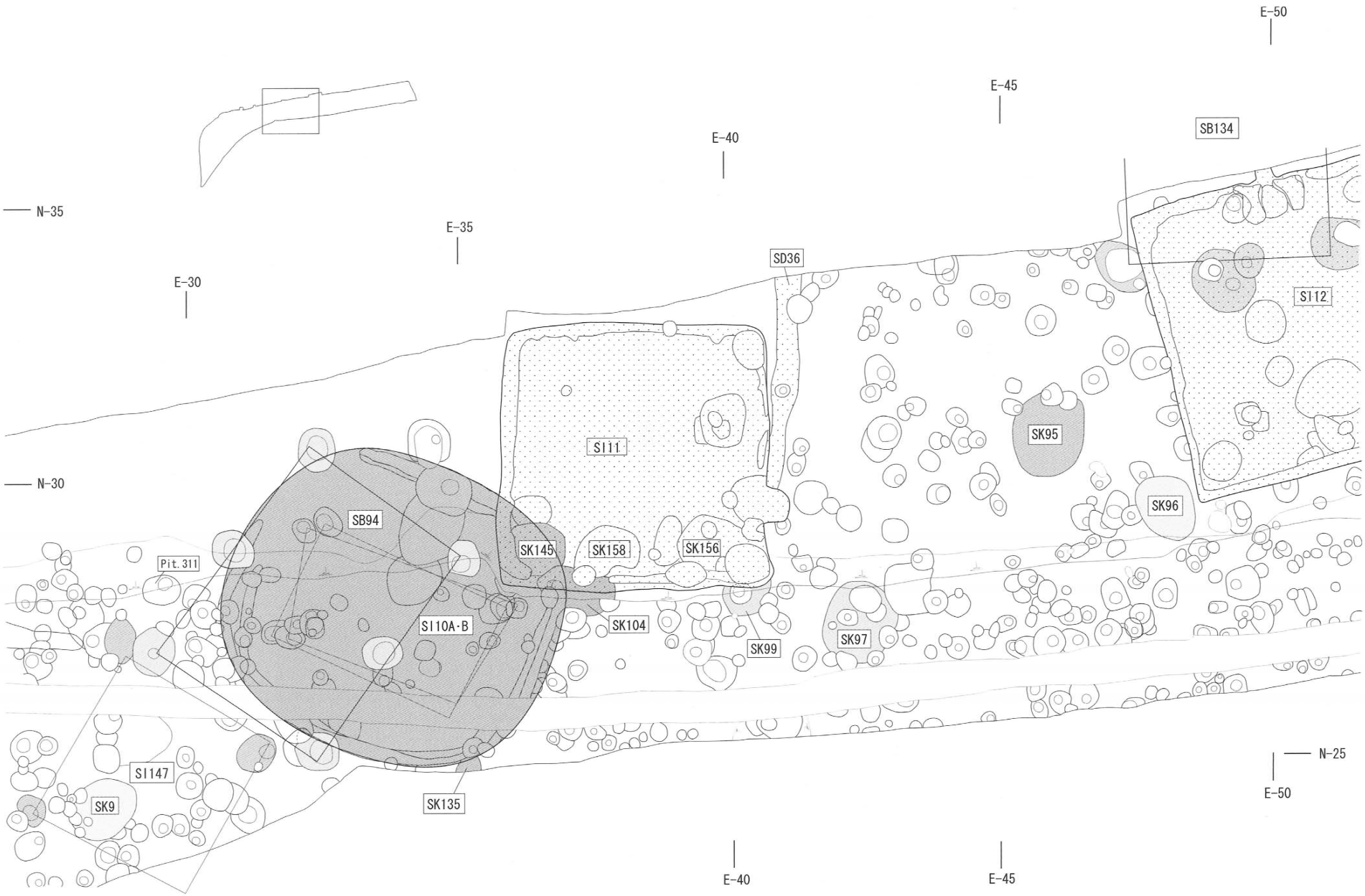


第 4 図　鰻沢遺跡検出主要遺構全体図（1/300）

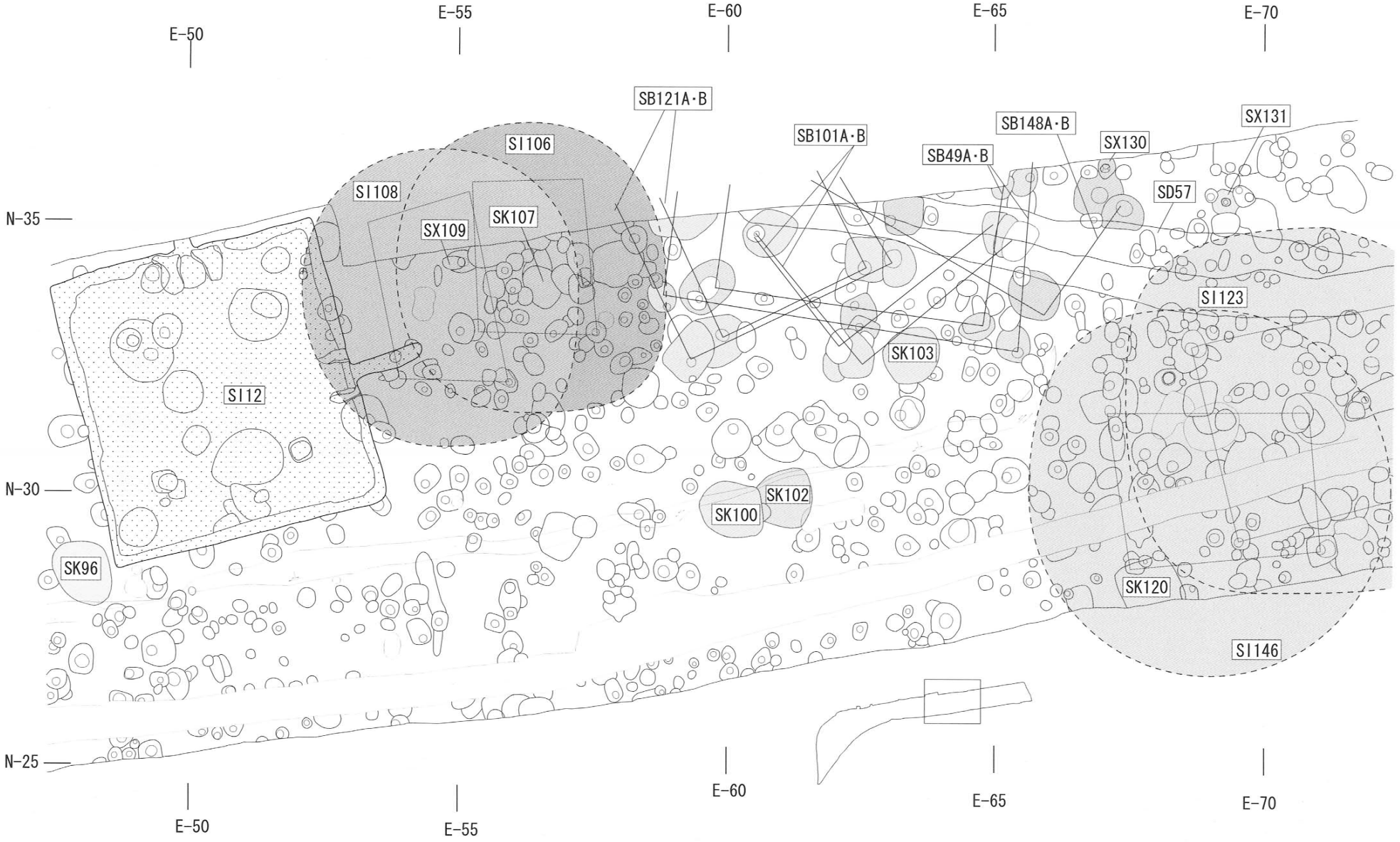
第５図　西区縄文時代・古代主要遺構配置図（1）（1/100）



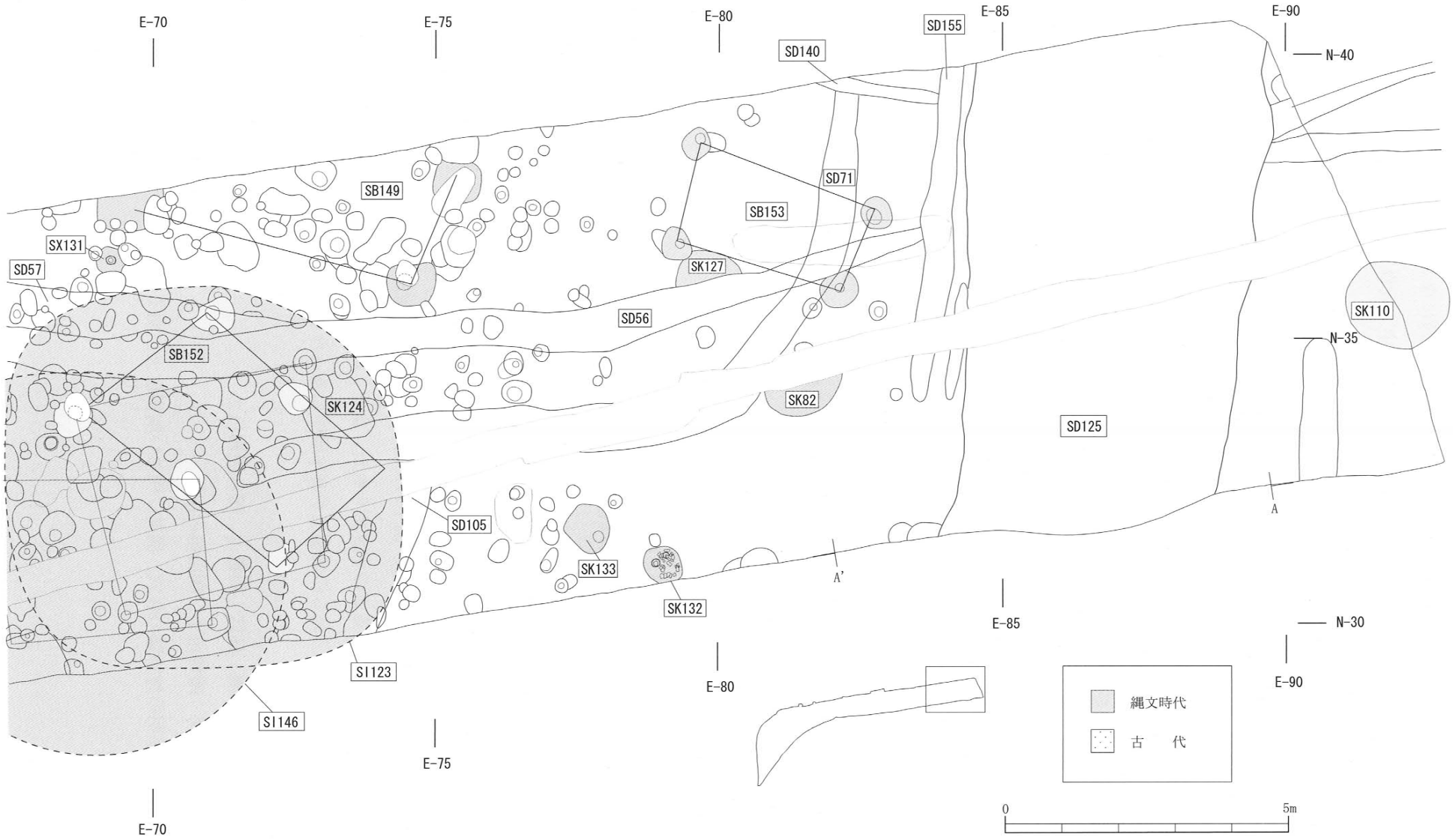
第 6 図　西区縄文時代・古代主要遺構配置図（2）（1/100）



第７図　西区縄文時代・古代主要遺構配置図（3）（1/100）



第 8 図　西区縄文時代・古代主要遺構配置図（4）（1/100）



第 9 図　西区縄文時代・古代主要遺構配置図（5）（1/100）

れたが、東区では溝跡４条が検出されたのみで、遺構密度が希薄になる状況が確認された。また、西区は鰻沢遺跡（縄文・古代）が主体であり、東区は萩沢城跡（中・近世）に関わる遺構が主体であることがわかった。

精査に際しては、調査区西端に任意の基準点を設け、これを原点として南北軸を座標北にあわせて組んだ直角座標をもとに、３m単位のグリッドを設定した。調査原点の国家座標は、第X系国家座標X＝－140848、Y＝18736である。その後、調査の状況に応じて、西区については20分の１平面図・断面図を作成し、遺構の希薄な東区については、50分の１平面図・断面図を作成した。また、35mmカラースライド・白黒及び60mmのカラー・白黒写真による記録も合わせて行った。

西区及び東区の調査は平成14年10月18日に終了し、生活道路部分については11月５日の道路工事の際に遺構確認を行った。その結果、西区で検出した土壙と溝跡の延長を検出したため、100分の１平面図に記録し、調査を終了した。

第三章　基本層序

表土下は薄い漸移層をはさんで、すぐ地山面になっており、西区中央付近では、地表から遺構確認面である地山面まで20㎝程度である。東区は地表面から遺構確認面である地山面まで約60㎝である。調査区を設定した丘陵部の基本層序は以下の通りである。

第Ⅰ層　調査区全体を覆う表土である。
第Ⅱ層　Ⅱ層からⅢ層への漸移層で、暗褐色シルトである。
第Ⅲ層　地山である。削平により、残存状況が異なるが、次の３層に大別される。
　Ⅲa層　黄褐色（10YR5/4）粘土層
　Ⅲb層　褐色（10YR4/6）砂層で、砂礫を含む。
　Ⅲc層　白色（10YR8/2）粘土層

遺構確認面は基本的にⅢa層である。削平のため、全体的に遺構の残存状況は悪く、竪穴住居跡は炉跡と主柱穴のみが残存しているものも認められた。また、調査の結果確認した遺構の堆積土には次のようなものがあり、本来はこれらの堆積土が基本層序にあったものと推定される。

縄文時代の住居跡、土壙、柱穴：黒色土、暗い黒褐色土
古代の住居跡、溝跡：暗褐色土、灰白色火山灰。
中世以降、時期不明の建物跡の柱穴、溝跡：明るい暗褐色土、明るい黒褐色土、にぶい黄褐色土

第 四 章　発見した遺構と遺物

今回の調査では、縄文時代中期末から中近世まで各時代の遺構･遺物が確認された。遺構確認面は基本層序の第Ⅲ層（地山面）である。発見された遺構は、竪穴住居跡12軒以上（縄文８以上、古代４）、掘立柱建物跡多数（縄文14以上、中世以降多数）、炉跡３基（縄文）、土壙38基（縄文25、古代３、中世以降・時期不明10）、溝跡13条（古代４、中世以降９）、井戸跡２基（中世以降）等である（第４～９図）。遺物は縄文土器を中心に石器、土偶、土製品、土師器、須恵器、近世陶器などが出土している。

以下では、これらの遺構と遺物をⅠ　縄文時代、Ⅱ　古代、Ⅲ　中世以降に分けて記述する。

Ⅰ　縄 文 時 代

竪穴住居跡８軒以上、掘立柱建物跡14棟以上、土壙25基などを発見した。

１　竪穴住居跡

８軒以上確認した。壁を確認できた住居跡はSI10住居跡だけで、その他は削平のために、炉跡と主柱穴、壁柱穴と考えられるピットのみ確認できた。主柱穴は、炉跡を基準とした時の位置、柱の掘方の大きさ、堆積土の特徴、底面の標高値をもとに認識した。SI147住居跡では、壁柱穴を特定できなかったが、土器埋設炉、主柱穴、焼土ブロックの広がりが確認されたことから、住居跡とした。

【SI10住居跡】（第10図）

［位置］N27・E34で確認した。住居跡の約3/4が残存し、北側では住居跡の壁、床、周溝の大半が削平されている。また、南側の一部が水道管の設置によって攪乱を受けている。

［重複］SK104、SK135、SK145土壙、SB94建物跡、SI11住居跡と重複する。SK104、SK135、SK145土壙より新しく、SB94建物跡、SI11住居跡より古い。本住居跡は１度建て替えられている。古いものから、SI10A、SI10Bとする。

〈SI10A〉

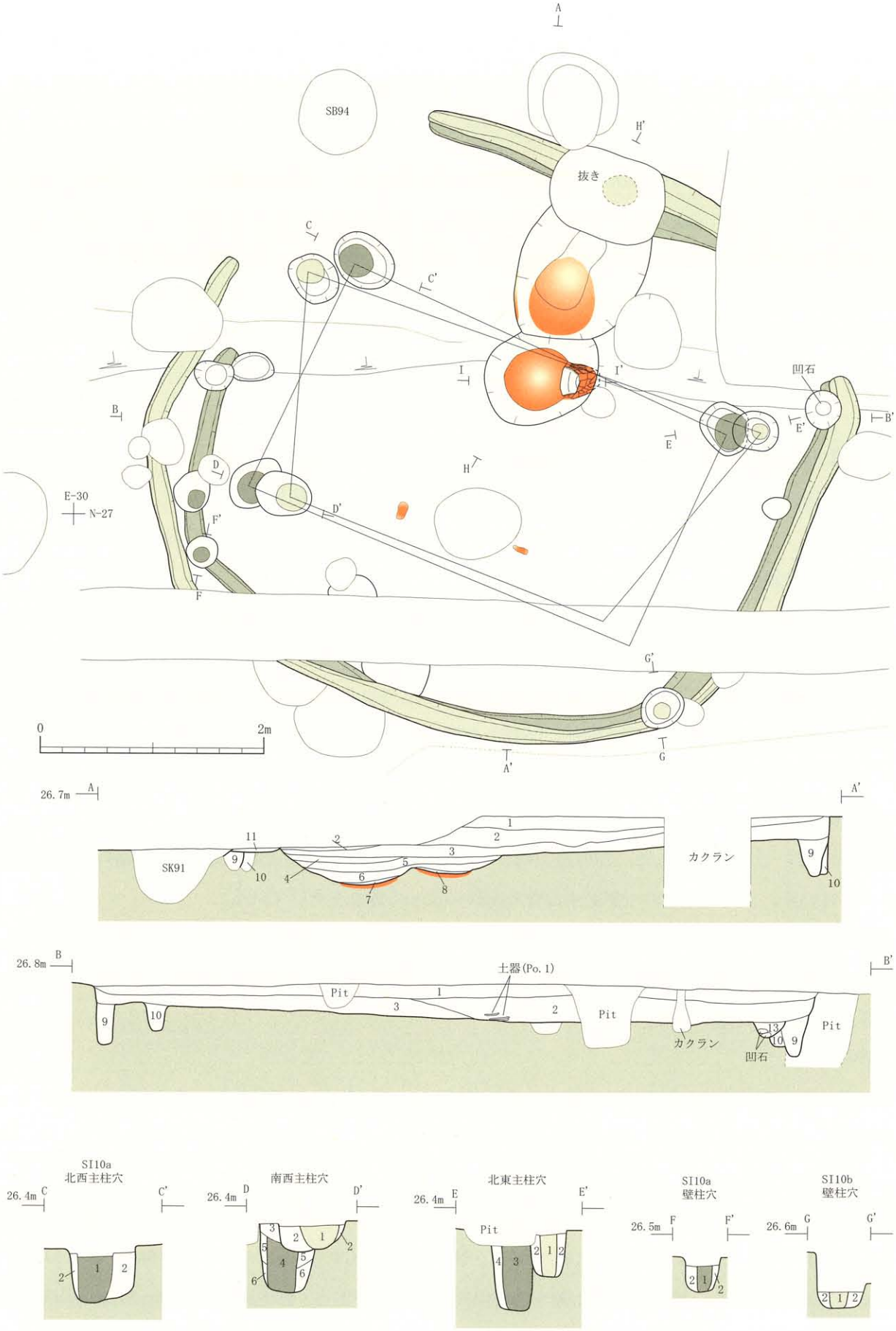
［規模・平面形］周溝と壁柱穴から推定すると長径5.2m、短径4.9mの不整円形とみられる。

［堆積土・壁］検出されなかった。

［床面］地山を床面とし、SI10Bと共通すると考えられる。

［主柱穴］４個検出し、そのうち３ヶ所で柱痕跡を確認した。柱間寸法は、北西主柱穴－北東主柱穴で3.7m、北西主柱穴－南西主柱穴で2.2mである。柱穴の平面形は、長径48～58㎝、短径40～46㎝の楕円形で、深さが67～80㎝、堆積土は地山粒を含む暗褐色シルトである。柱痕跡は直径30～34㎝の円形で、堆積土は地山粒、炭化物を含む黒褐色シルトである。

［周溝］住居跡西側および東側で幅14～18㎝、深さ14～30㎝の周溝を検出した。北西は削平され、北東はSI11住居跡によって壊されている。また、南側の大部分はSI10Bの周溝に壊されている。



第10図　SI10住居跡　平面図・断面図（1/50）

No.	遺　構	種　類	土　色	土　性	備　　考
1	SI10	1a 層	黒褐色　10YR3/2	シルト	炭化物、砂粒、土器片を多く含む　(人為堆積)
2		1b 層	黒褐色　10YR2/3	シルト	炭化物、砂粒、土器片を特に多く含む。土器廃棄層　(人為堆積)
3		2層	暗褐色　10YR3/3	シルト	焼土粒、炭化物を含む　(自然堆積)
4		炉内堆積土	暗褐色　10YR3/3	シルト	焼土粒、炭化物を多く含む　(自然堆積)
5		炉内堆積土	暗褐色　10YR3/4	砂質シルト	炭化物、砂粒を含む　(自然堆積)
6		炉内堆積土	暗褐色　10YR3/4	シルト	焼土粒、炭化物を含む (自然堆積)
7		炉内堆積土	暗褐色　10YR3/4	砂質シルト	炭化物、灰を含む。下面で赤変硬化　(機能時堆積)
8		炉内堆積土	暗褐色　10YR3/4	シルト	焼土粒、炭化物、白色粘土ブロック、灰を含む。下面で赤変硬化　(機能時堆積)
9		周溝埋土 (新)	黒褐色　10YR2/3	砂質シルト	地山ブロック、砂粒を含む　(人為堆積)
10		周溝埋土 (古)	暗褐色　10YR3/3	砂質シルト	地山ブロックを多く含む　(人為堆積)
11		柱抜き取り穴	暗褐色　10YR3/3	シルト	炭粒、砂粒を含む　(人為堆積)
12		柱痕跡	暗褐色　10YR3/3	シルト	
13		住居跡付属ピット	暗褐色　10YR3/4	シルト	焼土粒、炭粒を含む。凹石2個　(自然堆積)
1	北西主柱穴 (C-C')	柱痕跡	黒褐色　10YR2/2	シルト	炭化物、地山砂粒を含む
2		掘方埋土	褐　色　10YR4/4	砂質シルト	白色粘土ブロック、砂礫を含む
1	南西主柱穴 (D-D')	柱痕跡 (SI10b)	黒褐色　10YR2/2	シルト	炭化物を多く含む
2		掘方埋土 (SI10b)	黒褐色　10YR2/2	シルト	炭化物、砂礫を含む
3		柱抜き取り穴 (SI10a)		シルト	地山粒を少量含む
4		柱痕跡 (SI10a)	黒褐色　10YR2/2	シルト	炭化物を含む
5		掘方埋土 (SI10a)	黒褐色　10YR2/3	シルト	地山粒を少量含む
6		掘方埋土 (SI10a)	暗褐色　10YR3/4	シルト	地山砂粒を多く含む
1	北東主柱穴 (E-E')	柱痕跡 (SI10b)	黒褐色　10YR2/2	シルト	
2		掘方埋土 (SI10b)	黒褐色　10YR2/3	シルト	白色粘土粒を含む
3		柱痕跡 (SI10a)	黒褐色　10YR2/2	シルト	焼土粒、炭粒を含む
4		掘方埋土 (SI10a)	暗褐色　10YR3/4	シルト	地山粒を含む
1	壁柱穴 (SI10a) (F-F')	柱痕跡	黒褐色　10YR2/3	シルト	地山粒土粒、焼土粒、炭化物を含む
2		掘方埋土	黒褐色　10YR2/3	シルト	地山粒土粒を多く含む。炭化物を含む
1	壁柱穴 (SI10b) (G-G')	柱痕跡	黒褐色　10YR2/3	シルト	焼土粒、炭化物を含む
2		掘方埋土	黒褐色　10YR2/3	シルト	地山粒土粒を多く含む。炭化物を含む
1	炉跡埋設土器 (I-I')	埋設土器内堆積土	暗褐色　10YR3/4	シルト	焼土粒、炭化物、木炭、骨片を少量含む　(自然堆積)
2	炉跡埋設土器 (I-I')	埋設土器内堆積土	黒褐色　10YR2/3	シルト	焼土ブロック、炭化物、骨片を含む。木炭を多く含む

［壁柱穴］３個検出し、そのうち２ヶ所で柱痕跡を確認した。柱穴の平面形は直径28～32cm の円形で、深さが28～35cm である。柱痕跡の平面形は14～17cm の円形である。

［炉］検出されていない。柱穴の配置や住居跡の規模から、SI10Bと同位置にあったと考えられる。

［出土遺物］主柱穴と壁柱穴から、土器が出土している（第14図８～10)。

〈SI10B〉

［規模・平面形］周溝と壁柱穴から推定すると長径5.8m、短径5.5mの不整円形とみられる。

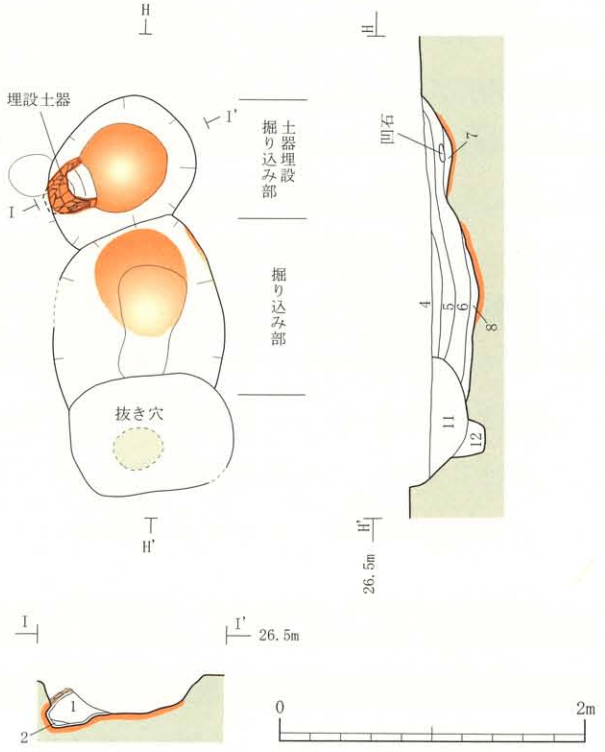
［堆積土］３層に分かれる。住居跡廃絶後、土器を多く含む黒褐色シルト（１a、１b層）で人為的に埋め戻されている。

［壁］残りの良い南側で、床面から検出面までの高さは29cm である。

［床面］地山を床面としている。

［床面の焼面］炉跡の延長線上の住居跡南側で小さい焼面を検出した。

［主柱穴］４個検出し、そのうち３ヶ所で柱痕跡を、１ヶ所で柱の抜き取り穴を確認した。主柱はSI10Aと同様に４本と考えられるが、６本の可能性もある。柱間寸法は、北西主柱穴－北東主柱穴で4.3m、北西主柱穴－南西主柱穴で2.1mである。柱穴の平面形は長径48～52cm、短径40～42cm の楕円形で、深さが28～42cm、堆積土は地山粒、砂礫を含む黒褐色シルトである。柱痕跡は18～28cm の円形で、堆積土は炭化物を多く含む黒褐色シルトである。



第11図　SI10b住居跡炉　平面図・断面図（1/50）

［周溝］住居跡をほぼ全周する幅16～30cm、深さ13～45cm の周溝を検出した。北西は削平され、北東はSI11住居跡によって壊されている。

［壁柱穴］１個検出し、柱痕跡を確認した。柱穴の平面形は、直径36cm の円形で、深さが24cm である。柱痕跡の平面形は16～18cm の円形である。

［炉］土器埋設掘り込み部および掘り込み部の２部構成による複式炉である（第11図）（註）。土器埋設掘り込み部が住居跡の中心からやや北側に位置し、掘り込み部が住居跡の南壁近くまでのびる。石組に使われた石、またはそれを抜き取った痕跡は認められない。堆積土は５層認められ、白色粘土層を底面としている。残存する大きさは長軸が約1.9m、短軸が約1.1mである。

〈土器埋設掘り込み部〉直径96cm、深さ28cm の円形で、断面形は皿状を呈する。底面直上に炭、灰、焼土粒を含む層があり、炉機能時の堆積土と考えられる。中央部にはあまり焼けた痕跡がなく、その周囲に強い加熱を受けて赤変、硬化した面が認められる。埋設土器は斜位に据えられ、口縁部が炉の中央に向けられている。埋設土器の掘方は土器とほぼ同じ大きさで、胴下部が炉壁から奥に入る。埋設土器を据えた後、粘土で土器片を貼り付けて埋設土器を覆っており、土器の内面、粘土、貼り付けられた土器片は著しい加熱を受けている。埋設土器に貼り付けられた土器片は４個体分（第15図）であった。

〈掘り込み部〉長径110cm 以上、短径112cm の楕円形で、南端は柱の抜き取り穴によって壊されている。壁付近から中央に向かって緩やかに傾斜している。底面直上に炭、灰、焼土粒を含む層があり、炉機能時の堆積土と考えられる。掘り込み部の東側、南側、西側底面は強い加熱を受けて赤変、硬化し、中央部と北側底面には焼け跡はほとんどみられない。西側壁面に白色粘土が貼ってあり、この部分には熱を受けた痕跡が顕著に見られる。

［その他の施設］炉の南壁近くに柱の抜き取り穴があり、その底面には柱痕跡が認められた。この柱痕跡は住居跡に伴うものと考えられるが、性格は不明である。

［出土遺物］縄文土器（第12～15図）、袖珍土器（第51図４）、耳飾り（第51図９、11）、斧状土製品（第52図５）、円盤状土製品（第53図１～４）、石器（第54図２、３、６、７、16、17、23、30、第55図２、５、８、９、第56図１～３、５、６）などが出土している。第15図３は炉の埋設土器である。深鉢で、口縁部を一部欠き、4/5が残存していた。同図１、２、４、５は炉埋設土器の外側に粘土で貼り付けられていた土器である。すべて深鉢で、１は口縁部と底部の小破片、２は底部から胴下部の1/2、４は底部と胴部の小破片、５は1/3が残存していた。第14図13の深鉢は住居跡中央部の１b層と床面直上から出土しており、住居廃絶時の遺物と考えられる。

註）ここでは、施設が複数あるという広義の「複式炉」として語句を用いている。

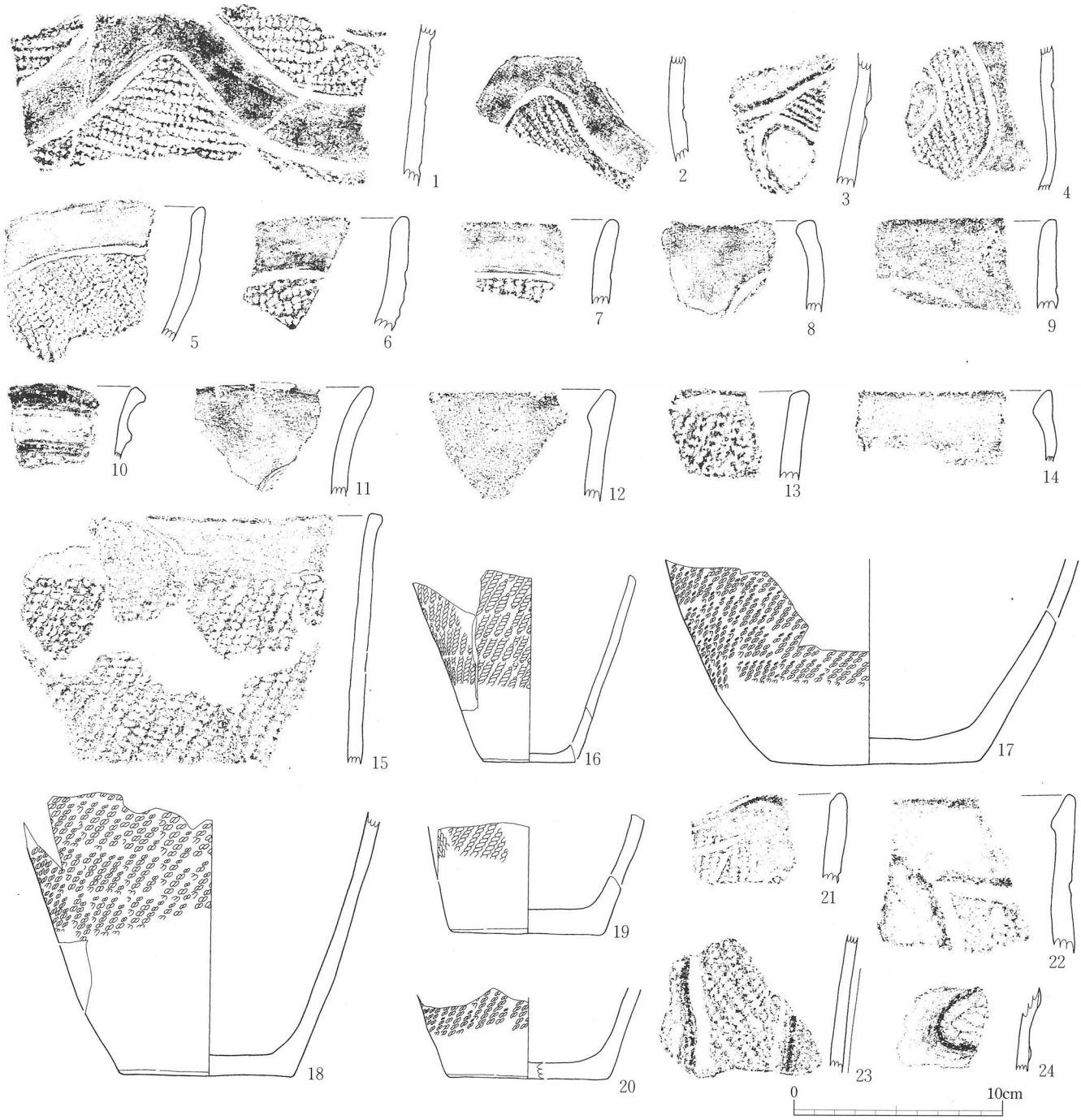
【SI106住居跡】（第16図）

［位置］N35・E58で確認した。残存状況が悪く、炉、主柱穴、壁柱穴のみを確認した。

［重複］SI108住居跡、SB121B建物跡と重複するが、新旧関係は不明である。

No.	層　位	器　形	特　　徴	時　期	写真図版
1	1a 層	深　鉢	口縁部：波状縁、渦巻文	後期初頭～前葉	10-1
2	1a 層	深　鉢	胴部：鎖状隆線	後期初頭	10-2
3	1a 層	深　鉢	口縁部：平縁、沈線文	中期末	10-6
4	1a 層	深　鉢	口縁部：平縁、沈線文　胴部：縄文	中期末	10-3
5	1a 層	深　鉢	口縁部：平縁、沈線文	中期末	10-9
6	1a 層	深　鉢	口縁部：平縁、沈線文　胴部：縄文（RL）	中期末	10-4
7	1a 層	深　鉢	口縁部：平縁、縄文	中期末	10-6
8	1a 層	深　鉢	口縁部：平縁	中期末	10-8
9	1a 層	深　鉢	胴部：沈線文、縄文	中期末	10-10
10	堆積土	深　鉢	胴部：波状縁、沈線文、縄文（LR）	中期末	10-7
11	1b 層	深　鉢	口縁部：波状縁　胴部：渦巻文	後期初頭～前葉	10-11
12	1b 層	深　鉢	口縁部：頂部盲孔の突起、渦巻文	中期末～後期前葉	10-12
13	1b 層	深　鉢	口縁部：波状縁、貫通孔、刺突による円文　胴部：「O」字状文	中期末	10-13
14	1b 層	注　口	口縁部：竹管状工具による円形刺突列、円文、縄文	中期末	10-14
15	1b 層	深　鉢	口縁部：波状縁、竹管状工具による楕円形刺突列　胴部：縄文（RL）	中期末	10-15
16	1b 層	深　鉢	口縁部：山形突起　胴部：横位沈線文、縄文	中期末	10-16
17	1b 層	深　鉢	口縁部：山形突起	中期末	10-17
18	1b 層	深　鉢	口縁部：平縁、隆沈線文、縄文	中期末	10-18
19	1b 層	深　鉢	口縁部：平縁、隆沈線文、縄文（LR）	中期末	10-20
20	1b 層	深　鉢	口縁部：平縁、「O」字状文、磨消縄文（RLR）	中期末	10-21
21	1b 層	深　鉢	胴部：「∫」字状文、磨消縄文（RLR）	中期末	10-19
22	1b 層	鉢	口縁部：平縁　胴部：波濤文、充填縄文（RLR）	中期末	10-23
23	1b 層	深　鉢	胴部：隆沈線文、縄文（LR）	中期末	10-22

第12図　SI10住居跡1a 層、1b 層出土土器



No.	層　位	器　形	特　徴	時　期	写真図版
1	1b 層	深　鉢	胴部：沈線文（非連結「S」字状文か）、充填縄文（LR）	中期末	10-25
2	1b 層	深　鉢	胴部：沈線文（非連結「S」字状文か）、縄文（LRL）	中期末	10-26
3	1b 層	深　鉢	胴部：隆沈線文、縄文（LR）	中期末	10-27
4	1b 層	深　鉢	胴部：沈線文、充填縄文（RL）	中期末	10-28
5	1b 層	深　鉢	口縁部：波状縁、縄文	中期末	10-29
6	1b 層	深　鉢	口縁部：波状縁　胴部：沈線文、縄文	中期末	10-30
7	1b 層	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：横位沈線文、縄文	中期末	11-1
8	1b 層	深　鉢	口縁部：波状縁、沈線文	中期末	11-2
9	1b 層	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：沈線文	中期末	11-3
10	1b 層	深　鉢	口縁部：平縁、沈線文	中期末	11-4
11	1b 層	深　鉢	口縁部：波状縁、隆沈線文	中期末	11-5
12	1b 層	深　鉢	口縁部：平縁	中期末	11-6
13	1b 層	深　鉢	口縁部：平縁		11-7
14	1b 層	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：縄文（RLR）		11-8
15	1b 層	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：縄文（RLR）		11-9
16	1b 層	深　鉢	胴部：縄文（RL）		13-1
17	1b 層	深　鉢	胴部：縄文（RLR）		13-4
18	1b 層	深　鉢	胴部：縄文（RL）		13-5
19	1b 層	深　鉢	胴部：縄文（RL）		13-3
20	1b 層	深　鉢	胴部：縄文（RLR）		13-2
21	2 層	深　鉢	口縁部：波状縁　胴部：沈線文、縄文	中期末	11-10
22	2 層	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：隆沈線文、縄文（RL）	中期末	11-11
23	2 層	深　鉢	胴部：隆沈線文、縄文（LR）	中期末	11-13
24	2 層	深　鉢	胴部：隆沈線文、縄文	中期末	11-17

第13図　SI10住居跡1b 層出土土器

No.	層　位	器　形	特　　徴	時　期	写真図版
1	2　層	深　鉢	胴部：隆沈線文、縄文（RL）	中期末	13-6
2	2　層	注　口	胴部：沈線文	中期末	11-19
3	2　層	深　鉢	胴部：隆沈線文、縄文	中期末	11-16
4	2　層	深　鉢	胴部：隆沈線文、縄文（RLR）	中期末	11-18
5	2　層	深　鉢	胴部：隆沈線文、充填縄文（RL）	中期末	11-12
6	2　層	深　鉢	胴部：沈線文、縄文	中期末	11-15
7	2　層	深　鉢	胴部：隆沈線文、充填縄文（RL）	中期末	11-14
8	SI10A-南西主柱穴	深　鉢	口縁部：波状縁　沈線文、縄文	中期末	11-24
9	SI10A-北西主柱穴	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：隆沈線文、縄文（LR）	中期末	11-25
10	SI10A-壁柱穴	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：隆沈線文	中期末	11-26
11	周　溝	深　鉢	胴部：沈線文、縄文（RLR）	中期末	11-23
12	SI10B-床　面	深　鉢	胴部：隆沈線文、縄文	中期末	11-22
13	SI10B-床面直上,1b層	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：「U」字状文、充填縄文（LR）、縄文（LR）　土器Po.1	中期末	10-24
14	SI10B-炉土器埋設掘り込み部3層	深　鉢	口縁部：平縁、連続刻目文	中期末	11-28
15	SI10B-炉土器埋設掘り込み部3層	深　鉢	胴部：沈線文、縄文	中期末	11-29
16	SI10B-炉2層	深　鉢	口縁部：平縁、隆沈線文、縄文（RL）	中期末	11-27
17	SI10B-炉掘り込み部4層	深　鉢	胴部：隆沈線文、充填縄文	中期末	11-30
18	SI10B-炉掘り込み部4層	鉢	口縁部：平縁、変形「S」字状文、充填縄文（LRL）	中期末	11-31

第14図　SI10住居跡1b層、2層、床面、柱穴、炉出土土器

No.	遺構・層位	器　形	特　　徴	時　期	写真図版
1	SI10B-炉埋設土器貼付	深　鉢	口縁部：波状縁、非連結「S」字状文、充填縄文（RL）	中期末	11-33
2	SI10B-炉埋設土器貼付	深　鉢	胴部：縄文（RLR）	中期末	13-7
3	SI10B-炉跡埋設土器	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：非連結「S」字状文、充填縄文（RL）	中期末	12
4	SI10B-炉埋設土器貼付	深　鉢	胴部：隆沈線文、充填縄文	中期末	11-32
5	SI10B-炉埋設土器貼付	深　鉢	口縁部：平縁、横位隆線文　胴部：縄文LR	中期末	13-8

第15図　SI10住居跡炉埋設土器

［規模・平面形］壁柱穴から推定すると直径約5.0mの不整円形とみられる。また、柱間寸法は、南西主柱穴－南東主柱穴で2.3mである。

［堆積土・壁］検出されなかった。

［主柱穴］2個検出し、そのうち1ヶ所で柱痕跡を確認した。柱の配置から主柱は4本と推定される。柱穴の平面形は直径40cmの円形で、残存する深さが47～49cm、堆積土は黒褐色シルトである。柱痕跡は直径12cmの円形で、堆積土は焼土を多く含む黒褐色シルトである。

［壁柱穴］4個検出し、そのうち2ヶ所で柱痕跡を確認した。平面形は直径22～34cmの円形で、深さが20～33cm、堆積土は黒褐色または暗褐色シルトである。柱痕跡の平面形は直径12cmの円形である。

［炉］土器埋設掘り込み部および掘り込み部の2部構成による複式炉である。

〈土器埋設掘り込み部〉直径48cm、深さ7cmの円形で、断面形は皿状を呈する。埋設土器は斜位に据えられている。掘方は埋設土器とほぼ同じで、土器の周囲は強い加熱を受けて赤変、硬化している。

〈掘り込み部〉長径100cm、短径80cmの楕円形で、底面から緩やかに立ち上がる。底面直上に炭、灰、焼土粒を含む層があり、炉機能時の堆積土と考えられる。掘り込み部底面に直径約34cmの赤変、硬化した面がある。

［出土遺物］炉に埋設された土器は深鉢で、約3/5が残存している（第17図1）。

【SI108住居跡】（第16図）

［位置］N35・E56で確認した。残存状況が悪く、炉、主柱穴、壁柱穴のみを確認した。

［重複］SI106、SI12住居跡、SX109炉跡と重複する。SI12住居跡より古い。SI106住居跡、SX109炉跡との新旧関係は不明である。

［規模・平面形］壁柱穴から推定すると直径5.2mの不整円形とみられる。また、柱間寸法は南西主柱穴－南東主柱穴で2.0mである。

［堆積土・壁］検出されなかった。

［主柱穴］3個検出し、そのうち2ヶ所で柱痕跡を、1ヶ所で柱の抜き取り穴を確認した。柱の配置から主柱は4本と推定される。柱穴は長径50cm、短径40cmの楕円形で、残存する深さが20～47cm、堆積土は黒褐色シルトである。柱痕跡の平面形は直径14～16cmの円形で、堆積土は黒褐色シルトである。

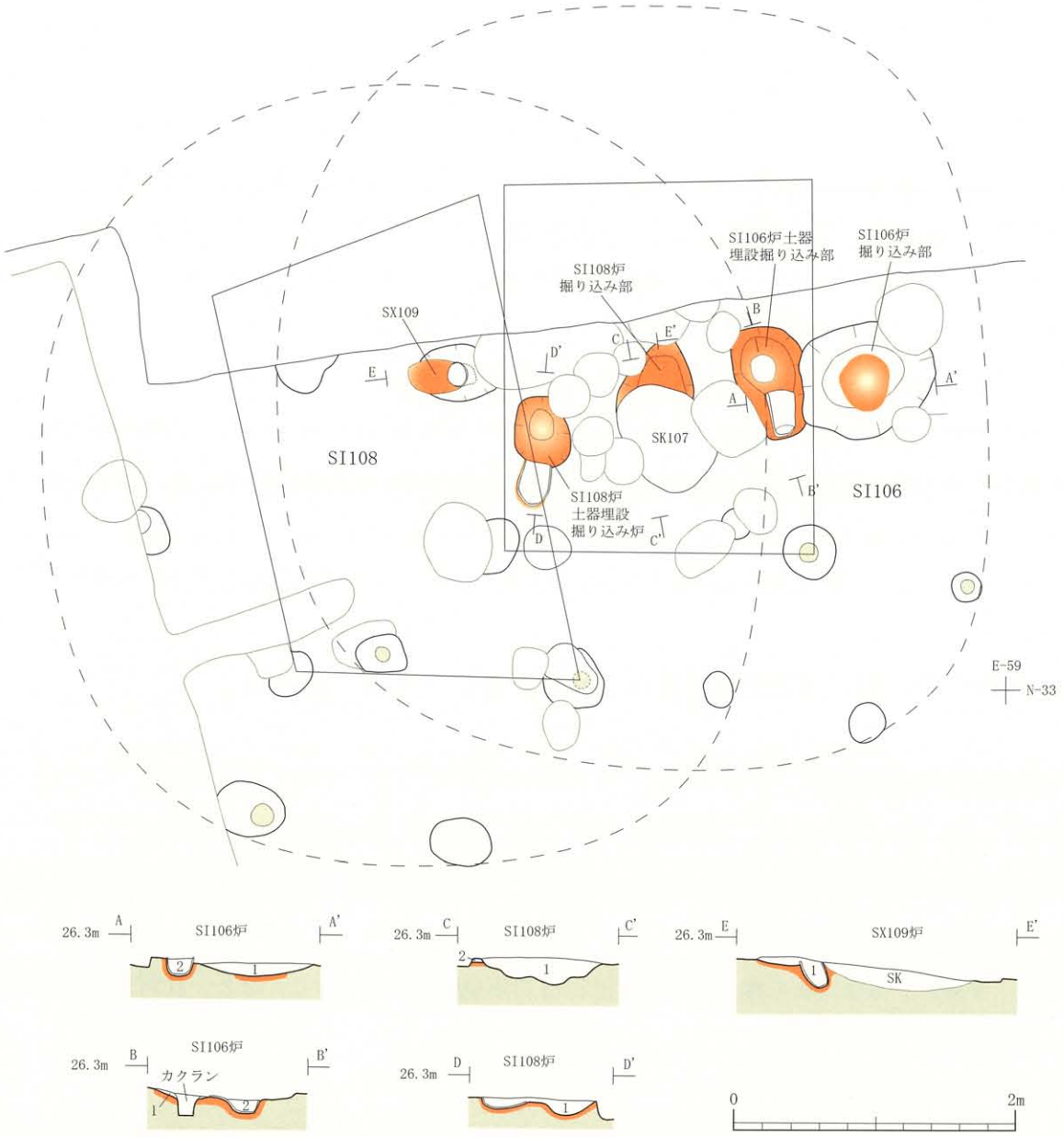
［壁柱穴］4個検出し、そのうち1ヶ所で柱痕跡を確認した。平面形は、長径24～50cm、短径18～34cmの楕円形で、深さが8～35cm、堆積土は黒褐色シルトである。柱痕跡の平面形は直径16cmの円形である。

［炉］土器埋設掘り込み部および掘り込み部の2部構成による複式炉である。

〈土器埋設掘り込み部〉長径56cm、短径40cm、深さ12cmの円形で、断面形は皿状を呈する。埋設土器は斜位に据えられている。掘方は埋設土器とほぼ同じで、土器の周囲は強い加熱を受けている。

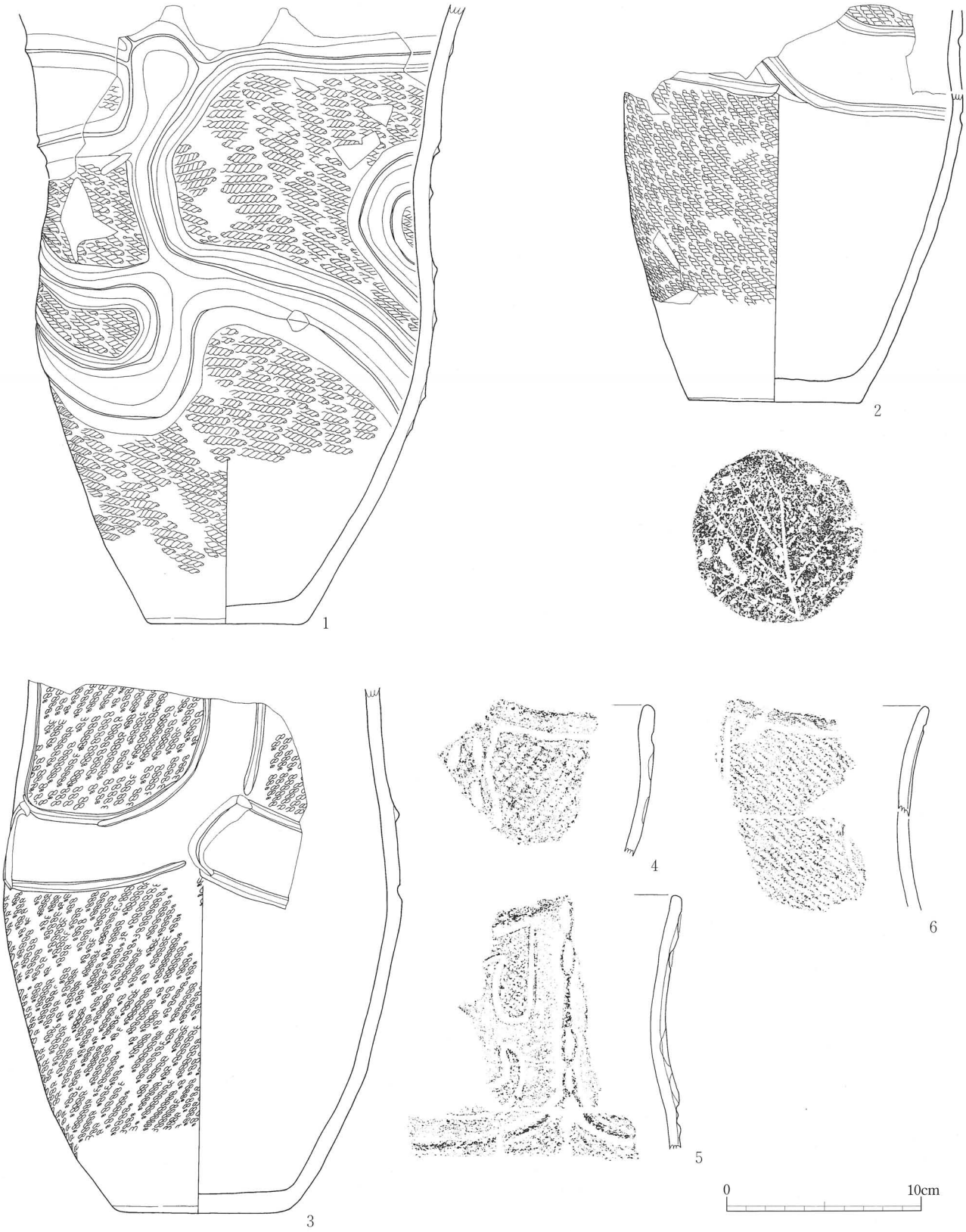
〈掘り込み部〉大部分をSK107土壙に壊され、赤変し硬化した面が一部残存している。

［出土遺物］炉に埋設された土器は深鉢で、約3/5が残存している（第17図3）。



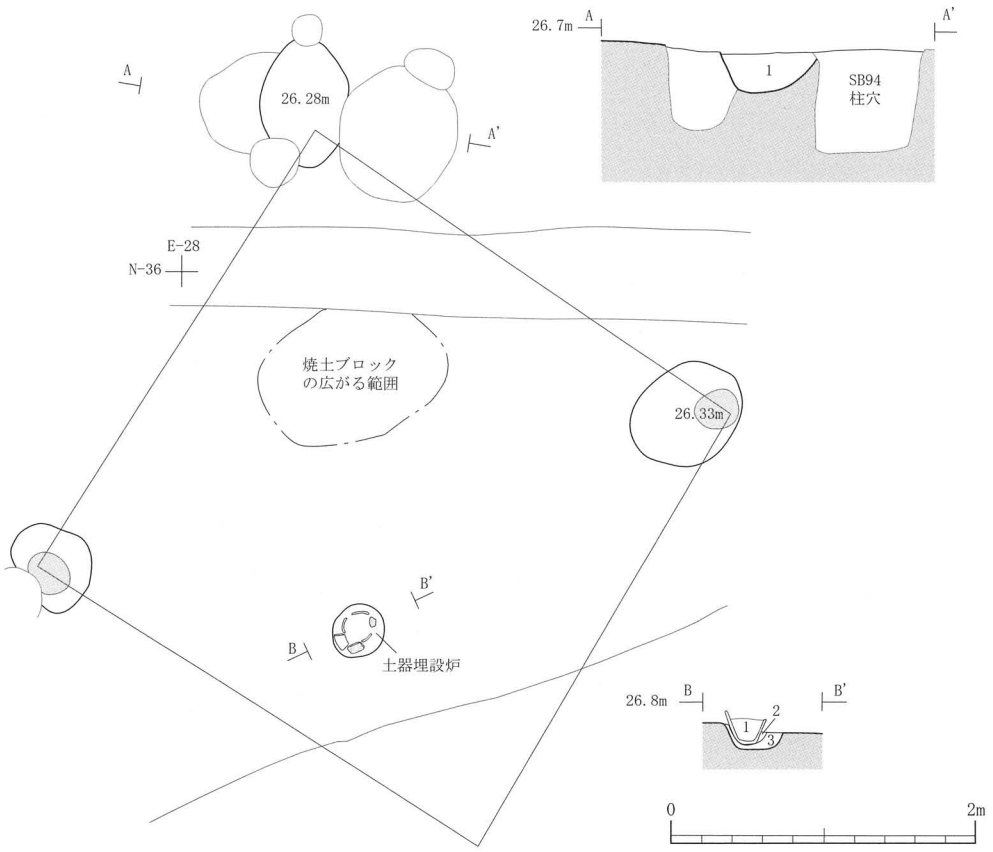
No.	遺　構	種　類	土　色	土　性	備　　考
1	SI106炉跡 (A-A')		暗褐色　10YR3/3	シルト	地山ブロック、焼土を多量に含む　(人為堆積)
2		埋設土器内堆積土	黒褐色　10YR2/3	シルト	地山ブロック、焼土を少量含む　(自然堆積)
	(B-B')	A-A' に共通			
1	SI108炉跡 (C-C')	SK107土壙堆積土	黒褐色　10YR2/2	シルト	地山ブロック、焼土、炭化物を少量含む　(人為堆積)
2		炉堆積土	暗褐色　10YR3/3	シルト	地山ブロック、焼土を少量含む　(自然堆積)
	(D-D')	B-B' に共通			
1	SX109炉跡 (E-E')		にぶい黄褐色　10YR4/3	シルト	焼土を少量含む (自然堆積)

第16図　SI106、108住居跡、SX109炉跡　平面図・断面図 (1/50)



No.	遺構・層位	器　形	特　　徴	時　期	写真図版
1	SI106炉埋設土器	深　鉢	胴部：「⊂」字縄文、磨消縄文（LR）	中期末	14-3
2	SX109埋設土器	深　鉢	胴部：クランク状文、磨消縄文（LR）	中期末	14-1,28-21
3	SI108炉埋設土器	深　鉢	胴部：クランク状文、磨消縄文（RLR）	中期末	14-4
4	SK107堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、破線文、縄文（RL）	後期初頭	14-2
5	SK107堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、鎖状隆線文、碇状文、磨消縄文（LR）	後期初頭	14-2
6	SK107堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、沈線文、縄文（LR）	後期初頭	14-2

第17図　SI106、SI108住居跡炉、SX109炉跡、SK107土壙出土土器



No.	遺　構	種　類	土　色	土　性	備　　考
1	主柱穴（A-A'）		暗褐色　10YR3/3	シルト	炭化物を多く含む　（人為堆積）
1	土器埋設炉（B-B'）	土器内堆積土	黒褐色　10YR2/3	シルト	
2		据方埋土	黒褐色　10YR2/3	シルト	
3		据方埋土	暗褐色　10YR3/3	シルト	地山砂を多量に含む

第18図　SI147住居跡　平面図・断面図（1/50）

【SI147住居跡】（第18図）

［位置］SI10住居跡の南西、N24・E29で確認した。残存状況が悪く、炉と主柱穴のみを確認した。

［重複］SB94建物跡と重複し、これより古い。

［規模・平面形］柱間寸法は、3.3m 等間である。

［主柱穴］３個検出し、そのうち２ヶ所で柱痕跡を確認した。柱の配置から主柱は４本と推定される。柱穴は長径60～80㎝、短径50～66㎝ の楕円形で、残存する深さは24～32㎝、堆積土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。柱痕跡の平面形は直径26㎝ の円形で、堆積土は黒褐色シルトである。

［炉］深鉢を正位に据えた土器埋設炉である。焼面は削平によって失われ、埋設土器と掘方のみ残存している。掘方の平面形は直径32㎝、深さ20㎝ の円形で、埋土は地山砂を含む黒褐・暗褐色のシルトである。埋設土器の北約１ｍのところに径1.4m 程の焼土ブロックの広がりがみられ、本住居跡と関連す

るものと考えられる。

［出土遺物］埋設された土器は深鉢で、全体の1/2が残存している（第21図１）。

【SI146A・B住居跡】（第19図）

［位置］N33・E68で確認した。残存状況が悪く、炉、主柱穴、壁柱穴のみを確認した。

［重複］SI123住居跡、SB152建物跡、SK120土壙と重複する。SI123住居跡より新しく、SB152建物跡、SK120土壙より古い。本住居跡は、柱穴がほぼ同じ位置で重複していることから、同規模で一度建て替えられたと考えられる。

［規模・平面形］壁柱穴から推定すると直径約6.4mの不整円形とみられる。柱間寸法は北西主柱穴－北東主柱穴で約3.6m、北東主柱穴－南東主柱穴で2.6mである。

［堆積土・壁］検出されなかった。

［主柱穴］４個検出し、そのうち２ヶ所で柱痕跡と柱の抜き取り穴を確認した。柱の配置から主柱は４本と考えられる。柱穴の平面形は、長軸40～80cm、短軸30～56cmの隅丸方形で、深さが21～60cm、堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。柱痕跡は直径22cmの円形で、堆積土は炭化物を含む黒褐色シルトである。

［壁柱穴］６個検出した。直径30～38cm、深さ６～29cmの円形である。

［炉］直径56cmの円形の炉で、中央に土器が据えられている。土器は焼土を非常に多く含む暗褐色土を掘方としている。

［出土遺物］炉に埋設された土器は深鉢で、底部が残存している（第21図２）。

【SI123住居跡】（第19図）

［位置］N30・E72で確認した。残存状況が悪く、炉、主柱穴、壁柱穴のみを確認した。

［重複］SI146住居跡、SB152建物跡、Pit.399と重複し、これより古い。

［規模・平面形］壁柱穴から推定すると直径約6.6mの不整円形とみられる。主柱穴の柱間寸法は、南西主柱穴－南東主柱穴で3.6m、北東主柱穴－南東主柱穴で3.5mである。

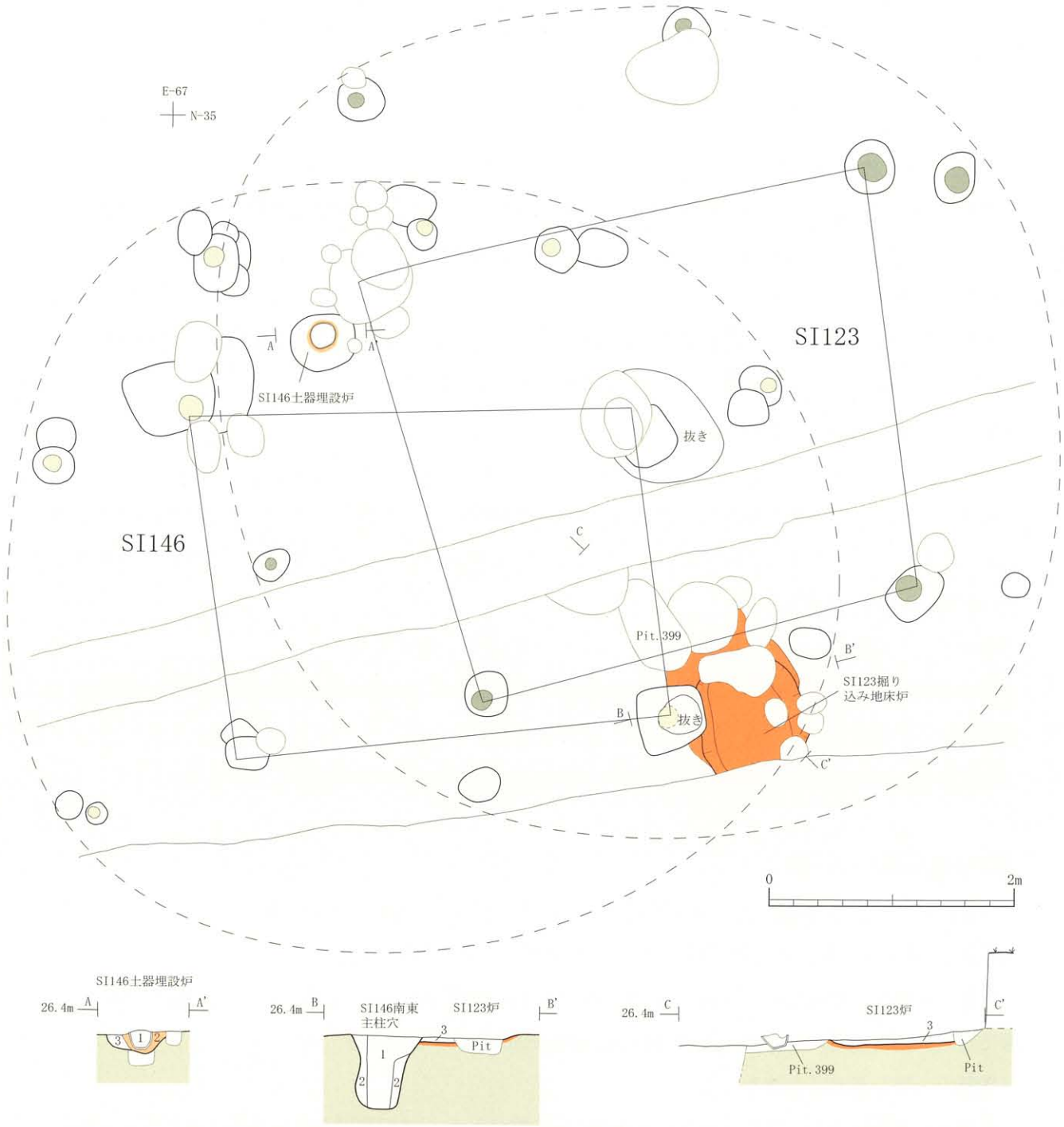
［堆積土・壁］検出されなかった。

［主柱穴］４個検出し、そのうち３ヶ所で柱痕跡を確認した。柱の配置から主柱は４本と考えられる。柱穴の平面形は直径36～54cmの円形で、残存する深さが32～34cm、堆積土は地山ブロックを含む黒褐色・暗褐色シルトである。柱痕跡は直径22～24cmの円形で、堆積土は黒褐色シルトである。

［壁柱穴］７個検出し、そのうち４ヶ所で柱痕跡を確認した。柱穴の平面形は直径26～42cmの円形で、深さが11～47cm、堆積土は暗褐色シルトである。柱痕跡は直径12～20cmの円形で、堆積土は黒褐色シルトである。

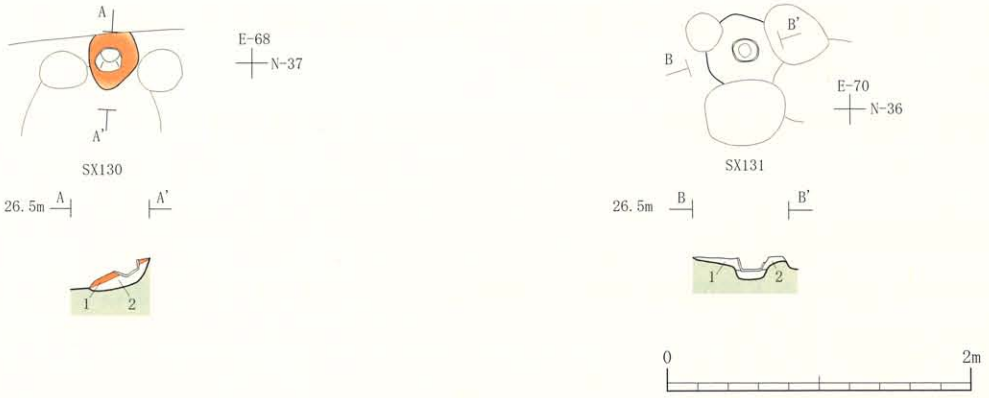
［炉］新しい柱穴によって壊されているが、長軸1.6m以上、短軸1.0mの南北方向の炉であると考えられる。残存する部分は地床炉で、強い受熱によって赤変、硬化している。

［出土遺物］深鉢の小破片が出土している。



No.	遺　構	種　類	土　色	土　性	備　考
1	SI146炉 (A-A')	土器内堆積土	暗褐色　10YR3/4	シルト	地山粒をやや多く含む
2		据方埋土	暗褐色　10YR3/4	シルト	焼土粒を多く含む
3		据方埋土	暗褐色　10YR3/4	シルト	地山中ブロックを多く含む
1	(B-B')	SI146主柱穴・抜取り穴	黒褐色　7.5YR3/1	シルト	地山ブロック、炭化物を少量含む
2		SI146主柱穴掘方	黒褐色　10YR2/2	シルト	地山ブロックを多く含む
3		SI123炉	極暗褐色　7.5YR2/3	シルト	地山小ブロック、炭化物を含む

第19図　SI146A・B、123住居跡平面図・断面図（1/50）



No.	遺構	種　類	土　色	土　性	備　　考
1	SX130	据方埋土		シルト	焼面
2		据方埋土	暗褐色　7.5YR3/3	シルト	焼土を少量含む
1	SX131	据方埋土	暗褐色　10YR3/3	シルト	地山ブロック（黄色）を多量に含む　（人為堆積）
2		据方埋土	黒褐色　10YR3/2	シルト	地山ブロックを少量含む　（人為堆積）

第20図　SX130、SX131炉跡　平面図・断面図（1/50）

2　炉　跡

西区中央付近で土器埋設炉跡が３基検出された。

これらの炉跡は組み合う主柱穴、壁柱穴が確認できなかったため、炉跡として分類したが、住居跡の炉と同じ構造であることから、屋外炉ではなく、本来は住居跡に伴う炉であったと考えられる。

【SX109炉跡】（第16図）

土器が斜位に埋設された土器埋設炉である。炉跡底面および土器の周囲は強い受熱により赤変、硬化している。

［位置］N35・E55で確認した。東側がピットに壊されている。

［重複］SI108住居跡と重複するが、新旧関係は不明で、SI108住居跡に伴う可能性もある。

［規模］残存する炉跡の大きさは、長径66cm、短径40cm、深さ８cm の楕円形である。東辺は新しいピットに壊されている。

［堆積土］１層で、焼土を少し含むにぶい黄褐色シルトである。埋設土器の掘方は土器とほぼ同じ大きさに掘り込まれている。

［出土遺物］埋設された土器は深鉢で、胴下部のみ残存している。土器の特徴は、SI108住居跡炉埋設土器と類似する器形、文様と考えられる（第17図２）。

【SX130炉跡】（第20図）

土器が斜位に埋設された土器埋設炉である。

［位置］N37・E67で確認した。

［重複］SB148建物跡と重複し、これより新しい。

［規模］残存する炉跡の大きさは、長径38cm、短径32cm、深さ19cm の楕円形である。

［堆積土］1層で、焼土を少し含む暗褐色シルトである。土器の掘方と考えられる。残存する炉跡堆積土の表面から4cm 程度が焼面になっている。

［出土遺物］埋設された土器は深鉢で、胴下部が残存している（第21図3）。

【SX131炉跡】（第20図）

土器を正位に埋設した土器埋設炉である。焼面は残っていないが、埋設土器は受熱によって器面に著しい焼けはじけがみられる。

［位置］N36・E69で確認した。

［重複］重複はない。

［規模］残存する炉跡の大きさは、直径約50cm の円形で、残存する掘方の深さは約18cm である。

［堆積土］2層に分かれる。地山ブロックを含む暗褐色・黒褐色シルトで、埋設土器の掘方と考えられる。

［出土遺物］埋設された土器は深鉢で、胴下部が残存している（第21図4）。

3　掘立柱建物跡

14棟以上確認した。発見した掘立柱建物跡は調査区の制限で、全体の構造を把握できるものは少ないが、SB94建物跡のように6本柱の建物とSB153建物跡のように4本柱の建物がある。これらの建物跡の柱穴は、残存の良いもので、平面形が直径90cm 前後の円形で、柱痕跡は直径50cm 程度、壁がほぼまっすぐに立ち上がり、深さは80cm 程度である。このような特徴は、縄文時代の竪穴住居跡の柱穴より大きく、土壙とは断面形で異なっており、古代以降の遺構とも平面形や堆積土の特徴で大きく異なっている。これらの特徴と柱穴底面の標高値が近似することを条件に、柱穴群を縄文時代の建物跡として認識した。標高値の差の許容範囲は、便宜的にもっとも深い柱穴ともっとも浅い柱穴で15cm 以下であることを基準とした。

【SB94建物跡】（第22図）

［位置］N27・E33で確認した。

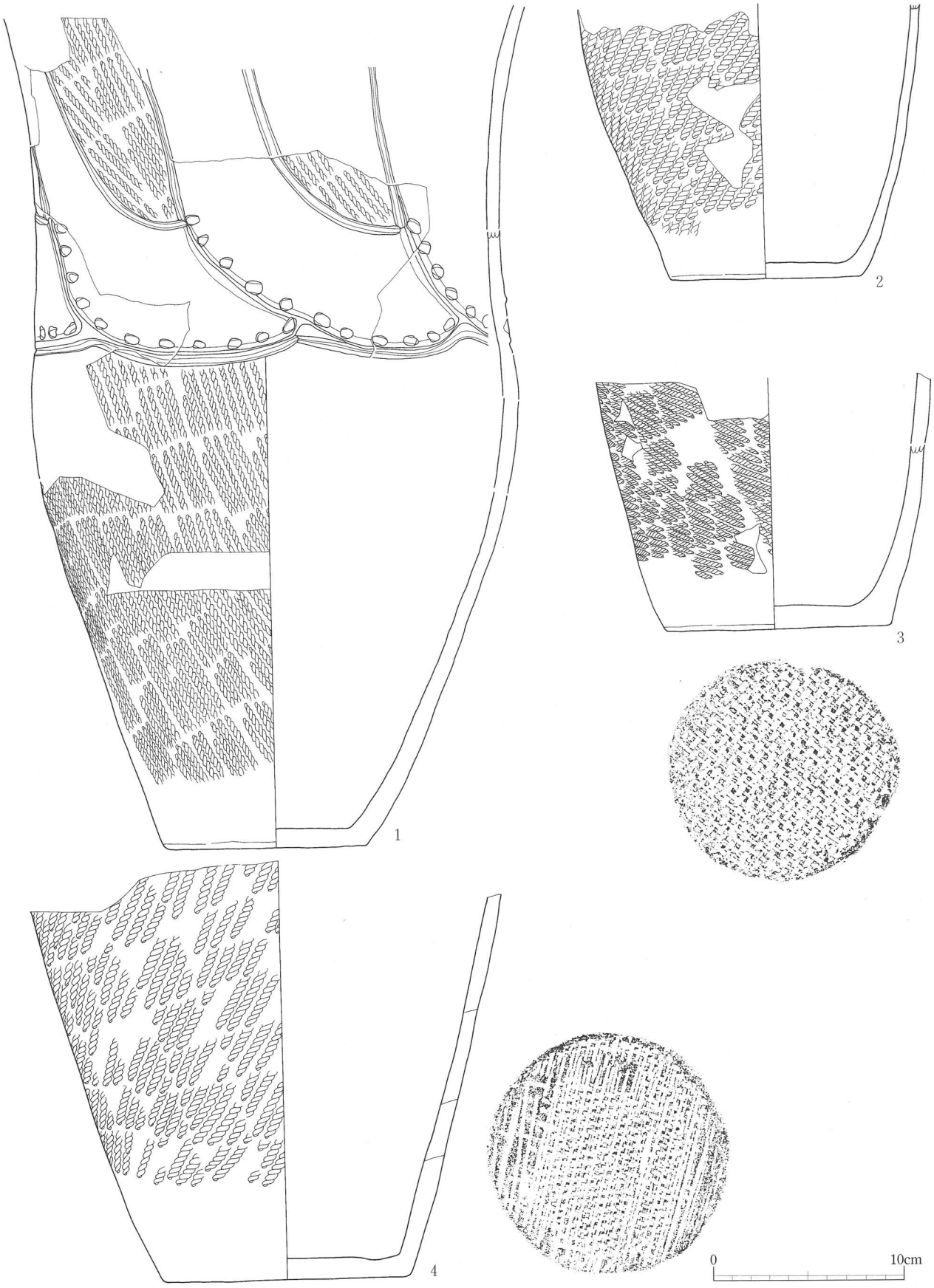
［重複］SI10、SI147住居跡と重複し、これより新しい。

［規模］桁行2間、梁行1間の南北棟で、桁行が西側柱列で4.8m、柱間寸法は北から、2.4m等間である。梁行は北側柱列で3.4mである。

［柱穴・柱痕跡］6個検出し、それぞれ柱痕跡と1ヶ所で柱の抜き取り穴を確認した。柱穴の平面形は長径70～90cm の円形で、残存する深さが17～68cm、堆積土は地山ブロックを多く含む黒褐色シルトである。柱痕跡は直径約50cm の円形で、堆積土は焼土ブロックを含む暗褐色シルトである。

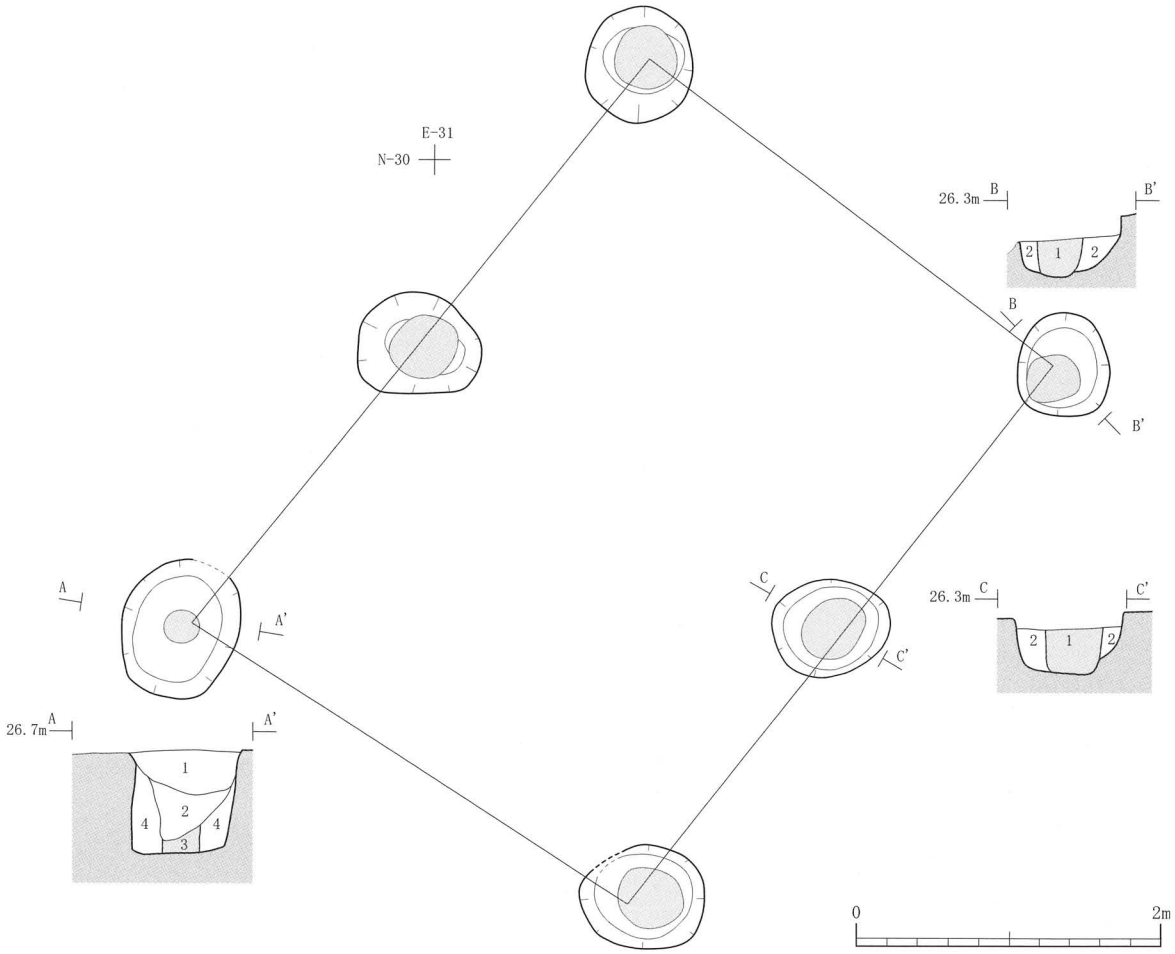
［方向］西辺でみると南で東に39°偏る。

［出土遺物］柱穴から土器片が少数出土している（第26図1、2）。



No.	遺構・層位	器　形	特　徴	時　期	写真図版
1	SI147炉埋設土器	深　鉢	胴部：クランク状文、撚糸文（L）	中期末	15-1
2	SI146炉埋設土器	深　鉢	胴部：縄文（RL）		15-2
3	SX130埋設土器	深　鉢	胴部：縄文（LR）		28-20
4	SX131埋設土器	深　鉢	胴部：縄文（RL）		15-3,28-22

第21図　SI146、147住居跡炉、SX130、SX131炉跡出土土器



No.	遺　構	種　類	土　色	土　性	備　　考
1	SB94 (A-A')	柱抜き取り穴	黒褐色　10YR2/3	シルト	炭化物、土器片、礫を含む
2		柱抜き取り穴	黒褐色　10YR2/3	シルト	炭化物を含む
3		柱痕跡	暗褐色　10YR3/3	シルト	炭化物を含む
4		掘方埋土	暗褐色　10YR3/4	砂質シルト	地山砂ブロックを多く含む
1	SB94 (B-B')	柱痕跡	黒　色　10YR2/1	シルト	炭化物を含む
2		掘方埋土	黒褐色　10YR2/3	シルト	地山ブロック、炭化物を含む
1	SB94 (C-C')	柱痕跡	黒　色　10YR2/1	シルト	炭化物を含む
2		掘方埋土	黒褐色　10YR2/3	シルト	白色粘土ブロックを多く含む

第22図　SB94建物跡　平面図・断面図（1/50）

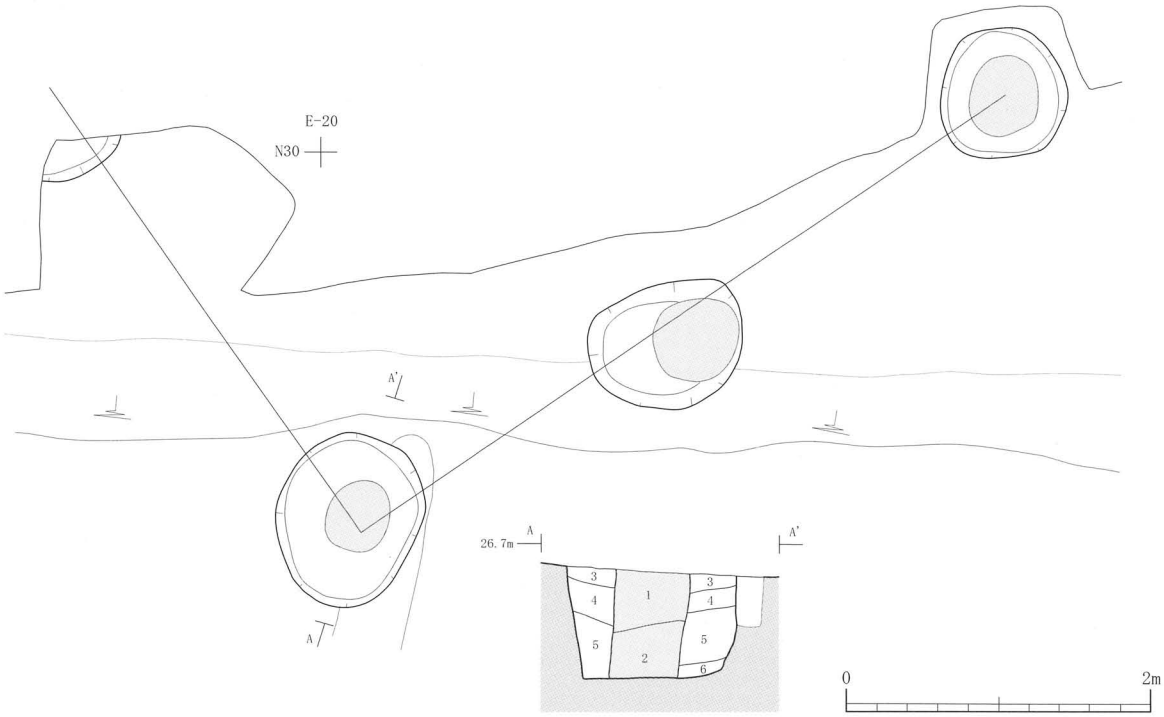
【SB143建物跡】（第23図）

［位置］N28・E23で確認した。

［重複］SD３溝跡と重複し、これより古い。

［規模］桁行２間以上、梁行１間以上の南北棟で、桁行が東側柱列で5.0m以上、柱間寸法は2.5m等間である。梁行は南側柱列で3.4mと推定される。

［柱穴・柱痕跡］４個検出し、そのうち３ヶ所で柱痕跡を確認した。柱穴の平面形は直径88～110㎝の円形で、残存する深さが32～80㎝、堆積土は、地山ブロックを多く含む暗褐色または黒褐色シルトであ



No.	遺　構	種　類	土　色	土　性	備　　考
1	SB143 (A-A')	柱痕跡	暗褐色　10YR3/3	シルト	焼土粒、炭化物、粘土大ブロックを多く含む
2			暗褐色　10YR3/3	シルト	焼土ブロック、炭化物をやや多く含む
3		掘方埋土	暗褐色　10YR3/3	シルト	
4			黒褐色　10YR2/2	シルト	地山中ブロックを多く含む。白色粘土小ブロックを含む
5			黒褐色　10YR2/2	シルト	地山大ブロックが主体
6			黒褐色　10YR2/3	粘質シルト	

第23図　SB143建物跡　平面図・断面図（1/50）

る。柱痕跡の平面形は、直径約50cmの円形で、堆積土は暗褐色シルトである。

［方向］東辺でみると南で東に55°偏る。

［出土遺物］柱穴から土器片が少数出土している（第26図３、４、６）。

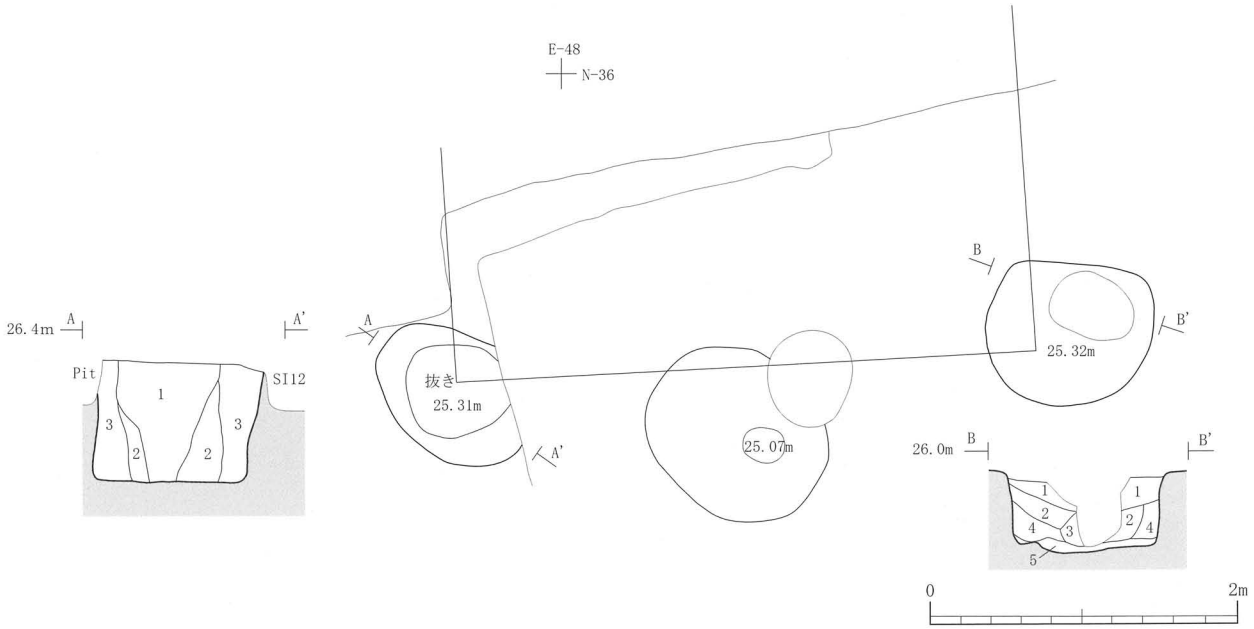
【SB134建物跡】（第24図）

柱穴が２個しか見つかっていないため、詳細は不明だが、SB143建物跡などと同規模の掘立柱建物跡であると推定される。なお、SB134建物跡の南側柱列の中間に同規模の柱穴があり、これがSB134建物跡に関連する柱穴である可能性がある。

［位置］N36・E48で確認した。

［重複］SI12住居跡と重複し、これより古い。

［規模］桁行１間以上、梁行１間の南北棟である。梁行は南側柱列で約3.8mである。



No.	遺　構	種　類	土　色	土　性	備　　考
1	SB134 (A-A')	柱抜き取り穴	黒褐色　10YR2/2	シルト	地山ブロック、炭化物を少し含む
2		柱抜き取り穴	暗褐色　10YR3/3	シルト	地山ブロックを少し含む
3		掘方埋土	暗褐色　10YR3/4	シルト	地山ブロックを多くに含む
1	SB134 (B-B')		黒褐色　10YR2/3	シルト	地山小ブロック、炭化粒を少し含む　(人為堆積)
2			褐　色　10YR4/4	シルト	地山ブロックを多く含む　(人為堆積)
3			暗褐色　10YR3/3	シルト	焼土粒、炭化粒を含む　(人為堆積)
4			褐　色　10YR4/4	シルト	地山ブロック、白色粘土ブロックを多く含む　(人為堆積)
5			褐　色　10YR4/4	シルト	炭化物を少し含む　(人為堆積)

第24図　SB134建物跡　平面図・断面図（1/50）

［柱穴・柱痕跡］２個検出し、そのうち１ヶ所で柱の抜き取り穴を確認した。柱穴の平面形は長径110㎝、短径80～90㎝の楕円形で、残存する深さは88㎝である。

［方向］南辺でみると西で北に３°偏る。

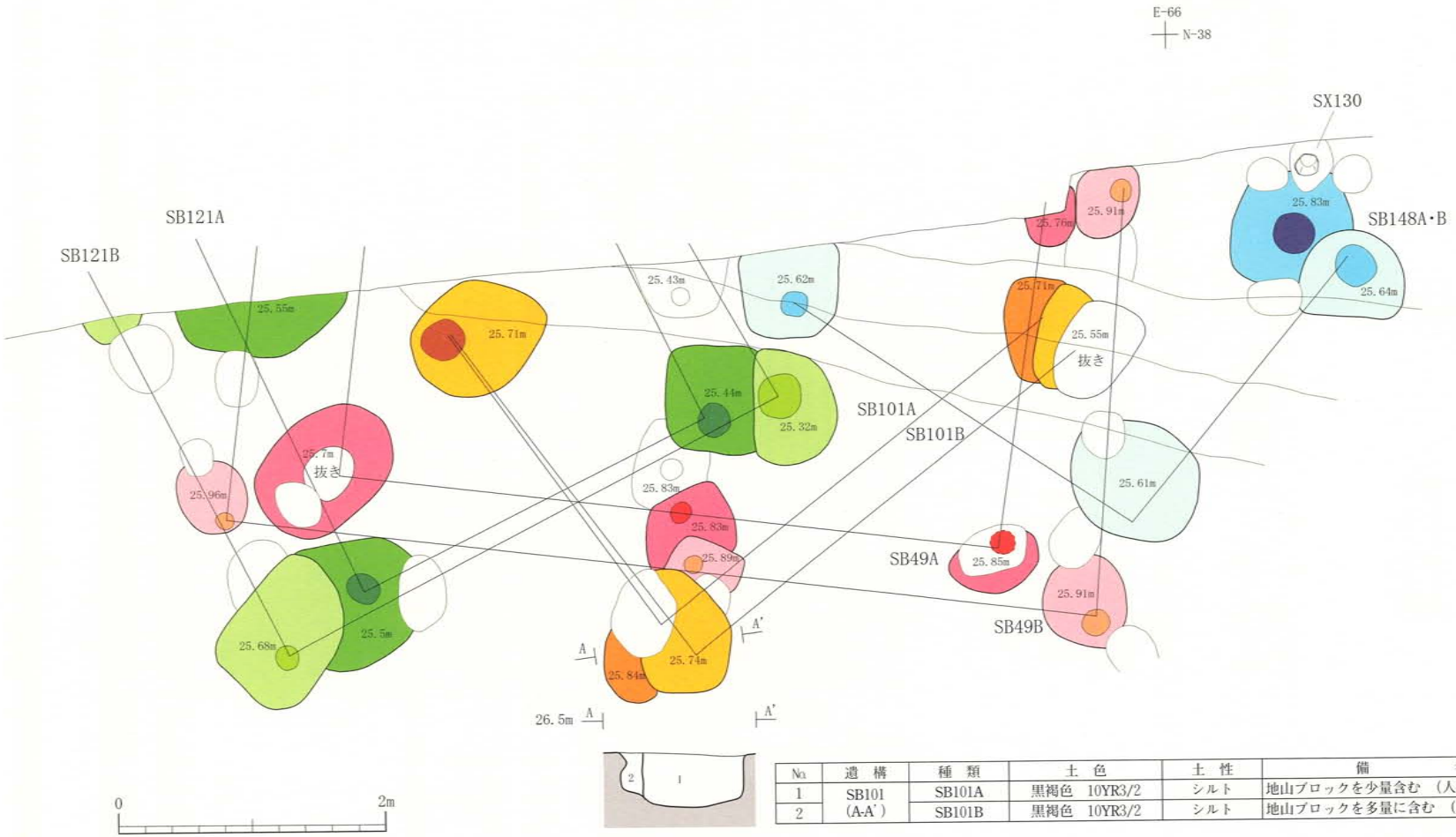
［出土遺物］柱穴から深鉢の口縁部破片が出土している（第26図５）。

【SB49A・B、SB101A・B、SB148A・B、SB121A・B建物跡】（第25図）

［位置］N32～36･E58～67で確認した。SB94建物跡に類似する掘立柱建物跡８棟の重複と推定したが、調査区際で柱穴が密集している状況での確認であるため、建物の規模が不明なものも多く、柱穴の組み合わせはなお検討の余地がある。それぞれ一度建て替えが認められ、古いものからA、Bとする。

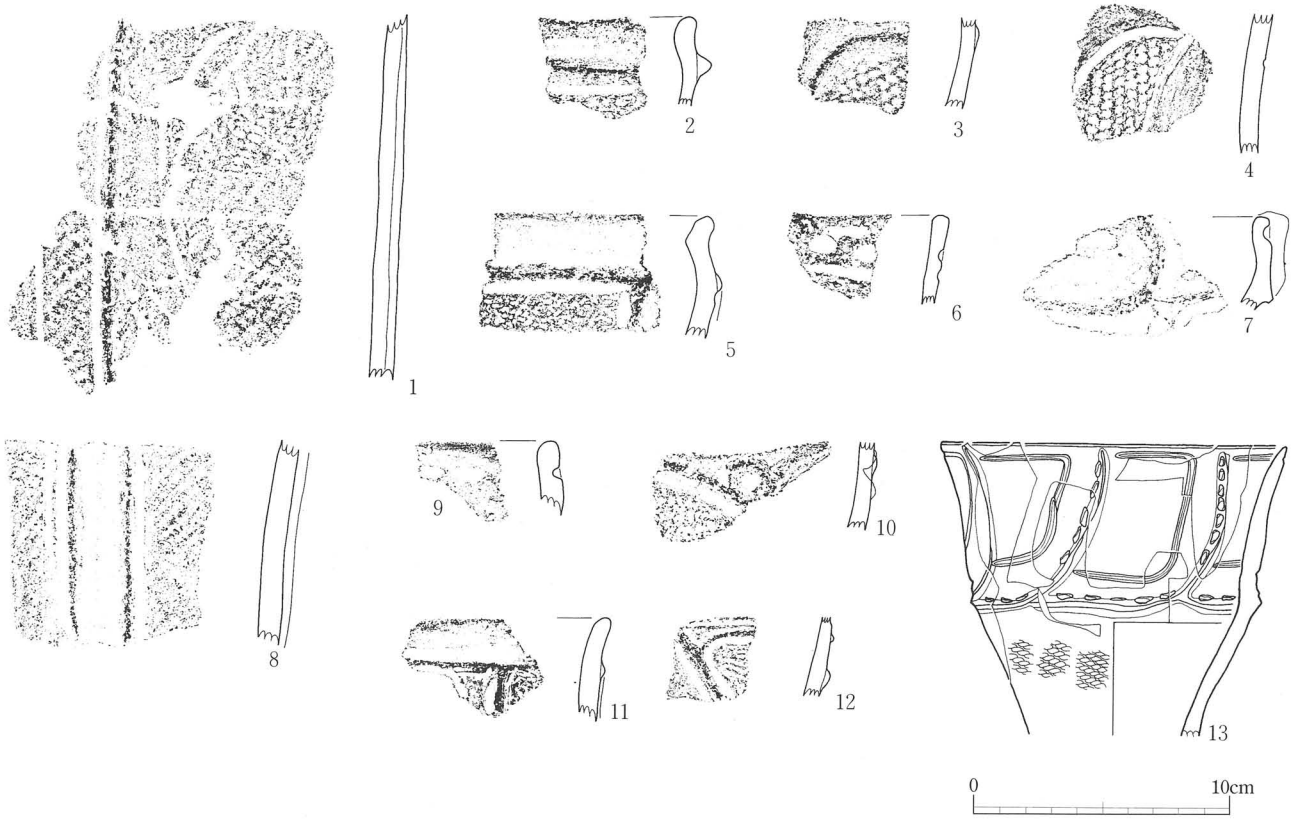
［重複］SB49A・B建物跡はSB101A・B建物跡、SB148A・B建物跡より古い。SB101A・B建物跡とSB148A・B建物跡の新旧関係は不明である。また、SB121建物跡と他の建物跡との新旧関係は不明である。

［出土遺物］SB148建物跡から小型深鉢が出土している（第26図13）。また、SB101B、SB121建物跡から深鉢の小破片が出土している（同図８～12）。



No.	遺構	種類	土色	土性	備考
1	SB101 (A-A')	SB101A	黒褐色 10YR3/2	シルト	地山ブロックを少量含む (人為堆積土)
2		SB101B	黒褐色 10YR3/2	シルト	地山ブロックを多量に含む (人為堆積土)

第25図　SB101A・B、121A・B、49A・B、SB148A・B建物跡　平面図・断面図(1/50)



No.	遺構・層位	器　形	特　　徴	時　期	写真図版
1	SB94堆積土	深　鉢	胴部：縦位隆線文、沈線文、磨消縄文（RL）	後期初頭	16-1
2	SB94堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、横位隆線文　胴部：縄文	中期末～後期初頭	16-2
3	SB143堆積土	深　鉢	口縁部：隆沈線文、縄文	中期末	16-6
4	SB143堀方埋土	深　鉢	胴部：沈線文、磨消縄文	中期末～後期初頭	16-7
5	SB134堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、方形区画文、縄文（RLR）	中期末～後期初頭	16-4
6	SB143堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、列点文、横位沈線文	中期末～後期初頭	16-5
7	SB148B 堆積土	深　鉢	口縁部：隆沈線文、列点文	中期末	16-14
8	SB101B 堆積土	深　鉢	胴部：縦位隆線文、縄文（RL）	後期初頭	16-11
9	SB101B 抜穴	深　鉢	口縁部：平縁、連続刻目文	中期末～後期初頭	16-9
10	SB101B 抜穴	深　鉢	胴部：隆線文、ボタン状貼付文、縄文	後期初頭	16-12
11	SB101B 抜穴	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：隆線文	中期末～後期初頭	16-10
12	SB121B 堆積土	深　鉢	胴部：隆線文、縄文	中期末～後期初頭	16-13
13	SB148A 堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、胴部「コ」字状文、縄文（LR）	中期末	16-8

第26図　SB94、SB143、SB134、SB101、SB121、SB148建物跡出土土器

【SB149建物跡】（第27図）

［位置］N36・E73で確認した。

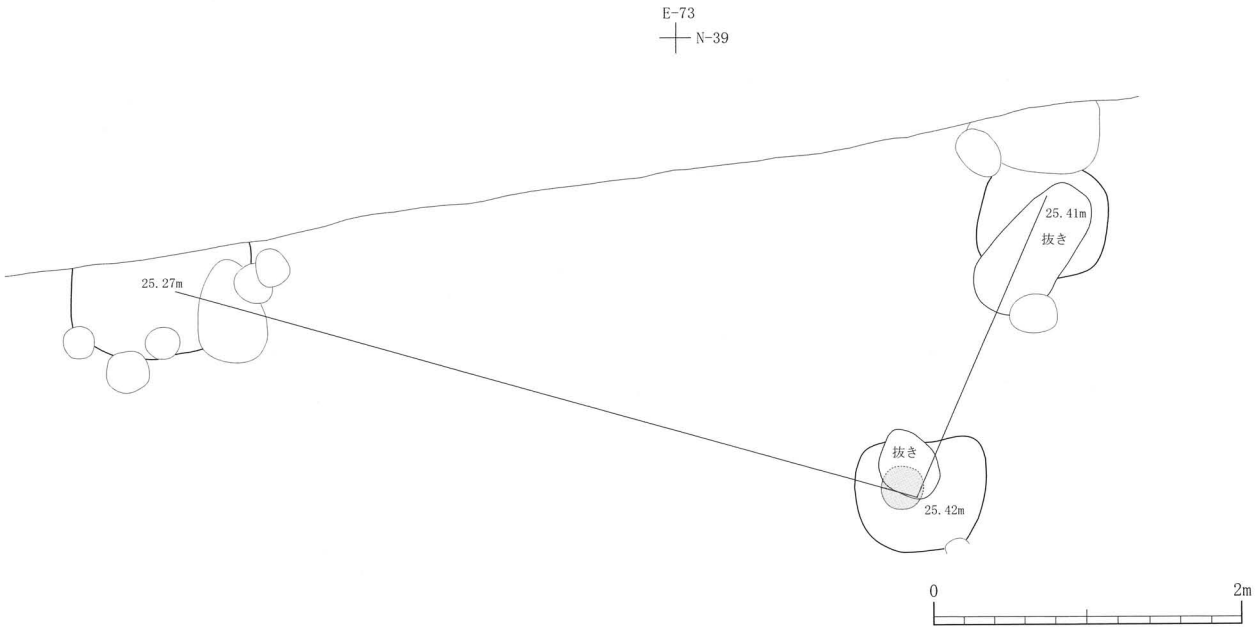
［重複］重複はない。

［規模］桁行１間以上、梁行１間以上の東西棟である。桁行は南側柱列で5.1m以上、梁行は東側柱列で2.2m以上である。

［柱穴・柱痕跡］３個検出し、そのうち１ヶ所で柱痕跡を、２ヶ所で柱の抜き取り穴を確認した。柱穴の平面形は直径70～90cm の不整円形で、残存する深さ約90cm、堆積土は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトなどである。柱痕跡は平面形が直径30cm の円形で、堆積土は黒褐色シルトである。

［方向］南辺でみると東で北に15°偏る。

［出土遺物］縄文土器の小破片が少数出土している。



第27図　SB149建物跡　平面図（1/50）

【SB152建物跡】（第28図）

［位置］N31・E72で確認した。

［重複］SI123住居跡、SK124土壙と重複し、これより新しい。

［規模］桁行２間、梁行１間の南北棟である。桁行は西側柱列で4.5m、梁行は北側柱列で約3.0mである。柱間は西側柱列で北から2.3m、2.2mである。

［柱穴・柱痕跡］５個検出し、そのうち３ヶ所で柱痕跡を、２ヶ所で柱の抜き取り穴を確認した。柱穴の平面形は長径50～70㎝、短径46～62㎝ の不整円形で、深さが30～48㎝、堆積土は地山ブロックを多く含む暗褐色シルトである。柱痕跡は直径24㎝ の円形で、堆積土は黒褐色シルトである。

［方向］西辺でみると南で西に54° 偏る。

［出土遺物］縄文土器の小破片が出土している。

【SB153建物跡】（第29図）

［位置］N34・E76で確認した。

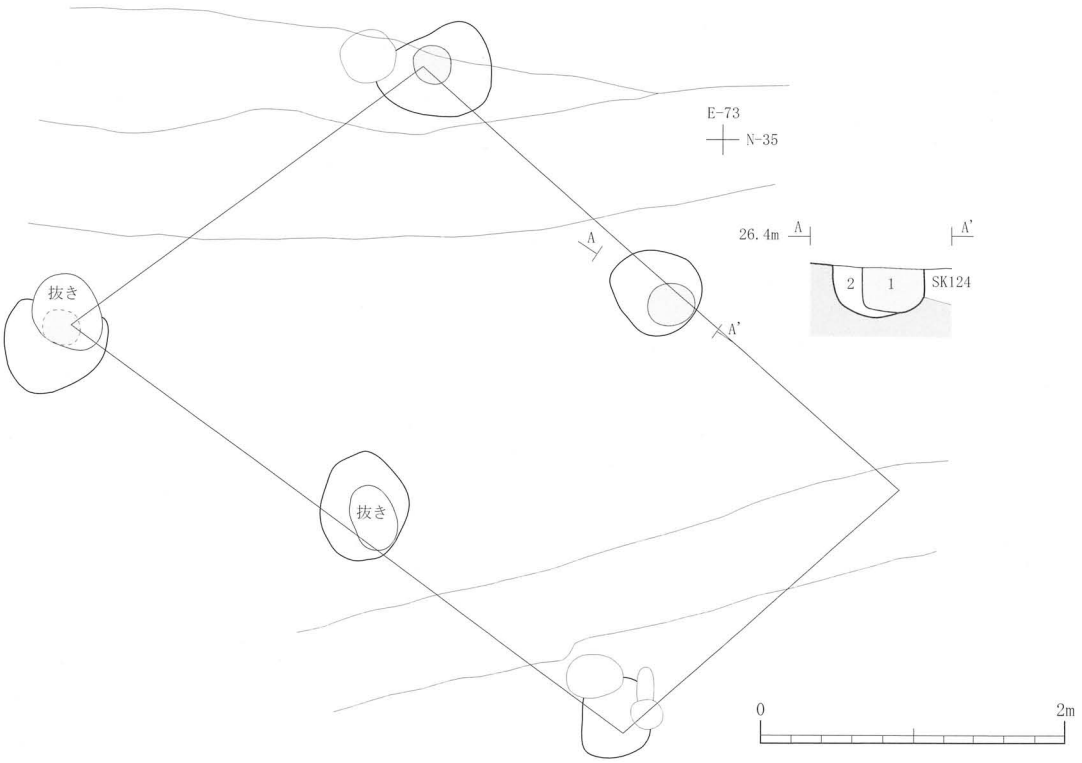
［重複］SK127土壙、SD71溝跡と重複する。SK127土壙より新しく、SD71溝跡より古い。

［規模］桁行１間、梁行１間の東西棟である。桁行は北側柱列で3.3mで、梁行は西側柱列で約1.8mである。

［柱穴・柱痕跡］４個検出し、それぞれ柱痕跡を確認した。柱穴の平面形は直径60～70㎝ の円形で、残存する深さが17～24㎝、堆積土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。柱痕跡の平面形は直径16～24㎝ の円形で、堆積土は黒褐色シルトである。

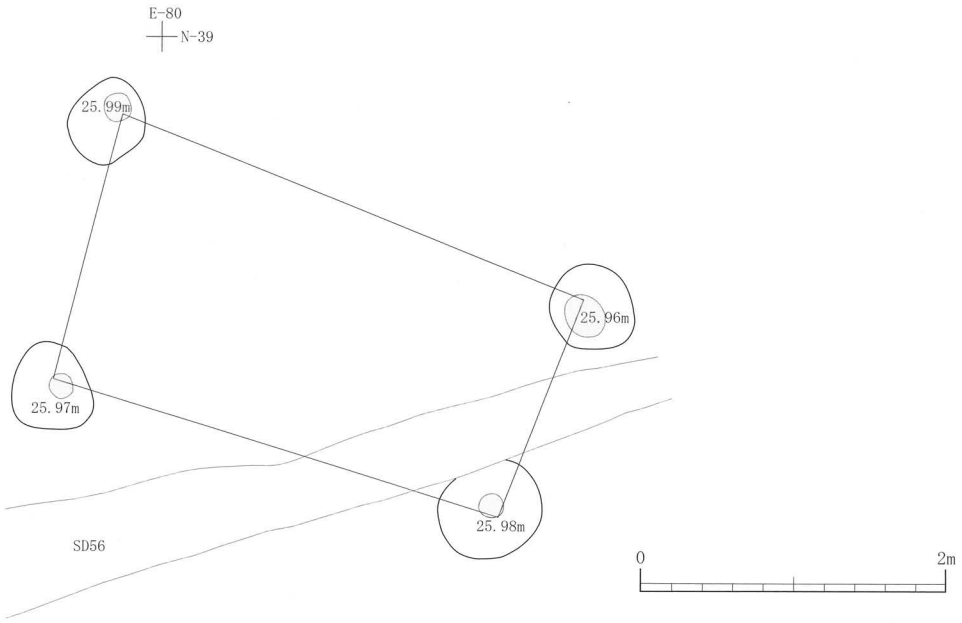
［方向］南辺でみると東で北に13° 偏る。

［出土遺物］柱穴から縄文土器の小破片が出土している。



No.	遺　構	種　類	土　色	土　性	備　　考
1	SB152 (A-A')	柱痕跡	黒褐色　10YR2/3	シルト	地山粒、炭化物を多く含む
2		掘方埋土	暗褐色　10YR3/3	シルト	地山小ブロックを多く含む

第28図　SB152建物跡　平面図（1/50）



第29図　SB153建物跡　平面図（1/50）

4　土　壙

25基確認した。形態から貯蔵穴と考えられるものとそれ以外のものに大別される。

A　貯蔵穴

5基確認した。直径0.8～1.8mの円形で、残存する深さは1.2～1.8mである。SK27、SK83、SK86、SK95土壙は底面が入口に比べて広がる形態である。いずれも人為的に埋め戻されている。

【SK27土壙】（第30図）

［位置］N18・E20で確認した。

［重複］SK26土壙と重複し、これより新しい。

［規模］調査区際で確認したため、全体形は不明である。検出された平面形は、長径0.86m、短径0.4mの半楕円形で、確認できた深さは約1.6mである。底面は平坦で、壁はオーバーハングするが、調査区の制限によって土壙壁面まで堆積土を除去できず、断面図は作成できなかった。

［堆積土］地山ブロックを含む黒色土が堆積している。

［出土遺物］縄文土器（第38図20～24）、円盤状土製品（第53図６）、石器(第55図７)が出土している。

【SK83土壙】（第30図）

［位置］N24・E18で確認した。

［重複］SD 4溝跡と重複し、これより古い。

［規模］上面径約0.72m、最大径約2.4m、底面径約1.54mの円形で、残存する深さは1.95mである。地山Ⅲｃ層まで掘り込まれており、底面は平坦である。壁はオーバーハング気味に立ち上がり、断面形はフラスコ状を呈する。底面から約34㎝上のところで西側に張り出し、段になっている。

［堆積土］17層に分かれる。９層中に焼土ブロック、灰、炭化物の集中がみられる。17層は炭化物を多く含む黒褐色粘質シルトで、貯蔵穴機能時の堆積土と考えられる。17層直上に壁の崩落土が堆積し、その後、炭化物、灰、焼土、地山粘土ブロックを含む黒褐色シルト層（７ａ～13層）によって人為的に埋め戻されている。また、その上には黒褐色シルト層（１～６ｂ層）などが自然堆積している。

［出土遺物］縄文土器片（第31、32図）、剥片石器（第54図20、55図11）、石皿（第57図）、多数の剥片、骨片、木炭やクルミ、クリ、トチとみられる堅果類の実が出土している。

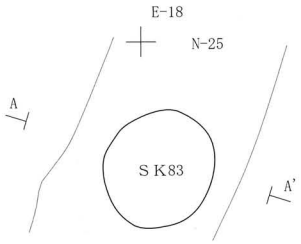
【SK86土壙】（第30図）

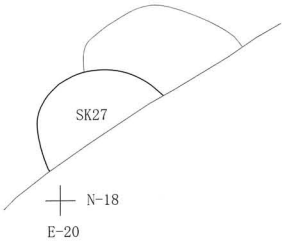
［位置］N24・E22で確認した。

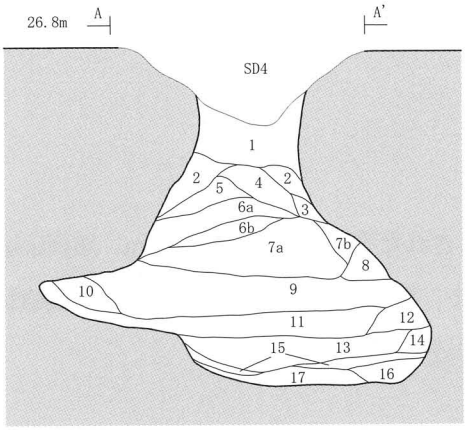
［重複］SI 2住居跡と重複し、これより古い。

［規模］上面径1.1m、底面径1.65mの円形の土壙で、残存する深さは1.26mである。地山Ⅲｃ層まで掘り込まれ、底面は平坦である。壁はオーバーハング気味に立ち上がり、フラスコ状を呈する。

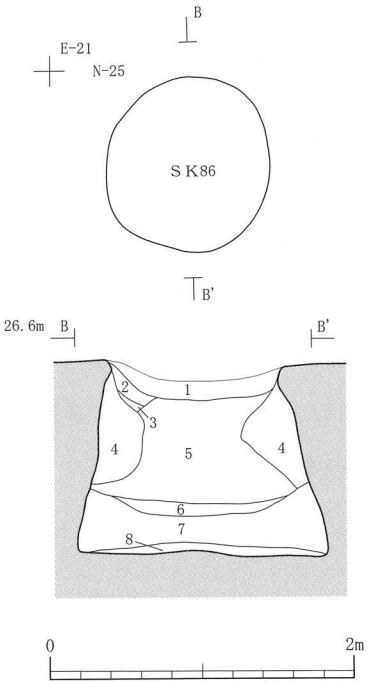
［堆積土］８層に分かれる。８層は黒褐色シルトで、炭化物を多く含む。貯蔵穴機能時の堆積土と考





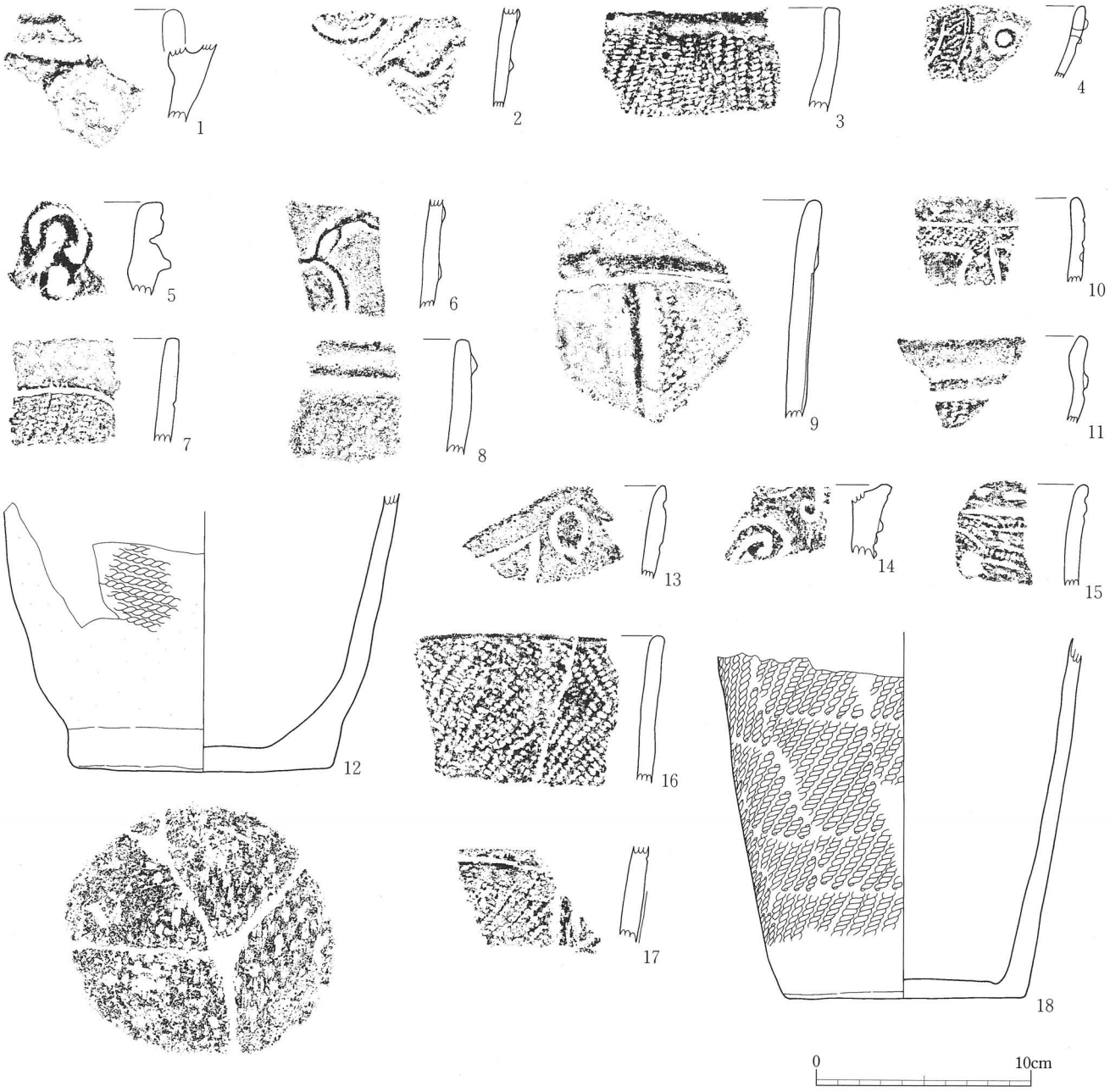


層	土　色	土　性	備　　考
1層	黒褐色 10YR2/3	シルト	地山ブロック、炭化物、赤色土粒を含む （自然堆積）
2層	褐　色 7.5YR4/3	粘土	地山粘土主体、砂粒含む。壁の崩落土 （自然堆積）
3層	黒褐色 10YR3/2	シルト	炭化物、赤色土粒を少量含む （自然堆積）
4層	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物ブロック（径3cm 程度）を多く含む。地山粒を含む （自然堆積）
5層	暗褐色 10YR3/3	シルト	炭化物、赤色土粒を少し含む。土器片を含む （自然堆積）
6a 層	黒褐色 10YR2/3	シルト	炭化物、赤色土粒を多く含む （自然堆積）
6b 層	黒褐色 10YR2/3	シルト	炭化物、赤色土粒を少し含む。土器片含む （自然堆積）
7a 層	黒褐色 10YR3/2	シルト	焼土、炭化物、赤色土粒を多く含む。土器片を含む。焼土、炭の廃棄層 （人為堆積）
7b 層	黒褐色 10YR3/2	砂質シルト	炭化物を少量含む
8層	黒褐色 10YR2/2	シルト	地山粘土ブロック、炭化物ブロックを多く含む。壁の崩落土 （自然堆積）
9層	黒　色 10YR2/1	粘質シルト	炭化物を多量に含む。地山ブロック、焼土ブロック、灰、土器片を含む。焼土、炭の廃棄層 （人為堆積）
10層	黒　色 10YR2/1	粘質シルト	地山ブロックを含む。壁の崩落土 （人為堆積）
11層	黒　色 10YR2/1	粘質シルト	炭化物を特に多く含む。炭化物層と粘質シルトの互層 （人為堆積）
12層	黒　色 10YR2/1	粘質シルト	地山粘土ブロック、炭化物をを多く含む
13層	暗褐色 10YR3/3	粘質シルト	地山粘土ブロック、焼土ブロック、炭化物を含む。焼土、炭の廃棄層 （人為堆積）
14層	明褐色 7.5YR5/6	砂質シルト	壁の崩落土 （自然堆積）
15層	明黄褐色 2.5YR7/6	シルト質粘土	白色粘土ブロックを特に多く含む （自然堆積）
16層	黄褐色 10YR5/6	砂質シルト	地山粘土ブロックを含む。壁の崩落 （自然堆積）
17層	黒褐色 10YR3/2	粘質シルト	地山ブロック、炭化物を含む （機能時堆積）



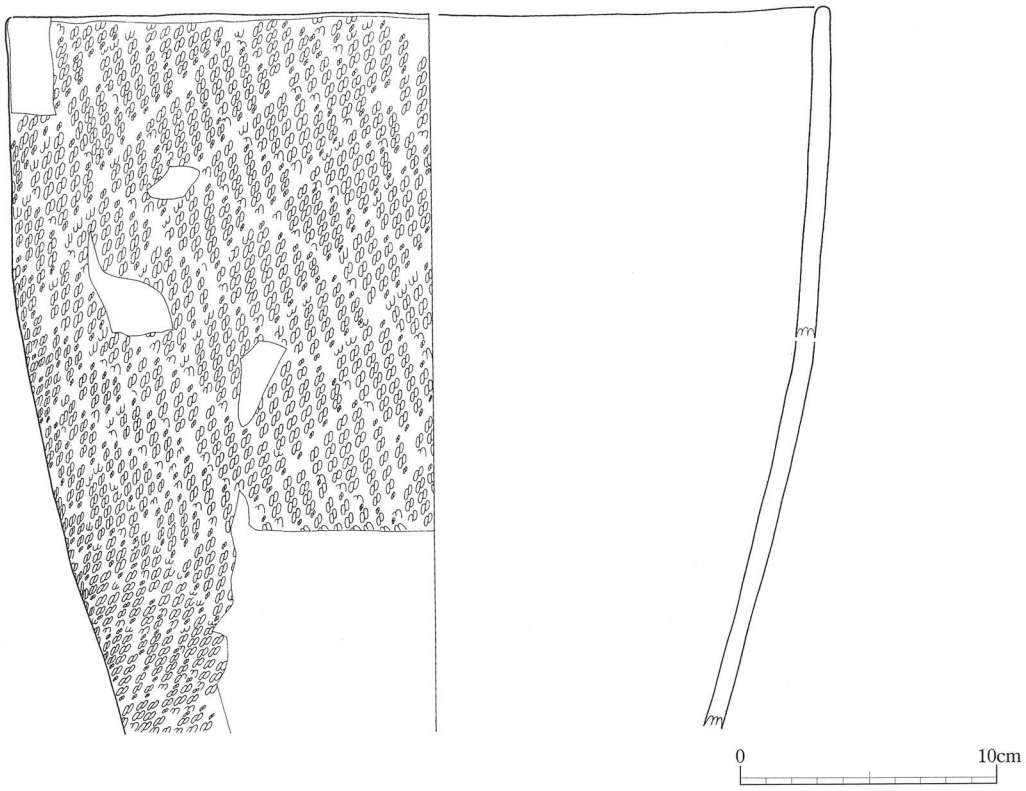
層	土　色	土　性	備　　考
1層	暗褐色 10YR3/3	シルト	（自然堆積）
2層	暗褐色 10YR3/3	シルト	地山粒をやや多く含む （自然堆積）
3層	暗褐色 10YR3/3	シルト	地山大ブロックを含む （壁の崩落土）
4層	暗褐色 10YR3/3	シルト	地山大ブロックを非常に多く含む （壁の崩落土）
5層	黒褐色 10YR2/3	シルト	焼土中ブロック、炭化物を含む （人為堆積）
6層	黒褐色 10YR2/3	粘質シルト	炭化物を多く含む。焼土粒を含む （人為堆積）
7層	黒褐色 10YR3/2	シルト	焼土、炭化物、白色粘土大ブロックをやや多く含む （人為堆積）
8層	黒　色 10YR2/1	シルト	炭化物層 （機能時堆積）

第30図　SK27、SK83、SK86土壙　平面図・断面図（1/50）



No.	層　位	器　形	特　　徴	時　期	写真図版
1	7a層	深　鉢	口縁部：波状縁　胴部：隆線文	後期初頭	17-1
2	7a層	深　鉢	胴部：隆線文、縄文	後期初頭	17-2
3	7a層	深　鉢	縄文（RL）		17-3
4	9層	鉢	口縁部：平縁、貫通孔、磨消縄文	後期初頭	17-4
5	9層	突　起	渦巻文	後期初頭	17-5
6	9層	深　鉢	胴部：鎖状隆線文	後期初頭	17-6
7	9層	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：沈線文、縄文（RL）	中期末～後期初頭	17-8
8	9層	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：隆線文、縄文	中期末～後期初頭	17-9
9	9層	深　鉢	口縁部：平縁　胴部「ノ」字状文、磨消縄文	中期末	17-7
10	9～11層	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：盲孔、磨消縄文（RL）	中期末	17-10
11	9～11層	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：隆沈線文、縄文	中期末	17-11
12	9層	深　鉢	胴部：縄文（LR）、摩滅　底部：網代痕		17-17,28-18
13	11層	深　鉢	口縁部：波状縁、円文	後期前葉	17-12
14	11層	深　鉢	口縁部：平縁、渦巻状隆線、渦巻状沈線文	後期初頭	17-13
15	11層	深　鉢	口縁部：平縁、列点文、横位沈線文、縄文	中期末～後期初頭	17-14
16	11層	深　鉢	口縁部：平縁、縄文（RL）		17-16
17	13層	深　鉢	胴部：横位沈線文、縦位隆線文		17-15
18	13層	深　鉢	胴部：縄文（RL）		17-18

第31図　SK83土壙出土土器（１）



層　位	器　形	特　　徴	時　期	写真図版
堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、縄文（RLR）　胴部：縄文（RLR）		17-19

第32図　SK83土壙出土土器（２）

えられる。その後、炭化物、灰、焼土、地山粘土ブロックを含む黒褐色シルトによって人為的に埋め戻され、その上に壁の崩落土、暗褐色シルト層が堆積している。

［出土遺物］縄文土器（第33図）、土偶（第52図１）などが出土している。

【SK95土壙】（第34図）

［位置］N31・E46で確認した。

［重複］重複はない。

［規模］上面径1.26m、底面径2.06m の円形で、残存する深さは1.16m である。

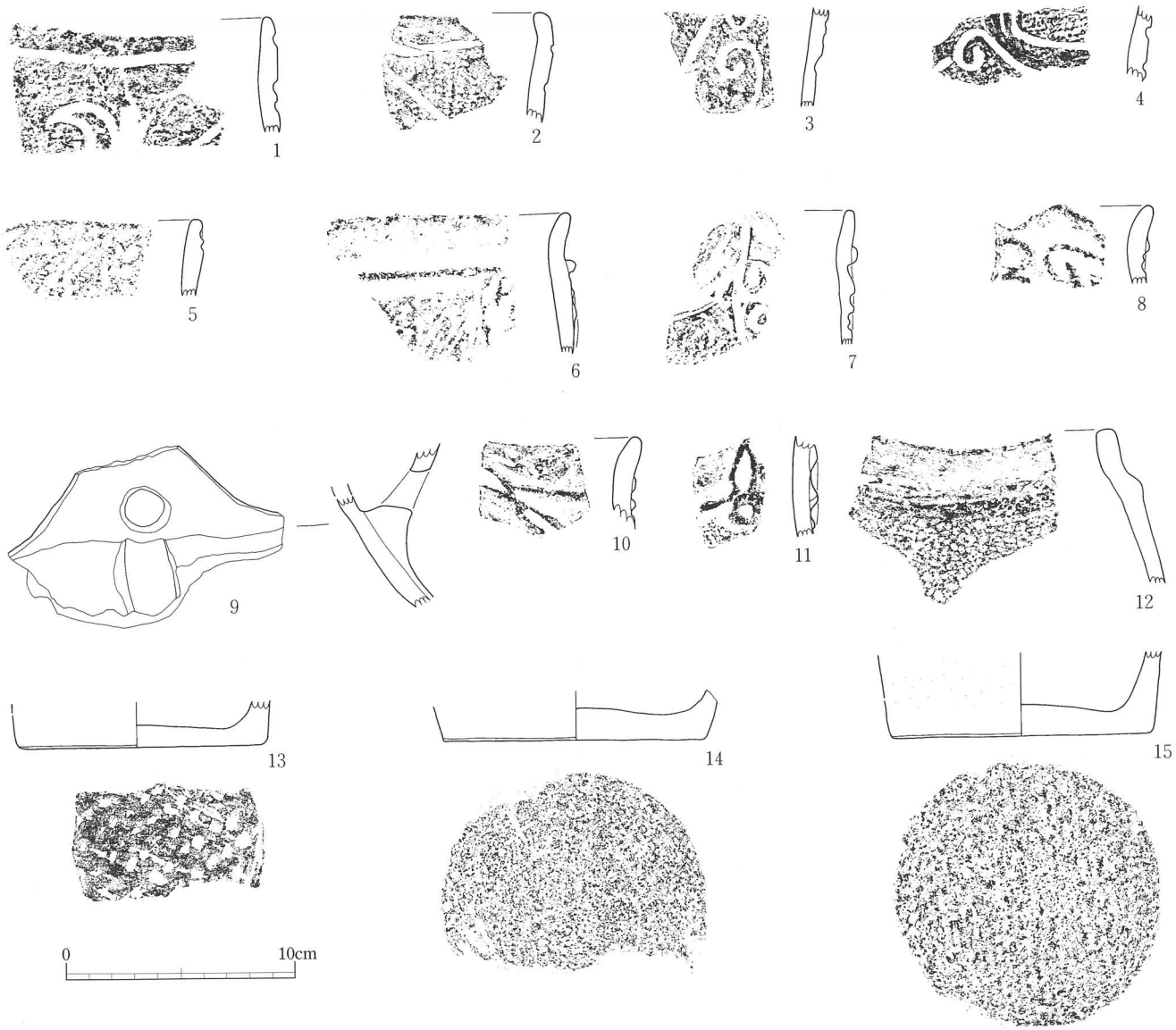
［堆積土］18層に分かれる。18層は黒褐色シルトで、機能時の堆積層である。その後、焼土、地山ブロック、土器片を多く含む黒褐色・暗褐色シルトなどによって人為的に埋め戻されており、薄い炭化物層（14層）も認められる。

［出土遺物］土壙埋め戻し土から、縄文土器（第35～37図）や円盤状土製品（第53図10）、石皿（写真図版35図２）などが出土している。

【SK110土壙】（第34図）

［位置］N35・E92の西区東端で確認した。

［重複］重複はない。



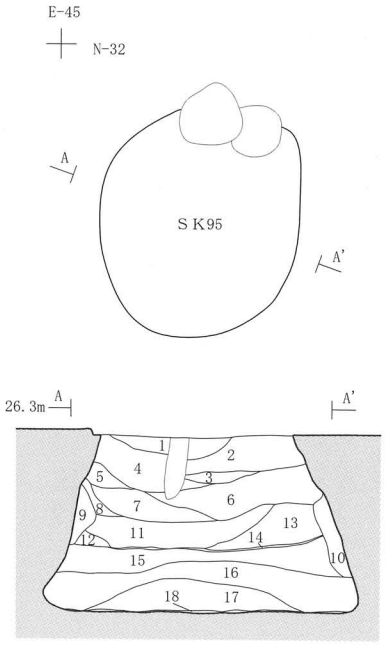
No.	層　位	器　形	特　　徴	時　期	写真図版
1	堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁　胴部：沈線文	後期初頭～前葉	16-15
2	堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、沈線文　胴部：沈線文、縄文（RLR）	後期前葉	16-16
3	堆積土	深　鉢	胴部：渦巻文、磨消縄文	後期前葉	16-17
4	堆積土	深　鉢	胴部：渦巻文、磨消縄文	後期前葉	16-18
5	堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、列点文、渦巻文	後期初頭～前葉	16-19
6	堆積土	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：鎖状隆線文、縄文	後期初頭～前葉	16-20
7	堆積土	深　鉢	胴部：渦巻文、縄文	後期初頭～前葉	16-21
8	堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、盲孔、渦巻状隆線文	後期初頭	16-22
9	堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、貫通孔　胴部：縦位隆帯	後期初頭	16-24
10	堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、鎖状隆線文	後期初頭	16-23
11	堆積土	深　鉢	胴部：鎖状隆線文、ボタン状貼付文、縄文	後期初頭	16-25
12	堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、無文帯　胴部：縄文		16-26
13	堆積土	深　鉢	底部：網代痕		28-1
14	堆積土	深　鉢	底部：網代痕		28-16
15	堆積土	深　鉢	底部：網代痕		

第33図　SK86土壙出土土器

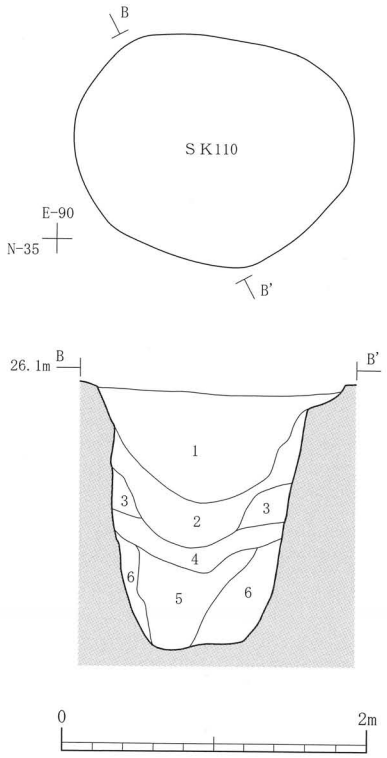
［規模］西区東端で遺構の約半分を検出し、その延長を生活道路部分で確認した。上面径1.62m、底径0.6mの円形で、残存する深さは1.68mである。地山Ⅲc層まで掘り込まれており、底面は平坦である。壁は底面からほぼまっすぐに立ち上がり、底面から約1.5mの高さのところで、緩やかに広がっている。

［堆積土］6層に分かれる。壁の崩落土堆積後、土器片、炭化物を多く含む黒褐色シルト・暗褐色シルトで人為的に埋め戻されている。

［出土遺物］縄文土器（第38図1～19）、石器（写真図版30-50）が出土している。

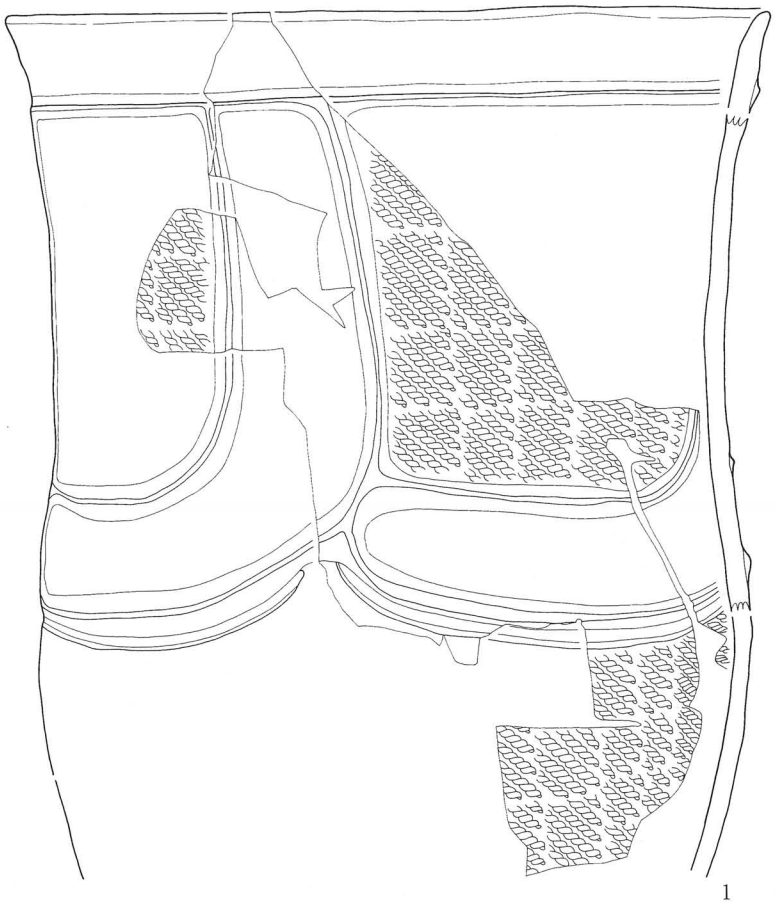


層	土　色	土　性	備　　考
1層	黒褐色 10YR2/2	シルト	地山ブロック、炭化物を少量含む　(人為堆積)
2層	黒褐色 10YR2/3	シルト	地山粒、焼土、炭化物を含む　(人為堆積)
3層	暗赤褐色 2.5YR3/3	シルト	焼土、炭の廃棄層　(人為堆積)
4層	黒褐色 10YR2/3	シルト	地山ブロック、焼土、炭化物を含む　(人為堆積)
5層	黒褐色 10YR2/2	シルト	地山ブロック、炭化物を少量含む　(人為堆積)
6層	黒褐色 10YR2/3	シルト	焼土、炭化物を含む　(人為堆積)
7層	黒褐色 10YR2/2	粘質シルト	炭化物を少量含む　(自然堆積)
8層	暗褐色 10YR3/3	シルト	地山ブロックを少量含む。壁の崩落土　(自然堆積)
9層	黒褐色 10YR2/3	シルト	地山ブロックを含む。壁の崩落土　(自然堆積)
10層	黒褐色 10YR2/3	粘性シルト	地山ブロックを含む。壁の崩落土　(自然堆積)
11層	暗褐色 10YR3/3	シルト	地山ブロック、焼土、炭化物を含む。土器片が多く出土　(人為堆積)
12層	暗褐色 10YR3/4	粘性シルト	地山ブロックを多量に含む。壁の崩落土　(自然堆積)
13層	暗褐色 10YR3/3	シルト	地山ブロック（崩落土）を多く含む。12層に類似　(自然堆積)
14層			炭化物層　(人為堆積)
15層	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘性シルト	地山ブロック（白色粘土）を多量に含む　(人為堆積)
16層	黒褐色 10YR2/2	シルト	地山ブロック、炭化物を少量含む　(人為堆積)
17層	にぶい黄褐色 10YR4/3	粘性シルト	地山ブロック（白色粘土）を含む　(人為堆積)
18層	黒褐色 10YR2/3	シルト	地山粒、地山ブロックを少量含む　(機能時堆積土)



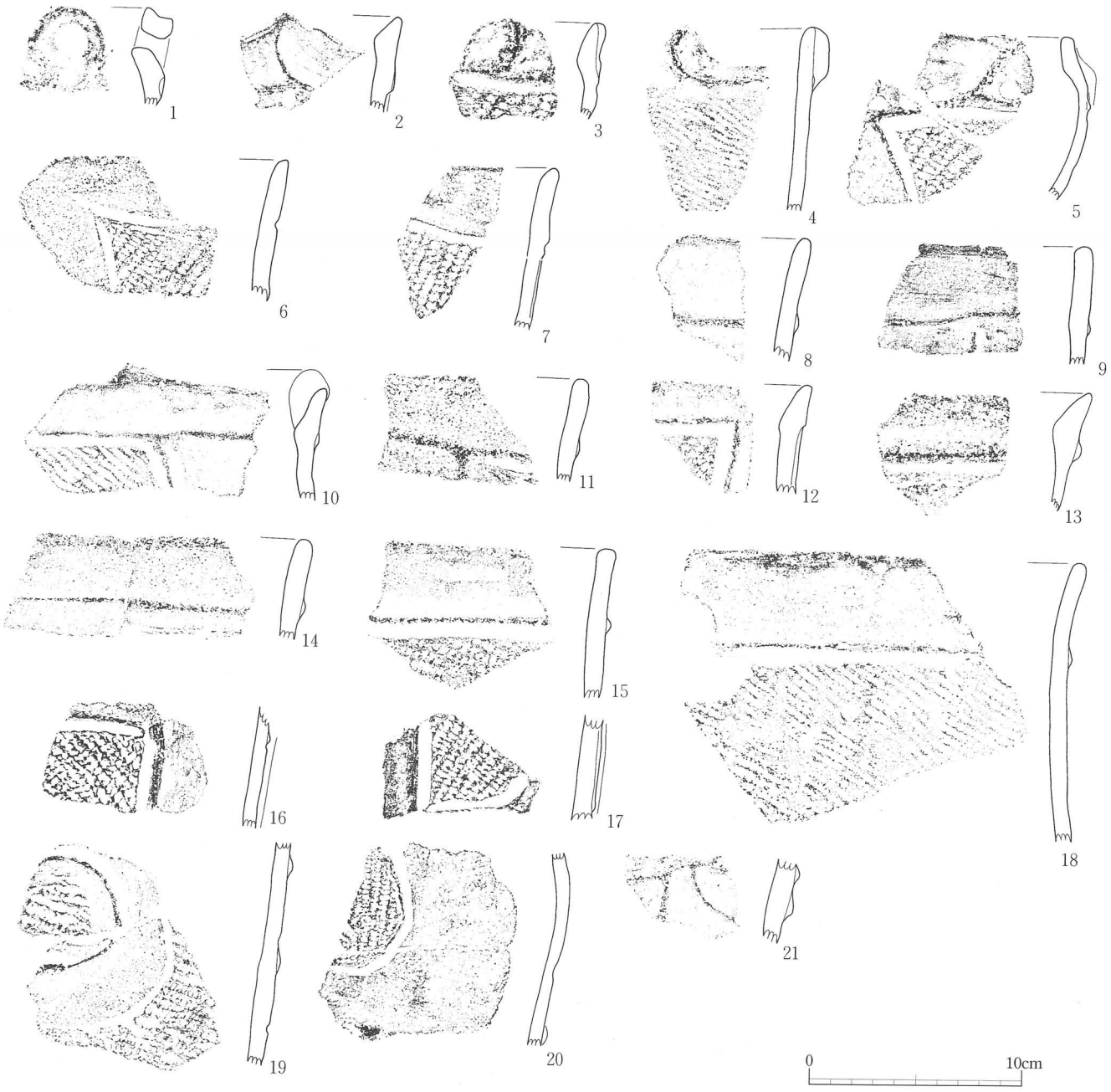
層	土　色	土　性	備　　考
1層	黒褐色 10YR3/2	シルト	白色粘土粒ブロック、炭化物をわずかに含む。土器片を多く含む　(人為堆積)
2層	黒褐色 10YR2/3	シルト	炭化物を含む。土器片を多く含む　(人為堆積)
3層	暗褐色 10YR3/3	シルト	地山ブロックを多量に含む。壁の崩落土　(自然堆積)
4層	暗褐色 10YR3/4	シルト	
5層	暗褐色 10YR3/3	シルト	土器片を含む　(人為堆積)
6層	暗褐色 10YR3/3	シルト	地山粘土ブロック、白色粘土ブロックを含む　(人為堆積)

第34図　SK95、SK110土壙　平面図・断面図（1/50）



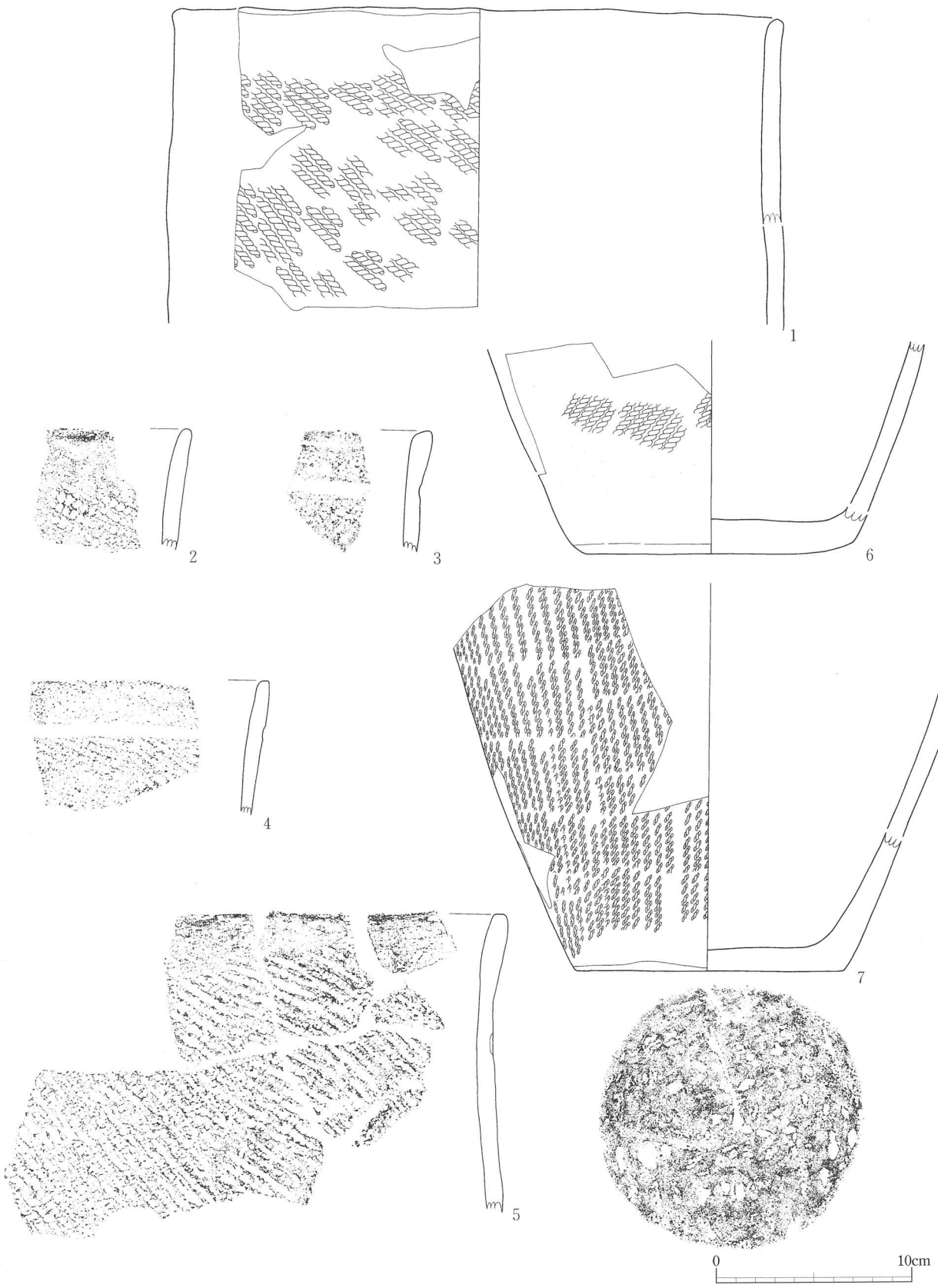
No.	層　位	器　形	特　　徴	時　期	写真図版
1	堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：隆沈線による「ノ」字状文、磨消縄文（LR）	中期末	18-1
2	堆積土	深　鉢	胴部：隆沈線による入組「O」字状文、磨消縄文（LR）	中期末	19-21

第35図　SK95土壙出土土器（１）



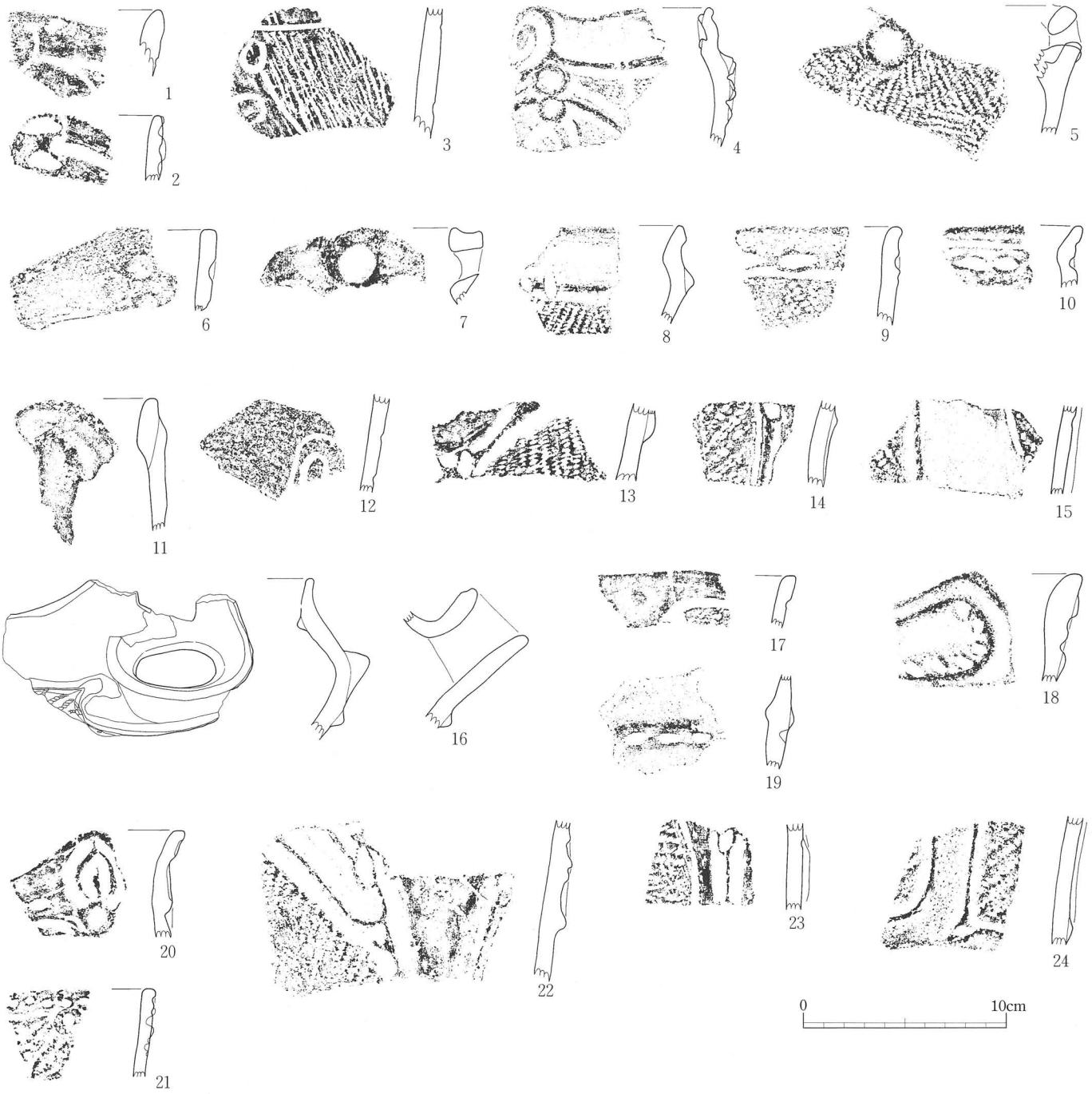
No.	層　位	器　形	特　徴	時　期	写真図版
1	堆積土	突　起	貫通孔、盲孔	中期末	19-4
2	堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、鰭状隆線文	中期末	19-6
3	堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、鰭状隆線文　胴部：縄文	中期末	19-5
4	堆積土	深　鉢	口縁部：鰭状隆線文　胴部：縄文（L）	中期末	19-1
5	堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、隆沈線文、列点文、縄文	中期末	19-2
6	堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、沈線文、縄文	中期末	19-3
7	堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、無文帯　胴部：隆沈線文、縄文（LR）	中期末	19-7
8	堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：隆沈線文、縄文	中期末	19-8
9	堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：隆沈線文	中期末	19-9
10	堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、内面に鰭状隆線文　隆沈線文、磨消縄文（L）	中期末	19-12
11	堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：隆沈線文、縄文	中期末	19-10
12	堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：隆沈線文、縄文	中期末	19-11
13	堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：隆沈線文	中期末	19-16
14	堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：隆沈線文	中期末	19-13
15	堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：隆沈線文、縄文（LR）	中期末	19-14
16	堆積土	深　鉢	胴部：隆沈線文、磨消縄文（LR）	中期末	19-18
17	堆積土	深　鉢	胴部：隆沈線文、磨消縄文（LR）	中期末	19-17
18	堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：隆沈線文、縄文（LR）	中期末	19-15
19	堆積土	深　鉢	胴部：一部隆沈線による「O」字状文、磨消縄文（LR）	中期末	19-19
20	堆積土	深　鉢	胴部：「O」字状文、磨消縄文（RL）、突起	中期末	19-20
21	堆積土	深　鉢	胴部：隆沈線文	中期末	19-22

第36図　SK95土壙出土土器（２）



No.	層　位	器　形	特　　徴	時　期	写真図版
1	堆積土	深　鉢	口縁部：無文帯　胴部：縄文（LR）	中期末	19-27
2	堆積土	深　鉢	口縁部：無文帯　胴部：縄文（LR）	中期末	19-25
3	堆積土	深　鉢	口縁部：無文帯　胴部：横位沈線文、縄文	中期末	19-24
4	堆積土	深　鉢	口縁部：無文帯　胴部：横位沈線文、縄文（LR）	中期末	19-23
5	堆積土	深　鉢	口縁部：無文帯　胴部：縄文（LR）	中期末	19-26
6	堆積土	深　鉢	胴部：縄文（RL）	中期末	19-3
7	堆積土	深　鉢	胴部：撚糸文（LR）　底部：網代痕＋なで	中期末	18-2,28-23

第37図　SK95土壙出土土器（３）



No.	遺構・層位	器　形	特　　徴	時　期	写真図版
1	SK110堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、円文	後期前葉	16-27
2	SK110堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、縦位隆帯＋刻目文	後期初頭	16-28
3	SK110堆積土	深　鉢	胴部：渦巻文、撚糸文（R）	後期前葉	16-29
4	SK110堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、渦巻文　胴部：ボタン状貼付文、隆線文、縄文	後期初頭	16-30
5	SK110堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、突起、貫通孔、縄文（RL）	後期初頭～前葉	16-31
6	SK110堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、盲孔	後期初頭～前葉	16-32
7	SK110堆積土	深　鉢	貫通孔		16-33
8	SK110堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：隆線文、縦位刻目文		16-34
9	SK110堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、列点文　胴部：横位沈線文、縄文		16-35
10	SK110堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、横位沈線文、列点文		16-36
11	SK110堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、縦位隆帯	後期初頭～前葉	16-37
12	SK110堆積土	深　鉢	胴部：弧状沈線文、縄文	後期初頭～前葉	16-38
13	SK110堆積土	深　鉢	胴部：隆線文＋刻目文	後期初頭	16-39
14	SK110堆積土	深　鉢	胴部：縦位隆帯＋ボタン状貼付文、縄文（RLR）	後期初頭	16-40
15	SK110堆積土	深　鉢	胴部：隆線文、縄文	中期末～後期初頭	16-41
16	SK110堆積土	注　口	胴部：隆線文、縄文	中期末～後期初頭	16-42
17	SK110堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、沈線文、縄文	中期末～後期初頭	16-43
18	SK110堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、隆沈線文、列点文	中期末	16-45
19	SK110堆積土	深　鉢	胴部：隆沈線文、列点文	中期末	16-44
20	SK27堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、重弧文、ボタン状貼付文、盲孔	後期初頭	16-46
21	SK27堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、列点文　胴部：ボタン状貼付文、刺突、縄文	後期初頭	16-47
22	SK27堆積土	深　鉢	胴部：隆線文＋刻目文、磨消縄文（RL）	後期初頭	16-50
23	SK27堆積土	深　鉢	胴部：隆線文＋刻目文、縄文	後期初頭	16-48
24	SK27堆積土	深　鉢	胴部：隆沈線文、磨消縄文（RL）	中期末	16-49

第38図　SK110、SK27土壙出土土器

B　その他の土壙（第４～９、39、40図）

発見された土壙のなかで、黒褐色土を主体とし、縄文土器のみを出土する土壙、または、縄文時代とわかる遺構より重複関係で古い土壙を縄文時代の土壙とした。貯蔵穴としたもの以外に20基発見した。

【SK33土壙】（第５図）

［位置］N10・E ３で確認した。

［重複］重複はない。

［規模］直径1.0m、深さ20㎝の円形である。断面形は皿状を呈する。

［堆積土］１層認められる。暗褐色シルト層で、自然堆積である。

［出土遺物］縄文土器（第41図１～３）、袖珍土器（第51図１、２）、石器（第54図13、55図３、写真図版30-12）が出土している。

【SK21土壙】（第39図）

［位置］N27・E26で確認した。

［重複］重複はない。

［規模］直径1.0mの円形で、深さは30㎝である。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

［堆積土］２層に分かれる。地山ブロック、焼土粒、炭化物を多く含む黒褐色シルトで人為的に埋め戻されている。

［出土遺物］縄文土器が出土している（第41図５）。

【SK ９土壙】（第７図）

［位置］N24・E28で確認した。

［重複］SI147住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。

［規模］長径約1.3m、短径約1.0m、深さ36㎝の楕円形である。底面は平坦で壁は急に立ち上がる。

［堆積土］１層認められる。地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで、人為的に埋め戻されている。

［出土遺物］縄文土器（第41図６～８、12）、円盤状土製品（第53図５）、石器（第54図５、写真図版29-46、30-46、33- ６）などが出土している。

【SK135土壙】（第７図）

［位置］N25・E35で確認した。

［重複］SI10住居跡と重複し、これより古い。

［規模］南半が調査区外にあり、SI10住居跡に北半を壊されているため、規模、形態は不明である。

［堆積土］１層で、黒褐色シルトである。

［出土遺物］縄文土器が出土している（第41図９）。

【SK90土壙】（第39図）

［位置］N23・E23で確認した。

［重複］SI 2住居跡と重複し、これより古い。

［規模］直径1.2mの円形で、残存する深さは20cmである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

［堆積土］3層に分かれる。地山ブロック、焼土粒、炭化物を多く含む黒褐色シルトで人為的に埋め戻されている。

［出土遺物］縄文土器（第42図1、2）、円盤状土製品（第53図9）、石器（写真図版29-52、30-40）が出土している。

【SK96土壙】（第39図）

［位置］N30・E48で確認した。

［重複］重複はない。

［規模］長径1.3m、短径1.0m、深さ50cmの楕円形である。底面は不整形で、壁は緩やかに立ち上がる。

［堆積土］2層に分かれる。地山粒、炭化物を含む黒褐色シルト層である。

［出土遺物］縄文土器（第41図10、11）が出土している。

【SK104土壙】（第39図）

［位置］N28・E37で確認した。

［重複］SI10、SI11住居跡、SK145土壙と重複する。SI10、SI11住居跡より古く、SK145土壙より新しい。

［規模］直径1.4mの不整円形で、深さは0.9mである。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

［堆積土］1層で、焼土粒、炭化物を多く含む黒褐色シルトで人為的に埋め戻されている。

［出土遺物］縄文土器の小破片が出土している。

【SK145土壙】（第39図）

［位置］N29・E36で確認した。

［重複］SI10、SI11住居跡、SK104土壙と重複し、これより古い。

［規模］直径1.16mの円形で、深さは34cmである。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。

［堆積土］1層で、地山ブロックを非常に多く含む暗褐色シルトで人為的に埋め戻されている。

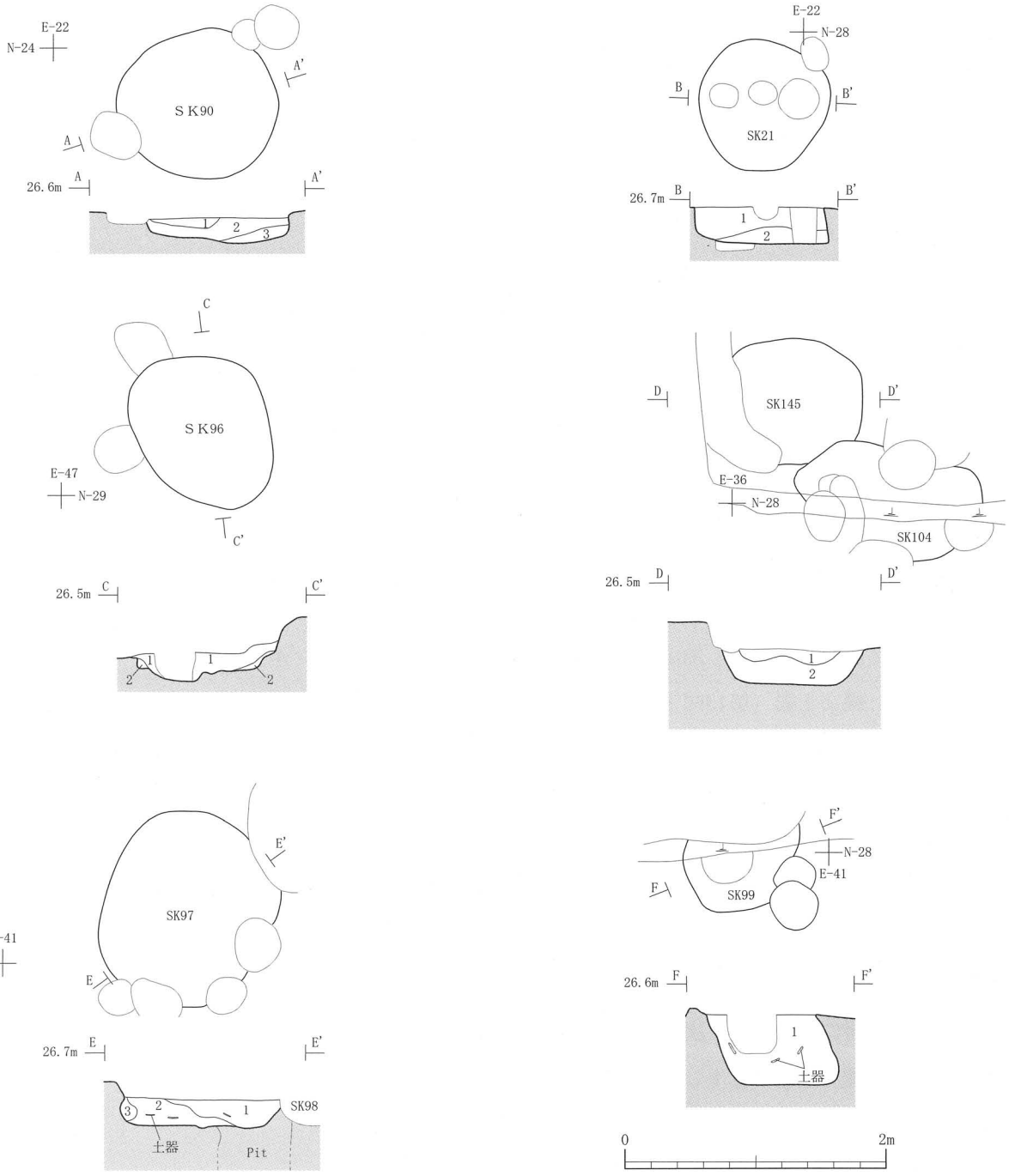
［出土遺物］縄文土器の小破片が出土している。

【SK99土壙】（第39図）

［位置］N28・E40で確認した。北半部はSI11住居跡によって壊されている。

［重複］SI11住居跡と重複し、これより古い。

［規模］直径0.86m、深さ5.4mの円形と考えられる。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。



層	遺　構	土　色	土　性	備　　考
1	SK90 (A-A')	黒褐色　10YR3/2	シルト	地山中ブロック、焼土粒、炭化物を多く含む　(人為堆積)
2		黒褐色　10YR3/2	シルト	地山粒、焼土粒、炭化物をやや多く含む　(人為堆積)
3		黒褐色　10YR3/2	シルト	地山中ブロック、炭化物を多く含む　(人為堆積)
1	SK21 (B-B')	黒褐色　10YR2/3	シルト	焼土粒、炭化物をやや多く含む　(人為堆積)
2		黒褐色　10YR2/3	シルト	炭化物を多く含む。焼土粒を少し含む　(人為堆積)
1	SK96 (C-C')	黒褐色　10YR2/3	シルト	地山粒、炭化物を少し含む　(自然堆積)
2		にぶい黄褐色　10YR4/3	シルト	地山粒を多く含む　(自然堆積)
1	SK145 (D-D')	にぶい黄褐色　10YR4/3	シルト	地山大ブロックを多く含む　(人為堆積)
2		黒褐色　10YR3/2	シルト	地山ブロックを多く含む　(人為堆積)
1	SK97 (E-E')	黒褐色　10YR2/2	シルト	焼土、炭化物を少し含む　(自然堆積)
2		黒褐色　10YR2/3	シルト	地山粒、地山ブロックを少し含む。土器片を含む　(自然堆積)
3		暗褐色　10YR3/4	シルト	地山ブロックを少し含む　(自然堆積)
1	SK99 (F-F')	暗褐色　10YR3/4	シルト	地山ブロック、土器片を多く含む　(人為堆積)

第39図　土壙　平面図・断面図（1）(1/50)

［堆積土］１層で、地山ブロックを多く含む黒褐色シルトで人為的に埋め戻されている。

［出土遺物］縄文土器の小破片、石器（第54図４）などが出土している。

【SK97土壙】（第39図）

［位置］N27・E42で確認した。

［重複］SK98土壙と重複し、これより古い。

［規模］長径1.46m、短径1.3m、深さ20㎝の楕円形と考えられる。底面は平坦で壁は急に立ち上がる。

［堆積土］３層に分かれる。地山粒、炭化物、焼土粒を含む黒褐色シルトである。

［出土遺物］縄文土器（第42図３～14）、土偶（第52図２）などが出土している。

【SK100土壙】（第40図）

［位置］N31・E60で確認した。

［重複］SK102土壙と重複し、これより新しい。

［規模］直径1.2m、深さ56㎝の円形と考えられる。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

［堆積土］２層に分かれる。地山粒、炭化物、焼土粒を含む黒褐色シルトである。

［出土遺物］縄文土器（第43図１～14）、土偶（第52図４）、円盤状土製品（第53図11～13）、石器（第56図４、５）などが出土している。

【SK102土壙】（第40図）

［位置］N31・E61で確認した。北辺部は削平によって失われている。

［重複］SK100土壙と重複し、これより古い。

［規模］直径1.1m、深さ0.2mの円形と考えられる。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。

［堆積土］２層に分かれる。炭化物、焼土粒を含む黒褐色シルトである。

［出土遺物］縄文土器が出土している（第43図15）。

【SK103土壙】（第40図）

［位置］N33・E63で確認した。

［重複］重複はない。

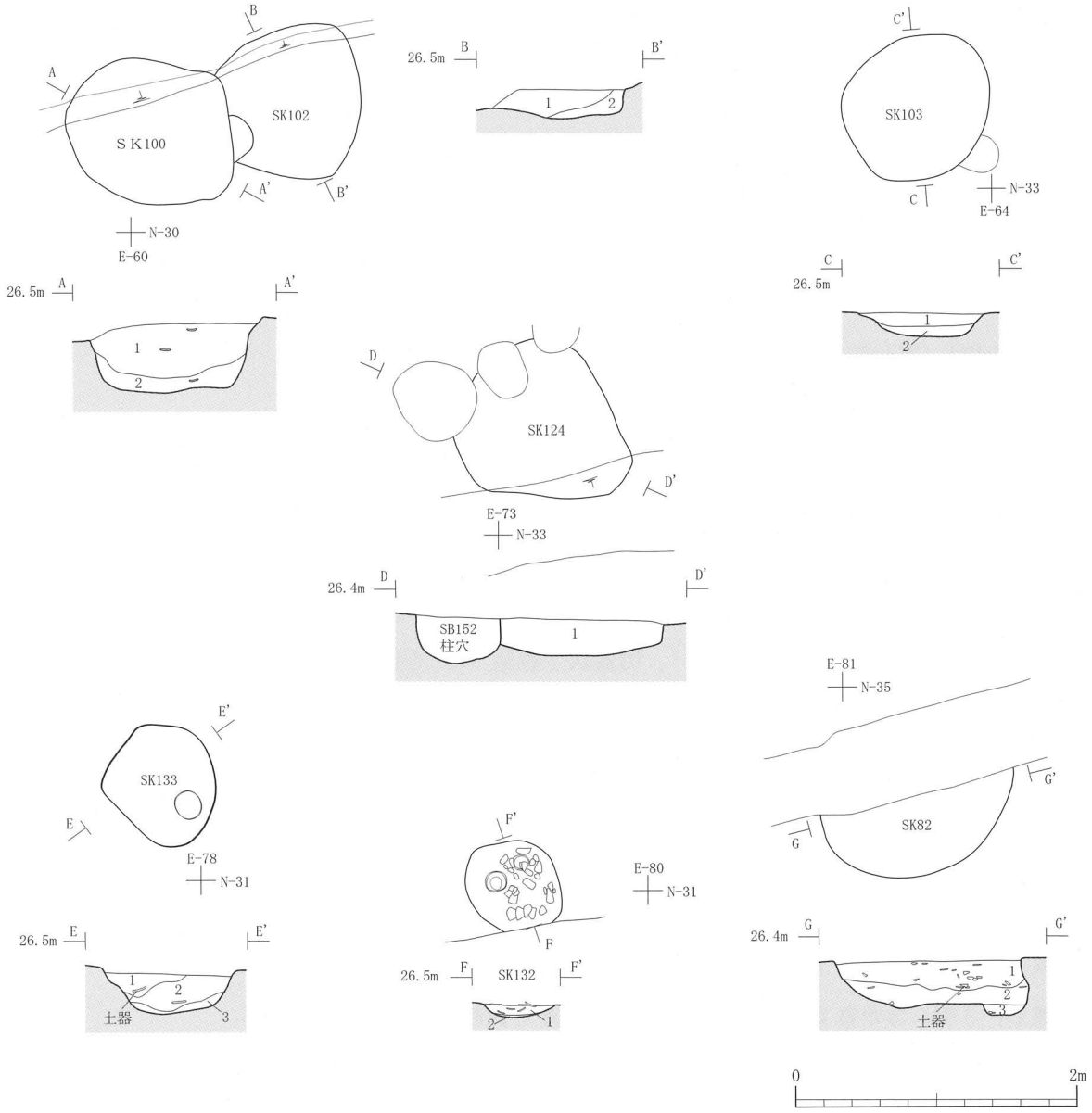
［規模］長径1.1m、短径1.0m、深さ0.2mの楕円形と考えられる。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

［堆積土］１層認められる。地山粒、炭化物、焼土粒を少し含む黒褐色シルトである。

［出土遺物］縄文土器（第43図16～20）が出土している。

【SK120土壙】（第８図）

［位置］N29・E68で確認した。



層	遺　構	土　色	土　性	備　　考
1	SK100 (A-A')	黒褐色　10YR2/2	シルト	焼土、炭化物を少し含む　(自然堆積)
2		黒褐色　10YR3/2	シルト	地山ブロック、炭化物、焼土を少し含む　(自然堆積)
1	SK102 (B-B')	黒褐色　10YR2/3	シルト	焼土、炭化物を含む　(自然堆積)
2		黒　色　10YR2/1	シルト	焼土、炭化物を少量含む。地山粒を含む　(自然堆積)
1	SK103 (C-C')	黒褐色　10YR2/3	シルト	地山ブロック、焼土、炭化物を含む　(自然堆積)
2		黒褐色　10YR2/2	シルト	地山ブロックを少し含む　(自然堆積)
1	SK124 (D-D')	黒褐色　10YR2/3	シルト	焼土粒、炭化物を多く含む　(人為堆積)
1	SK133 (E-E')	暗褐色　10YR3/3	シルト	焼土を含む　(自然堆積)
2		黒褐色　10YR2/3	シルト	焼土を含む　(自然堆積)
3		暗褐色　10YR3/4	シルト	地山ブロックを含む　(自然堆積)
1	SK132 (F-F')	黒褐色　10YR3/2	シルト	(人為堆積)
2		暗褐色　10YR3/4	シルト	(自然堆積)
1	SK82 (G-G')	黒褐色　10YR2/2	シルト	焼土粒、炭化物、土器片を多く含む　(人為堆積)
2		黒褐色　10YR2/3	シルト	焼土粒、炭化物を含む　(人為堆積)
3		黒褐色　10YR3/2	シルト	

第40図　土壙　平面図・断面図（2）（1/50）

［重複］SI146住居跡と重複し、これより新しい。

［規模］長径80cm 以上、短径約1.1m 以上、深さ約20cm の不整円形である。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。

［堆積土］１層認められ、黒褐色シルトである。

［出土遺物］条痕文が施された深鉢の胴部破片（第43図21）、円盤状土製品（第53図８、14）、石器（第54図10、18、写真図版29-16）などが出土している。

【SK124土壙】（第40図）

［位置］N34・E73で確認した。

［重複］SB152建物跡と重複し、これより古い。

［規模］長径1.3m、短径1.1m、深さ28cm の不整円形と考えられる。底面は中央からゆるやかに浅くなり、壁は急に立ち上がる。

［堆積土］１層認められる。地山粒、炭化物、焼土粒を少し含む黒褐色シルトである。

［出土遺物］縄文土器（第44図１～９）、円盤状土製品（第53図20）、石器（第54図１）が出土している。

【SK133土壙】（第40図）

［位置］N32・E78で確認した。

［重複］重複はない。

［規模］直径0.8m、深さ32cm の円形と考えられる。底面から緩やかに立ち上がる。

［堆積土］３層に分かれる。地山ブロック、焼土粒を含む暗褐色シルトである。

［出土遺物］縄文土器（第44図10～12）、袖珍土器（第51図６）が出土している。

【SK132土壙】（第40図）

［位置］N31・E79で確認した。

［重複］重複はない。

［規模］直径0.65m、深さ0.1m の円形と考えられる。底面から緩やかに立ち上がる。

［堆積土］２層に分かれる。黒褐色シルトで人為的に埋め戻されている。

［出土遺物］縄文土器が出土している（第44図22、23）。

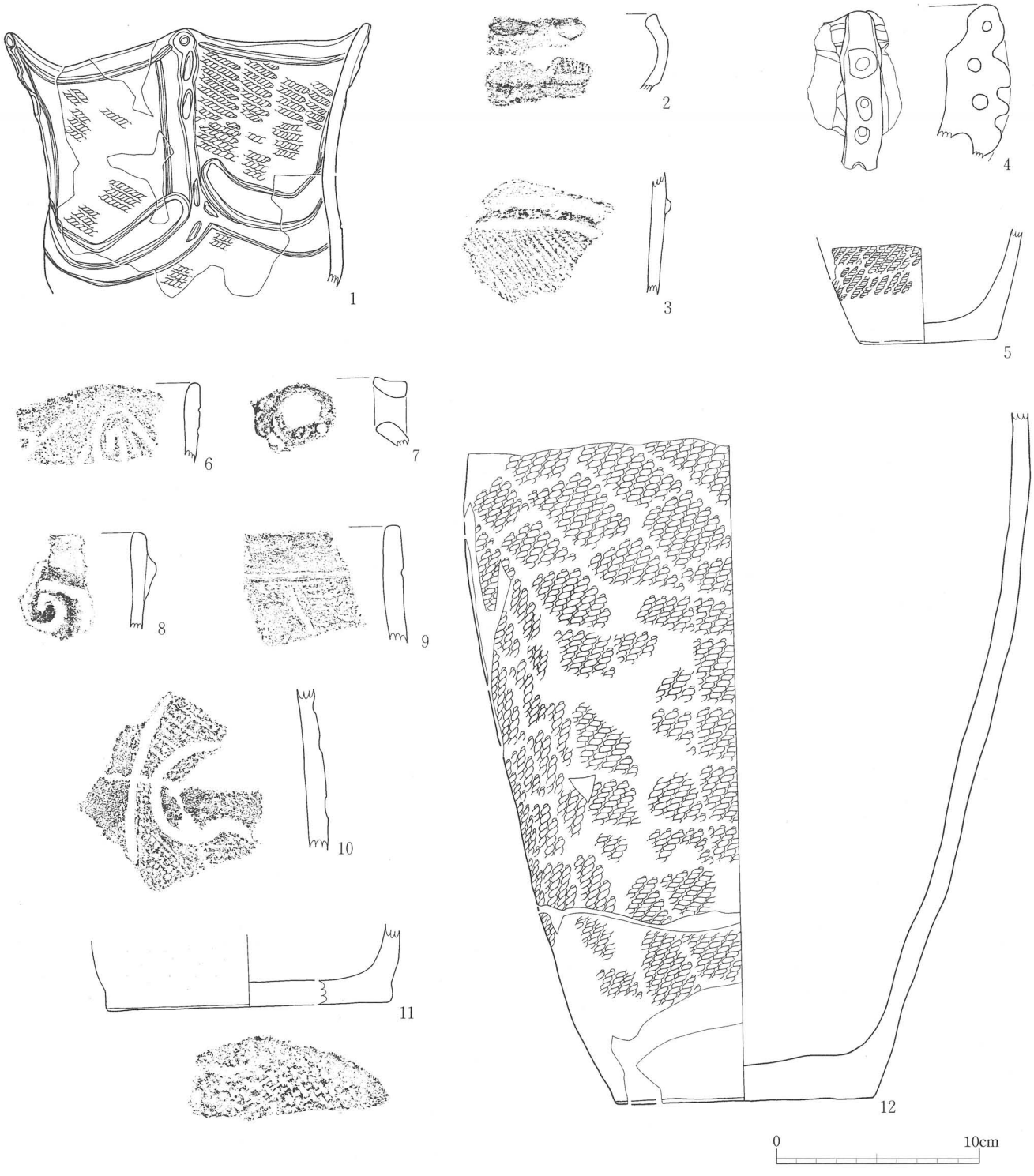
【SK127土壙】（第９図）

［位置］N36・E80で確認した。

［重複］SB153建物跡と重複し、これより古い。

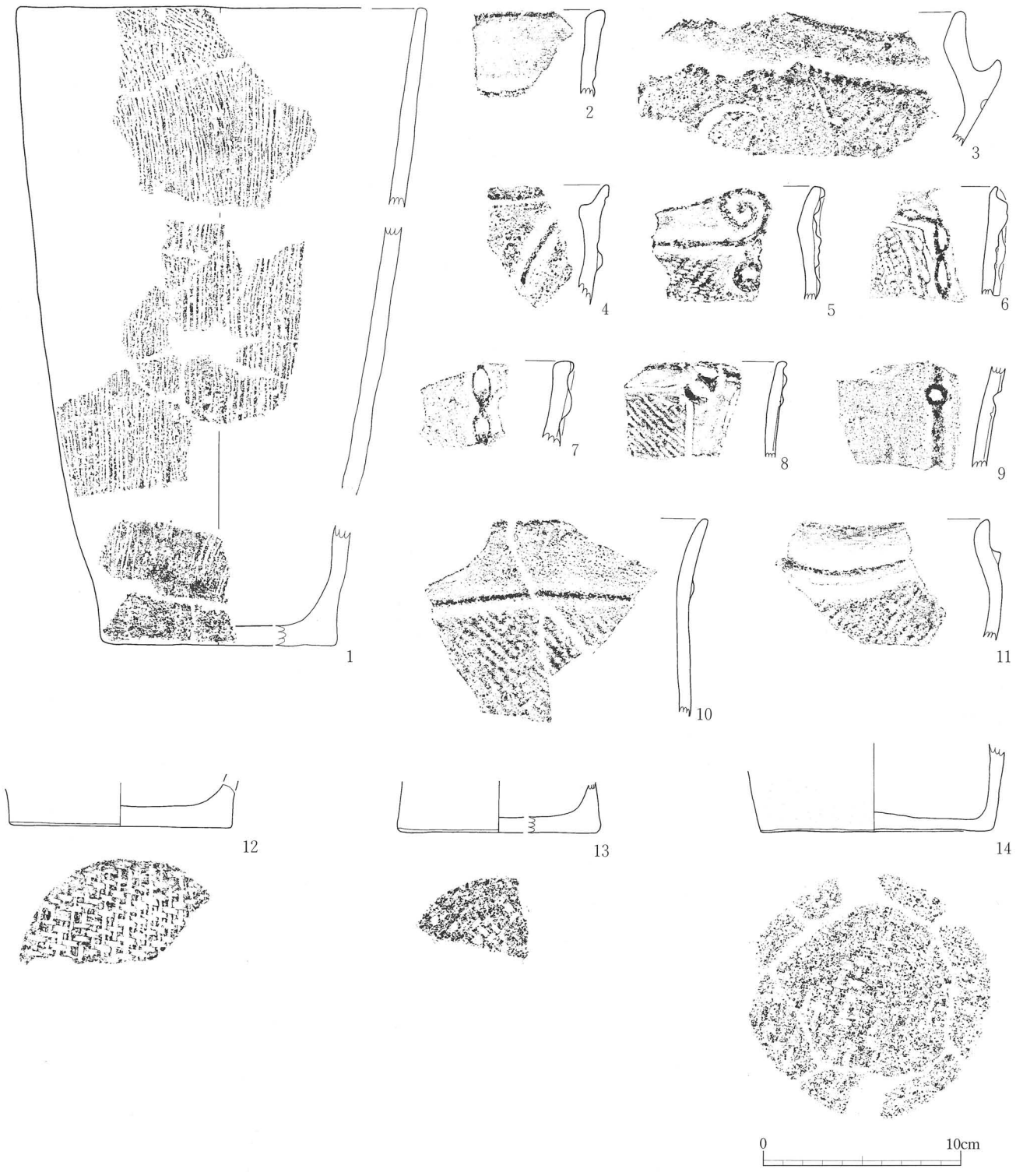
［規模］直径1.2m 程度の円形と推定されるが、SD56溝跡によって大部分が壊されている。

［出土遺物］縄文土器が出土している（第44図13）。



No.	遺構・層位	器　形	特　徴	時　期	写真図版
1	SK33堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、頂部盲孔　胴部：縦位鎖状隆線文、弧状区画沈線文、磨消縄文（LR）	後期初頭	20-1
2	SK33堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、縄文	中期末	20-2
3	SK33堆積土	深　鉢	胴部：隆線文、縄文（LR）	中期末～後期初頭	20-3
4	SK24堆積土	深　鉢	橋状突起、貫通孔3個、盲孔4個	中期末～後期初頭	20-4
5	SK21堆積土	深　鉢	胴部：縄文（RL）		23-5
6	SK9堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、渦巻文	後期前葉	20-5
7	SK9堆積土	突　起	貫通孔		
8	SK9堆積土	深　鉢	隆線による渦巻文	後期初頭～前葉	20-7
9	SK135堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：沈線文、縄文	中期末～後期初頭	20-8
10	SK96堆積土	深　鉢	胴部：蕨手状文、磨消縄文（LR）	後期前葉	20-9
11	SK96堆積土	深　鉢	底部：網代痕		28-7
12	SK9堆積土	深　鉢	胴部：縄文（RL）		22-1

第41図　土壙（SK）出土土器（1）



No.	遺構・層位	器　形	特　徴	時　期	写真図版
1	SK90堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、条痕文　胴部：条痕文		20-19
2	SK90-1層	深　鉢	口縁部：平縁、横位沈線文	中期末	20-20
3	SK97堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁　胴部：沈線文	後期初頭	20-10
4	SK97堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、横位沈線文、弧状隆線文、	後期初頭	20-11
5	SK97堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、隆線による渦巻文　胴部：ボタン状貼付文、縄文（RL）	後期初頭	20-12
6	SK97堆積土	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：鎖状隆線文、列点文、縄文	後期初頭	20-13
7	SK97堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、鎖状隆線文、縄文	後期初頭	20-14
8	SK97堆積土	深　鉢	口縁部：平縁　、無文帯　胴部：隆沈線文刻目文、方形区画沈線文、縄文	後期初頭	20-15
9	SK97堆積土	深　鉢	胴部：盲孔、縦位隆線文、縄文	後期初頭	20-16
10	SK97堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：隆線文、縄文（LR）	中期末	20-17
11	SK97堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、弧状隆線文　胴部：縄文（RL）	中期末～後期初頭	20-18
12	SK97堆積土	深　鉢	底部：網代痕		28-8
13	SK97堆積土	深　鉢	底部：網代痕		28-3
14	SK97堆積土	深　鉢	底部：網代痕		28-5

第42図　土壙（SK）出土土器（2）

No.	遺構・層位	器　形	特　徴	時　期	写真図版
1	SK100堆積土	突　起	ボタン状貼付文、弧状隆線文	後期初頭	20-21
2	SK100堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、ボタン状貼付文、渦巻文、隆線文　胴部：縄文（RL）	後期初頭	20-22
3	SK100堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁　胴部：鎖状隆線文、縄文	後期初頭	20-23
4	SK100堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、弧状文、刺突列	後期初頭～前葉	20-24
5	SK100堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、弧状隆線文、刺突列	中期末～後期初頭	20-25
6	SK100堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、渦巻文、刺突列、縄文（RL）	後期初頭～前葉	20-26
7	SK100堆積土	深　鉢	弧状沈線文、刺突列、縄文	後期初頭	20-27
8	SK100堆積土	深　鉢	胴部：ボタン状貼付文、弧状沈線文、縄文	後期初頭	20-28
9	SK100堆積土	深　鉢	胴部：鎖状隆線文	後期初頭	20-29
10	SK100堆積土	深　鉢	胴部：弧状隆線文		20-30
11	SK100堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、沈線文、縄文	中期末～後期初頭	20-31
12	SK100堆積土	深　鉢	底部：網代痕		28-6
13	SK100堆積土	深　鉢	胴部：弧状沈線文＋列点文、磨消縄文（LR）	中期末～後期初頭	20-32
14	SK100堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、隆線文、縄文	中期末	20-33
15	SK102堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、横位沈線文		20-34
16	SK103堆積土	深　鉢	胴部：弧状沈線文＋列点文	中期末～後期初頭	20-36
17	SK103堆積土	深　鉢	胴部：鎖状隆線文	後期初頭	20-35
18	SK103堆積土	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：方形区画文、縦位隆線＋刻目文、磨消縄文（RL）	中期末～後期初頭	20-38
19	SK103堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：縄文（LR）		20-37
20	SK103堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、縄文		20-39
21	SK120堆積土	深　鉢	胴部：条痕文		20-40

第43図　土壙（SK）出土土器（3）

No.	遺構・層位	器　形	特　徴	時　期	写真図版
1	SK124堆積土	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：渦巻文	後期前葉	21-1
2	SK124堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、隆線文、列点文	中期末～後期初頭	21-2
3	SK124堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、貫通孔、環状突帯＋列点文	中期末～後期初頭	21-3
4	SK124堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、斜位刻目文、沈線文		21-4
5	SK124堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、沈線文、縄文	中期末～後期初頭	21-5
6	SK124堆積土	深　鉢	胴部：磨消縄文	中期末	21-6
7	SK124堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：縄文（RL）	中期末	21-7
8	SK124堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：縄文（LRL）	中期末	21-8
9	SK124堆積土	深　鉢	底部：木葉痕		28-9
10	SK133堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：横位沈線、縄文（LR）	中期末	21-9
11	SK133堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、無文帯　胴部：破線文、縦位区画沈線文、縄文（RL）	後期初頭	22-3
12	SK133堆積土	深　鉢	底部：網代痕		28-10
13	SK127堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、縦位隆線文＋刻目文　胴部：横位沈線、縄文		21-10
14	SK82堆積土	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：横位隆線文、縄文（RL）	中期末～後期初頭	21-11
15	SK82堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、隆線文	中期末	21-13
16	SK82堆積土	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：横位隆線文、縄文	中期末	21-14
17	SK82堆積土	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：横位沈線文、縄文（RL）	中期末	21-15
18	SK82堆積土	深　鉢	胴部：隆沈線文＋刻目文、縄文	中期末～後期初頭	21-16
19	SK82堆積土	深　鉢	口縁部：沈線文		21-12
20	SK82堆積土	深　鉢	胴部：隆沈線文、条痕		21-17
21	SK82堆積土	深　鉢	口縁部：縄文		21-18
22	SK132堆積土	深　鉢	底部：網代痕		22-4
23	SK132堆積土	深　鉢	胴部：縄文（R）　底部：網代痕		22-2,28-24

第44図　土壙（SK）出土土器（4）

【SK82土壙】（第40図）

［位置］N34・E81で確認した。北半部をカクランによって壊されている。

［重複］重複はない。

［規模］直径1.4m、深さ0.42mの不整円形と考えられる。底面は不整形で、壁は急に立ち上がる。

［堆積土］３層に分かれる。地山粒、炭化物、焼土粒を含む黒褐色シルトで、人為的に埋め戻されている。

［出土遺物］縄文土器（第44図14～21）、土偶（第52図３）、円盤状土製品（第53図７）が出土している。

5　その他の出土遺物

A　土　器（第45～50）

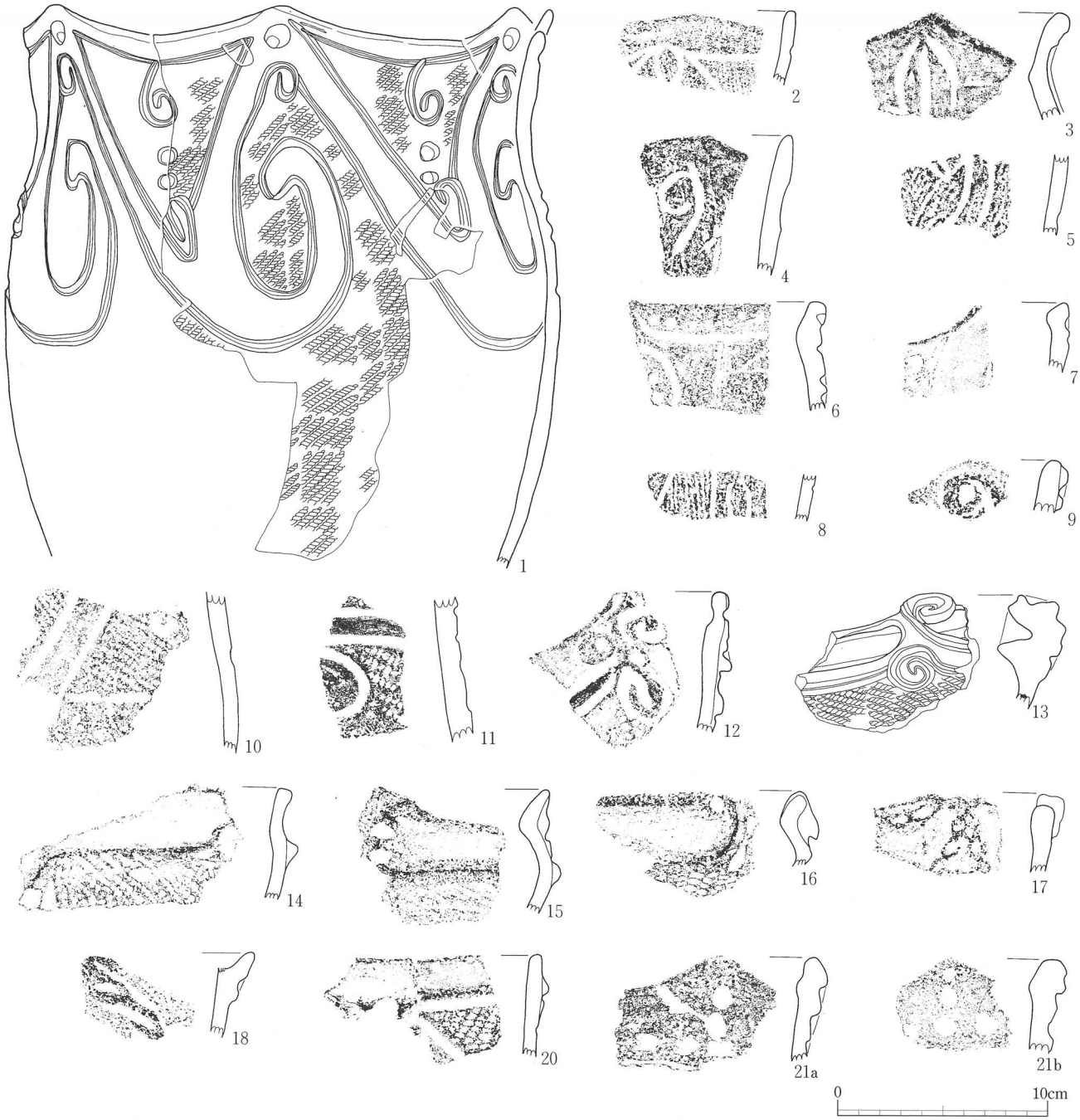
調査区内で検出された小穴（Pit）、古代以降の遺構、西区および東区遺構確認時に出土した縄文土器について特徴的な個体を中心に記述する。第45～49図は西区出土土器である。第45図１は波状縁の深鉢で、胴部がやや張り、口縁が外反する器形である。口縁の波頂部には円形の盲孔が施される。胴上部に沈線で渦巻文が６単位施され、単位文様間には、小型の渦巻文と円形の盲孔が２個加えられる。第47図１は平縁の深鉢で、胴上部に玉抱「S」字状文が施されている。文様は沈線と隆沈線で描かれ、磨消縄文手法である。５は深鉢の胴部破片で、沈線で「O」字状文が施され、沈線に沿って列点文が加えられている。第49図８は鍔付きの波状縁の深鉢で、胴部には鎖状隆線文が施されている。第50図は東区出土の土器で、東区の西端付近で出土した。５は深鉢の胴部破片で、平行する沈線で渦巻文が描かれ、ボタン状貼付文と沈線文間に円形の刺突列が施されている。

B　袖珍土器・土製品（第51、53図）

袖珍土器は、深鉢、鉢、壺がある（第51図１～７）。１は壺形で、渦巻状の沈線文が施されている。３は壺形で、方形区画状隆帯に円形刺突が施されている。７は丸底風の鉢形で、無文である。３は後期初頭で、その他は時期不明である。

土製品は、土偶、支脚付きの台状土製品、耳飾り、斧状土製品、土製円盤がある。

第52図１～４は土偶で、１はSK86土壙（貯蔵穴）４・５層（人為堆積）から出土し、左腕の一部を欠損している。丸みをもった三角形の頭部が板状の胴部から前に突き出し、両腕が横斜め上方に広がっている。肩から脇に抜ける貫通孔が施されている。孔には明瞭な擦れ跡は認められなかった。顔は、鼻が隆線、目、口は盲孔で表現されている。目の上から鼻上にかけて剥落痕があり、眉を隆線で表現していた可能性がある。脚の表現はない。背面の肩に三叉状にわかれる渦巻文が施され、首と背面中央に正中線が施されている。肩から脇に抜ける貫通孔がある土偶は、一関市清水遺跡（村上:2002）に類例がみられる。２、３は土偶の腕部で、２は表面に平行沈線文、裏面に幾何学的な文様が施され、先端にくぼみがある。３は竹管状工具によって刺突が施されている。４は土偶の胴下部で、脚は横に開いている。表面には正中線とそれに直交する短沈線が２条施され、裏面には正中線が施されている。



No.	遺構・層位	器　形	特　徴	時　期	写真図版
1	Pit.34堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、盲孔、連結渦巻文、磨消縄文（RL）	後期前葉	23-1
2	Pit.343堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁　胴部：渦巻文	後期前葉	23-2
3	Pit.393堆積土	深　鉢	口縁部：弧状文	後期前葉	23-3
4	Pit.617堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、渦巻文	後期前葉	23-4
5	Pit.281堆積土	深　鉢	胴部：蕨手文、縄文	後期前葉	23-5
6	Pit.86堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、円形刺突列　胴部：弧状沈線文、縄文	後期初頭～前葉	23-6
7	Pit.349堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、円文	後期初頭～前葉	23-7
8	Pit.642堆積土	深　鉢	胴部：渦巻文、縄文	後期初頭～前葉	23-8
9	Pit.372堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、ボタン状貼付文	後期初頭～前葉	23-9
10	Pit.250堆積土	深　鉢	胴部：渦巻文、磨消縄文	後期初頭～前葉	23-10
11	Pit.614堆積土	深　鉢	胴部：蕨手文、縄文	後期前葉	23-11
12	Pit.92堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、ボタン状貼付文、渦巻文　胴部：渦巻状隆線文	後期初頭	23-12
13	Pit.420堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、渦巻状隆線文　胴部：渦巻状隆線文、縄文（LR）	後期初頭	23-13
14	Pit.228堆積土	深　鉢	口縁部：無文帯　胴部：鎖状隆線文、縄文	後期初頭	23-14
15	Pit.264堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、隆線文＋刻目文　胴部：横位隆線文、縄文	後期初頭	23-15
16	Pit.472堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、隆線文、列点文、縄文	中期末～後期初頭	23-16
17	Pit.646堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、鎖状隆線文	後期初頭	23-17
18	Pit.SI10-7堆積土	深　鉢	口縁部：鎖状隆線文	後期初頭	23-18
19	Pit.647堆積土	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：隆線文、縄文	中期末～後期初頭	23-19
20	Pit.391堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、列点文	中期末～後期初頭	23-20
21	Pit.194堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、列点文	中期末～後期初頭	23-21

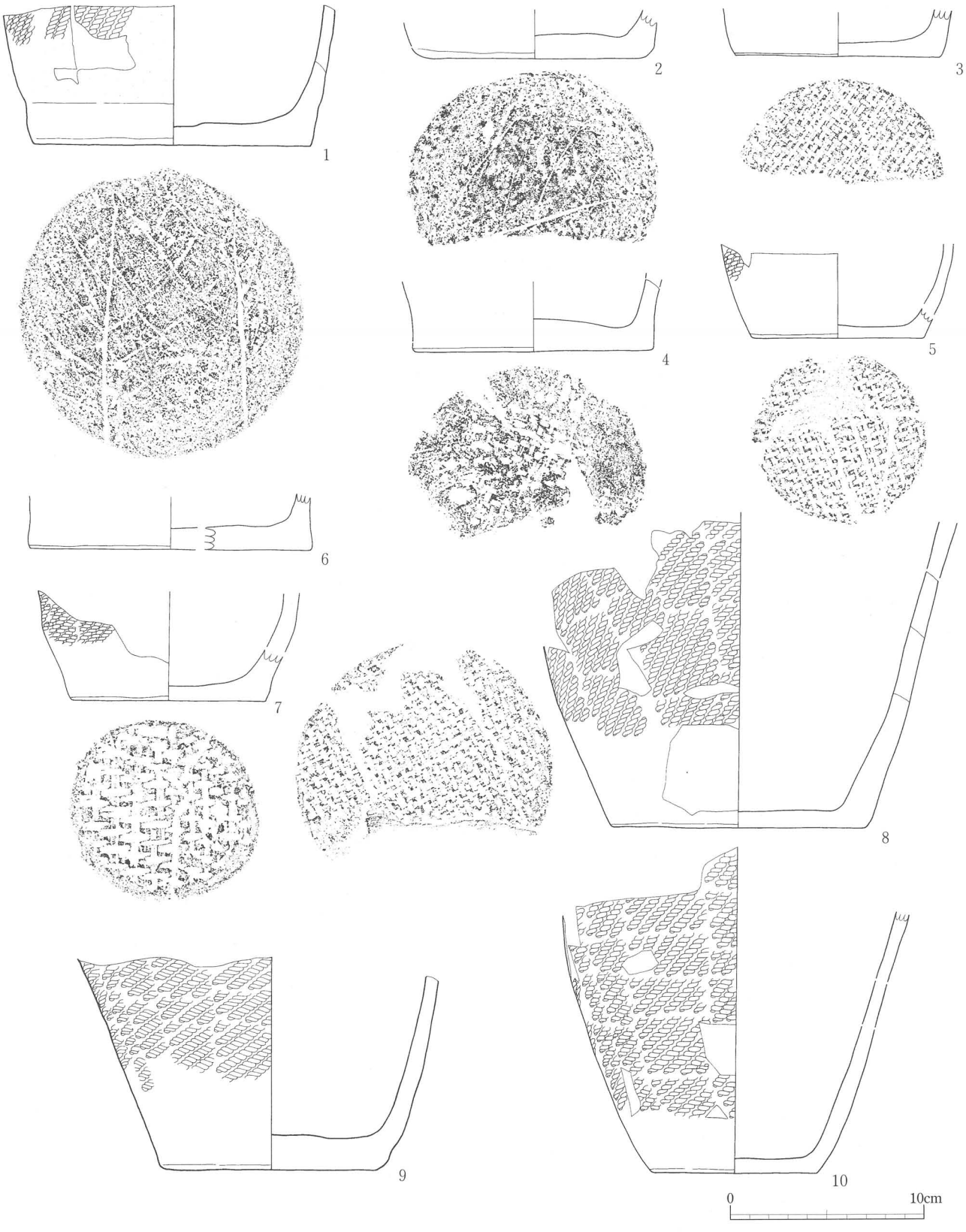
第45図　西区 Pit 出土縄文土器（1）

No.	遺構・層位	器　形	特　　徴	時　期	写真図版
1	Pit.373堆積土	深　鉢	口縁部：盲孔、竹管状工具による円形刺突	中期末～後期初頭	23-22
2	Pit.634堆積土	突　起	方形突起、列点文	後期前葉	23-23
3	Pit.323堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、列点文　胴部：弧状隆沈線文、縄文	中期末～後期前葉	23-24
4	Pit.648堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、隆線文＋刻目文	中期末～後期初頭	23-25
5	Pit.251堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、円形刺突列、横位沈線文	中期末～後期初頭	23-32
6	Pit.373堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、隆沈線文＋列点文	中期末	23-33
7	Pit.SI10-15堆積土	深　鉢	胴部：隆沈線文、縄文（RLR）	後期初頭	23-29
8	Pit.SI10-15堆積土	深　鉢	胴部：ボタン状貼付文、縄文	後期初頭	23-28
9	Pit.614堆積土	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：縦位隆線文＋刻目文、ボタン状貼付文、沈線文	後期初頭	23-26
10	Pit.662堆積土	深　鉢	口縁部：平縁　口縁部～胴部：縦位隆線文＋刻目文、磨消縄文（LR）	中期末～後期初頭	23-30
11	Pit.7堆積土	深　鉢	胴部：縦位鎖状隆線文、磨消縄文（LR）	後期初頭	23-27
12	Pit.253堆積土	深　鉢	胴部：縦位鎖状隆線文、磨消縄文（LR）	後期初頭	23-35
13	Pit.609堆積土	深　鉢	胴部：隆線文＋刻目文、縄文	後期初頭	23-36
14	Pit.382堆積土	深　鉢	胴部：隆線文＋刻目文、縄文（RL）	後期初頭	23-37
15	Pit.347堆積土	深　鉢	胴部：隆線文＋刻目文	後期初頭	23-31
16	Pit.648堆積土	深　鉢	胴部：鎖状隆線文、縄文	後期初頭	23-38
17	Pit.435堆積土	深　鉢	胴部：隆線文、縄文	後期初頭	23-40
18	Pit.386堆積土	深　鉢	胴部：鎖状隆線文、ボタン状貼付文、縄文	後期初頭	23-34
19	Pit.648堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、破線文　胴部：縦位沈線文、列点文、縄文（LR）	中期末	24-2
20	Pit.SI10-16堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：隆線文、方形沈線文、縄文（L）	中期末～後期初頭	24-3
21	Pit.353堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：隆線文、縦位沈線文、縄文	中期末	
22	Pit.314堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯、横位隆線文	中期末～後期初頭	24-6
23	Pit.251堆積土	深　鉢	胴部：鎖状隆線文、縄文	後期初頭	23-39
24	Pit.249堆積土	深　鉢	口縁部：渦巻状隆線文	中期末～後期初頭	24-7
25	Pit.391堆積土	深　鉢	胴部：弧状沈線文、縄文	中期末	
26	Pit.391堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁　胴部：弧状隆沈線文、縄文	中期末	

第46図　西区 Pit 出土縄文土器（2）

No.	遺構・層位	器　形	特　徴	時　期	写真図版
1	Pit.311堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、玉抱「S」字状文、磨消縄文（RL）	中期末	24-10
2	Pit.399堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、無文帯　胴部：沈線文、縄文（LR）	中期末	24-1
3	Pit.391堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、隆沈線文、縄文	中期末	24-4
4	Pit.664堆積土	深　鉢	胴部：「O」字状文、磨消縄文（R）	中期末	24-5
5	Pit.394堆積土	深　鉢	胴部：「O」字状文、磨消縄文（RL）	中期末	24-11
6	Pit.206堆積土	深　鉢	胴部：クランク状文、磨消縄文（RL）	中期末	24-12
7	Pit.SI10-15堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯		24-13
8	Pit.350堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯		24-14
9	Pit.206堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：縄文		24-16
10	Pit.SI10-16堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：縄文（RLR）		24-18
11	Pit.8堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯		24-19
12	Pit.94堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：縄文		24-15
13	Pit.347堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、縄文（LR）		24-20
14	Pit.648堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：横位隆線文、縄文		24-17
15	Pit.391堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、縄文（RL）		
16	Pit.91堆積土	深　鉢	胴部：縄文（LR）		24-21

第47図　西区 Pit 出土縄文土器（3）

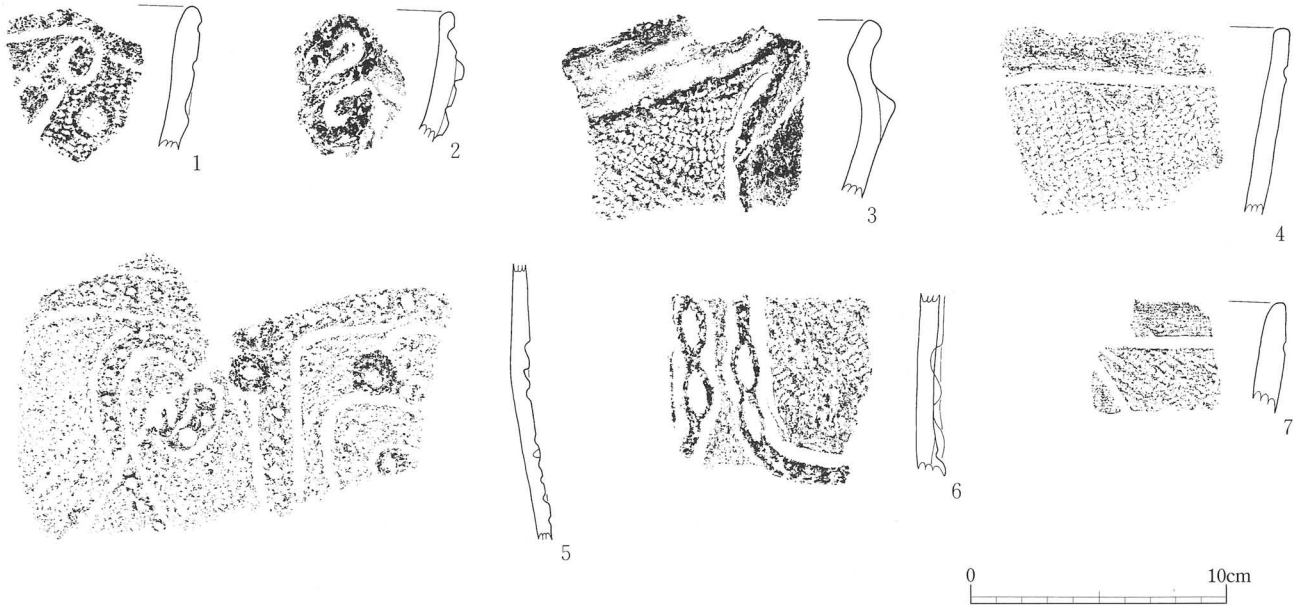


No.	遺構・層位	器　形	特　　徴	時　期	写真図版
1	Pit.347堆積土	深　鉢	胴部：縄文（RL）　底部：木葉痕		25-4,28-17
2	Pit.399堆積土	深　鉢	底部：木葉痕		28-13
3	Pit.330堆積土	深　鉢	底部：網代痕		28-15
4	Pit.392堆積土	深　鉢	底部：網代痕		28-4
5	Pit.648堆積土	深　鉢	胴部：縄文（RL）　底部：網代痕		28-14
6	Pit.664堆積土	深　鉢	底部：網代痕		28-12
7	Pit.399堆積土	深　鉢	胴部：縄文（RL）　底部：網代痕		25-5,28-2
8	Pit.665堆積土	深　鉢	胴部：縄文（RL）		25-1,28-19
9	Pit.506堆積土	深　鉢	胴部：縄文（RL）		25-2
10	Pit.399堆積土	深　鉢	胴部：縄文（RL）		25-3

第48図　西区 Pit 出土縄文土器（4）

No.	遺構・層位	器　形	特　徴	時　期	写真図版
1	SI1-1層	深　鉢	底部：網代痕、円盤状土製品か		28-11
2	SI2柱穴堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、無文帯　胴部：ボタン状貼付文、鎖状隆線文	後期初頭	21-19
3	SI2-2層	深　鉢	胴部：沈線文、列点文、縄文（RL）	中期末～後期初頭	21-20
4	SI12-3層	深　鉢	胴部：磨消縄文（RL）、隆線文＋列点文	中期末	21-21
5	SI11-1層	深　鉢	胴部：隆沈線文、ヘラ状工具による刺突列	後期初頭	21-22
6	SI11貯蔵穴	深　鉢	口縁部：波状縁、隆線文		21-23
7	SK104	鉢	円形沈線文		
8	SD56堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、鎖状隆線文、渦巻状隆線文	後期初頭	21-24
9	SD57堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、隆線文		21-25
10	西区遺構確認面	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯、横位隆線文		21-26
11	SD125堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、ボタン状貼付文、弧状文、列点文、縄文（RL）	後期初頭	21-27
12	SD125堆積土	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：隆線文、縄文	中期末～後期初頭	21-28
13	SD125堆積土	深　鉢	口縁部：平縁　胴部：縦位隆線文＋刻目文、沈線文、縄文（RL）	中期末～後期初頭	21-29
14	SD125堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：隆線文＋刻目文	中期末～後期初頭	21-30
15	SD125堆積土	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：縄文（RL）	中期末～後期初頭	21-31
16	SD125堆積土	深　鉢	胴部：隆線文＋刻目文	後期初頭	21-32
17	SD125堆積土	深　鉢	胴部：弧状沈線文、縄文（RL）	中期末～後期初頭	21-33
18	SD125堆積土	鉢	口縁部：平縁、円形刺突列（R）		21-34
19	SD125堆積土	深　鉢	口縁部：波状縁、渦巻文、縄文（R）	後期前葉	21-35

第49図　西区出土縄文土器



No.	遺構・層位	器　形	特　　徴	時　期	写真図版
1	東区遺構確認面	深　鉢	口縁部：波状縁　胴部：渦巻文、盲孔、縄文	後期初頭～前葉	21-38
2	東区遺構確認面	深　鉢	口縁部：波状縁、渦巻状隆線文	後期初頭～前葉	21-39
3	東区遺構確認面	深　鉢	口縁部：波状縁　胴部：隆線文、縄文	後期初頭～前葉	21-40
4	東区遺構確認面	深　鉢	口縁部：平縁、無文帯　胴部：横位沈線文、縄文（RL）		21-36
5	東区遺構確認面	深　鉢	胴部：渦巻文、ボタン状貼付文、刺突列	後期初頭	21-41
6	東区遺構確認面	深　鉢	胴部：鎖状隆線文、縄文（LR）	後期初頭	21-42
7	東区遺構確認面	深　鉢	胴部：平縁、沈線文、縄文（LR）		21-37

第50図　東区出土縄文土器

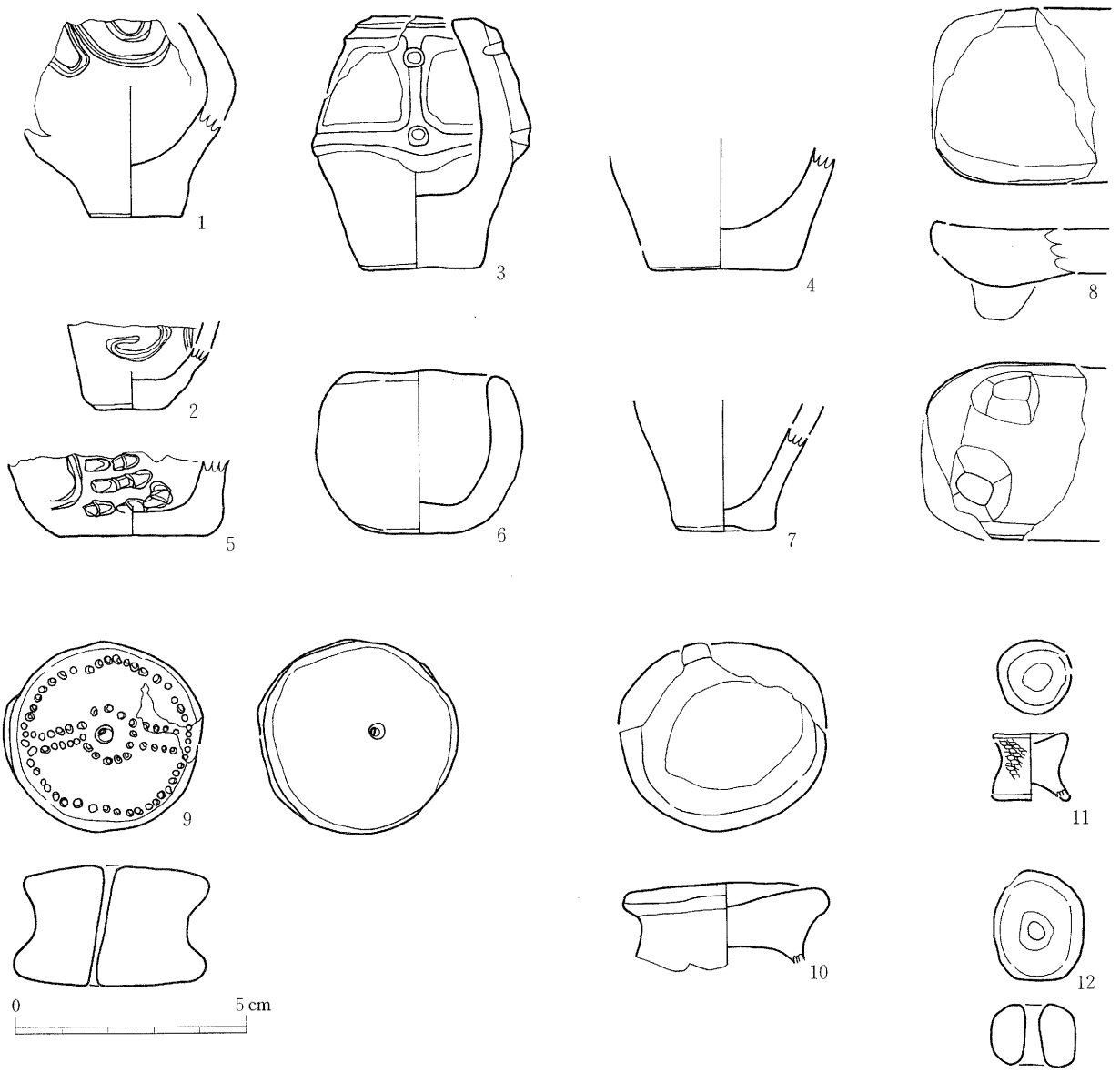
1は共伴して出土した土器から、後期初頭～後期前葉のものと考えられる。2、4は大木10式新段階～後期初頭のものと考えられ、3は時期不明である。

第51図8は四脚付の台状土製品で、同形の石皿を模していると考えられる。

同図9～12は耳飾りで、滑車状耳飾り3点と球形のものがある。9は貫通孔があり、表面に円形刺突によって孔の周囲と縁辺に円文が描かれ、2条一組の刺突列でそれを連結している。裏面は無文である。10、11は断面が「く」字状の臼形で、11にはLR縄文が施されている。12は玉状で貫通孔があり、無文である。9、11は共伴して出土した土器から大木10式期、その他は時期不明である。

第52図5は斧状土製品の先端部と考えられ、表面にはLR縄文が施されている。SI10住居跡1b層から出土しており、大木10式期のものと考えられる。斧状土製品は、大衡村上深沢遺跡や岩手県大迫町観音堂遺跡などで出土している。

第53図は円盤状土製品で、土器片を加工して円形に仕上げているものを円盤状土製品とした。24点出土している（第53図、写真図版27）。平面形では不整円形のものと楕円形のものがある。ほとんどは土器の胴部破片を素材とし、8は円形の突起を素材としている。周縁に敲打が加えられ、全体の形が作られている。12は周縁を敲打後、一部研磨を加えている。大きさは直径4㎝前後のものが多く、使用の痕跡が認められるものはなかった。表面は地文のみのものが多く、文様がみられるものは4点ある。表面の文様から14と15は後期前葉と考えられるが他は時期不明である。

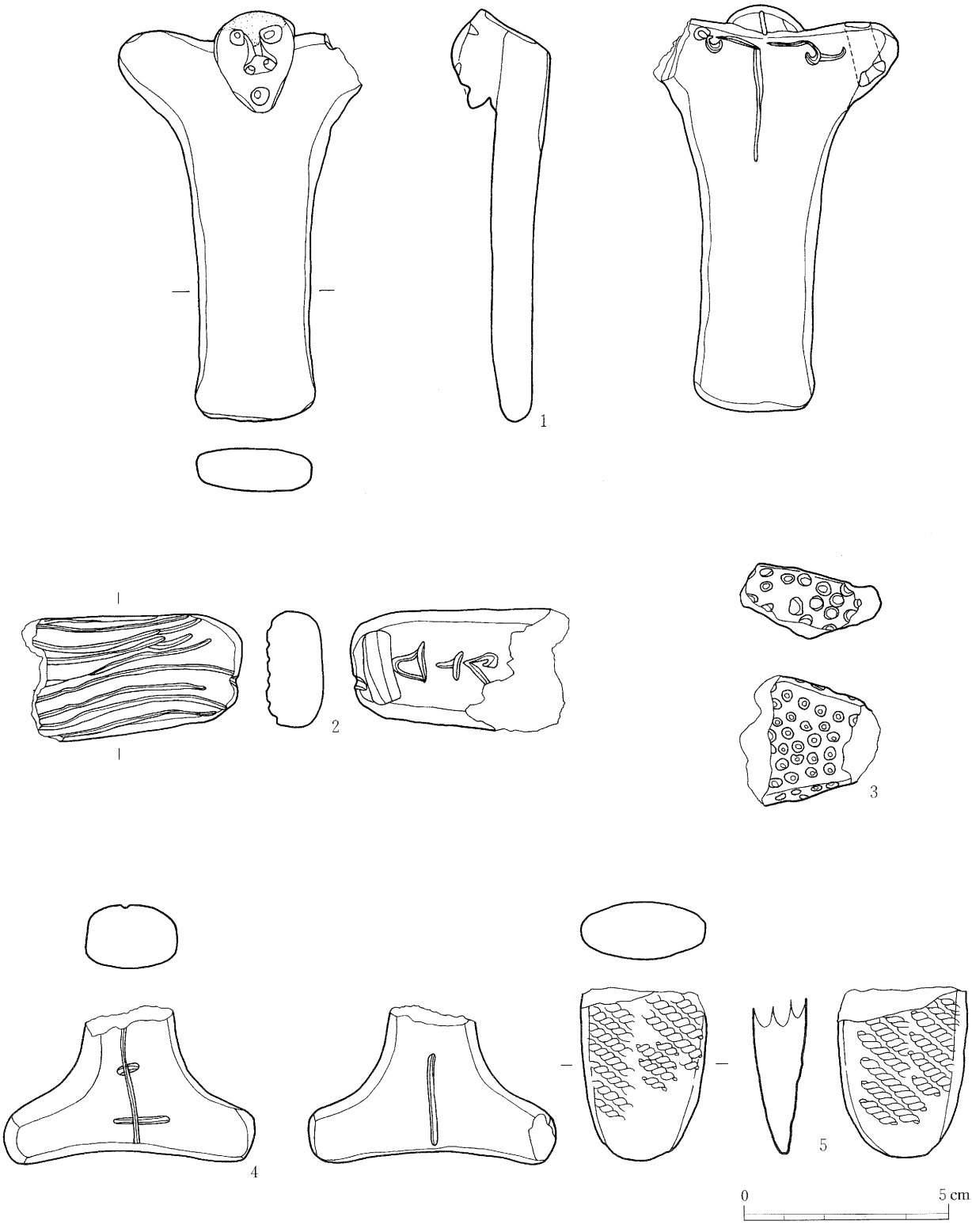


No.	遺構・層位	器　形	特　　徴	時　期	写真図版
1	SK33堆積土	壺	胴部：波状文		26-1
2	SK33堆積土		胴部：渦巻文		26-2
3	SK107堆積土	壺	口縁部：平縁　胴部：方形区画文＋円形刺突	後期初頭	26-9
4	SI10-1b層		胴部：無文		
5	SI2掘方埋土		胴部：沈線文、刺突列		26-6
6	SK133堆積土	鉢	口縁部：平縁　胴部：無文（ナデ）　底部丸底気味		26-4
7	SI10-1a層	深　鉢	胴部：無文　底部に凹面		26-5
8	SK87堆積土	台状土製品	四脚付、全面ナデ調整		26-3
9	SI10-1b層	耳　飾	滑車状、表面：円形刺突列による円文、裏面：無文　貫通孔		26-7
10	SI10付近遺構確認面	耳　飾	「く」字状、縄文		26-8
11	SI10-1b層	耳　飾	「く」字状、縄文		26-10
12	Pit.372堆積土	耳　飾	玉状、無文		26-11

第51図　鰻沢遺跡出土袖珍土器、土製品

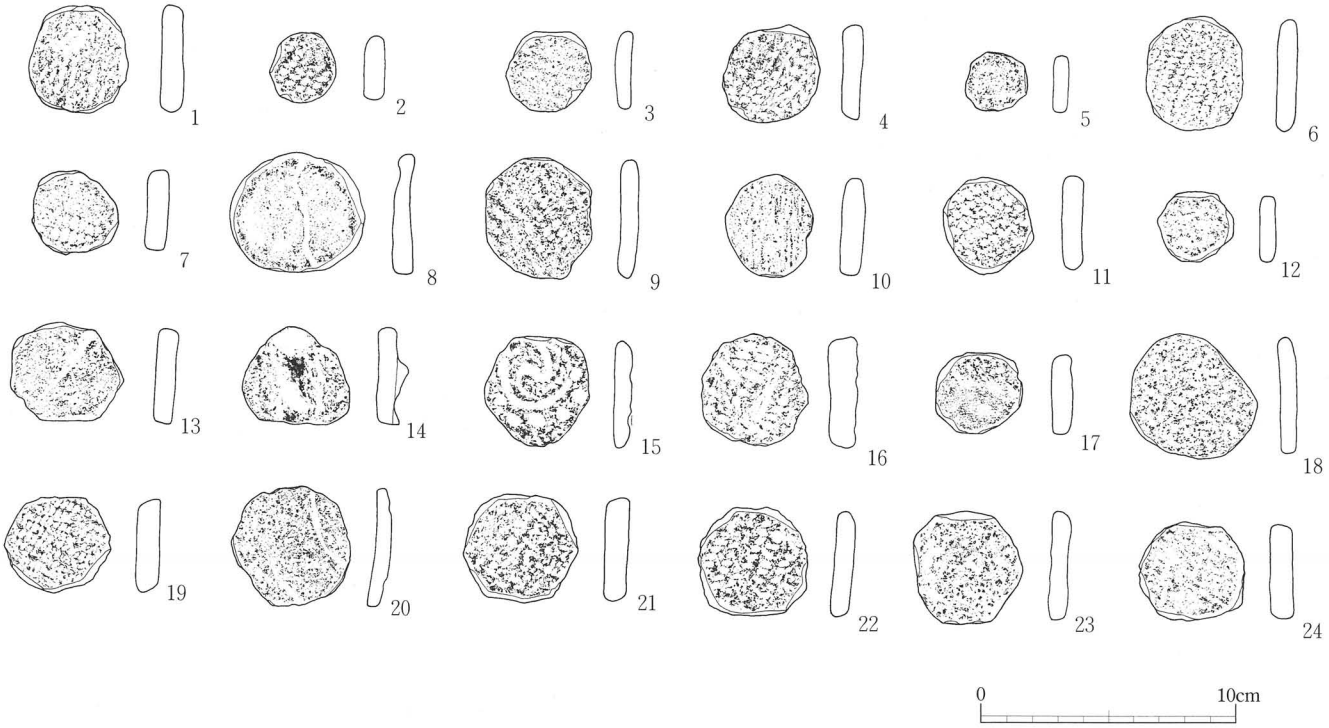
C　石　器（第54～57図）

遺構出土石器が少なく、まとまりとして捉えられないため、遺跡出土石器について一括してその特徴を述べる。器種は石鏃122点、石匙５点、石錐４点、不定形石器、剥片、石核、磨石、凹石、敲石、石皿、石製円盤などがある。今回の調査では、石斧はなく、石核もほとんど出土していない。定形石器に使われている石材は、碧玉・鉄石英が最も多く、ついで頁岩、黒曜石などがある。



No.	遺構・層位	器　形	特　徴	写真図版
1	SK86-4・5層	土　偶	左腕欠損。頭部：円盤状、円形刺突によって目・口・鼻穴を表現、鼻は粘土貼付。目上部に剥落痕あり、眉の表現か。胴部：板状、前面無文、背面、首に中軸線、肩に三叉状渦巻文。腕部上から下に貫通孔	27-1
2	SK97堆積土	土　偶	腕部：表面に平行沈線文、背面に幾何学文、先端に凹部	27-3
3	SK82堆積土	土　偶	腕部：全面に竹管状工具による刺突	27-2
4	SK100堆積土	土　偶	胴部：表面に中軸線と横位短沈線文、裏面に中軸線、脚部：無文	27-4
5	SI10-1a層	斧状土製品	先端部のみ残存、表裏面にRL縄文	27-5

第52図　鰻沢遺跡出土土偶、斧状土製品



No.	遺構・層位	長径（mm）	短径（mm）	重量（g）
1	SI10-1b 層	42.5	38.3	19.0
2	SI10-1b 層	27.5	25.3	6.3
3	SI10-1b 層	32.8	30.6	7.0
4	SI10堆積土	41.7	37.6	14.6
5	SK9堆積土	24.9	23.4	3.7
6	SK27堆積土	45.2	37.4	16.0
7	SK82堆積土	33.2	32.4	12.0
8	SK120堆積土	52.9	46.5	18.2
9	SK90堆積土	49.5	43.0	17.0
10	SK95堆積土	39.3	34.4	12.2
11	SK100堆積土	37.8	33.7	12.2
12	SK100堆積土	29.4	28.8	5.3

No.	遺構・層位	長径（mm）	短径（mm）	重量（g）
13	SK100堆積土	43.6	39.0	15.6
14	SK120堆積土	41.9	37.5	13.8
15	SD4堆積土	43.8	40.0	13.6
16	SD56堆積土	42.1	41.6	21.6
17	SD57堆積土	34.9	31.8	10.0
18	Pit.409	49.8	46.5	19.2
19	Pit.656	39.5	36.4	15.6
20	SK124堆積土	47.2	45.3	14.4
21	西区遺構確認	44.4	43.6	20.2
22	東区遺構確認	44.0	43.3	16.8
23	東区遺構確認	44.3	40.7	15.2
24	東区遺構確認	40.5	39.0	18.0

第53図　鰻沢遺跡出土円盤状土製品

【剥片石器】（第54、55図、写真図版29～31）

定形石器は形態の特徴から次のように分類した。

石　鏃（54図）

122点出土している。これらは基部と側縁の形態に違いがあり、以下のように分類した。

A　凹基：基部の中央にえぐりを入れて凹状にしているもの（1～15）

1　側縁が強く膨らむもの（1）

2　側縁が直線的か、やや膨らむもの（2～13）

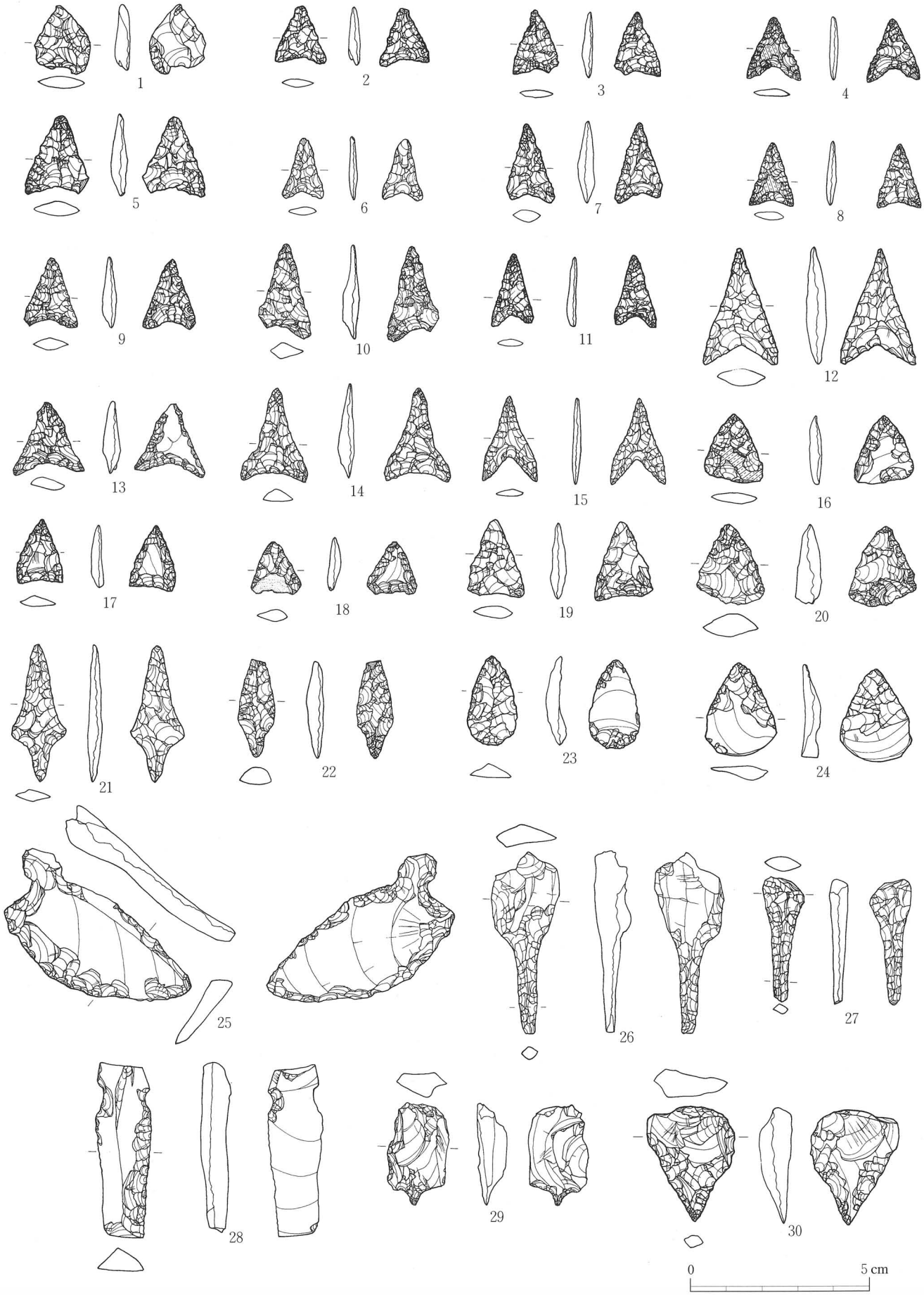
3　側縁が凹むもの（14、15）

B　平基：基部をほぼ直線的にしているもの（16～19）

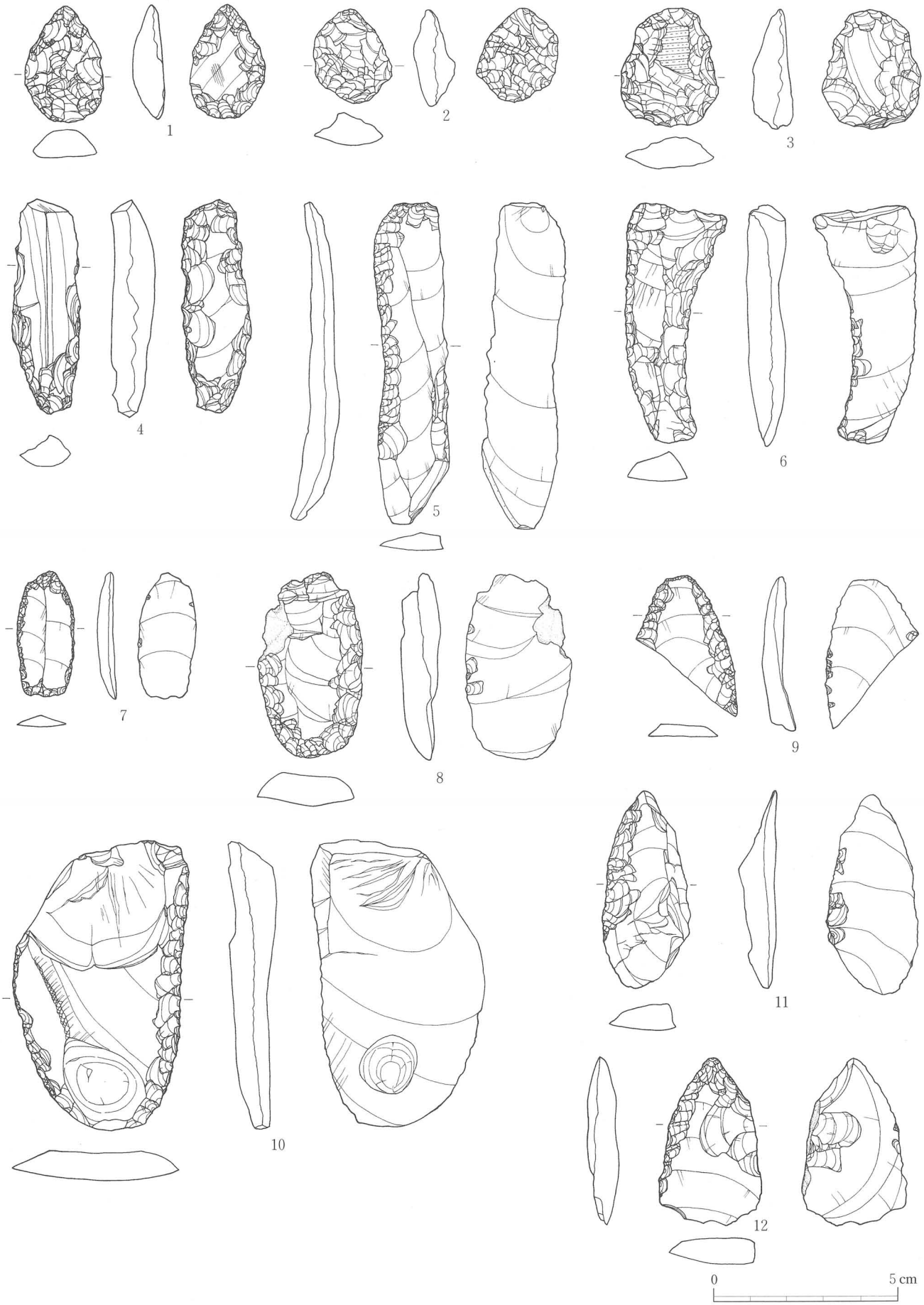
C　凸基：基部側縁にえぐりを入れて、凸状の茎部をを作り出しているもの（21）

D　丸基：基部を丸く膨らませているもの（20）

E　基部が棒状のもの（写真図版30-46、47）



第54図　鰻沢遺跡出土剥片石器（1）



第55図　鰻沢遺跡出土剥片石器（2）

石　匙（第54図）

5点出土している。主要刃部に対してつまみ部軸線がほぼ平行なもの（28）と主要刃部に対してつまみ部軸線が斜方向なもの（25）がある。

石　錐（第54図）

13点出土している。錐部の全面を調整し棒状に作出したもの（26、27）、素材の一端に錐部を短く作出したもの（29）、錐部を尖頭器状に作出したもの（30）がある。

これらの器種の中では石鏃が比較的まとまった資料が得られた。各類型ごとに比較すると、A2類（凹基）が最も多く出土し、石鏃全体の約5割に相当する。凸基（C類）、丸基（D類）は非常に少ない。A2類に次いで、B類（平基）が多くみられる。B類は薄手のもの（第54図17）と厚手のもの（同図20）がある。このように鰻沢遺跡出土の石鏃は、形態から大別5類型に分類され、その中で凹基（A類）を主体とし、約6割に相当する。本遺跡と時期の近接する菅生田遺跡（縄文時代中期末～後期初頭）と比較すると、菅生田遺跡では凹基が全体の6割、平基、丸基は各1割未満、凸基の出土はない。凸基の出土が本遺跡でわずかに認められる点を除いて良く一致している。出土数からみた石鏃の形態的特徴はこの時期の特徴があらわれていると考えられる。

不定形石器（第55図）

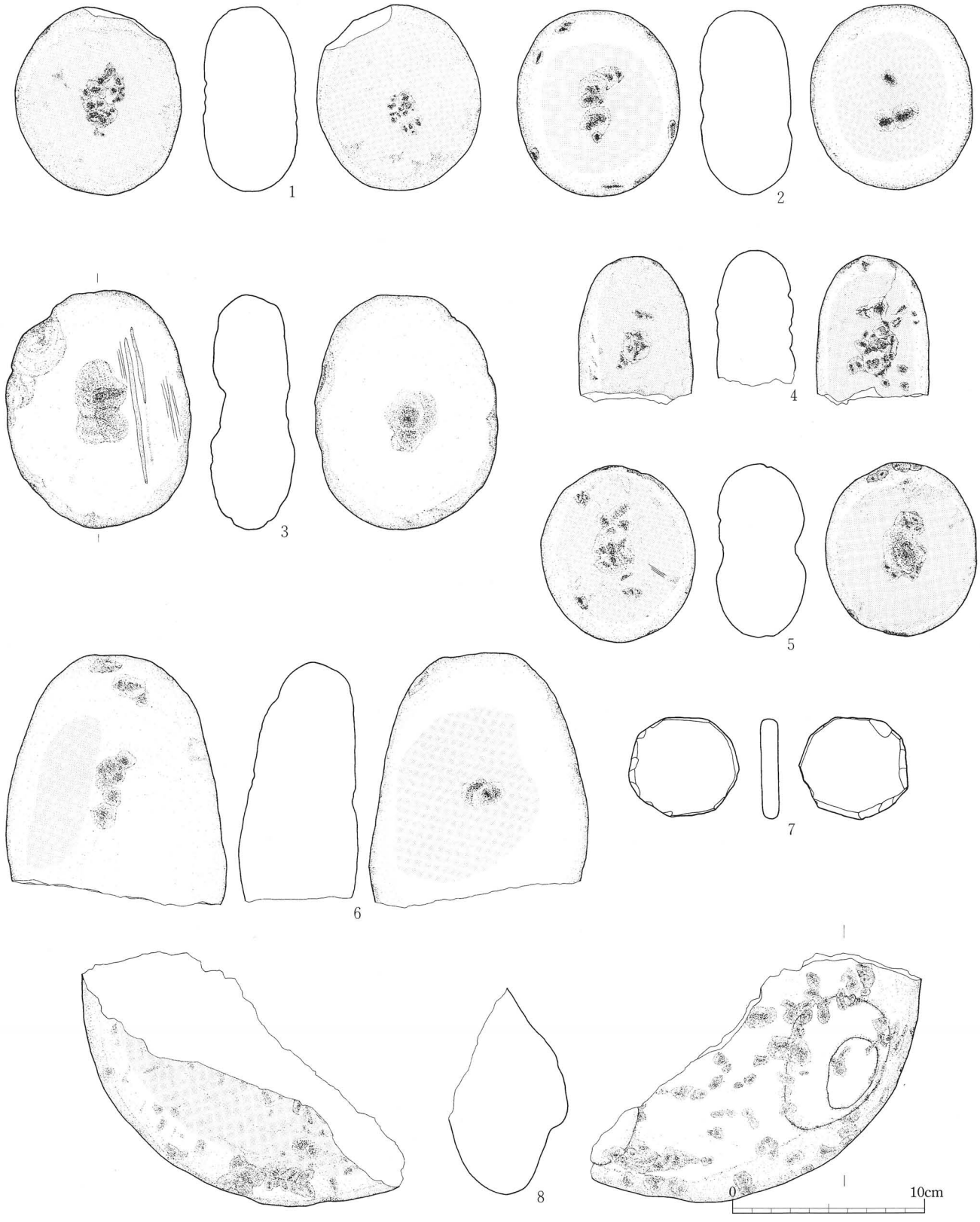
不定形石器は、素材となる剥片に両面加工を施しているものと片面のみに加工を施しているものとに大きく分かれる。両面加工の不定形石器には、縁辺に調整剥離を巡らして、尖頭器状のもの（1）、厚手の円形のもの（2）、小型のヘラ状のもの（3）、棒状のもの（4）がある。片面加工の不定形石器は、一方の側縁に調整剥離が施されているもの（5、11）と両側縁に調整剥離が施されているものがある（6～9、10、12）。

【礫石器】（第56、57図、写真図版34～37）

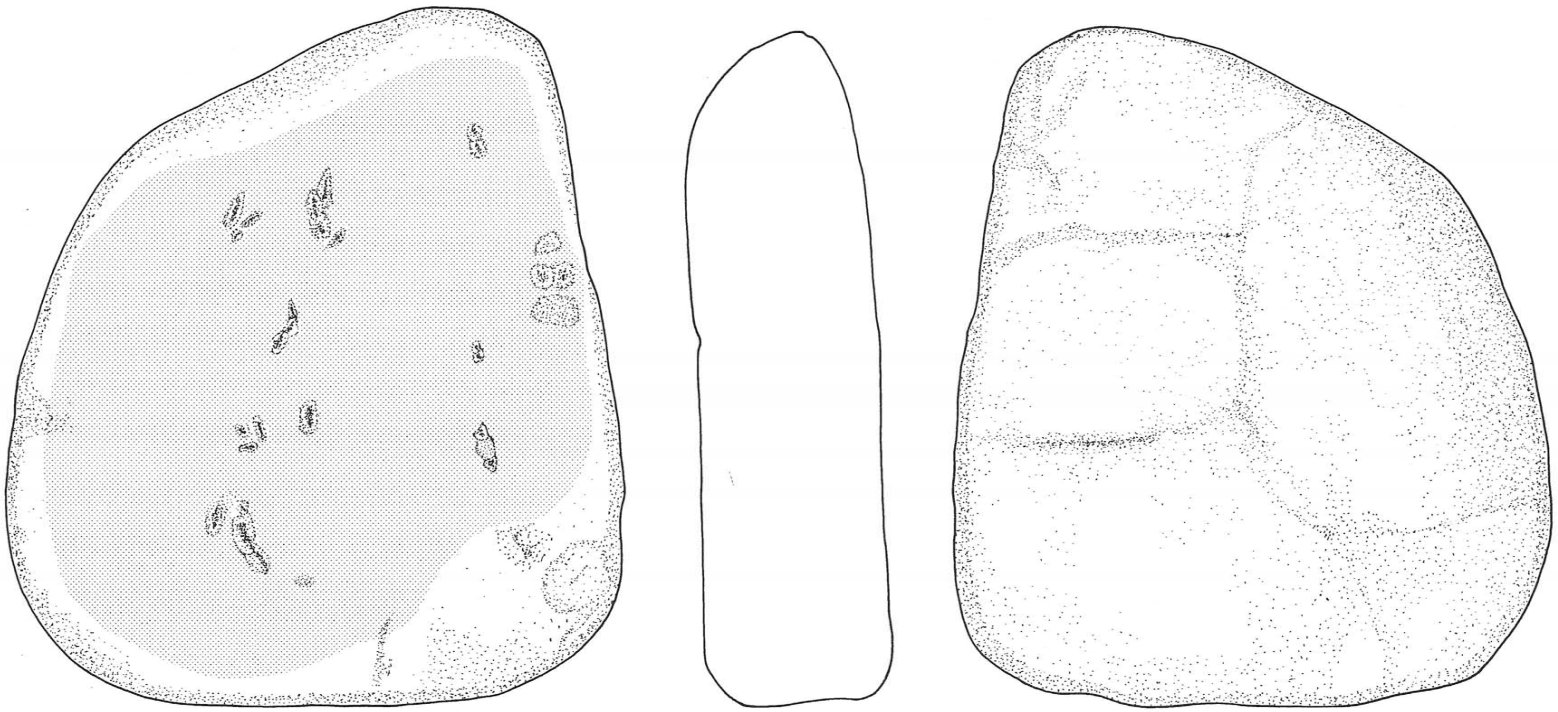
敲石、磨石、凹石、石皿が出土している。敲石、凹石、磨石は、ほとんどがそれぞれの機能を複合しており、形態と使用痕跡から推定される主要な機能に基づいて分類を行った。石皿は脚をもつもの（第56図8）と不整形で形状の加工を施さないもの（第57図）がある。

円盤状石製品（第56図7、写真図版34-1）

直径約5cmの不整円形で縁辺に敲打が加えられて整形されている。大きさ、形態は円盤状土製品と類似する。使用痕跡は認められなかった。



第56図　鰻沢遺跡出土礫石器（1）



第57図　鰻沢遺跡出土礫石器（2）

鰻沢遺跡出土石器属性表

器種	遺構・層位	類型	長（㎜）	幅（㎜）	厚（㎜）	重（g）	長幅比	石材	備考	図版	写真
石鏃	東区遺構確認面	A1	(29.8)	22.9	8.3	5.2	-	頁岩	先端部欠損		29-1
石鏃	SK124堆積土	A1	19.2	(15.7)	3.4	0.5	-	珪化凝灰岩	基部欠損	54-1	29-2
石鏃	SI12-1層	A2	19.5	14.3	3.4	0.9	1.36	碧玉			29-3
石鏃	西区遺構確認面	A2	21.8	13.2	2.3	0.4	1.65	黒曜石			29-4
石鏃	Pit.32堆積土	A2	20.4	(11.5)	2.3	0.4	-	碧玉	基部欠損		29-5
石鏃	SI12-1層	A2	18.9	17.7	2.8	0.8	1.07	碧玉			29-6
石鏃	東区遺構確認面	A2	20.5	(13.2)	2.5	0.6	-	碧玉	基部欠損		29-7
石鏃	SB94堆積土	A2	19.2	12.8	2.5	0.5	1.50	黒曜石	基部欠損		29-8
石鏃	SI11-1層	A2	18.1	13.9	2.4	0.4	1.30	黒曜石			29-9
石鏃	SI10-1b 層	A2	16.0	13.9	3.0	0.6	1.15	鉄石英		54-2	29-10
石鏃	SK9堆積土	A2	21.7	17.7	4.3	1.2	1.23	鉄石英	末端欠損	54-5	29-11
石鏃	SK99堆積土	A2	17.7	14.8	2.3	0.5	1.20	頁岩		54-4	29-12
石鏃	SI10-1b 層	A2	17.9	(12.6)	2.3	0.4	-	碧玉	末端欠損	54-3	29-13
石鏃	SI11カマド崩落土	A2	15.1	13.7	2.3	0.4	1.10	頁岩			29-14
石鏃	SI12-1層	A2	(19.8)	18.4	4.4	1.0	-	碧玉	先端部欠損		29-15
石鏃	SK120堆積土	A2	16.0	13.5	2.0	0.4	1.19	碧玉			29-16
石鏃	SI2-1・2層	A2	18.2	15.1	2.8	0.5	1.21	碧玉			29-17
石鏃	SI2-2層	A2	16.1	12.9	2.6	0.4	1.25	鉄石英			29-18
石鏃	SI12-1層	A2	18.0	14.2	2.5	0.5	1.27	碧玉			29-19
石鏃	SD57堆積土	A2	(15.2)	(13.6)	2.3	0.5	1.12	碧玉	先端部、末端欠損		29-20
石鏃	Pit.46堆積土	A2	18.9	17.1	2.8	0.6	1.11	玉髄			29-21
石鏃	Pit.651堆積土	A2	17.5	14.0	2.3	0.4	1.25	頁岩			29-22
石鏃	東区遺構確認面	A2	15.3	14.6	2.8	0.5	1.05	碧玉			29-23
石鏃	SK126堆積土	A2	17.1	(11.5)	3.3	0.3	-	鉄石英	基部欠損		29-24
石鏃	SI10-1b 層	A2	17.2	11.4	2.1	0.3	1.51	玉髄		54-6	29-25
石鏃	SI10床直	A2	22.5	(13.0)	4.4	0.9	-	頁岩	末端欠損	54-7	29-26
石鏃	Pit.SI10-21堆積土	A2	19.7	14.8	3.9	0.6	-	頁岩		54-8	29-27
石鏃	Pit.276堆積土	A2	18.1	12.4	2.6	0.4	1.46	碧玉		54-9	29-28
石鏃	西区遺構確認面	A2	20.0	(14.6)	3.4	0.8	-	頁岩	基部欠損		29-29
石鏃	SK76堆積土	A2	20.0	11.5	2.4	0.4	1.74			54-11	29-30
石鏃	Pit.648堆積土	A2	19.0	11.9	2.7	0.5	1.60	頁岩			29-31
石鏃	SD125堆積土	A2	20.9	13.2	1.9	0.3	1.58	黒曜石	基部欠損		29-32
石鏃	SD125堆積土	A2	27.0	(14.2)	3.3	0.9	-	碧玉	欠損		29-33
石鏃	SK123堆積土	A2	24.4	(12.9)	2.7	0.6	-	碧玉	基部欠損		29-34
石鏃	SI12-1層	A2	21.7	(11.9)	2.1	0.5	-	碧玉	末端欠損		29-35
石鏃	SD5堆積土	A2	23.0	11.3	2.7	0.5	2.04	碧玉			29-36
石鏃	西区遺構確認面	A2	21.2	12.1	2.4	0.5	1.75	碧玉	基部欠損		29-37
石鏃	SK120堆積土	A2	26.5	(14.6)	4.5	1.1	-	碧玉	末端欠損	54-10	29-38
石鏃	表採	A2	23.5	17.1	2.6	0.7	1.37	碧玉			29-39
石鏃	SD3堆積土	A2	19.8	(14.8)	2.3	0.5	-	玉髄	末端欠損		29-40
石鏃	西区遺構確認面	A2	21.6	14.9	2.4	0.4	1.45	碧玉			29-41
石鏃	SI1-1層	A2	14.6	10.9	3.3	0.3	1.34	碧玉			29-42
石鏃	SK33堆積土	A2	20.3	19.6	4.7	1.1	1.04	碧玉		54-13	29-43
石鏃	SK83-11層	A2	19.4	(15.5)	3.4	0.5	-	頁岩	基部欠損		29-44
石鏃	西区遺構確認面	A2	33.0	21.1	5.7	2.5	1.56	頁岩		54-12	29-45
石鏃	SK9堆積土	A2	(18.3)	(12.8)	2.8	0.5	-	碧玉	末端欠損		29-46
石鏃	SI10堆積土	A2	(18.7)	18.6	4.3	1.4	-	鉄石英	先端部欠損		29-47
石鏃	SK31堆積土	A2	(12.1)	16.9	2.3	0.2	-	頁岩	先端部欠損		29-48
石鏃	SK83堆積土	A2	(19.0)	16.2	3.4	0.6	-	頁岩	先端部欠損		29-49
石鏃	SK83堆積土7a	A2	(17.6)	15.4	2.8	0.6	-	碧玉	先端部欠損		29-50
石鏃	SK83堆積土7a	A2	(12.8)	12.4	2.3	0.3	-	碧玉	先端部欠損		29-51
石鏃	SK90堆積土	A2	(17.3)	15.2	3.0	0.8	-	頁岩	先端部欠損		29-52
石鏃	SD125堆積土	A2	(15.8)	17.8	2.6	0.6	-	碧玉	先端部、末端欠損		29-53
石鏃	SI2-2層	A2	(15.2)	15.8	3.6	0.5	-	碧玉	先端部欠損		29-54
石鏃	SI12-1層	A2	(13.2)	(13.6)	2.2	0.4	-	頁岩	先端部、末端欠損		29-55
石鏃	SD56堆積土	A2	(14.3)	16.8	2.5	0.6	-	玉髄	先端部欠損		
石鏃	SD105-1層	A2	20.2	12.6	4.8	0.9	1.60	頁岩	側縁部欠損		
石鏃	西区遺構確認面	A2	(14.5)	(13.4)	2.3	0.4	1.08	碧玉	先端部、末端欠損		
石鏃	SI12-4層堆積土	A3	26.1	18.7	4.1	1.2	1.40	頁岩		54-14	30-1
石鏃	Pit.326	A3	19.5	(12.7)	1.7	0.4	-	頁岩	末端欠損		30-2
石鏃	西区遺構確認面	A3	24.3	(18.8)	4.5	1.4	-	頁岩	末端欠損		30-3
石鏃	西区遺構確認面	A3	25.8	(21.2)	6.1	1.9	-	頁岩	末端欠損		30-4
石鏃	Pit.228,229堆積土	A3	18.5	14.2	3.3	0.5	1.30	頁岩			30-5
石鏃	Pit.70堆積土	A3	25.8	19.1	3.4	1.1	1.35	頁岩			30-6
石鏃	Pit.394堆積土	A3	24.3	15.3	2.1	0.5	1.59	頁岩		54-15	30-7
石鏃	SI12-1層	A3	23.1	17.1	2.7	0.5	1.35	頁岩			30-8
石鏃	西区遺構確認面	A3	25.8	16.0	2.9	0.6	1.61	頁岩			30-9
石鏃	SI12一1層	A3	26.1	14.6	2.5	0.6	1.79	碧玉			30-10
石鏃	SI11-1層	A3	(19.4)	12.2	2.5	0.4	-	碧玉	先端部欠損		30-11
石鏃	SK33堆積土	A3	31.7	(15.6)	4.4	1.4	-	頁岩	抉り部欠損		30-12
石鏃	SK83-1層	A3	26.9	12.1	3.6	0.5	2.22	頁岩	縁辺部欠損		30-13
石鏃	SD3堆積土	A3	26.8	(15.6)	2.5	0.7	-	頁岩	末端欠損		30-14
石鏃	SD5堆積土	A3	(22.4)	(11.6)	2.0	0.3	-	鉄石英	末端欠損		30-15
石鏃	SD125堆積土	A3	(17.9)	(12.9)	2.7	0.6	-	碧玉	先端部、末端欠損		30-16
石鏃	東区遺構確認面	A3	13.4	14.4	2.5	0.4	0.93	頁岩	先端部、末端欠損		30-17
石鏃	SI10-1b 層	B	19.0	17.3	3.3	1.1	1.10	碧玉			30-18
石鏃	SI10-2層	B	19.2	16.5	2.9	0.9	1.16	碧玉		54-16	30-19
石鏃	SK83-1層	B	16.7	16.9	4.1	0.8	0.99	碧玉			30-20
石鏃	SK83-11層	B	30.2	23.1	5.9	3.3	1.31	頁岩			30-21
石鏃	SI12-1層	B	14.1	14.9	2.1	0.5	0.95	黒曜石			30-22
石鏃	Pit.385堆積土	B	(15.8)	(14.5)	2.3	0.4	-	黒曜石	基部欠損		30-23
石鏃	SK120	B	15.2	14.0	2.8	0.5	1.09	頁岩		54-18	30-24
石鏃	SI10-1b 層	B	18.2	12.6	2.8	0.6	1.44	碧玉		54-17	30-25
石鏃	SI2-2層	B	19.5	(16.2)	4.4	1.1	-	頁岩	末端欠損		30-26
石鏃	Pit.648堆積土	B	19.6	(16.8)	3.3	0.7	-	鉄石英	基部欠損		30-27
石鏃	西区遺構確認面	B	27.2	15.0	3.9	1.6	1.81	碧玉	末端欠損		30-28
石鏃	Pit.SI10-4堆積土	B	21.7	15.7	4.0	1.2	1.38	頁岩		54-19	30-29
石鏃	西区遺構確認面	B	19.6	17.2	4.1	1.1	1.14	碧玉			30-30
石鏃	SK83-11層	B	22.2	17.1	4.0	1.4	1.30	頁岩			30-31
石鏃	SK83堆積土	B	22.6	18.6	7.1	2.4	1.22	碧玉		54-20	30-32
石鏃	Pit.336堆積土	B	25.5	20.8	9.5	4.3	1.23	碧玉			30-33
石鏃	Pit.648堆積土	B	28.0	21.6	6.8	2.7	1.30	碧玉			30-34
石鏃	SI12一1層	B	27.1	17.5	7.0	2.5	1.55	碧玉			30-35
石鏃	Pit.55堆積土	B	30.8	25.1	10.2	7.1	1.23	頁岩			30-36
石鏃	西区遺構確認面	B	24.3	21.1	6.0	2.6	1.15	頁岩			30-37
石鏃	西区遺構確認面	B	24.6	20.2	9.0	3.5	1.22	碧玉			30-38
石鏃	SI1堆積土	B	19.9	15.9	6.3	1.7	1.25	頁岩			30-39
石鏃	SK90堆積土	B	(21.4)	18.0	4.3	1.6	-	碧玉	先端部欠損		30-40
石鏃	SI2一2層	B	22.7	18.3	5.1	1.9	1.24	碧玉	先端部、末端欠損		30-41
石鏃	Pit.394堆積土	B	(13.6)	18.2	5.2	1.2	-	頁岩	先端部欠損		

鰻沢遺跡出土石器属性表

器種	遺構・層位	類型	長（㎜）	幅（㎜）	厚（㎜）	重（g）	長幅比	石材	備考	図版	写真
石鏃	西区遺構確認面	B	(14.7)	13.3	5.1	1.0	-	碧玉	先端部欠損		
石鏃	西区遺構確認面	B	(13.0)	15.2	3.7	0.8	-	碧玉	先端部欠損		
石鏃	SD61堆積土	B	(18.0)	19.0	3.2	1.1	-	頁岩	先端部欠損		
石鏃	SI11-1層	B	(16.2)	18.2	3.6	1.1	-	碧玉	先端部欠損		
石鏃	西区遺構確認面	B	(15.7)	15.0	2.5	0.5	-	碧玉	先端部欠損		
石鏃	東区遺構確認面	B	(16.3)	15.9	2.1	0.6	-	碧玉	先端部欠損		
石鏃	Pit.79堆積土	C	38.8	15.2	3.6	1.4	2.55	頁岩		54-21	30-42
石鏃	SI2-2層	C	20.5	11.4	4.3	0.9	1.80	碧玉			30-43
石鏃	SK58堆積土	C	(27.5)	10.3	4.5	1.3	-	碧玉	先端部欠損	54-22	30-44
石鏃	西区遺構確認面	C	25.6	11.4	2.3	0.6	2.25	碧玉			30-45
石鏃	SK9堆積土	D	21.2	10.2	3.9	0.8	2.08	碧玉			30-46
石鏃	西区遺構確認面	D	25.4	11.0	5.5	1.2	2.31	頁岩			30-47
石鏃	SI11-1層	D	(29.6)	24.7	6.3	4.7	-	碧玉			30-49
石鏃未成品	SI10-1b 層		25.1	14.1	3.7	1.2	1.78	頁岩		54-23	30-48
石鏃未成品	SK110堆積土		31.0	20.9	4.0	2.5	1.48	頁岩			30-50
石鏃未成品	西区遺構確認面		25.1	22.2	4.1	2.1	1.13	頁岩			30-51
石鏃未成品	Pit.343堆積土		26.1	19.6	4.5	2.2	1.33	碧玉		54-24	30-52
石鏃未成品	SI2-2層		25.1	16.2	4.6	1.3	1.55	玉髄			30-53
石鏃未成品	SI12-1層		24.6	13.7	3.7	1.4	1.80	頁岩			30-54
石匙	東区遺構確認面		57.0	32.3	6.5	11.8	1.76	頁岩		54-25	31-1
石匙	SI2堆積土		39.8	24.1	4.5	3.7	1.65	碧玉			31-2
石匙	西区遺構確認面		40.5	18.6	4.5	3.3	-				31-3
石匙	SD125堆積土		(31.4)	(19.7)	5.4	3.7	1.59	鉄石英	刃部欠損		31-4
石匙	東区遺構確認面		48.4	15.5	7.0	5.7	-	頁岩		54-28	31-5
石錐	SK68堆積土		(50.6)	(19.5)	8.0	5.3	2.59	碧玉	先端部欠損	54-26	31-6
石錐	SK68堆積土		(35.3)	12.1	5.0	1.5	-	頁岩	先端部欠損	54-27	31-7
石錐	SI11-1層		(48.9)	16.4	9.0	6.5	-	頁岩	先端部欠損		31-8
石錐	Pit.SI10-16堆積土		(34.6)	14.3	7.1	2.6	-	頁岩	先端部欠損		31-9
石錐	西区遺構確認面		(33.5)	15.3	7.8	2.8	-	碧玉	先端部欠損		31-10
石錐	東区遺構確認面		(33.9)	26.6	7.9	4.2	-	碧玉	先端部欠損		31-11
石錐	SI11カマド崩落土		(38.9)	14.3	4.9	2.0	-	碧玉	先端部欠損		31-12
石錐	SI10-1b 層		32.3	24.5	8.5	5.7	1.32	頁岩		54-30	31-13
石錐	SI11-1層		28.1	16.8	7.4	3.5	1.67	鉄石英		54-29	31-14
石錐	SK84堆積土		(24.9)	16.2	5.4	2.2	-	頁岩	先端部欠損		31-15
石錐	SI12-1層		(22.2)	16.0	5.9	2.3	-	頁岩	先端部欠損		31-16
石錐	西区遺構確認面		(18.4)	13.9	6.8	1.8	-	碧玉	先端部欠損		31-17
石錐	西区遺構確認面		(22.2)	16.6	18.5	2.4	-	碧玉	先端部欠損		
不定形石器	SD5堆積土		32.6	21.6	8.3	5.8	1.51	黒曜石		55-1	31-18
不定形石器	SD125堆積土		30.5	(22.9)	8.1	5.9	-	碧玉			31-19
不定形石器	SK83-1層		33.5	24.5	8.5	6.5	1.37	碧玉			31-20
不定形石器	西区遺構確認面		24.4	14.2	6.9	2.1	1.72	頁岩			31-21
不定形石器	SI1-1層		22.5	18.7	7.0	2.8	1.20	鉄石英			31-22
不定形石器	SI10-1b 層		26.5	21.4	10.0	5.0	1.24	碧玉		55-2	31-23
不定形石器	SK23堆積土		24.0	21.4	12.3	6.2	1.12	碧玉			31-24
不定形石器	SD105-1層		(20.6)	17.5	10.0	3.1	-	碧玉	先端部欠損		31-25
不定形石器	SK33堆積土		33.2	27.1	10.4	10.4	1.23	鉄石英		55-3	31-26
不定形石器	SK31堆積土		30.5	29.3	8.5	7.0	1.04	碧玉			31-27
不定形石器	Pit.SI10-28堆積土		88.8	19.0	8.8	14.8	4.67	頁岩			32-1
不定形石器	Pit.481堆積土		60.1	19.1	10.9	13.6	-	頁岩		55-4	32-2
不定形石器	西区遺構確認面		65.6	31.0	11.2	18.6	2.12	頁岩			32-3
不定形石器	SK37堆積土		60.1	22.4	10.2	12.4	2.68	頁岩			32-4
不定形石器	SI10-1b 層		90.5	20.6	7.8	16.0	4.39	頁岩		55-5	32-5
不定形石器	Pit.631堆積土		65.6	26.9	9.1	16.4	2.44	頁岩		55-6	32-6
不定形石器	西区遺構確認面		60.9	18.3	7.8	9.9	3.33	頁岩			32-7
不定形石器	SK83堆積土		58.7	24.8	11.4	12.8	2.37	頁岩			32-8
不定形石器	SK27堆積土		34.7	15.5	4.3	2.6	2.24	頁岩		55-7	32-9
不定形石器	SI2-1・2層		73.8	29.6	10.0	27.2	2.49	頁岩			32-10
不定形石器	西区遺構確認面		67.0	30.1	8.0	15.8	2.23	碧玉			32-11
不定形石器	SD4堆積土		55.2	28.4	6.3	9.2	1.94	碧玉			32-12
不定形石器	Pit.613堆積土		51.1	31.4	10.0	14.2	1.63	頁岩			32-13
不定形石器	SD4堆積土		51.8	32.3	9.8	13.8	1.60	頁岩			32-14
不定形石器	SD56堆積土		81.4	46.9	11.9	53.0	1.74	頁岩	焼けはじけ	55-10	32-15
不定形石器	SI10-1b 層		37.1	27.3	53.0	4.8	1.36	頁岩		55-9	32-16
不定形石器	Pit.160堆積土		49.9	34.8	8.4	15.2	1.43	頁岩			32-17
不定形石器	西区遺構確認面		54.4	41.9	10.1	29.0	1.30	頁岩			33-1
不定形石器	SI10-2層		52.1	29.3	9.4	17.4	1.78	頁岩		55-8	33-2
不定形石器	Pit.166堆積土		44.4	29.2	7.5	11.2	1.52	頁岩			33-3
不定形石器	SK83堆積土		54.4	24.9	9.9	11.8	2.18	玉髄		55-11	33-4
不定形石器	Pit.386堆積土		43.0	30.8	8.8	11.4	1.40	頁岩		55-12	33-5
不定形石器	SK9堆積土		47.8	25.8	5.5	7.8	1.85	頁岩			33-6
不定形石器	SI1-1層		54.8	28.1	11.3	16.0	1.95	頁岩			33-7
不定形石器	SI10-1b 層		47.0	25.2	10.1	14.2	1.87	碧玉			33-8
不定形石器	SK23堆積土		48.5	30.6	11.1	12.2	1.58	碧玉			33-9
不定形石器	SD125堆積土		52.2	32.0	4.8	9.9	1.63	碧玉			33-10
不定形石器	Pit.383堆積土		42.0	24.3	6.1	5.3	1.73	頁岩			33-11
不定形石器	西区遺構確認面		40.0	24.6	4.4	4.8	1.63	頁岩			33-12
不定形石器	西区遺構確認面		39.1	24.7	7.4	6.4	1.58	黒曜石			33-13
石製円盤	Pit.301堆積土		54.7	57.0	8.9	36.0	0.96			56-7	34-1
磨石	Pit.484堆積土		70.9	32.8	24.3	103.0	2.16	砂（シルト）岩			34-2
磨石	Pit.453堆積土		66.6	33.4	29.0	85.0	1.99	砂（シルト）岩	受熱痕跡有		34-3
敲・磨石	SI11-1層		69.5	47.3	36.4	159.0	1.47	砂岩			34-4
敲石	SK83堆積土		49.0	43.5	35.8	84.0	1.13	安山岩			34-5
敲石	SI10-1b 層		45.0	40.9	33.6	65.0	1.10	安山岩			34-6
敲石	Pit.465堆積土		69.8	60.5	51.4	278.0	1.15	安山岩			34-7
凹石	SK100堆積土		96.0	79.0	47.5	482.0	1.22	石英安山岩		56-5	34-8
凹石	SI10付属東壁際 ピット		98.7	86.0	49.2	602.0	1.15	砂岩		56-1	34-9
凹石	SI10付属東壁際 ピット		99.0	83.0	41.0	628.0	1.19	砂岩		56-2	34-10
凹石	SK100堆積土		(76.9)	(59.4)	(40.1)	254.0	1.29	石英安山岩	欠損	56-4	34-11
凹石	SI10B 炉土器埋設部堆積土		125.0	95.0	43.0	347.0	1.32	凝灰岩		56-3	34-12
凹石	SI10B 炉掘込部堆積土		128.0	11.8	65.0	1120.0	10.85	砂岩		56-6	34-13
凹石	西区遺構確認面		106.0	74.5	47.8	562.0	1.42	砂岩			34-14
凹石	Pit.520堆積土		110.0	88.0	57.0	796.0	1.25	輝石安山岩	受熱痕跡有		34-15
石皿	SI2-2層		198.0	151.0	89.0	3620.0	1.31	砂岩			34-16
石皿	SK94堆積土		(160.0)	(197.0)	91.0	1100.0	0.81	安山岩	欠損	56-8	35-1
石皿	SK95堆積土		(146.0)	(181.0)	106.0	2940.0	0.81	砂岩	欠損、受熱痕跡有		35-2
石皿	SI1堆積土		(159.0)	161.0	69.0	2600.0	(0.99)	輝石安山岩	欠損、受熱痕跡有		35-3
石皿	SI12-1層		(132.0)	(179.0)	47.0	1740.0	0.74	石英安山岩	欠損		35-4
石皿	SK83-13層		295.0	263.0	100.0	12400.0	1.12			57	36

Ⅱ　古　代

竪穴住居跡４軒、土壙３基、溝跡４条を発見した。

１　竪穴住居跡（SI）

西区西部で４軒確認した。

【SI １住居跡】（第58図）

［位置］N14・E13で確認した。カマドの一部と住居跡南東部は調査区外にのびる。

［重複］SD４溝跡と重複し、これより古い。

［規模・平面形］北辺4.7m、西辺5.0mの方形である。

［堆積土］１層認められる。地山粒、炭化物を含む暗褐色シルトで自然堆積である。

［壁］地山を壁としており、床面から住居跡の外側にやや開いて立ち上がる。壁高は残りのよい南辺で17㎝である。

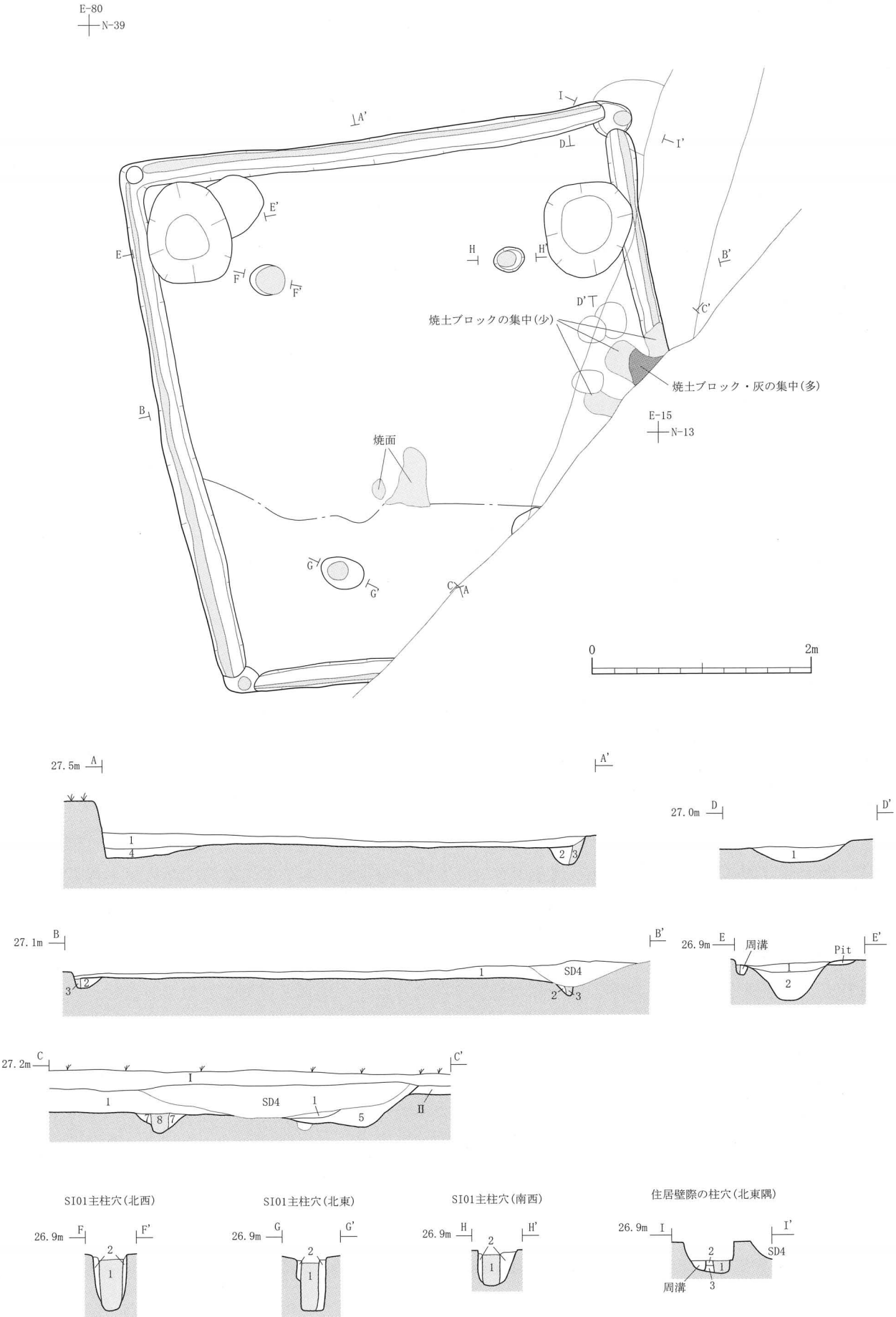
［床面］ほぼ平坦である。住居跡の南辺付近は厚さ３～９㎝の掘方埋土を床面とし、その他の部分は地山を床面としている。

［床面の焼面］床面南部で焼面１カ所を確認した。

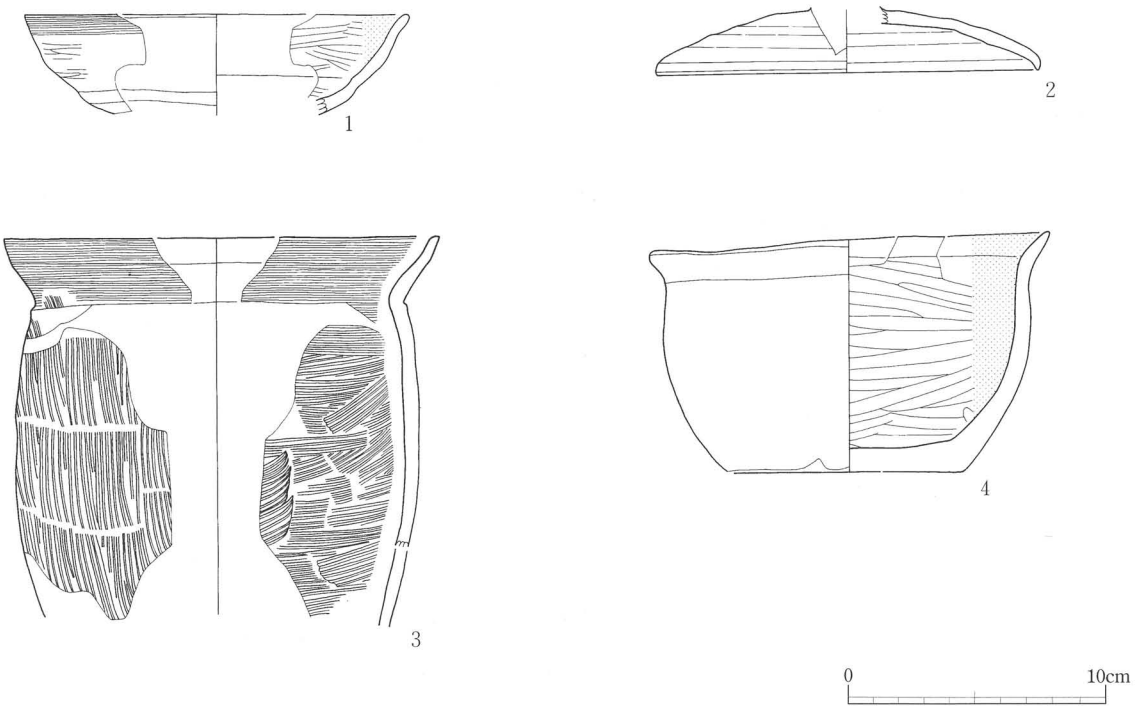
［主柱穴］４個検出し、そのうち３ヶ所で柱痕跡を確認した。柱間寸法は北西主柱穴－北東主柱穴で2.2m、北西主柱穴－南西主柱穴で2.7mである。柱穴の平面形は長径28～42㎝、短径22～28㎝の楕円形で、深さが32～52㎝、堆積土は地山粒を含む褐色シルトである。柱痕跡の平面形は直径16～22の円形で、堆積土は炭化物を含む暗褐色シルトである。

［周溝］南西部分は未確認だが、ほぼ全周で確認された。カマド部分で途切れる。幅８～17㎝、深さ５～９㎝の壁材痕、幅12～18㎝の掘方を検出した。北西隅、北東隅で土壙と重複し、これより古い。

No.	遺　構	種　類	土　色	土　性	備　　考
1	SI1 (A-A') (B-B') (C-C')	1層	暗褐色　10YR3/4	シルト	炭化物を含む　(自然堆積)
2		周溝掘方埋土	褐　色　10YR4/4	粘質シルト	地山ブロックを多く含む
3		周溝壁材痕	暗褐色　10YR3/3	シルト	炭化物を含む
4		掘方埋土	暗褐色　10YR3/3	シルト質粘土	地山ブロック、砂粒を多く含む
5		煙道内堆積土	暗褐色　7.5YR3/3	シルト	焼土ブロック、炭化物、灰を多く含む
6		南東主柱穴柱痕跡	暗褐色　10YR3/3	シルト	炭化物を含む
7		南東主柱穴掘方埋土	暗褐色　10YR3/4	シルト	
1	北東隅土壙 (D-D')		暗褐色　10YR3/3	シルト	地山粒を多く含む。焼土小ブロック、炭化物を含む　(人為堆積)
1	北西隅土壙 (E-E')		暗褐色　10YR3/4	シルト	炭化物を多く含む　(自然堆積)
2			褐　色　10YR4/4	シルト	地山粒を含む　(人為堆積)
1	北西主柱穴 (F-F')	柱痕跡	暗褐色　10YR3/3	シルト	炭化物を含む
2		掘方埋土	褐　色　10YR4/6	砂質シルト	地山粒、砂粒を含む
1	北東主柱穴 (G-G')	柱痕跡	暗褐色　10YR3/3	シルト	炭化物を含む
2		掘方埋土	褐　色　10YR4/6	粘質シルト	地山粒を多く含む
1	南西主柱穴 (H-H')	柱痕跡	暗褐色　10YR3/3	シルト	炭化物を含む
2		掘方埋土	褐　色　10YR4/6	砂質シルト	地山粒、砂粒を多く含む
1	壁際の柱穴 (I-I')	柱痕跡	暗褐色　10YR3/3	シルト	炭化物を含む
2		掘方埋土	暗褐色　10YR3/4	シルト	地山粒を含む
3		掘方埋土	褐　色　7.5YR4/6	粘質シルト	地山ブロックを多く含む



第58図　SI 1 住居跡　平面図・断面図（1/50）



No.	種　類	遺構・層位	口　径	底　径	器　高	残　存	特　徴	写真図版
1	土師器坏	床　面	15.0			1/6	非ロクロ調整。外面：体下部に段、口縁ヨコナデ、体部ヘラミガキ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	
2	須恵器蓋	周　溝	15.0			つまみ以外残存	つまみ欠損。外面：ロクロナデ→体部回転ヘラケズリ→つまみ接合→ロクロナデ。内面：ロクロナデ。重ね焼き痕。焼成時組み合わされた高台坏の口径13.2cm、台径8.5cm	37-2
3	土師器甕	床　面	17.4			破　片	非ロクロ調整。外面：胴部ハケメ→口縁ヨコナデ。内面：胴部ハケメ→口縁ヨコナデ。	37-3
4	土師器鉢	床　面	15.8	9.2	15.8	3/4	非ロクロ調整。外面：磨き、摩滅。内面：ヘラミガキ→黒色処理。	37-1

第59図　SI 1 住居跡出土土器

［土壙］住居跡北東隅と南西隅付近で検出した。北東隅の土壙は長径89cm、短径80cm、深さ20cm の円形で、断面形は皿状を呈する。地山・焼土ブロックを含む暗褐色シルトで人為的に埋め戻されている。位置的にみて貯蔵穴の可能性がある。北西隅の土壙は平面形が長径96cm、短径76cm の楕円形で、深さは34cm である。断面形は擂鉢状を呈する。地山粒を多く含む褐色シルトで人為的に埋め戻されている。

［壁柱穴］住居跡北東隅、北西隅、南西隅に柱穴が認められた。周溝と重複しこれより古い。

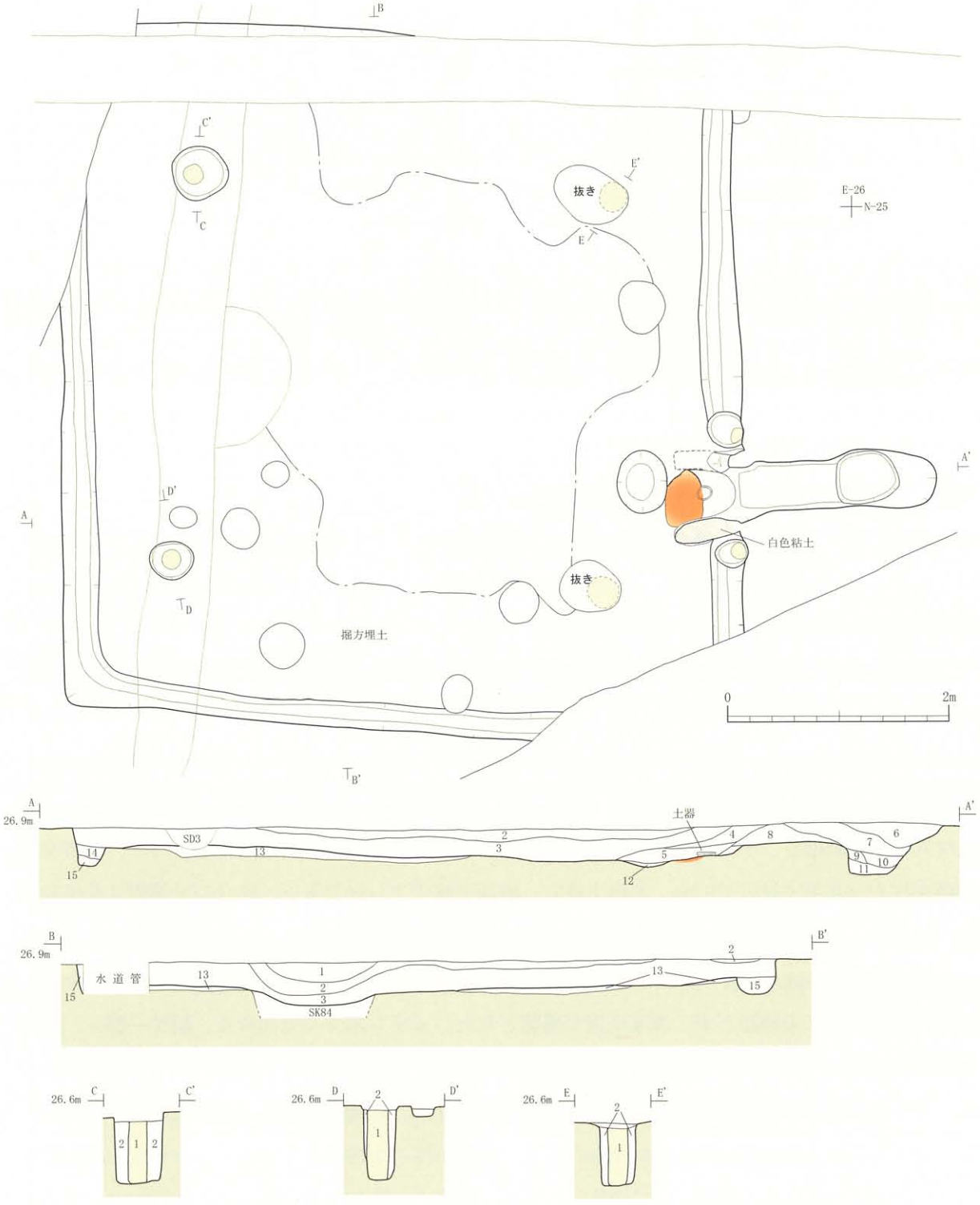
［カマド］東辺の中央でカマドのかき出し部と調査区壁に煙道の一部が確認された。かき出し部に焼面はみられず、焼土、灰、炭化物のブロックが集中している。

［出土遺物］機能時、または廃絶時の遺物として、床面から非ロクロの土師器坏、甕、鉢が出土している。また、構築時の遺物として、周溝から須恵器蓋が出土している（第59図）。

【SI 2 住居跡】（第60図）

［位置］N23・E23で確認した。住居跡南東隅は調査区外にのびる。住居跡北辺は大部分が撹乱によって失われている。

［重複］SK84土壙、SD 3 、SD 4 溝跡と重複する。SK84土壙より新しく、SD 3 、SD 4 溝跡より古い。



第60図　SI 2 住居跡　平面図・断面図（1/50）

No.	遺　構	種　類	土　色	土　性	備　　考
1	SI2 (A-A') (B-B')	1層	暗褐色　10YR3/3	シルト	(自然堆積)
2		2層	暗褐色　10YR3/4	シルト	灰白色火山灰を多量に含む　(自然堆積)
3		3層	暗褐色　10YR3/3	シルト	焼土粒、炭化物を極少量含む　(自然堆積)
4		カマド天井部崩落土	暗褐色　10YR3/3	シルト	白色粘土大ブロック、焼土を多量に含む
5		カマド内堆積土	暗褐色　10YR3/4	シルト	焼土粒を多量に含む　カマド廃絶後　(自然堆積)
6		煙道天井部崩落土	暗褐色　10YR3/3	シルト	白色粘土大ブロック、焼土を多く含む
7		煙道天井部崩落土	暗褐色　10YR3/4	シルト	焼土粒、白色粘土小粒を多く含む。炭化物を含む
8		煙道壁崩落土	暗褐色　10YR3/4	シルト	地山粒、焼土小ブロックが全体に広がる
9		自然流入土	暗褐色　10YR3/3	シルト	地山小粒を少量含む　(自然堆積)
10		煙道崩落土	暗褐色　10YR3/4	シルト	焼土粒を多く含む。白色粘土小ブロックを少量含む
11		自然流入土	暗褐色　10YR3/4	シルト	焼土粒を全体的に含む　(自然堆積土)
12		カマド掻出部堆積土	暗褐色　10YR3/3	シルト	焼土粒、炭化物を多量に含む
13		貼床	暗褐色　10YR3/3	シルト	地山ブロックを多く含む
14		周溝掘方埋土	暗褐色　10YR3/4	シルト	地山粒を多く含む
15		周溝掘方埋土	にぶい黄褐色10YR4/3	シルト	地山粒を少量含む
1	北西主柱穴 (C-C')	柱痕跡	暗褐色　10YR3/4	シルト	地山ブロック多く含む
2		掘方埋土	暗褐色　10YR3/3	シルト	炭化物を含む
1	南西主柱穴 (D-D')	柱痕跡	暗褐色　10YR3/4	シルト	地山小ブロックを含む
2		掘方埋土	暗褐色　10YR3/3	シルト	地山中ブロックを含む
1	北東主柱穴 (E-E')		暗褐色　10YR3/3	シルト	白色粘土、焼土粒を多く含む
2			黒褐色　10YR3/2	シルト	

［規模・平面形］南辺約6.2m、西辺約6.2mの方形である。

［堆積土］２層に分かれる。焼土、炭化物を含む暗褐色シルト、その上に灰白色火山灰を多く含む暗褐色シルトが約10cm 堆積している。いずれも自然堆積である。なお、SI２住居跡堆積土はSK84土壙の位置で陥没がみられる。

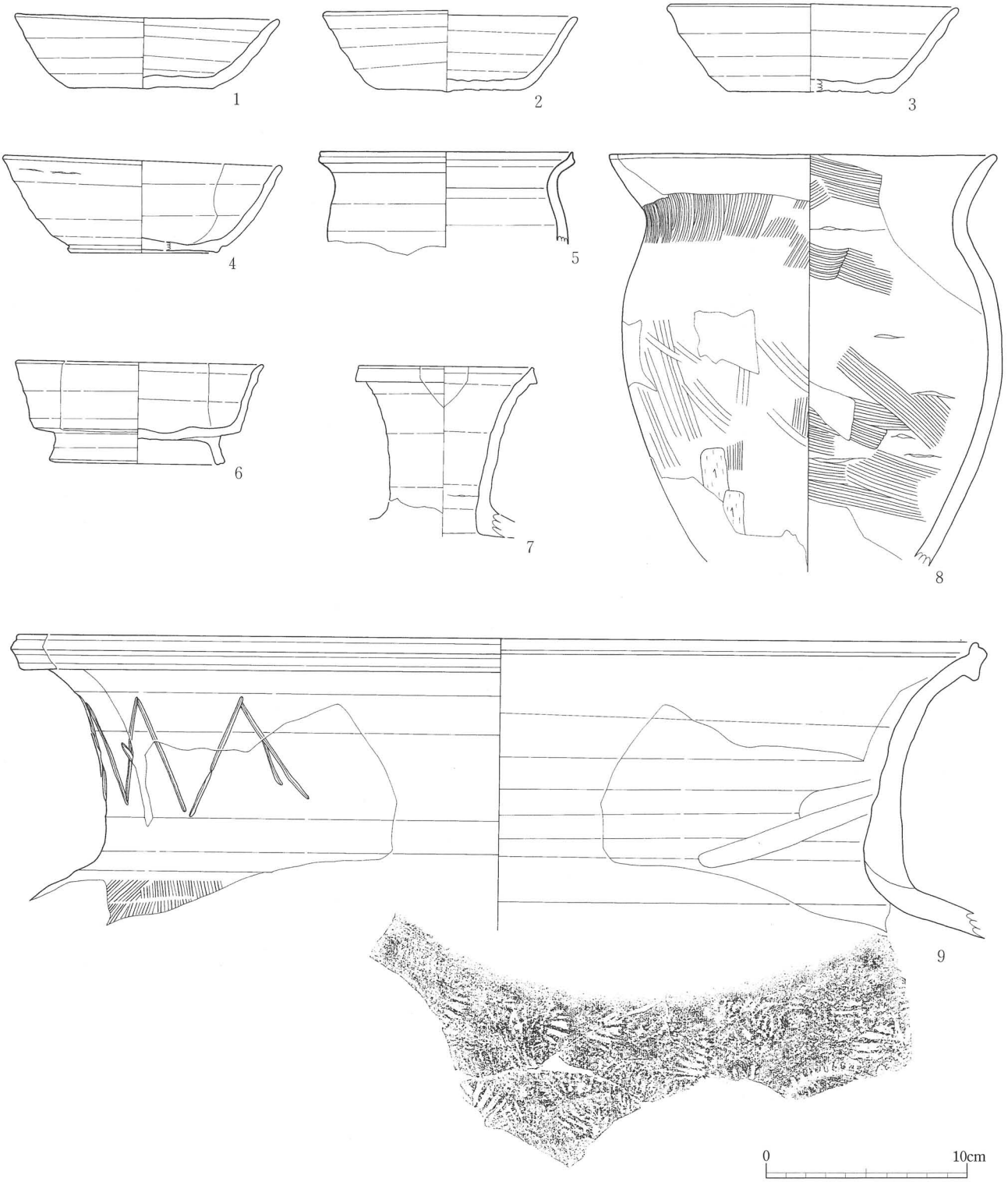
［壁］地山を壁としており、床面からほぼまっすぐに立ち上がる。壁高は残りのよい東辺で34cm である。

［床面］ほぼ平坦である。住居跡の中央付近は厚さ10cm 程の貼床を床面とし、その他の部分は地山を床面としている。

［主柱穴］４個検出し、そのうち４ヶ所で柱痕跡を、２ヶ所で柱の抜き取り穴を確認した。柱間寸法は北西主柱穴－北東主柱穴で3.8m、北西主柱穴－南西主柱穴で3.6mである。柱穴の平面形は長径40～42cm、短径36～50cm、の楕円形で、深さが46～67cm、堆積土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。柱痕跡の平面形は直径18～28cm の円形で、堆積土は地山小ブロックを含む暗褐色シルトである。

［周溝］南東部分は未確認だが、ほぼ全周で確認された。カマド部分で途切れる。幅20～28cm、深さ６～13cm の周溝を検出した。壁材痕、壁柱穴は確認されなかった。

［カマド］東辺のやや南寄に付設されている。カマド天井部、左側壁、煙道は住居廃絶後に崩落している。カマド本体は壁内幅約94cm、奥行約67cm で、側壁の長さは約60cm である。ある程度地山を削り出し、その上に白色粘土を積み上げて構築している。煙道は、長さ1.8m、幅44cm、深さ約17cm で、先端に向かって次第に浅くなる。先端部は直径56cm の円形のピット状を呈し、煙道底面より約28cm 深くなっている。カマド側壁の外側には掘方が直径約30cm、深さ約25cm、柱痕跡の平面形が約15cm の円形の柱穴がある。カマドの前面には、堆積土に焼土、炭化物を多く含む、長径57cm、短径46cm の円形のピットがあり、かき出し部と考えられる。



No.	種　類	遺構・層位	口　径	底　径	器　高	残　存	特　徴	写真図版
1	須恵器坏	2　層	13.0	7.0	3.6	3/4	外面：底部ヘラ切り。焼成不良。	37-5
2	須恵器坏	2　層	13.0	7.1	4.1	ほぼ完形	外面：底部ヘラ切り。	37-6
3	須恵器坏	カマド	14.7	8.3	4.5	1/2	外面：底部ヘラ切り。火襷痕顕著。	37-7
4	須恵器坏	周溝埋土	14.1	7.6	4.9	1/2	外面：底部回転糸切り無調整。粘土紐積上痕。	37-8
5	土師器甕	カマド	12.5			破片	ロクロ調整。口縁部受け口状。	37-9
6	須恵器高台坏	2　層	12.4		5.1	1/4	ヘラ切り→台部接合→ロクロナデ。焼成前ヘラ記号「－」。台径8.9cm	37-10
7	須恵器長頸壺	1・2層	8.8			口頸部1/2	内面に粘土紐積上痕。黒茶色。残存高8.7cm	37-11
8	土師器甕	煙道堆積土	18.9			2/3	外面：頸部ハケメ縦方向。胴部ハケメ→ヘラミガキ、ヘラケズリ。摩滅。内面：ハケメ。粘土紐積上痕。炭化物付着。	37-13
9	須恵器甕	2　層	49.2			口径部1/5	ロクロ調整。外面、口径部に鋸歯文。胴部平行叩き目。内面：口頸部ロクロナデ→指ナデ。胴部放射状叩き目。焼成堅緻。SI111層、SB166柱穴、SD125堆積土から同一個体出土接合。	38-1

第61図　SI 2 住居跡出土土器

［出土遺物］機能時、または廃絶時の遺物として、カマドから須恵器坏、ロクロ土師器甕が出土した（第61図３～５）。５の甕は口縁部を下にした状態でカマド中央から出土しており、カマドの支脚に関係するものと考えられる。また、周溝埋土から須恵器坏、土製支脚（写真図版37－12）が出土している。廃絶後の遺物としては、煙道堆積土から非ロクロの土師器甕、住居跡堆積土から土師器坏、須恵器高台坏、甕、長頸壺などが出土している（１、２、６～９）。

【SI11住居跡】（第62図）

［位置］N30・E38で確認した。

［重複］SK104、SK145、SK156、SK157、SK158土壙、SD36溝跡と重複し、これより新しい。

［規模・平面形］南辺約4.8m、西辺約4.7mの方形である。

［堆積土］２層に分かれる。地山ブロックを多く含む褐色砂質シルトが住居跡壁際に堆積し、その上に地山ブロック、灰白色火山灰のブロックを含む暗褐色シルトが堆積している。いずれも自然堆積である。

［壁］地山を壁としており、床面からほぼまっすぐに立ち上がる。壁高は残りのよい南辺で20cmである。

［床面］ほぼ平坦である。住居跡の中央付近と西辺付近に部分的に貼床がみられる。その他の部分は地山を床面としている。

［主柱穴］検出されなかった。

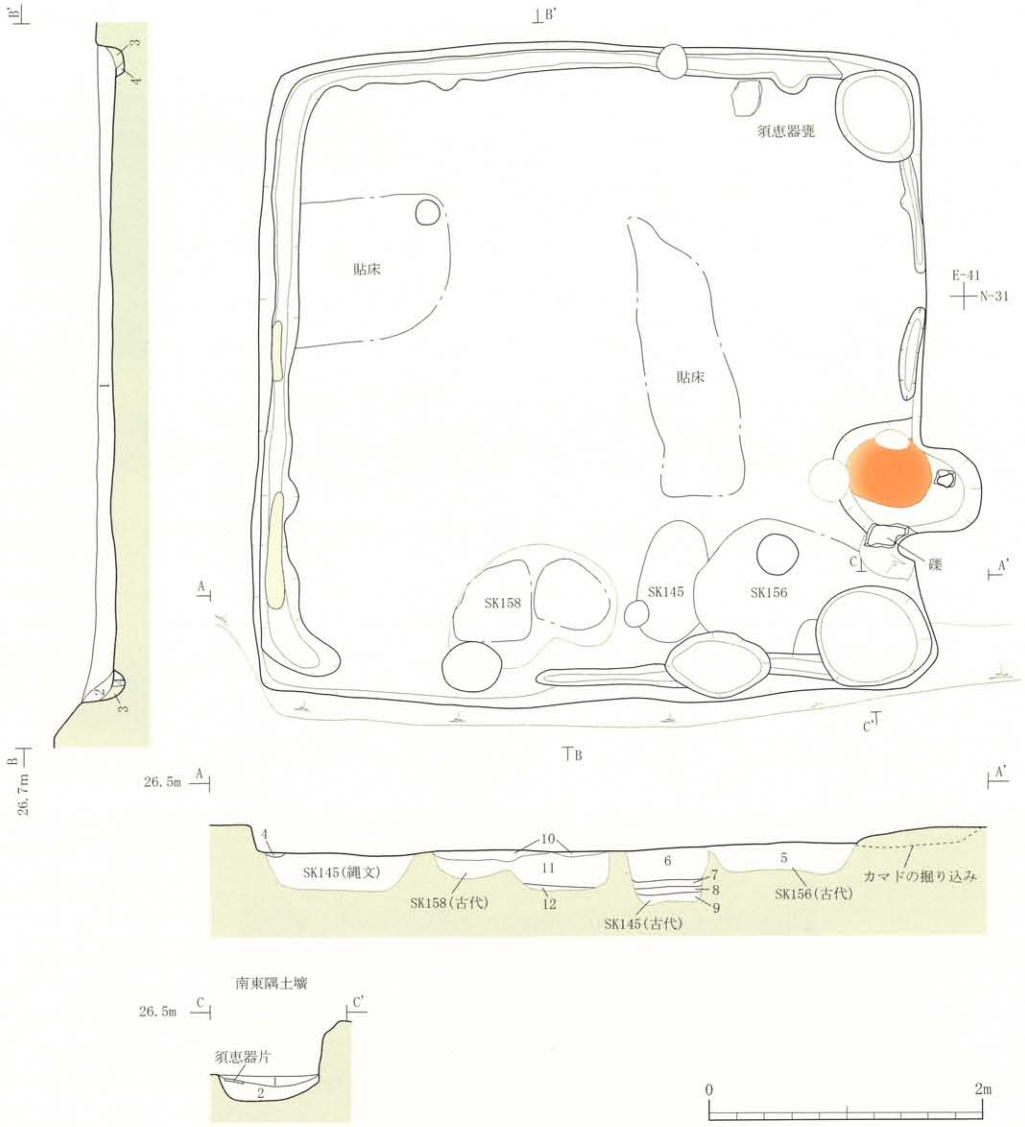
［周溝］ほぼ全周で確認されるが、カマド部分で途切れる。幅８～29cm、深さ２～８cmである。壁材痕は西辺の一部で確認された。

［カマド］東辺のやや南寄に付設されている。カマドの右側壁と燃焼部を確認した。カマド本体は壁内幅約76cm、奥行約106cmで、側壁は地山を削りだした上に白色粘土を貼り付けて構築している。右側壁は礫片を心材としている。側壁の長さは約42cmで、燃焼部は東壁から張り出すように地山を50cmほど掘り込んで造られている。燃焼部中央に支脚石が据えられている。

［土壙］南東隅で検出した土壙は直径約80cm、深さ18cmの円形である。底部は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は焼土ブロック、地山ブロックを多く含む灰黄褐色のシルトなどで人為的に埋め戻されている。位置的に貯蔵穴の可能性がある。

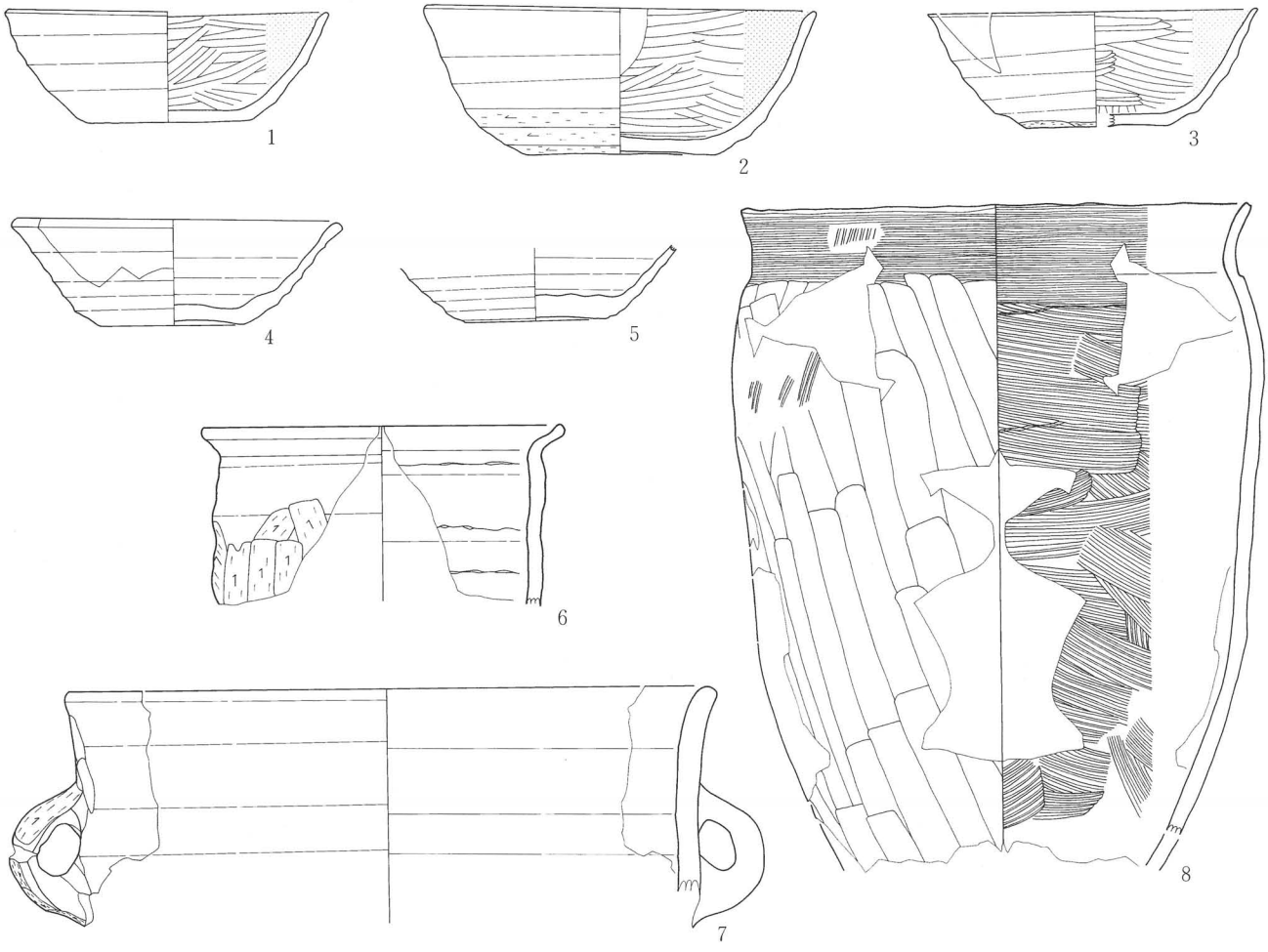
また、本住居跡内西辺沿いに、SI11住居跡より古いSK104、SK145、SK156、SK157、SK158土壙を検出した。これらの土壙は堆積土上層に地山ブロックを多く含むにぶい黄褐色シルト層が確認され、それらは硬くしめられていることから、住居構築時に土壙上に貼床をしたか、土壙を人為的に埋め戻して床面にしたと考えられる。

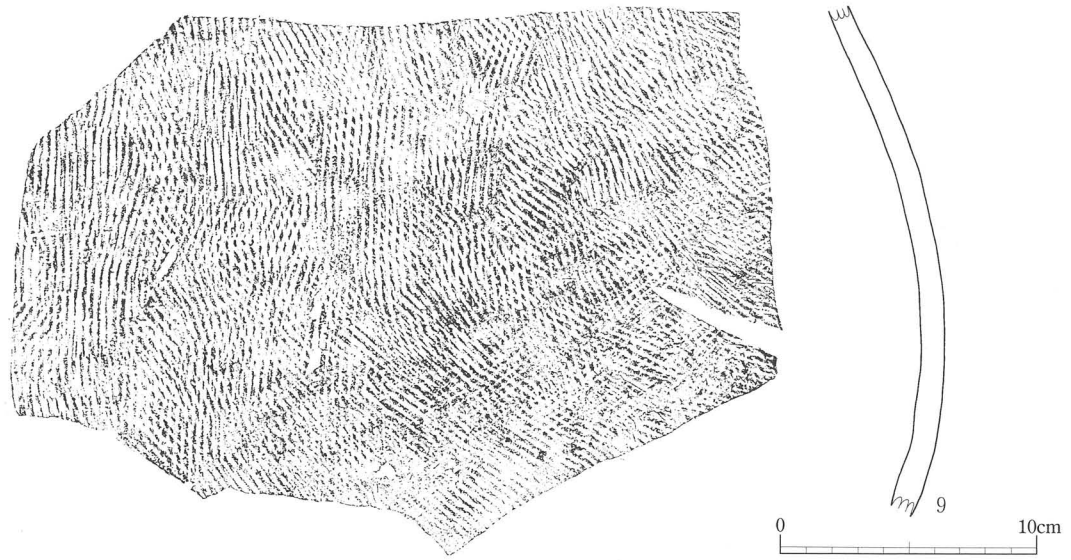
［出土遺物］機能時または廃絶時の遺物としては、須恵器甕の胴部破片が床面から出土している（第63図９）。廃絶後の遺物として、堆積土からロクロ土師器坏、須恵器坏、ロクロ土師器甑などが出土している（同図１～８）。



No.	遺　構	種　類	土　色	土　性	備　　考
1	SI11 (A-A')	堆積土	暗褐色　10YR3/4	シルト	地山小ブロックを多く含む。灰白色火山灰ブロックを含む　(自然堆積)
2		壁崩落土	褐　色　10YR4/4	シルト	地山粒を多く含む　(自然堆積)
3		壁材痕跡	黒褐色　10YR3/2	砂質シルト	
4		周溝掘方埋土	にぶい黄褐色　10YR4/3	シルト	
5	SK156	1層	黒褐色　10YR2/3	シルト	暗褐色土が混じる。1～3cm の地山ブロックを多く含む　(人為堆積)
6	SK157	1層	黒褐色　10YR2/3	シルト	暗褐色土が混じる。1～3cm の地山ブロックを多く含む　(人為堆積)
7		2層	暗褐色　10YR3/3	シルト	5mm 位の焼土ブロックを含む
8		3層	にぶい黄褐色　10YR6/4	粘土	
9		4層	暗褐色　10YR3/3	シルト	5mm 位の焼土ブロックを含む
10	SI11	貼床	にぶい黄褐色　10YR4/3	シルト	5～10mm の地山ブロックを多く含む
11	SK158	1層	暗褐色　10YR3/4	シルト	地山ブロックと焼土ブロックを非常に多く含む。須恵器出土　(人為堆積)
12		2層	褐　色　10YR4/4	シルト	焼土を含む
1	Pit (C-C')		黒褐色　10YR3/2	シルト	炭化物を多く含む
1	Pit (D-D')		褐　色　10YR4/4	シルト	炭化物を多く含む
1	Pit (E-E')		暗褐色　10YR3/3	シルト	
2			灰黄褐色　10YR4/2	シルト	地山ブロック、焼土ブロックを多く含む　(人為堆積)

第62図　SI11住居跡　平面図・断面図 (1/50)





No.	種類	遺構・層位	口径	底径	器高	残存	特徴	写真図版
1	土師器坏	1 層	13.1	6.6	4.7	4/5	ロクロ調整。外面：底部切り離し不明→手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。焼成不良	38-5
2	土師器坏	1 層	15.9	7.8	6.1	3/4	ロクロ調整。外面：底部切り離し不明→体下部～底部回転ヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理。焼けはじけ有	38-2
3	土師器坏	SK158-2層	13.4	5.8	4.7	1/2	ロクロ調整。外面：底部回転糸切り無調整。体下部手持ちヘラケズリ。内面：ヘラミガキ→黒色処理	
4	須恵器坏	SK158-2層	13.3	5.7	4.4	1/2	外面：回転糸切り無調整。焼成不良。灰白色。住居に伴う土壙か	38-3
5	須恵器坏	Pit.666		5.7		1/3	外面：回転糸切り無調整。焼成不良。灰白色。住居跡より新しい Pit	38-4
6	土師器甕	1 層	14.5			1/5	ロクロ調整。口縁部受け口状。外面：胴部ロクロナデ→ヘラケズリ。内面：ロクロナデ、粘土紐積上痕	
7	土師器甑	1 層	26.0				取手付近のみ残存。ロクロ調整。外面：ロクロナデ→取手接合→接合部指ナデ。内面：ロクロナデ。取手：削り	38-8
8	土師器甕	1 層	20.5			1/2	非ロクロ調整。外面：ハケメ→口頸部ヨコナデ→ヘラミガキ。内面：ハケメ→口頸部ヨコナデ	38-7
9	須恵器甕	床 面				破 片	外面：格子状叩き目。内面：ナデ	38-9

第63図　SI11住居跡出土土器

【SI12住居跡】（第64図）

［位置］N33・E51で確認した。

［重複］重複はない。

［規模・平面形］南辺約5.3m、西辺約5.4mの方形である。

［堆積土］１層認められる。地山粒、炭化物を含む暗褐色シルトで、自然堆積である。

［壁］地山を壁としており、床面からほぼまっすぐに立ち上がる。壁高は残りのよい北辺で40cm である。

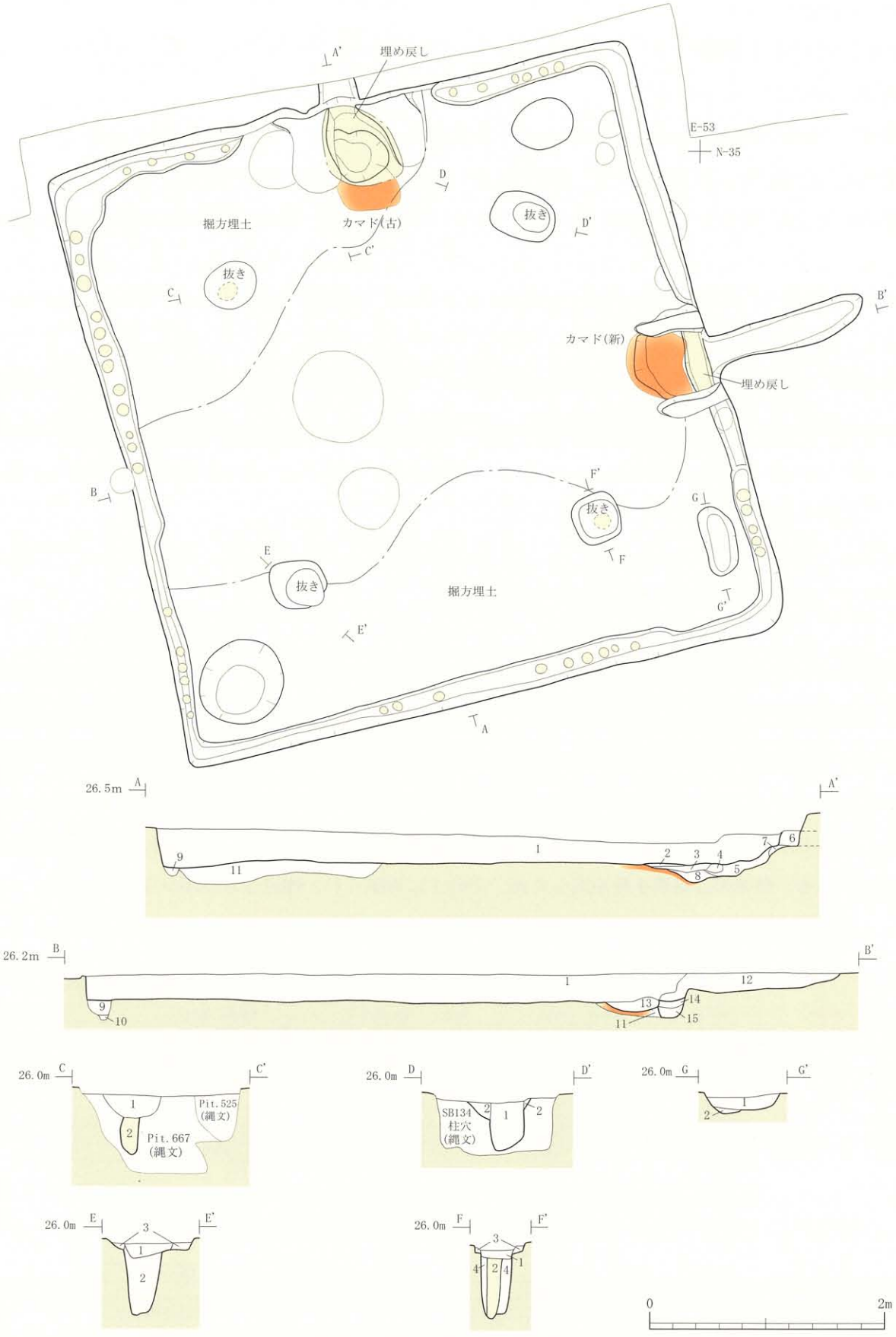
［床面］ほぼ平坦で、住居跡の北西付近で貼床がみられる。中央部分は掘方埋土、その他は地山を床面としている。

［主柱穴］４個検出し、そのうち４ヶ所で柱痕跡を、３ヶ所で柱の抜き取り穴を確認した。柱間寸法は2.7m等間である。柱穴の平面形は長軸44～56cm、短軸38～42cm の方形または円形で、深さが52～65cm、堆積土は地山粒を含む暗褐色シルトである。柱痕跡の平面形は12～32cm の円形で、堆積土は地山粒、炭化物を含む暗褐色シルトである。

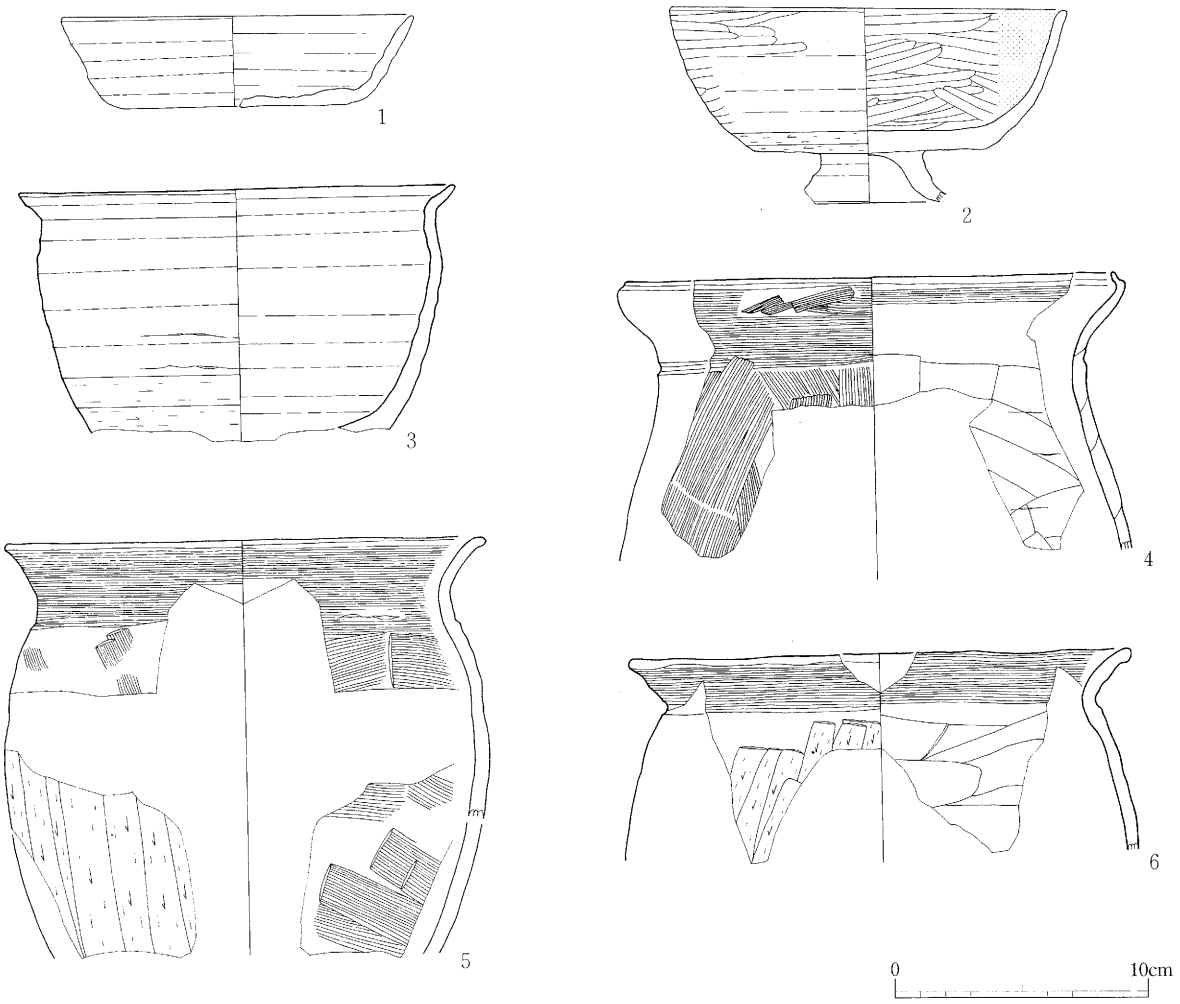
［周溝］ほぼ全周で確認された。カマド（古）部分で途切れる。幅８～29cm、深さ２～８cm の周溝を検出した。壁材痕は各辺において部分的に確認された。

［カマド］北辺中央と東辺中央に付設されている。北辺のカマドが古く、東辺に作り替えられている。北辺のカマド（古）は燃焼部と側壁を確認した。煙道は調査区外にのびる。カマド本体は壁内幅約44cm、奥行約62cm で、側壁は、長さ約70cm で、白色粘土を積み上げて構築されている。煙道は幅約34cm で、カマド燃焼部から約30cm 高くなっている。カマド（古）は、天井、側壁が壊され、燃焼部を埋め戻して床面にしている。周溝は新しく造られていない。東辺のカマド（新）は、燃焼部と側壁を確認した。カマド本体は壁内幅約52cm、奥行約70cm で、側壁は長さ約60cm あり、白色粘土を積み上げて構築されている。燃焼部は周溝を埋め戻した後、その上に構築され、煙道は燃焼部から約20cm 高く、長

No.	遺　構	種　類	土　色	土　性	備　　考
1	SI12 (A-A') (B-B')	1層	暗褐色　10YR3/3	シルト	地山粒、炭化物を全体に含む
2		貼床	明黄褐色 10YR6/6	粘質シルト	地山粒、炭化物を含む　北側カマド（古）廃棄後の燃焼部上の貼床
3		カマド埋め戻し土	暗褐色　10YR3/3	シルト	地山粒、炭化物を含む　北側カマド（古）の埋め戻し土
4		カマド埋め戻し土	黄褐色　10YR5/6	粘土	地山粘土ブロック　カマド燃焼部の埋め戻し土
5		カマド埋め戻し土	褐　色 10YR4/4	シルト	焼土粒、炭化物、白色粘土を多量に含む
6		煙道埋め戻し土	褐　色 10YR4/4	シルト	白色粘土ブロックを多くに含む。焼土粒を含む
7		カマド内堆積土	にぶい黄褐色 10YR5/4	砂質シルト	炭化物をわずかに含む　カマド機能時の堆積土
8		カマド内堆積土	暗褐色　10YR3/4	シルト	焼土を多く含む　カマド機能時の燃焼部の堆積土
9		周溝埋土	暗褐色　10YR3/4	シルト	炭化物をわずかに含む
10		周溝埋土	暗褐色　10YR3/4	シルト	
11		掘方埋土	褐　色 10YR4/4	シルト	地山ブロック、白色粘土ブロックを多く含む
12		煙道内堆積土	暗褐色　10YR3/4	シルト	地山小ブロック、焼土小ブロックを多く含む
13		カマド埋め戻し土	褐　色 10YR4/6	シルト	焼土、白色粘土を全体に多く含む
14		カマド古機能時周溝	暗褐色　10YR3/4	シルト	炭化物をわずかに含む
15		カマド古機能時周溝	暗褐色　10YR3/4	シルト	地山粒を多く含む　カマド（古）機能時周溝
1	北西主柱穴 (C-C')	柱抜き取り穴	暗褐色　10YR3/3	シルト	地山小ブロック、炭化物を含む
2		柱痕跡	褐　色 10YR4/4	シルト	地山ブロック、白色粘土ブロックを多く含む
1	北東主柱穴 (D-D')	柱抜き取り穴	暗褐色　10YR3/3	シルト	地山小ブロック、炭化物を含む
2		掘方埋土	褐　色 10YR4/4	シルト	地山ブロックを多く含む。炭化物をわずかに含む
1	南西主柱穴 (E-E')	柱抜き取り穴	暗褐色　10YR3/4	シルト	炭化物をわずかに含む
2		柱抜き取り穴	褐　色 10YR4/4	シルト	地山ブロック、白色粘土ブロックを含む
3		掘方埋土	暗褐色　10YR3/4	シルト	地山を多く含む
1	南東主柱穴 (F-F')	柱抜き取り穴	褐　色　10YR4/4	シルト	地山粒、炭化物を含む
2		柱痕跡	暗褐色　10YR3/3	シルト	
3		掘方埋土	暗褐色　10YR3/3	シルト	地山を少量含む
4		掘方埋土	暗褐色　10YR3/4	シルト	地山を多く含む
1	南東隅 Pit (G-G')		褐　色 10YR4/4	シルト	焼土、炭化物、白色粘土ブロックを多く含む　（人為堆積）
2			暗褐色　10YR3/4	シルト	



第64図　SI12住居跡　平面図・断面図（1/50）



No.	種類	遺構・層位	口径	底径	器高	残存	特徴	写真図版
1	須恵器坏	カマド（新）側壁上部	13.8	8.0	3.7	完形	外面：ヘラ切り→軽い手持ちヘラケズリ。体下部軽いヘラケズリ。内面：体下部～底部ヘラケズリ。焼成後底部中央に外面から穿孔	39-1
2	土師器高坏	カマド（新）内	15.7	9.2	7.8	3/4	ロクロ調整。外面：ロクロナデ→ヨコミガキ、体下部～底部回転ヘラケズリ→台部接合。摩滅。内面：ヘラミガキ→黒色処理。台部：ロクロ調整。内面回転ヘラケズリ	39-2
3	土師器甕	カマド（古）内	17.2			1/3	ロクロ調整。口縁部受け口状。外面：体下部回転ヘラケズリ。粘土紐積上痕	39-3
4	土師器甕	カマド（古）側壁	20.0			破片	非ロクロ調整。外面：沈線状の段→ハケメ→口頸部ヨコナデ→口縁部ハケメ。内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。粘土紐積上痕	39-4
5	土師器甕	1層	18.8			1/3	非ロクロ調整。外面：ナデ→体下半ヘラケズリ。内面：ナデ→口頸部ヨコナデ。粘土紐積上痕	39-5
6	土師器甕	南西隅土壙	19.8			破片	非ロクロ調整。外面：ヘラケズリ、口頸部ヨコナデ。内面：ヘラナデ→口頸部ヨコナデ	

第65図　SI12住居跡出土土器

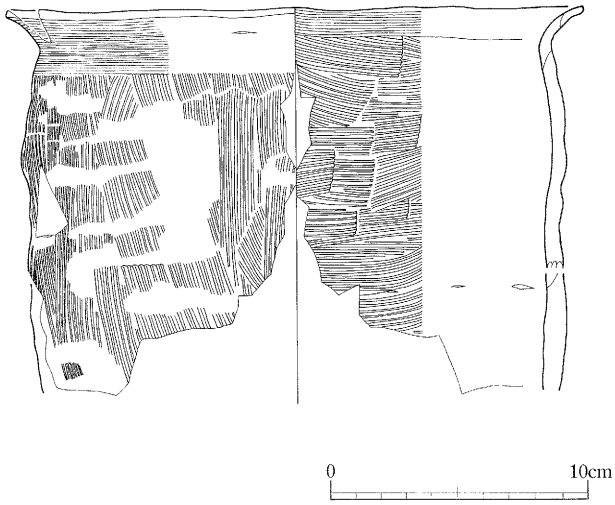
さ約137cm、幅約26cmである。煙出しピットはない。

［出土遺物］機能時、または廃絶時の遺物として、北側のカマド（古）内からロクロ土師器甕、左側壁から非ロクロで、頸部に沈線の巡る土師器長胴甕が出土している（第66図３、４）。また、東側のカマド（新）内から土師器高坏、右側壁上面から須恵器坏が出土し（同図１、２）、坏には底部に焼成後の穿孔がある（写真図版40）。廃絶後の遺物として、住居跡堆積土から非ロクロの甕が出土している（５）。

２　土　壙（第62図）

SI11住居跡の床面下からSK156、SK157、SK158土壙を検出した。これらはSI11住居跡より古く、S

K156土壙はSK157土壙より新しい。SK156土壙は、長径1.7m、短径0.9m、深さ20cmの楕円形で、断面形は皿状を呈する。SK157土壙は、長径0.9m、短径0.4m、深さ40cmの楕円形で、断面形は底面が平坦で壁が急に立ち上がる。SK158土壙は、長軸1.2m、短軸0.7m、深さ20～30cmの不正形で、断面形は底面が不正形で壁は急に立ち上がる。SK156、SK157、SK158土壙の堆積土からは土師器または須恵器が出土しており、SK157土壙からは土師器長胴甕が出土している（第67図）。



種　類	口　径	残　存	特　徴	写真図版
土師器甕	22.6	破　片	非ロクロ調整。外面：胴部ハケメ→口縁ヨコナデ。内面：胴部ハケメ→口縁ヨコナデ。炭化物付着	38-6

第67図　SK157出土土器

3　溝　跡（第4～7図）

南北方向の溝跡を4条検出した。

【SD154溝跡】（第6図）

［位置］N24・E8付近で確認した。

［重複］重複はない。

［規模］上幅約0.4m、下幅約0.2m深さ約20cmである。方向は南－北方向で東に15°偏る。底面は平坦で断面形は皿状を呈する。

［堆積土］1層認められる。地山粒を含む暗褐色シルト層で、自然堆積である。

［出土遺物］土師器片、縄文土器片が少数出土している。

【SD 6溝跡】（第6図）

［位置］N21・E14付近で確認した。

［重複］SD5溝跡と重複し、これより古い。

［規模］上幅約0.4m、下幅約0.2m、深さ約0.1mである。方向は南－北方向で東に5°偏る。断面形は皿状を呈する。

［堆積土］1層認められる。地山粒を少し含む暗褐色シルト層で、自然堆積である。

［出土遺物］土師器片、縄文土器片が出土している。

【SD 3溝跡】（第6図）

［位置］N20・E19付近で確認した。

［重複］SI2住居跡、SK89土壙と重複し、SI2住居跡より新しく、SK89土壙より古い。

［規模］上幅約0.6m、下幅約0.35m、深さ約17cmである。方向は南－北方向で東に10°偏る。断面形は皿状を呈する。

［堆積土］２層に分かれる。暗褐色シルト層で、上層は地山粒を含む。自然堆積である。

［出土遺物］須恵器片、縄文土器片が出土している。

【SD36溝跡】（第７図）

［位置］N33・E41付近で確認した。

［重複］SI11住居跡と重複し、これより古い。

［規模］上幅約0.5m、下幅約0.2m、深さ約30㎝ である。方向は南－北方向で東に６° 偏る。断面形はⅢ状を呈する。

［堆積土］１層認められる。地山ブロックを少し含む暗褐色シルト層で、自然堆積である。

［出土遺物］土師器片、縄文土器片が少数出土している。

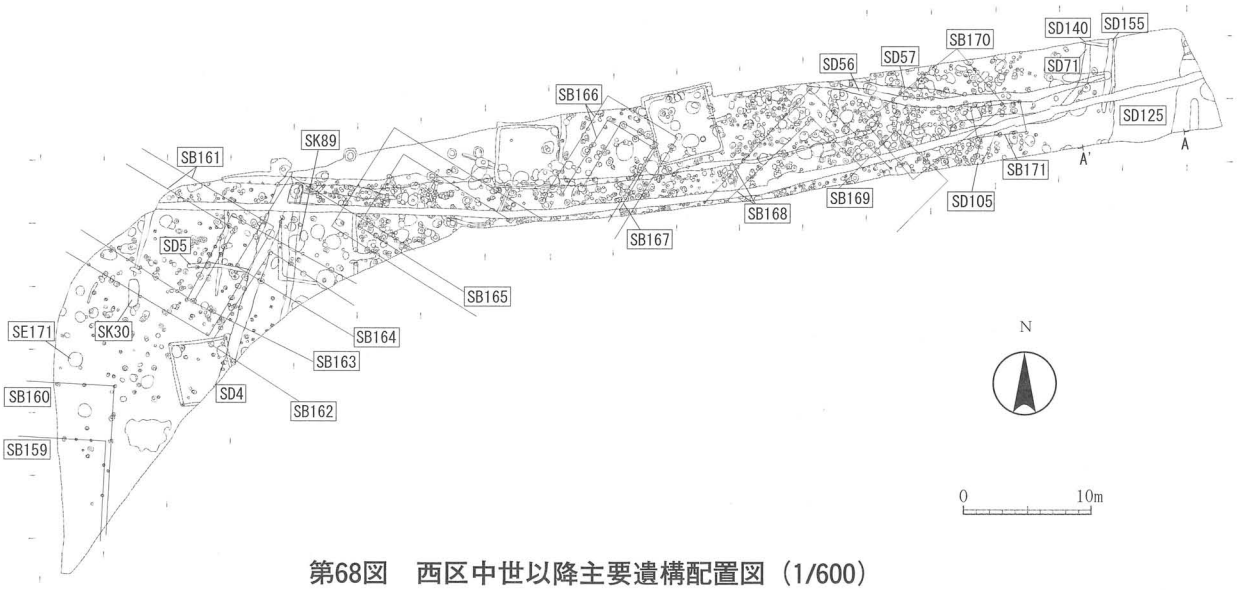
Ⅲ　中世以降および時期不明の遺構（第４、68、69図）

西区全体に径60㎝ 以下の柱穴が密集して検出された。これらは、縄文時代や古代の柱穴と規模や埋土の特徴で異なっているものが多い。そのうち、柱穴底面の標高値や柱間などをもとに掘立柱建物跡13棟を検出したが、建物の規模や構造が不明なものも多く、柱穴の組み合わせはなお検討の余地がある。柱穴からは、ほとんど遺物が出土していないため、時期の特定は困難であるが、遺跡の南西に中近世の城館である萩沢城址があり、これらの建物跡はこの城館に伴う可能性がある（第68図）。

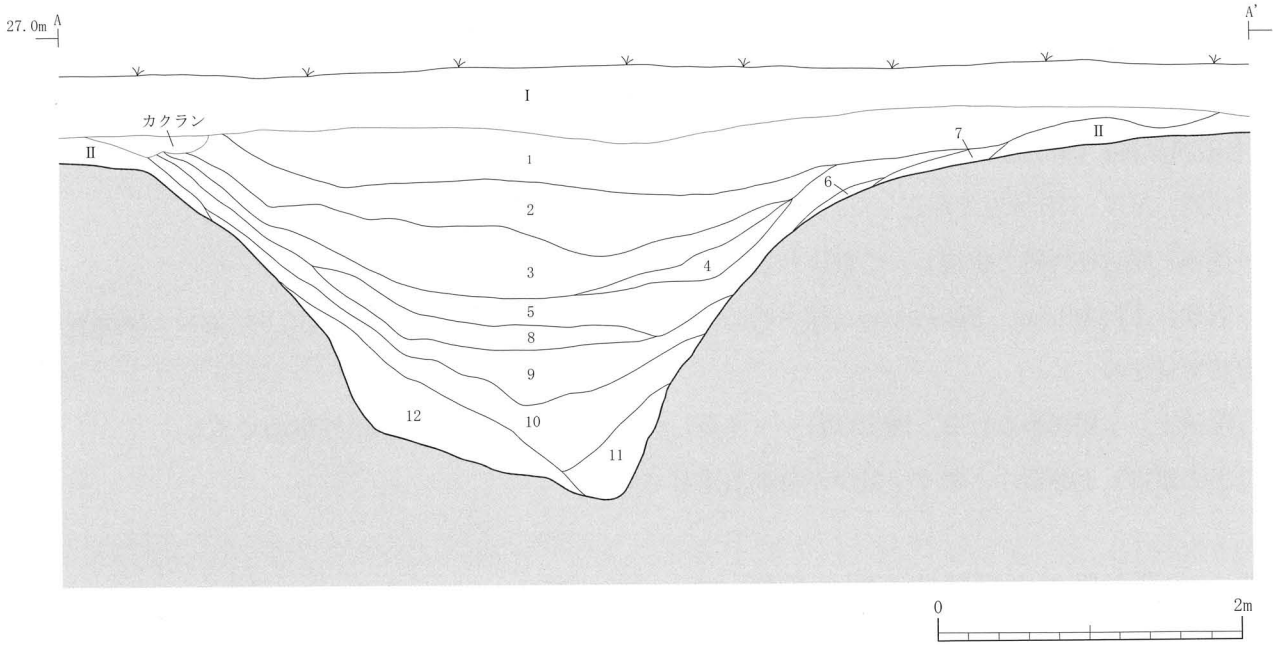
また、この他に時期不明の井戸跡、土壙、溝跡などを検出した。

溝跡では、SD４、SD５、SD56、SD57、SD71、SD140、SD136、SD125溝跡から近世陶器片が出土しており、比較的新しい溝跡と考えられる。SD105溝跡はSD４溝跡と同じ方向であるが、出土遺物も少なく、時期は不明である。

SD125溝跡は上幅7.4m、下幅1.9m、深さ約2.4mで、断面形は逆台形を呈する（第69図）。堆積土は地



第68図　西区中世以降主要遺構配置図（1/600）



層	土　色	土　性	備　　考
1	黒褐色　10YR3/1	シルト	地山大ブロック、白色粘土大ブロックを多く含む　(人為堆積土)
2	黒褐色　10YR3/1	シルト	地山大ブロック、白色粘土大ブロックを多く含む　(人為堆積土)
3	黒褐色　10YR3/2	シルト	地山大ブロック、白色粘土中ブロックを含む　(人為堆積土)
4	黒褐色　10YR2/2	シルト	地山粒を少し含む　(自然堆積)
5	黒褐色　10YR2/3	粘質シルト	地山小ブロックを少し含む　(自然堆積)
6	黒褐色　10YR2/2	シルト	(自然堆積)
7	暗褐色　10YR3/4	シルト	(自然堆積)
8	黒褐色　10YR2/3	粘質シルト	白色粘土をやや多く含む　(自然堆積)
9	暗褐色　10YR4/3	粘質シルト	(自然堆積)
10	暗褐色　10YR4/3	粘質シルト	地山小ブロック、白色粘土小ブロックをやや多く含む　(崩落土)
11	暗褐色　10YR4/3	粘質シルト	地山大ブロック、白色粘土大ブロックを多量に含む　(崩落土)
12	暗褐色　10YR4/3	粘質シルト	白色粘土大ブロックを少量含む　(崩落土)

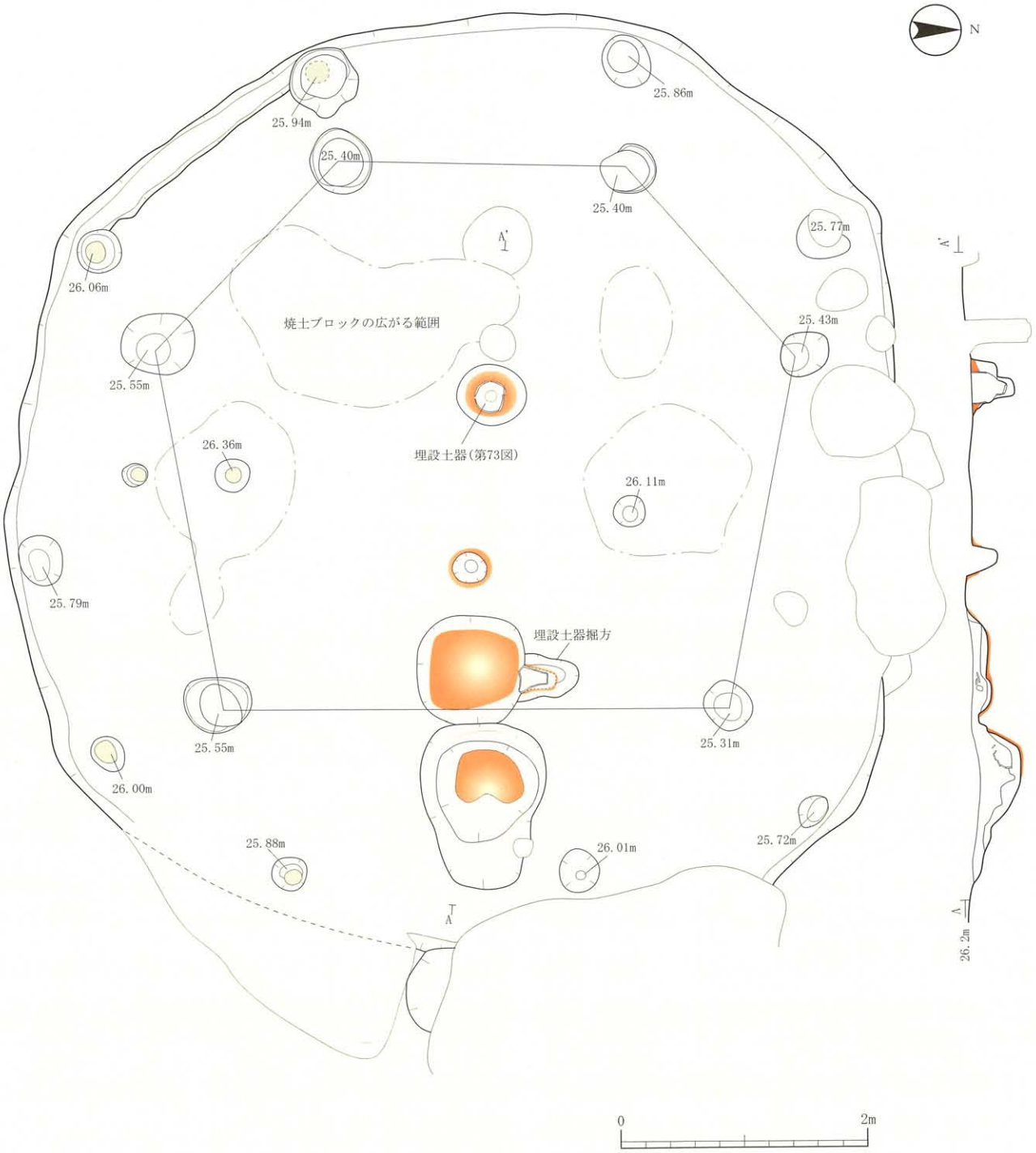
第69図　SD125溝跡　平面図・断面図（1/50）

山粒を含む黒褐色土が自然堆積した後、白色粘土大ブロックを含む黒褐色土などによって人為的に埋め戻されている。堆積土からは近世陶器片、土師器片、須恵器片、縄文土器片が出土している。

土壙は、SK84、SK87、SK89、SK30などがある。SK84、SK87、SK89土壙はSI２住居跡と重複し、これより新しい。須恵器、土師器片などが出土しているが、SI２住居跡堆積土由来のものと考えられる。SK89土壙の壁は受熱によって赤変、硬化し、焼土、炭化物を含む暗褐色土が自然堆積している。SK30土壙は平面形が長軸約2.2m、短軸約0.8mの隅丸方形で、深さ約40㎝ である。断面形は底面が平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

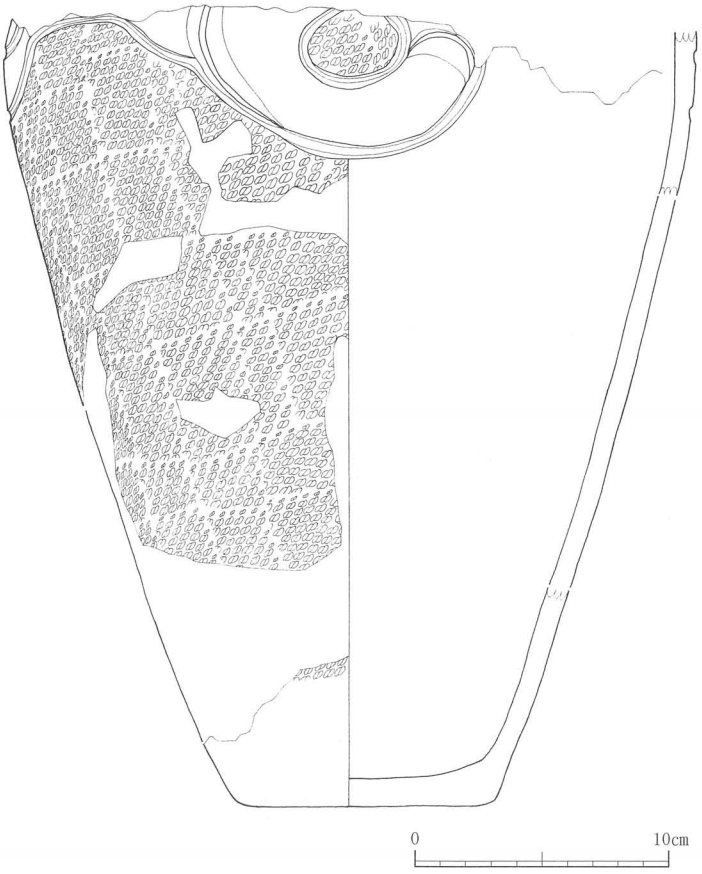
Ⅳ　昭和49年度調査の住居跡

鰻沢遺跡は昭和49年に発掘調査が行われ、９軒の竪穴住居跡が確認された。今回の調査区外にある円形が昭和49年調査時に検出された住居跡の位置で（第76図）、そのうち１軒（以下SI200とする）が精査されている（宮城県教育委員会：1975）。



第70図　SI200住居跡　平面図・断面図（1/50）

SI200住居跡は、SI10住居跡の南約20mに位置し、直径約7.5mの円形で、複式炉とその長軸延長線上の土器埋設炉、主柱穴、住居壁、周溝、壁柱穴が確認されている（第70図）。地山面を床面とし、主柱穴が6個、壁柱穴が9個検出され、建て替えは認めらない。炉は土器が横位に埋設された土器埋設掘り込み部と掘り込み部の2部構成による複式炉である。なお、この複式炉と土器埋設炉との間にも焼面を伴う掘り込みが認められた。埋設土器は残っていないが、この位置にも土器埋設炉があったと推定される。 複式炉に埋設された土器は、『築館町史』に写真が掲載されており、「∫」字状文に接近した「O」字状文が施されている。複式炉の長軸延長線上の土器埋設炉の土器は口縁部を欠く深鉢で、胴上部に「O」字状文、胴下部には縦回転のRLR縄文が施されている（第71図）。



第71図　SI200住居跡炉埋設土器

第五章　考　察

Ⅰ　縄文時代

1　縄文土器

調査により出土した土器片は整理箱でおよそ70箱である。整理の結果、図示できたものは46点、破片資料を含めると、深鉢296点、鉢4点、注口部3点、袖珍土器7点である。

土器は、住居跡、炉跡、土壙（貯蔵穴）から主に出土し、出土土器の大半を占める。器種は深鉢、鉢、注口土器があり、深鉢がほとんどである。文様が施されている土器と地文だけの土器があり、地文はRL縄文を縦に回転させたものが最も多く、縦回転のLR縄文、撚糸文などが少数みられる。土器の底部は無文で無調整のものが最も多く、そのほかには、網代痕が残っているもの（写真図版28）、網代痕をなでて消しているもの（写真図版28-23）、木葉痕があるものがみられる（写真図版28-9、13、17、21）。全体の器形がわかる土器が少ないため、従来の研究に従って、文様・装飾によって大別すると、次の3グループに分類される。

1グループ：非連結「S」字状文、「ノ」字状文などのアルファベット状の文様が施されるもの
2グループ：2個一対のボタン状貼付文と鎖状隆線文、刻目をもつ隆線文が施されるもの
3グループ：沈線によって文様が描かれ、蕨手状文や渦巻文が施されるもの

これらは土器の特徴からそれぞれ、中期末大木10式（丹羽：1971、相原：1988）、後期初頭袖窪式（林：1965、小笠原：1993）・門前式（今村：1977、熊谷：1986）、後期前葉南境式（後藤：2004）に相当すると考えられる。これらの土器の中で、1グループは、SI10住居跡やSK95土壙からまとまって出土している。2グループと3グループはいずれも小破片が多く、遺構出土土器をもとにまとまりとして捉えることは困難である。

器形をみると、1グループは、平縁が多く、これに突起が付くものがある。口縁が外反し、胴部中央が張るもの（第15図3）や口縁がやや外反し、胴部に明瞭な屈曲がない器形（第14図13）がみられる。2グループは波状縁が多く、口縁部がやや外反し、胴下部が軽く膨らむ器形がみられる（第41図1）。また、口縁部が鍔状に肥厚しているものがある（第49図8）。3グループは波状縁が多く、口縁部がやや外反し、胴上部が軽く膨らむ器形がみられる（第45図1）。

以下、出土量の多い1グループについて、まとまった資料が得られたSI10竪穴住居跡とSK95土壙出土土器をもとに検討したい。

A　土器の分類（第72図）

SI10住居跡炉・床面直上出土土器

住居構築時・または使用時の遺物として炉出土土器がある。遺構の章で述べたように、SI10住居跡の炉埋設土器には、4個体分の土器が外側に貼り付けられており、これらの土器は型式的にまとまりをもつと考えられる。ただし、外側に貼り付けられていた土器は完全な形になるものがないことから、意図的に割られたものではなく、土器の破損品が利用された可能性が強い。そのため厳密には埋設土器との新旧関係も想定される。

炉埋設土器は、口縁が平縁で外反し、胴部中央が張る器形の深鉢である。胴上部に横に展開する非連結「S」字状文が3単位施され、単位文様の末端がかみ合い、その一部は分節している（第72図8、写真図版12）。文様は縄文帯で描かれ、隆線とそれと平行する沈線を組み合わせた隆沈線を施文後、文様内にRL縄文が充填されている（充填縄文手法）。埋設土器に貼り付けられていた土器は、口縁が平縁で胴部に屈曲がなく、口縁の無文帯と胴部の縄文帯が横位隆線で区画されている深鉢（同図11）、口縁が波状縁で、埋設土器と共通する非連結「S」字状文が施されている深鉢（9）、隆沈線で文様が施されている深鉢胴部破片（第15図4）、胴部にRLR縄文が施されている深鉢（第15図2）がある。

住居廃絶時の遺物として、床面直上から第72図10の深鉢が出土している。土器は平縁で、口縁がやや外反し、胴部に明瞭な屈曲がない器形である。胴上部に「U」字状文が5単位施されている。文様は充填縄文手法で施され、縄文帯によって描かれており、胴上部と下部は無文帯で区画されている。

註）炉掘り込み部４層からは、口縁が隆沈線で区画され、文様が無文帯で描かれた土器が出土している。しかし、小破片で、全体の特徴が不明であるため、ここでは取り上げていない。

SI10住居跡1b 層出土土器

住居跡堆積土１ｂ層は、住居廃絶後に埋め戻された層で、土器が多く含まれる。比較的短期間に形成された層で、含まれる土器も一定のまとまりをもつものと考えられる。「O」字状文や「∫」字状文など無文帯で文様が描かれた土器が多く出土している（第72図１、３）。土器の地文は文様施文前に器面全体に施され、隆沈線または沈線施文後の磨きによって文様が描かれている（磨消縄文手法）。

SK95土壙出土土器

SK95土壙は、土壙埋め戻し土の11層中に土器が多く含まれる。比較的短期間に形成された層で、含まれる土器も一定のまとまりをもつものと考えられる。出土した土器はすべて深鉢で、「ノ」字状文（第72図６）や「O」字状文（第72図７）が施されたもの、円形の貫通孔と円形刺突をもつ口縁（第36図１）、弧状の隆線とそれに沿う楕円形の刺突列をもつ波状縁（同図５）、無文の平縁、地文のみが施されたものなどが出土している。また、これらの土器には口縁部内面が肥厚するもの（第36図13）がみられる。第72図６の深鉢は、胴下部が軽く膨らみ、口縁部がわずかに外反する器形である。このように、SK95土壙からは「ノ」字状文、「O」字状文など無文帯で文様が描かれた土器が出土し、これらの土器はすべて磨消縄文手法で施されている。

これらの遺構出土の３つの土器群についてその特徴を比較すると、SI10住居跡１ｂ層出土土器とSK95土壙出土土器の特徴が共通し、これらはSI10住居跡炉・床面直上出土土器とは異なっている。SI10住居跡における層位的上下関係から、土器の特徴の差は時間差によるものと考えられ、SI10住居跡とSK95土壙出土土器は、土器の特徴と出土状況をもとに以下の２類に分類され、次のような特徴がみられる。

註）１ｂ層中からは、第12図22のようにSI10住居跡炉･床面直上出土土器と共通する特徴を持つ土器もわずかに含まれる。また、後期に含まれる土器（第11図11）も出土しているが、図示した小破片のみで、何らかの原因で混入したものと考えられる。

１類（SI10住居跡炉・床面直上出土土器）

胴上部に縄文帯によって独立した単位文様が施され、主文様は横方向に展開する。文様は沈線または隆沈線を施した後、文様内に縄文が充填されて描かれる（充填縄文手法）。このため、第72図10のように主文様内の縄文と胴下部に用いられる縄文原体が異なるものがみられる。

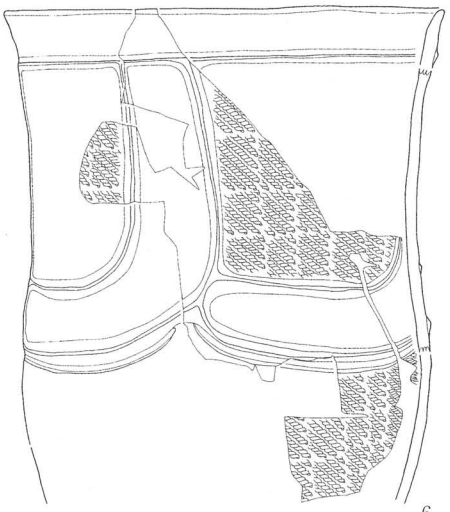
２類（SI10住居跡１ｂ層・SK95土壙出土土器）

胴上部に展開する主文様は沈線または隆沈線によって描かれ、口縁部と胴部が隆沈線または沈線によって区画されるか、口縁部の無文帯が胴部文様に組み込まれる。地文は文様施文前に土器全体に施

2類（SI10住居跡16層、SK95土壙）

1

SI10 1b層「ʃ」字状文



6

SK95「ノ」字状文

2

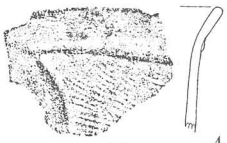
SI10 1b層

3

SI 101b層
「O」字状文

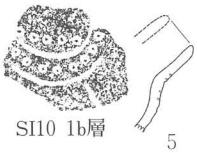
7

SK95 縦位連結「O」字状文



4

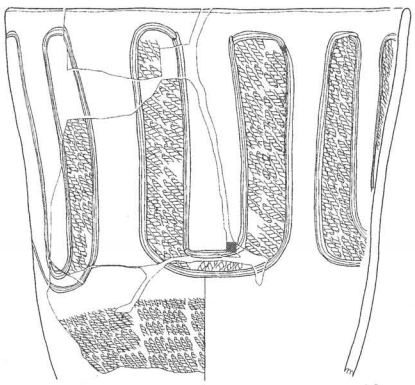
SI10 1b層



5

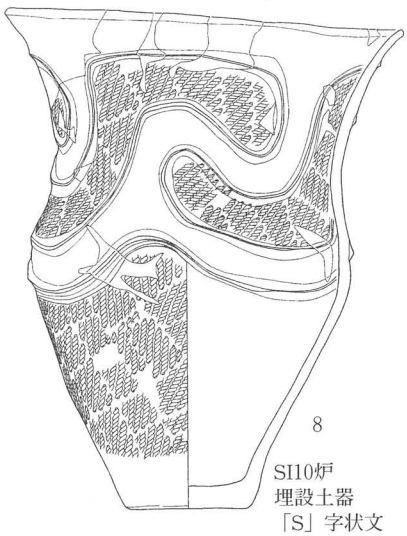
SI10 1b層

1類（SI10住居跡炉・床面直上）



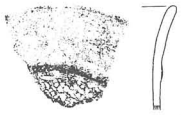
10

SI10 床面直上「U」字状文

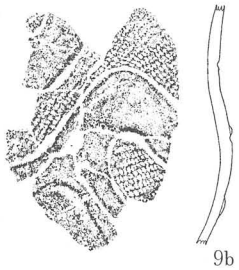


8

SI10炉
埋設土器
「S」字状文

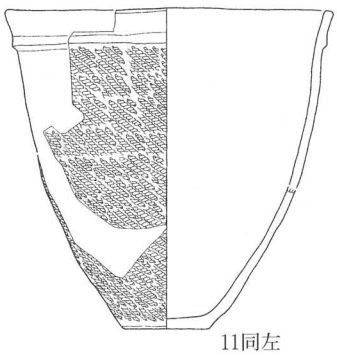


9a



9b

SI10 炉埋設土器貼付



11同左

第72図　鰻沢遺跡出土土器分類（大木10式）

され、その後の磨きによって文様が描かれる（磨消縄文手法）。この結果、主文様における「図と地の逆転」（池谷：1988、小林：1988）が認められる。文様は無文帯で描かれ、横方向に連結する。

以上のようにSI10住居跡とSK95土壙出土土器を2つに分類した。1類と2類には時期差があり、大木10式土器を細分したものであると考えられる。以下ではその編年的位置について検討したい。

B　土器の編年的位置

宮城県における大木10式の細分案は、丹羽茂氏（丹羽:1971、1981、1982）、須藤隆氏（須藤:1985）、相原淳一氏（相原：1988）らによって示されている。大木10式は大きく古段階と新段階に分類され、各研究者によってさらに細分が検討されている。宮城県の大木10式土器の型式研究は宮城県南部の遺跡出土資料を中心に進められてきたが、設定された大木10式の各段階の特徴は、大きくは宮城県北部においても適用され得ると考えられる。これに岩手県の遺跡出土事例も踏まえ、鰻沢遺跡出土土器群の編年的位置について考察し、宮城県北部における大木10式期の特徴について検討したい。

1類土器に類似する土器は、七ヶ宿町大梁川遺跡遺物包含層Ⅱａ～ｂ層出土土器や岩出山町玉造遺跡第8号住居跡炉埋設土器、利府町郷楽遺跡第126号住居跡炉埋設土器などがあり、これらは大木10式古段階に相当すると考えられている。1類土器と大梁川遺跡遺物包含層Ⅱａ～ｂ層出土土器を比較すると、器形や文様帯の幅など共通点も多いが、1類土器の文様が非連結「S」字状文を主体とし、大梁川遺跡遺物包含層Ⅱａ～ｂ層出土土器の文様が雁股状分節波濤文を主体とするなど文様の意匠において差異がみられる。1類土器と玉造遺跡第8号住居跡炉埋設土器、郷楽遺跡第126号住居跡炉埋設土器とでは、その特徴はほぼ一致しており、1類土器はこれらと共通した特徴をもった土器と考えられる。さらに、これらの土器は、大梁川遺跡遺物包含層Ⅱｃ～ｄ層出土土器や岩出山町玉造遺跡第7号住居跡炉埋設土器、仙台市北前遺跡第2号住居跡出土土器（渡部：1986）に比べて新しい特徴をもち、層位的に上下関係としてみられる傾向が、大梁川遺跡遺物包含層や岩出山町玉造遺跡第7号住居跡において確認されている。このことから、1類土器は古段階でも比較的新しいもの（後半）に相当すると考えられる。

2類土器に類似する土器は、松島町西ノ浜貝塚第4層出土土器（宮城県教育委員会：1967）、岩手県大迫町観音堂遺跡第7号住居跡埋土出土土器（中村：1986）などがあり、これらは大木10式新段階に相当すると考えられている。文様意匠やその表出手法においても一致する点が多く、2類土器はこれらとほぼ同時期のものと捉えられる。また、これらの2類土器に相当する土器と白石市菅生田遺跡第2号住居跡炉埋設土器や郷楽遺跡第121号住居跡炉埋設土器などとに時期差を捉え、2類土器に相当する土器が、大木10式新段階でも比較的新しいものとする考え方もある（丹羽：1982）が、今回の調査でそれを明らかにすることはできなかった。この変遷案に対して否定的な見解もある（相原前掲）ことから、ここでは、2類土器は大きく新段階に相当する土器として捉えておきたい。

このように鰻沢遺跡出土の大木10式土器は大木10式古段階後半～新段階に相当すると考えられ、宮城県北部におけるこの時期の特徴を表していると考えられる。

2　縄文時代の遺構

A　竪穴住居跡

縄文時代の住居跡を８軒（SI10A・B、SI147、SI106、SI108、SI146A・B、SI123）以上確認した。以下では、昭和49年度調査のSI200を含め、鰻沢遺跡で検出された住居跡についてまとめたい。

時　期

炉埋設土器の特徴から、SI10B、SI106が大木10式古段階後半、SI108、SI1147、SI200が新段階と考えられる。また、重複関係で、SI123はSI146より古く、SI146は後期前葉の土器が出土しているSB152より古いことから、SI123、SI146は後期前葉以前と考えられる。

構造・規模

SI10BとSI200が残存状況が良く、それには複式炉、主柱穴、住居壁、周溝、壁柱穴が存在する。その他の住居跡は削平が著しく不明である。住居跡の平面形はいずれも円形を基調としており、SI10Aが直径約5.2m、SI10Bが約5.5m、SI200は直径約7.5mである。床面は、SI10BとSI200で確認された。平坦で貼床は認められず、すべて地山面まで掘り込んで床面としている。主柱は炉の長軸線をはさんで線対称の位置に配置されており、SI10Aは４本、SI10Bの主柱は４または６本、SI200は６本と考えられる。また、残存状況は良くないが、SI106、SI108、SI147、SI146、SI123は４本と推定される。炉は、SI10B、SI106、SI108、SI200で複式炉、SI147、SI146では土器埋設炉が構築されている。これらの炉はいずれも石組はなく、石を抜き取った痕跡も認められない。以下では、鰻沢遺跡において特徴的に認められた複式炉について述べたい。

複式炉

①構造と用途

SI10BやSI200などで検出された炉は、燃焼部が複数（土器埋設掘り込み部と掘り込み部）有り、土器が斜位または横位に埋設される特徴を持つ（第11図）。以下、この形態の炉を斜位土器埋設複式炉（目黒：1982）とする。

土器埋設掘り込み部では、土器は斜位に埋設され、地床炉の壁面に埋め込んで構築されている。土器はいずれも胴部が膨らみ、胴上部にくびれをもつ器形で、SI10B住居跡の埋設土器は、周りに地山粘土で土器片が貼られていた。隣接する掘り込み部は住居跡中央から壁に向かって緩やかに浅くなっている。焼面は、土器埋設掘り込み部では、中央付近と埋設土器の周囲に強い受熱の痕跡があり、掘り込み部では、住居跡中央側と側壁に放射状に焼面がみられ、住居跡壁側にはない。

斜位土器埋設複式炉で特徴的な土器埋設掘り込み部の機能について考察すると、土器を斜位に埋設する形態やSI10Bの炉にみられる土器片を貼り付ける行為は、断熱（保温）効果と蓄熱効果を高めるためであると考えられる。これは調理用の窯の構造と一致し、その主要な機能は食物の蒸し焼きであったと推定される。土器を斜位に埋設する行為はオキを土器の内外に移動しやすくするためと蓄熱を効率化するための工夫と考えられる。

なお、このような炉の構造と焼面の状況を宮城県南部の大木10式期に多くみられる上原型複式炉（土器埋設部＋敷石石組部＋石組部）と比較した場合、土器埋設掘り込み部と土器埋設部が対応し、掘り込み部は敷石石組部と石組部（前底部）の特徴をあわせたものといえ、それぞれの受熱の痕跡も良く一致している（丹羽：1974）。このことから、鰻沢遺跡で住居跡内に構築されている炉は、上原型複式炉と類似した形態と使用痕跡をもっていると考えられる。

②構築された時期と分布

斜位土器埋設複式炉は、大木９～10式期にみられる。鰻沢遺跡で検出された形態の炉の類例は宮城県と岩手県にみられ、管見では日本海側の遺跡にはみられない。以下では、この斜位土器埋設複式炉の分布がみられる地域の炉の形態とその構築時期について考察する。

［大木９式期］

複式炉の土器埋設部の土器が炉の長軸線上に斜位に埋設され、燃焼部に開口して構築される。土器は正立した状態から30°程度傾けられる。現在のところ、斜位土器埋設複式炉におけるの最も古い段階のものと考えられる。

県内では、大衡村上深沢遺跡第４号住居跡（後藤他：1978）、仙台市北前遺跡１号住居跡（渡部：1989）などに認められる。

県外では、岩手県大迫町観音堂遺跡、藤沢町上野平遺跡（阿部・酒井2000）、秋田県象潟町上熊ノ沢遺跡（和泉他：1991）、河辺町松木台Ⅲ遺跡（柴田他：2001）、埼玉県児玉町古井戸遺跡（加曽利Ｅ４式古段階）（宮井：1989）などの大木９式期の住居跡にみられる。

この段階の斜位土器埋設複式炉は広い地域において認められ、それぞれ各遺跡の中での数はあまり多くなく、土器は正位に埋設されるものが多い。

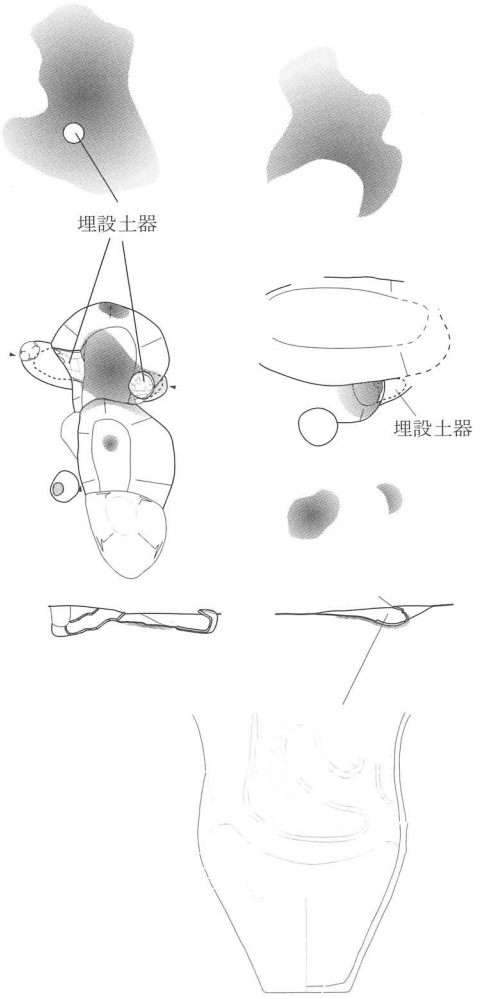
［大木10式古段階前半］

秋田県松木台Ⅲ遺跡SI142住居跡でみられ、炉の形態は大木９式期のものと類似する。この段階の複式炉の土器は基本的に正位に埋設され、大木10式古段階後半に斜位土器埋設複式炉が構築される宮城県岩出山町玉造遺跡や岩手県花泉町下舘銅屋遺跡においても、この時期の住居跡の埋設土器は正位に埋設されている。

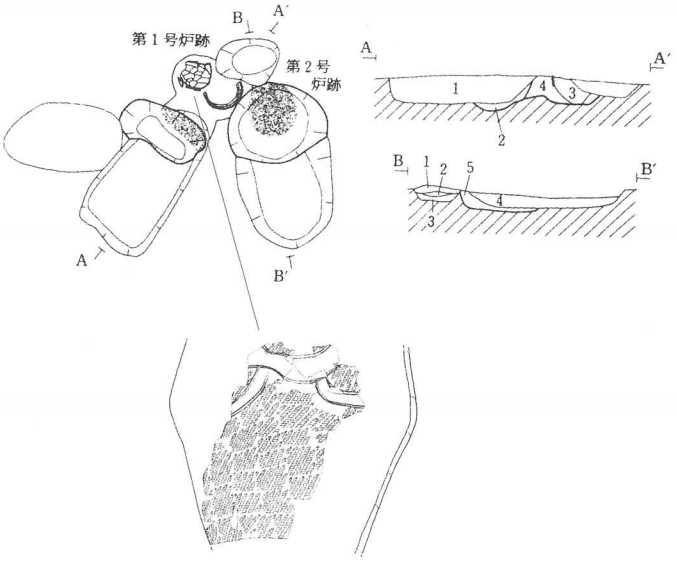
［大木10式古段階後半］

大木10式古段階後半になると大木10式古段階前半までの斜位土器埋設複式炉とは異なり、炉の長軸と直行するように炉壁に土器が斜位に埋設される。土器は正立した状態から60°以上傾けられたものが多く、ほぼ水平に埋設されたものもみられる。この時期の斜位土器埋設複式炉は、岩手県南部から宮城県北部に類例が多くみられる（第75図）。

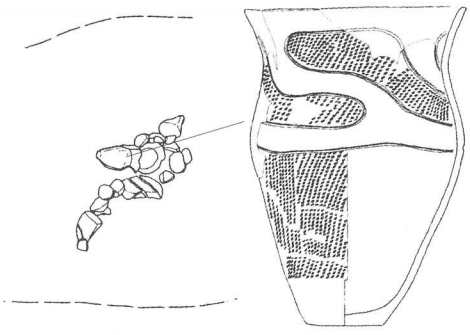
県内では、鰻沢遺跡の他に県北部で、迫町坂戸遺跡（小野寺:2003）、岩出山町玉造遺跡（千葉:1980）、涌谷町長根貝塚（宮城県教育委員会：1969）、三本木町寺下遺跡（西村：2000）などで検出され、県南部では仙台市沼遺跡（工藤：1992）、白石市菅生田遺跡（丹羽：1982）、七ヶ宿町大梁川遺跡（相原他：1988）などに類例が認められる（第73図）。



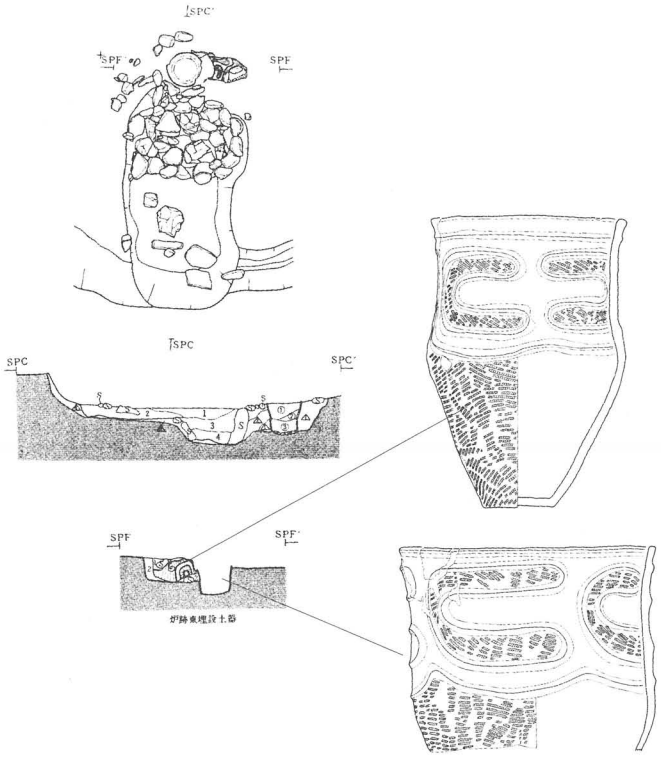
1　迫町　坂戸遺跡　SI１住居跡



2　三本木町　寺下遺跡　第１号炉跡



3 岩出山町　玉造遺跡　第８住居跡

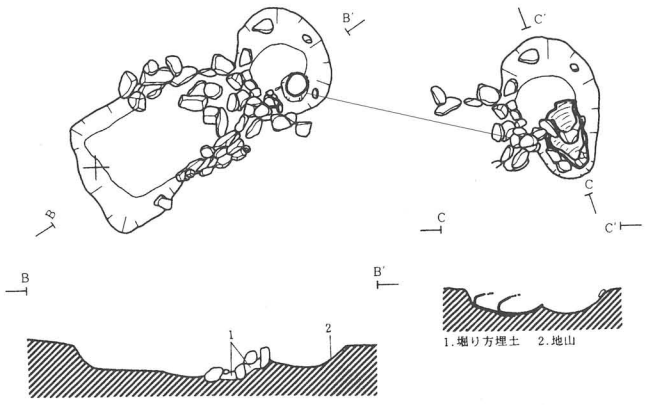


4　仙台市　沼遺跡　SI-6住居跡

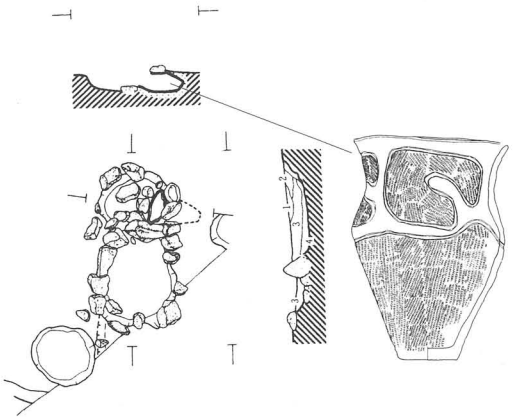
炉跡：縮尺1/60

埋設土器：縮尺1/8

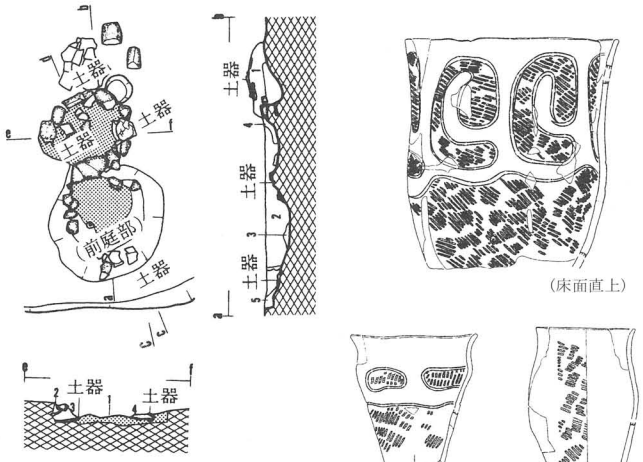
第73図　斜位土器埋設複式炉類例（宮城県）



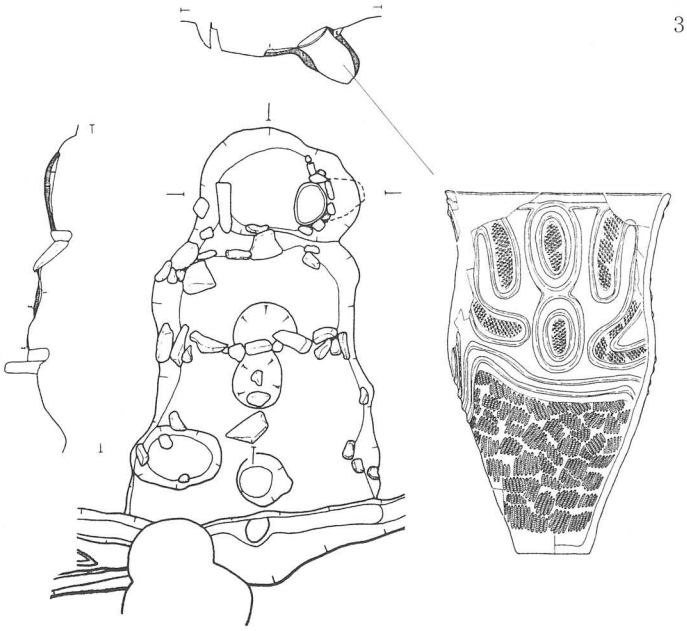
1　江刺市　五十瀬神社前遺跡　CB03住居跡



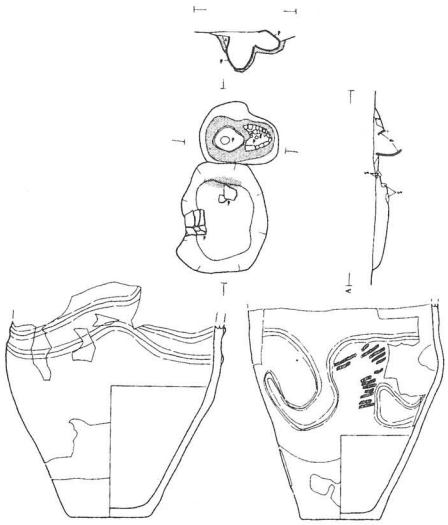
2　石鳥谷町　高畑遺跡　GH56住居跡



3　北上市　館Ⅳ遺跡　IC-10住居跡



4　藤沢町　上野平遺跡　RA03住居跡



5　水沢市　沢田遺跡　第１号土器埋設炉

炉跡：縮尺1/60

埋設土器：縮尺1/8

第74図　斜位土器埋設複式炉類例（岩手県）

第75図　斜位土器埋設複式炉の分布

このうち、坂戸遺跡は伊豆沼の南東岸に面した丘陵上に形成された集落跡で、鰻沢遺跡からは約7.5km離れた位置にある。大木10式古段階後半～新段階と考えられる住居跡が3軒検出されており、炉は石組をもたない斜位土器埋設複式炉で、鰻沢遺跡の炉の形態と最も良く一致する（小野寺：2003）。これらは炉の長軸延長線上に土器を埋設しており、埋設土器が向かい合わせで2個据えられているもの（SI1）、土器埋設掘り込み部と掘り込み部に加え、前庭部に相当する掘り込み部をもつもの（SI2）がある。現在ところ、炉に石組を伴わない例は、本遺跡の他に迫町坂戸遺跡においてのみ認められる。玉造遺跡では、古段階後半（第8号住居跡）から新段階（第9号住居跡）の住居跡で斜位土器埋設複式炉が構築されている。寺下遺跡や沼遺跡では大木10式古段階後半の斜位土器埋設複式炉が検出され、正位と斜位の埋設土器を組み合わせた構造である。

県外では、岩手県花泉町下舘銅屋遺跡（松本：1999）、千厩町清田台遺跡（小原：2003）、大東町中野台遺跡（小野寺：1997）、江刺市五十瀬神社前遺跡（菅原：1979）、藤沢町上野平遺跡（阿部他：2000）、北上市柳上遺跡（小原：1995）、北上市館Ⅳ遺跡（佐々木：1993）、水沢市沢田遺跡（村上：1996）、石鳥谷町高畑遺跡（菅原・鈴木：1980）、大迫町観音堂遺跡（中村：1986）、大船渡市長谷堂貝塚（阿部・平：2001、阿部：2003）、山田町山ノ内Ⅱ遺跡（佐々木他：1996）、松尾村長者屋敷遺跡（高橋他：1981）などで検出されている（第74図）。

これらの斜位土器埋設複式炉が検出されている遺跡の中で、柳上遺跡や長谷堂貝塚では、斜位土器埋設複式炉の他にも、石組複式炉や正位土器埋設複式炉、単式の斜位土器埋設炉など多様な炉の形態がみられる。また、宮城県南部の沼遺跡、菅生田遺跡、大梁川遺跡では、斜位土器埋設複式炉は一部の住居跡に限って認められる。この時期の宮城県南部では、正位に土器を埋設した土器埋設複式炉が主に構築されており、利府町郷楽遺跡（阿部他:1990）、仙台市観音堂遺跡（宮城県教育委員会:1986）、蔵王町二屋敷遺跡（加藤他：1984）、川崎町湯坪遺跡（一條：1978）などでは埋設土器は正位のみ検出されている。一方、岩手県北部では、単式の斜位土器埋設炉や石囲炉、石組複式炉が主体で、盛岡市湯沢遺跡（三浦他：1978）、一戸町仁昌寺Ⅱ遺跡（中村：2002）、一戸町御所野遺跡（一戸町教育委員会：1993、2004）などで確認される。

なお、大木10式新段階には、北上川下流域にある鰻沢遺跡、玉造遺跡、長根貝塚、下館銅屋遺跡では、大木10式古段階後半に引き続き斜位土器埋設複式炉が主体的に構築されるが、北上川中流域にある柳上遺跡、上野平遺跡、清田台遺跡などでは、新段階になると単式の斜位土器埋設炉や石囲炉などが主体となる。大木10式新段階には、北上川中流域と下流域においても炉の形態に差異が認められる。

［後期初頭］

この時期の住居跡の良好な検出例は少ないが、仙台市六反田遺跡で石囲炉と正位土器埋設石囲炉、岩手県柳上遺跡、長谷堂貝塚、湯沢遺跡で、単式の斜位土器埋設炉が検出されている。後期初頭以後は、県内外関わらず斜位土器埋設複式炉は検出されていない。

以上のように、鰻沢遺跡で検出された斜位土器埋設複式炉の類例は、大木10式古段階後半から新段階の住居跡において認められる。

これらは、岩手県南部から宮城県北部に主に分布し、北は岩手県石鳥谷町付近から南は宮城県三本木町付近までの鳴瀬川流域を一部含む北上川中・下流域が主要な分布圏であると考えられる。

沿岸部については、山田町山ノ内Ⅱ遺跡や大船渡市長谷堂貝塚において検出されていることから、内陸部と同様の分布が推定されるが、この時期の住居跡の良好な検出例が少なく、炉の形態は不明な点が多い。

B　掘立柱建物跡

検出された掘立柱建物跡は6本柱のものが2棟、4本柱のものが1棟、規模不明のものが11棟検出された。これらはほぼ同じ位置で建て替えが行われており、建物跡の重複として確認できた他にも、SB94やSB134に近接する柱穴などは、この時期の建物跡の柱穴である可能性が強く、調査区外にも掘立柱建物跡があると考えられる。

これらの建物跡の時期については、柱穴出土土器から時期が求められる。SB134、SB143、SB148は大木10式新段階以降、SB94、SB101、SB121は後期初頭以降と考えられる。SB153は後期初頭の土器が出土しているSK127より新しく、SB152は後期前葉の土器が出土しているSK124より新しいことから、それぞれそれ以降と考えられる。

なお、SB49、SB148、SB101には柱穴の切り合いによる新旧関係があり、SB49よりSB148、SB101は新しい。また、SB49、SB121、SB148、SB101はそれぞれ一度建て替えられている。

このような建物跡の重複関係と、遺跡出土土器の時期が大木10式古段階後半から後期前葉であることから、年代の決められない建物跡についても概ね大木10式新段階～後期前葉に建てられたと考えられる。

C　土　壙

検出された土壙の中で、SK27、SK83、SK86、SK95、SK110は、遺構確認面から深さが1.2m以上有り、上面径に比べ底面径が広い形態で、貯蔵穴と考えられるものである。

これらの土壙の時期は、機能時のものと考えられる土器がないため、堆積土出土土器から年代を推定すると、SK95が大木10式新段階、SK27、SK83が後期初頭、SK86、SK110が後期前葉に相当すると考えられる。

SK83、SK95では土壙底面に機能時のものと考えられる炭化物層を検出した。SK83の炭化物層からは、木炭やクルミ、クリとみられる堅果類の実が出土している。また、これらの土壙は焼土ブロック、灰、炭化物、土器、石片などを多く含む層で埋め戻されていることから、貯蔵穴の機能を果たさなくなった後は、ごみ穴として使用されたと考えられる。

D　遺跡の各時期の構成

遺構から出土した土器と遺構同士の重複関係から、鰻沢遺跡で検出された主な遺構は次のように変遷したと考えられる（第76図）。

【中期末（１類期）】	SI10、SI106住居跡、SK135、SK104、SK145土壙
【中期末（２類期）】	SI147、SI200、SI108住居跡、SX109炉跡、SK95土壙
【中期末（２類期）～後期前葉】	SB134、SB143、SB148建物跡、SX130炉跡
【後期初頭】	SK27、SK83、SK97、SK100、SK127土壙
【後期初頭～前葉】	SB94、SB101、SB121、SB153建物跡、SK33、SK103土壙
【後期前葉】	SB152建物跡、SK９、SK86、SK96、SK110、SK124土壙

上記以外の遺構は、遺跡出土土器の時期が縄文時代中期末から後期前葉であることから、概ねその時期と考えられる。

Ⅱ　古　代

遺構の年代

今回検出された古代の住居跡は４軒である。古代の遺物はほとんどこれらの住居跡の床面や堆積土中から出土している。

SI１住居跡は出土土器が少ないため、器種構成について検討することは難しいが、これらの土器の特徴は瀬峰町桃生田前遺跡３号住居跡や志波姫町御駒堂遺跡第22号住居跡、新田柵推定地SI73b住居跡出土土器に類似する。このことから、住居跡の年代はおよそ８世紀後半と考えられる。

SI２住居跡は、カマドから出土した遺物の特徴が栗駒町長者原遺跡第29・30・44号住居跡出土土器と類似する。このことから住居跡の年代は８世紀末～９世紀前葉と考えられる。

SI11住居跡は、機能時または廃絶時の遺物がほとんどないが、住居跡と重複しこれより古いSK157土壙出土の土師器甕、住居跡堆積土出土遺物の特徴から、住居跡の年代は９世紀代と考えられる。

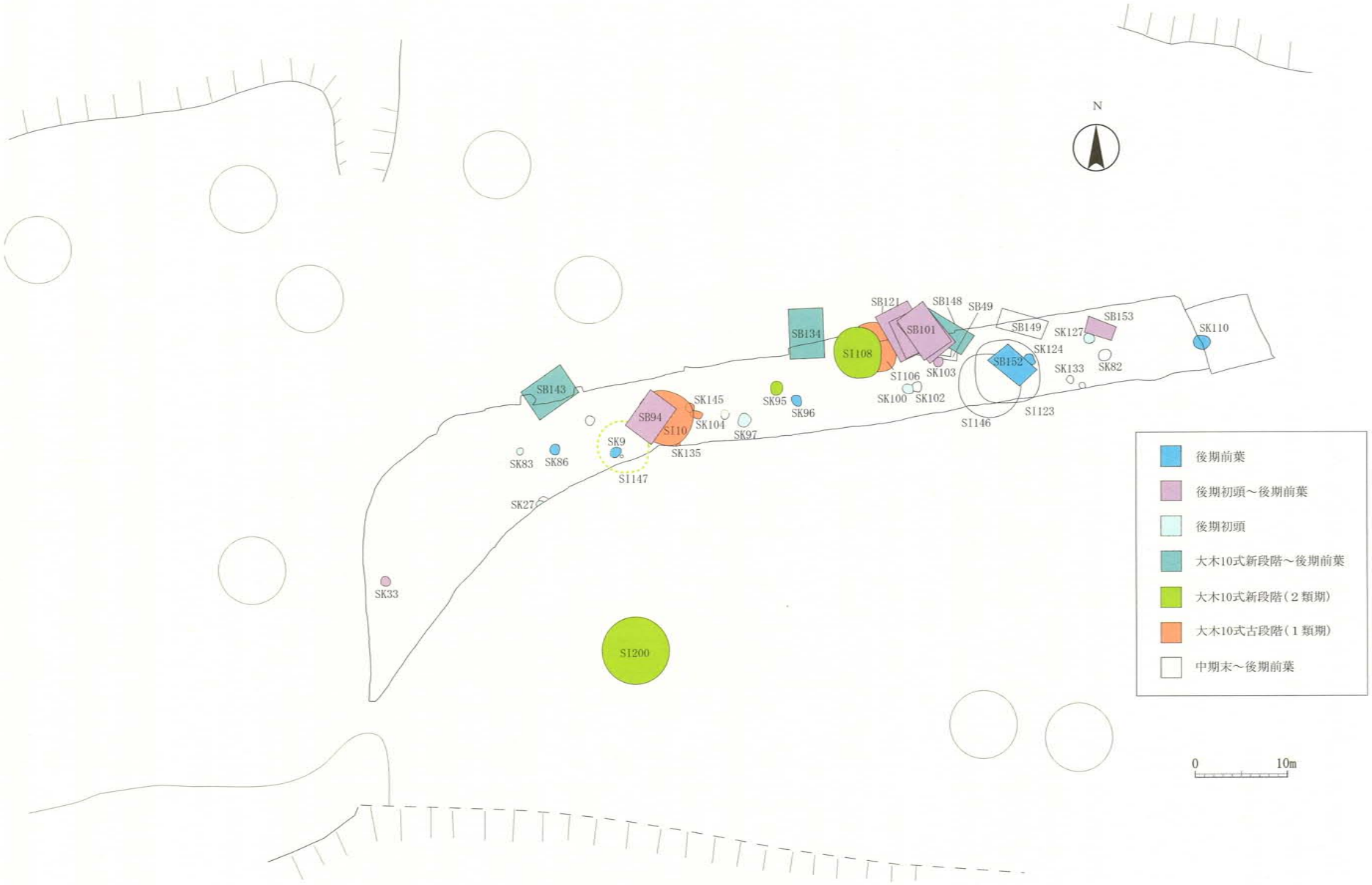
SI12住居跡は、カマドから出土した遺物の特徴から住居跡の年代は８世紀後半と考えられる。

土壙は３基検出された。出土遺物からSK158土壙は８世紀後半、SK156、SK157土壙はSI11住居跡より古いことから、９世紀以前と考えられる。

溝跡は４条検出された。SD36溝跡はSI11住居跡より古いことから９世紀以前と考えられる。SD３溝跡はSI２住居跡より新しいことから、８世紀末～９世紀前葉以降、SD５、SD154溝跡は年代を特定できる遺物はなかった。

Ⅲ　中 世 以 降

SD125溝跡は、上幅7.4m、下幅1.9m、深さ約2.4mの大溝で、人為的に埋め戻されていた。堆積土からは近世陶器片、縄文土器片、土師器片、須恵器片が出土している。鰻沢遺跡の南東の平坦部には、萩沢城跡がある。『栗原郡誌』によれば、諏訪氏の末裔、三塚大隅守以後この地に居城し、大崎義隆の幕下に属したとある。『仙台城内古城・館』（紫桃：1973）には、この城館に伴う空壕が、萩沢城跡の北



第76図　鰻沢遺跡遺構変遷図（1/600）

と西に巡らされ、城館のあった台地と完全に断絶されていたとある。SD125溝跡は位置と大きさからみてこの城跡の西側に巡らされた空壕であると考えられる。また、西区で検出された縄文時代のもの以外の掘立柱建物跡は、遺物が出土していないため、時期は不明であるが、この城館と同時期のものである可能性がある。

第六章　まとめ

1．調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡８軒以上、掘立柱建物跡14棟以上、土壙25基などを検出した。
2．これらの遺構は縄文時代中期末大木10式～後期前葉南境式期のものと考えられる。
3．遺跡から出土した土器は、縄文時代中期末大木10式を主体としている。これらは２類に分類され、それぞれ時期差をもち、この時期の宮城県北部の特徴を表していると考えられる。
4．縄文時代の竪穴住居跡には土器を斜位に埋設した複式炉（斜位土器埋設複式炉）が構築され、この炉の形態は大木10式期の岩手県南部～宮城県北部において特徴的に認められる。
5．奈良時代（８世紀後半）～平安時代（９世紀）頃と考えられる竪穴住居跡４軒、土壙３基、溝跡４条を検出した。
6．西区東端でSD125溝跡を検出した。この溝跡は鰻沢遺跡南東部にある中近世の城館である萩沢城跡の外周溝と考えられる。また、西区で検出された掘立柱建物跡はこの城館と同時期のものである可能性がある。

引用・参考文献

相原淳一他：1988『大梁川・小梁川遺跡　七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第126集
安達　訓仁：2000『桃生田前遺跡下富前遺跡』瀬峰町文化財調査報告書第19集
阿部　　恵：1990『倉崎貝塚・唐木崎貝塚』迫町文化財調査報告書第１集
阿部　恵他：1990『利府町郷楽遺跡Ⅱ－仙塩道路関連遺跡発掘調査報告書－』宮城県文化財調査報告書第134集
阿部勝則他：1997『本内Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第271集
阿部勝則他：2000『上野平遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第333集
阿部　勝則：2004『長谷堂貝塚発掘調査報告書　県営長谷堂アパート建設事業関連遺跡発掘調査』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第434集
阿部　　豊：1999『千鶏Ⅳ遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書第54
天野　順陽：2003『嘉倉貝塚　平成13・14年度重要遺跡範囲確認調査報告書』築館町文化財調査報告書第16集
新井　達哉・西戸純一：2003『和台遺跡　主要地方道川俣安達線関連埋蔵文化財発掘調査報告書』飯野町埋蔵文化財報告書第５集
池谷　信之：1988「東北地方における縄文時代中期末葉土器の変遷と後期土器の成立」『沼津市博物館紀要12』
和泉昭一他：1991『大砂川地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅱ　上熊ノ沢遺跡』秋田県文化財調査報告書第213集
伊藤　玄三：1965「敷味貝塚」『埋蔵文化財緊急発掘調査概報』宮城県文化財調査報告書第８集
一條　孝夫：1978『湯坪遺跡発掘調査概報』宮城県文化財調査報告書第54集
一戸町教育委員会：2004『御所野遺跡　Ⅱ』一戸町文化財調査報告書第48集
伊藤　玄三：1965「敷味貝塚」『埋蔵文化財緊急発掘調査概報』宮城県文化財調査報告書第８集

伊東　信雄：1957「古代史」『宮城県史』第１巻
今村　啓爾：1977「称名寺式土器の研究（下）」『考古学雑誌63－２』
小笠原好彦：1993「袖窪貝塚出土の縄文後期初頭土器」『宮城史学　特別号　大塚徳郎先生傘寿記念』
小倉　和重：1998「斜位土器埋設炉についての一考察　－複式炉との比較を通して－」『奈和　第36号』
押山　雄三：1990「福島県の複式炉」『郡山市文化財研究紀要　第５号』
小野寺智哉：2003「坂戸遺跡」『平成15年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
小野寺哉志子・小野寺悦朗：1997『中野台　埋蔵文化財発掘調査報告書第17集
小原　眞一：1995『柳上遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第213集
小原　眞一：2003『清田台遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第412集
加藤　道男：1982『青木畑遺跡』宮城県文化財調査報告書第85集
加藤・阿部・小徳：1984「二屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅸ』宮城県文化財調査報告書第99集
菅野　智則：2003「縄文集落研究の初期的操作」『歴史　第101輯』
栗原郡教育會：1918『栗原郡誌』
小井川和夫他：1982「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ』宮城県文化財調査報告書第83集
小牛田町教育委員会：1976『山前遺跡』
小平　忠孝：1981「越戸Ⅱ遺跡」『東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第21集
後藤勝彦他：1972「中沢遺跡発掘調査報告」『川崎町史』
後藤勝彦他：1978『上深沢遺跡　東北自動車道遺跡調査報告書　Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第52集
後藤　勝彦：2004「南境貝塚調査の層位的成果Ⅰ７トレンチの場合　－陸前地方縄文中期から後期の編年的研究－」『宮城考古学　第６号』
小林　　克：1988「内村遺跡出土土器と住居群の変遷」『研究紀要　第３号』秋田県埋蔵文化財センター
駒木野智寛：2004「複式炉の研究　－岩手県内における複式炉の地域別分布傾向とその分析－」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『紀要ＸＸⅢ』
斉藤　吉弘：1979『宇南遺跡』宮城県文化財調査報告書第59集
坂本　真弓：2002「沢部型複式炉の現在　－青森県内の複式炉集成から－」『海と考古学とロマン』
佐々木　弘：1993『館Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第187集
佐々木清文他：1996『山ノ内Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第249集
笹平　克子：1994『向館遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第206集
佐藤　　洋：1987『六反田遺跡Ⅲ』仙台市文化財調査報告書102集
佐藤淳一・高木　晃：2001『南畑遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第349集
佐藤　憲幸・三好秀樹：2003『嘉倉貝塚』宮城県文化財調査報告書第192集
佐藤　正彦：1992『門前貝塚』陸前高田市文化財調査報告第16集
佐藤　正彦：1999『堂の前貝塚発掘調査報告書　Ⅱ』陸前高田市文化財調査報告第21集
紫桃　正隆：1973『仙台領内古城・館　２』
篠原　信彦：1990『下ノ内遺跡　仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告書Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第136集
柴田陽一郎：2001『松木台Ⅲ遺跡』秋田県文化財調査報告書第326集
主浜　光朗：1987『山田上ノ台遺跡　－昭和55年度発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第100集
菅原弘太郎：1979「五十瀬神社前遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書　Ⅰ』岩手県文化財調査報告書第33集
菅原弘太郎他：1980「高畑遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』岩手県文化財調査報告書第49集
菅原　祥夫：2003「複式炉の成立過程とその意義」『福島考古　第44号』
鈴鹿　良一：1986「複式炉と敷石住居」『福島の研究１　地質・考古篇』
須藤　　隆：1985「東北地方における縄文集落の研究」『東北大学考古学研究報告１』
高木　　晃：1998『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書　－第６次～第８次調査－』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第273集
高橋憲太郎：1990「白石遺跡第３次・第４次調査」『崎山遺跡群　Ⅳ』宮古市埋蔵文化財調査報告書23
高橋憲太郎・三浦千秋：1995「早稲栃Ⅱ遺跡」『宮古市内遺跡発掘調査概報　Ⅰ』
高橋文夫他：1981『長者屋敷遺跡発掘調査報告書（Ⅱ）』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第20集

高橋文夫他：1984『長者屋敷遺跡発掘調査報告書（Ⅲ）』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第77集
竹下　將男：2003『早稲栃Ⅱ遺跡第６次調査』宮古市埋蔵文化財調査報告書61
千葉　孝雄：1995『上八木田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第227集
千葉　宗久：1980『玉造遺跡』宮城県文化財調査報告書第68集
築館町史編纂委員会：1976『築館町史』
中川　久夫：1992「伊豆沼・内沼付近の地形・地質」『伊豆沼・内沼環境保全対策に関する報告書』第19集
中村直美他：2002『仁昌寺Ⅱ遺跡・仁昌寺遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第400集
中村　良幸：1982「複式炉」について－岩手県を中心として－」『考古風土記　第７号』
中村　良幸：1986『観音堂遺跡－第１次～６次発掘調査報告書－』大迫町埋蔵文化財報告第11集
成田　滋彦：2003「最花式土器－在地式土器群の様相－」『研究紀要　第８号』青森県埋蔵文化財調査センター
西村　　力：1999「寺下遺跡」『名生館遺跡　下草古城本丸跡ほか』宮城県文化財調査報告書第181集
丹羽　　茂：1971「縄文時代における中期社会の崩壊と後期社会の成立に関する試論」『福島考古　第12号』
丹羽　　茂：1974「福島県における縄文時代中期の住居・集落跡研究の現状と問題点」『福島考古　第15号』
丹羽　　茂：1981「大木式土器」『縄文文化の研究　４』
丹羽　茂他：1982「菅生田遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書　Ⅶ』宮城県文化財調査報告書第92集
丹羽　　茂：1989「中期　大木土器様式」『縄文土器大観　草創期・早期・前期』
林　　謙作：1965「縄文文化の発展と地域性　２東北」『日本の考古学』Ⅱ
古川工業高校郷土研究部：1974『鰻沢遺跡現地説明会資料』
本間　　宏：1994「大木10式土器の考え方」『しのぶ考古　10』
松本　建速：1999『下館銅屋遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第297集
三浦謙一他：1978『郡南村　湯沢遺跡　（昭和52年度）』岩手県埋文センター文化財調査報告書第２集
三浦　謙一：1983『湯沢遺跡発掘調査報告書（遺物編）』岩手県埋文センター文化財調査報告書第66集
宮井　英一：1989『古井戸　－縄文時代－　児玉工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告－Ⅴ－』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集
宮城県教育委員会：1967『西ノ浜貝塚緊急発掘調査概報』宮城県文化財調査報告書第16集
宮城県教育委員会：1969『埋蔵文化財緊急発掘調査概報　－長根貝塚－』宮城県文化財調査報告書第19集
宮城県教育委員会：1975「鰻沢遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報（昭和49年度分）』宮城県文化財調査報告書第40集
宮城県教育委員会：1986『宮城町　観音堂遺跡　新宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第118集
三好　秀樹：1995『長者原遺跡』栗駒町文化財調査報告書第３集
三好　秀樹：1998『新田柵跡推定地』田尻町文化財調査報告書第３集
武藤祐浩・和泉昭一：1991『上熊の沢遺跡』秋田県文化財調査報告書第213集
村上　　拓：1996「沢田遺跡」『沢田・仙人東遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第230集
村上　　拓：2002『清水遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第382集
目黒　吉明：1982「住居の炉」『縄文文化の研究　８』
森　　貢喜：1980「木戸遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第69集
森　　貢喜：1983「佐内屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ』宮城県文化財調査報告書第93集
森　　幸彦：1996「複式炉小考」『論集しのぶ考古　目黒吉明先生頌寿記念』
吉岡恭平他：1981『六反田遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第34集
吉田　　努・千葉周秋：1980「大明神遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書　Ⅲ』岩手県文化財調査報告書第52集
吉田・坂田他：2003「楢葉町馬場前遺跡の調査成果」『福島県文化財センター白河館研究紀要　2002』
吉野　　武：1998「梅木遺跡」『梅木遺跡ほか』（第１分冊）大衡村文化財調査報告書第２集
渡部　　紀：1989『北前遺跡』仙台市文化財調査報告書第129集
渡辺　　誠：2003「縄文時代の食文化－植物食を中心として－」『研究紀要　第17号』秋田県埋蔵文化財センター
渡辺洋一・酒井宗孝：1995『大畑Ⅰ遺跡・大畑Ⅱ遺発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第218集
1673～1680「仙台領古城書上」『仙台叢書　４』

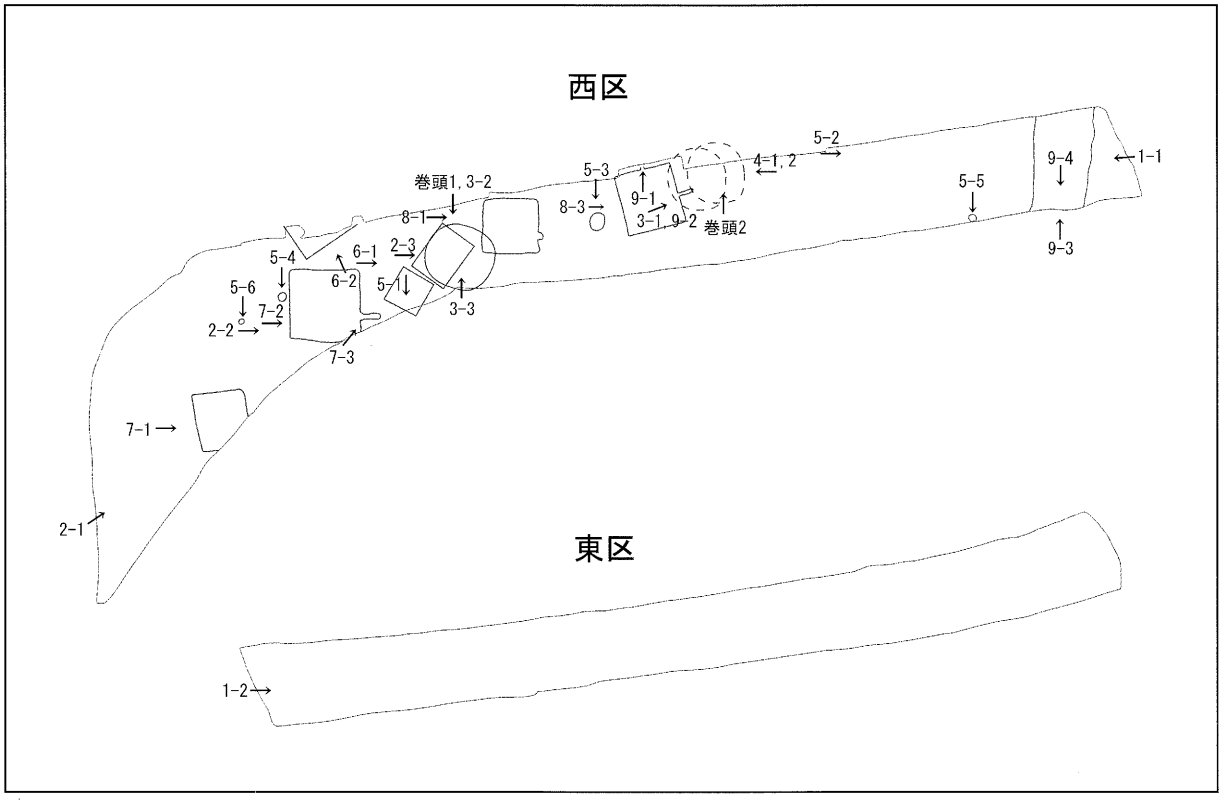
鰻沢遺跡遺構属性表

遺　構No.	種　類	調査区	位　置	出土遺物・備考	重　複	図　版
1	SI	西	N14・E13	土師器、須恵器、8世紀後半		6、58
2	SI	西	N23・E23	ロクロ土師器、9世紀前半		6、60
3	SD	西	N17-28・E20	縄文土器、須恵器		6
4	SD	西	N13-29・E14-19	須恵器、円盤状土製品		3、6
5	SD	西	N21・E12-17	縄文土器、土師器		6
6	SD	西	N19-26・E15	縄文土器、土師器		6
9	SK	西	N24・E28	縄文土器、円盤状土製品、石器		7
10	SI	西	N27・E33	大木10式古段階、耳飾り		7、10
11	SI	西	N30・E38	土師器（内黒）、須恵器（回転糸切り）、9世紀		7、62
12	SI	西	N33・E51	土師器（内黒、ロクロ）、須恵器、8世紀後半		8、64
21	SK	西	N27・E26	縄文土器		6、39
23	SK	西	N22・E19	縄文土器、須恵器		6
24	SK	西	N24・E18	縄文土器		6
27	SK	西	N18・E19	フラスコ状貯蔵穴、円盤状土製品		6、30
30	SK	西	N18-20・E7			5、68
31	SK	西	N18・E4	縄文土器		6、32
33	SK	西	N10・E3	縄文土器（後期初頭）、袖珍土器		5
36	SD	西	N30-34・E41-42	土師器	SI11より古	7
49	SB	西	N33-38・E59-68		SB101、SB148より古	8、25
56	SD	西	N35・E60-84	須恵器　近世陶器、円盤状土製品		9、68
57	SD	西	N35・E63-72	近世陶器、円盤状土製品		9、68
71	SD	西	N33-40・E71-83	近世陶器		9、68
82	SK	西	N34・E82	縄文土器、土偶、円盤状土製品		9、40
83	SK	西	N24・E18	フラスコ状貯蔵穴、縄文土器（後期初頭）、石鏃		6、30
84	SK	西	N24・E21	石錐		6
86	SK	西	N24・E22	フラスコ状貯蔵穴、縄文土器（後期前葉）、土偶		6、30
87	SK	西	N21・E22	袖珍土器（四脚）		6
89	SK	西	N24・E20			6
90	SK	西	N23・E23	縄文土器、円盤状土製品、石器		6、39
94	SB	西	N24-30・E29-35	縄文土器（後期初頭）		7、22
95	SK	西	N31・E46	フラスコ状貯蔵穴、縄文土器（大木10式新段階）		7、34
96	SK	西	N30・E48	縄文土器（後期初頭）		7、39
97	SK	西	N27・E42	縄文土器（後期初頭）、土偶		7、39
99	SK	西	N28・E40	縄文土器、石鏃		7、39
100	SK	西	N31・E60	円盤状土製品		8、40
101	SB	西	N33-38・E59-68	縄文土器（大木10式新段階～後期初頭）	SB49より新	8、25
102	SK	西	N31・E61	縄文土器		8、40
103	SK	西	N33・E63	縄文土器		8、40
104	SK	西	N28・E37	縄文土器		7、39
105	SD	西	N30－33・E74	石鏃、不定形石器		9
106	SI	西	N35・E58	縄文土器（大木10式古段階）、斜位土器埋設複式炉		8、16
107	SK	西	N35・E57	縄文土器（後期初頭）、袖珍土器	SI108炉より新	8、16
108	SI	西	N35・E56	縄文土器（大木10式新段階）、斜位土器埋設複式炉		8、16
109	SX	西	N35・E55	縄文土器、斜位土器埋設炉		8、16
110	SK	西	N35・E92	貯蔵穴、縄文土器（後期前葉）、石鏃未成品		9、34
120	SK	西	N29・E68	縄文土器、円盤状土製品、石器		8
121	SB	西	N33-38・E59-68	縄文土器（大木10式新段階～後期初頭）		8、25
123	SI	西	N30・E72	縄文土器、石鏃		9、19
124	SK	西	N34・E73	縄文土器（大木10式新段階）、円盤状土製品、石器		9、40
125	SD	西・東	N31-39・E83-175	近世陶器、中・近世城館の大溝		9、68、69
127	SK	西	N36・E79	縄文土器（後期初頭）	SB153より新	9
130	SX	西	N37・E67	斜位土器埋設炉	SB148より新	8、20
131	SX	西	N36・E69	土器埋設炉		8、20
132	SK	西	N31・E79	縄文土器		9、40
133	SK	西	N32・E78	縄文土器（大木10式新段階～後期初頭）、袖珍土器		9、40
134	SB	西	N36・E48	縄文土器（大木10式新段階～後期初頭）		7、24
135	SK	西	N24・E34	縄文土器	SI10より古	7
136	SD	東	N33-42・E97-156	近世陶器		4
140	SD	西・東	N33-40、E82-115	近世陶器		4、9、68
143	SB	西	N27-31・E18-24	縄文土器（大木10式）		6、23
145	SK	西	N29・E36	縄文土器	SI10、SK104より古	7、39
146	SI	西	N33・E68	縄文土器、土器埋設炉	SB123より新、SB152より古	8、19
147	SI	西	N23・E29	縄文土器（大木10式新段階）、土器埋設炉		7、18
148	SB	西	N33-38・E59-68	縄文土器（大木10式新段階）	SB49より新	8、25
149	SB	西	N36-38・E70-75	縄文土器		9、27
152	SB	西	N31-36・E69-74	縄文土器	SI123、146、SK124より新	9、28
153	SB	西	N36-39・E79-42	縄文土器	SK127より新	9、29
154	SD	西	N20-26・E8-9	土師器		6
155	SD	西	N40-33・E83-84			9、68
156	SK	西	N29・E40	土師器、須恵器	SI11より古	7、67
157	SK	西	N29・E39	土師器（甕）	SI11より古	7、62
158	SK	西	N29・E38	土師器	SI11より古	7、62
159	SB	西	N0-7・E1-5			4、68
160	SB	西	N0-13・E1-6			4、68
161	SB	西	N16-27・E4-19			4、68
162	SB	西	N14-23・E13-23			4、68
163	SB	西	N15-25・E11-24			4、68

鰻沢遺跡遺構属性表

遺　構No.	種　類	調査区	位　置	出土遺物・備考	重　複	図　版
164	SB	西	N18-28・E16-28			4、68
165	SB	西	N22-31・E23-40			4、68
166	SB	西	N26-32・E40-50			4、68
167	SB	西	N25-33・E43-48			4、68
168	SB	西	N25-36・E51-66			4、68
169	SB	西	N28-34・E63-71			4、68
170	SB	西	N28-38・E65-76			4、68
171	SB	西	N32-35・E73-77			4、68
7	Pit	西	N34・E56	縄文土器	SK107より新	
8	Pit	西	N34・E56	縄文土器		
32	Pit	西	N21・E15	石鏃		
34	Pit	西	N21・E14	縄文土器（後期前葉）	SD6より古	6
55	Pit	西	N20・E13	石鏃		
70	Pit	西	N14・E8	縄文土器		
79	Pit	西	N9・E5	石鏃		
86	Pit	西	N27・E39	縄文土器、土師器		
91	Pit	西	N29・E43	縄文土器		
92	Pit	西	N28・E44	縄文土器	SK97より新	
94	Pit	西	N27・E44	縄文土器		
160	Pit	西	N32・E65	縄文土器、不定形石器		
164	Pit	西	N36・E65	不定形石器		
194	Pit	西	N31・E76	縄文土器（大木10式新段階～後期初頭）		
206	Pit	西	N27・E24	縄文土器（大木10式）		
228	Pit	西	N25・E26	縄文土器（後期初頭）		
249	Pit	西	N29・E31	縄文土器（大木10式新段階～後期初頭）		
250	Pit	西	N22・E26	縄文土器（後期前葉）		
251	Pit	西	N24・E30	縄文土器（後期初頭）		
253	Pit	西	N22・E26	縄文土器（後期初頭）		
264	Pit	西	N24・E26	縄文土器（中期末～後期初頭）		
281	Pit	西	N27・E38	縄文土器（後期前葉）		
301	Pit	西	N27・E36	円盤状石製品	SI10より古	
311	Pit	西	N28・E29	縄文土器（大木10式新段階）		7
314	Pit	西	N27・E39	縄文土器（大木10式）		
323	Pit	西	N32・E43	縄文土器（大木10式新段階～後期初頭）		
330	Pit	西	N27・E46	縄文土器		
343	Pit	西	N33・E45付近	縄文土器（後期前葉）		
347	Pit	西	N33・E58	縄文土器（後期初頭）		
349	Pit	西	N33・E46	縄文土器（後期前葉）		
350	Pit	西	N35・E62	縄文土器		
353	Pit	西	N29・E70	縄文土器（大木10新段階）		
372	Pit	西	N33・E68	縄文土器（後期初頭）、耳飾		
373	Pit	西	N34・E68	縄文土器（大木10式新段階～後期初頭）		
382	Pit	西	N36・E70	縄文土器（後期初頭）	SX131より新	
386	Pit	西	N36・E69	縄文土器（後期初頭）、不定形石器	SX131より新	
391	Pit	西	N31・E71	縄文土器（大木10式～後期初頭）	SX131より新	
392	Pit	西	N29・E72	縄文土器		
393	Pit	西	N31・E72	縄文土器（後期前葉）		
394	Pit	西	N31・E72	縄文土器（大木10式新段階）		
399	Pit	西	N31・E71	縄文土器（大木10式新段階）	SI123より新	
409	Pit	西	N36・E74	円盤状土製品		
420	Pit	西	N32・E61	縄文土器（後期初頭）		
435	Pit	西	N23・E12	縄文土器（後期初頭）		
465	Pit	西	N25・E42	敲石		
472	Pit	西	N37・E76	縄文土器（大木10式新段階～後期初頭）		
481	Pit	西	N30・E73	縄文土器、不定形石器		
506	Pit	西	N32・E70	縄文土器		
609	Pit	西	N31・E58	縄文土器（後期初頭）		
614	Pit	西	N36・E69	縄文土器（後期初頭）	SX131より新	
617	Pit	西	N25・E35	縄文土器（後期初頭）	SK135より新	
634	Pit	西	N38・E73	縄文土器（後期前葉）		
642	Pit	西	N36・E65	縄文土器（後期前葉）		
646	Pit	西	N37・E69	縄文土器（後期初頭）		
647	Pit	西	N32・E72	縄文土器（大木10式新段階～後期初頭）		
648	Pit	西	N36・E67	縄文土器		
651	Pit	西	N27・E28	縄文土器	SI147、SI4より古	
656	Pit	西	N30・E70	円盤状土製品		
662	Pit	西	N33・E65	縄文土器（後期初頭）		
664	Pit	西	N31・E71	縄文土器（大木10式新段階）		
665	Pit	西	N27・E30	縄文土器		
228	Pit	西	N26・E26	縄文土器（大木10式新段階～後期初頭）、石鏃		
SI10-4	Pit	西	N28・E35	石鏃		
SI10-7	Pit	西	N27・E34	縄文土器（後期初頭）		
SI10-15	Pit	西	N28・E35	縄文土器（後期初頭）		
SI10-16	Pit	西	N27・E37	縄文土器（大木10式新段階～後期初頭）、石錐		
SI10-28	Pit	西	N26・E32	不定形石器		

写　真　図　版


西区
巻頭1, 3-2
8-1
5-3
8-3
9-1
3-1, 9-2
巻頭2
4-1, 2
5-2
5-5
9-4
1-1
9-3
5-4
6-1
2-3
6-2
5-1
3-3
5-6
7-2
2-2
7-3
7-1
2-1
東区
1-2

1．西区全景（東から）

2．東区全景（西から）

1．西区南西部
SI 1 住居跡付近
（南から）

2．西区西部
SI 2 住居跡付近
（西から）

3．西区中央部
SI11住居跡付近
（西から）

写真図版 2

1．西区東部
SI108住居跡付近
（西から）

2．SI10住居跡炉
（北から）

3．西区SI10住居跡
炉埋設土器
（南から）

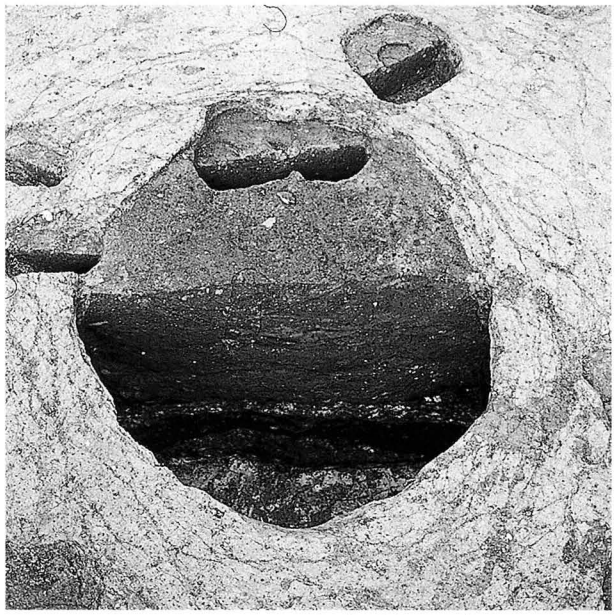
1．西区SI106
住居跡炉
（東から）

2．西区SI108
住居跡炉
（東から）

3．西区SX109炉跡
（南から）

1．西区SI147住居跡土器埋設炉（北から）

2．西区SX130土器埋設炉（東から）



3．西区SK96土壙（南から）

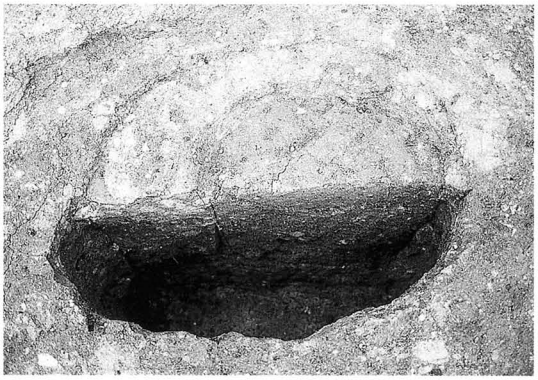
4．西区SK83土壙（南から）

5．西区SK132土壙　土器出土状況（北から）

6．西区Pit .34土器出土状況（北から）

1．西区SB94建物跡
（西から）

2．西区SB143建物跡（南東から）



3．SB94建物跡柱穴（南から）

4．SB143建物跡柱穴（東から）

1．西区SI１住居跡
（西から）

2．西区SI２住居跡
（西から）

3．SI２住居跡カマド
（南西から）

1．西区SI11住居跡
（西から）

2．SI11住居跡カマド
（西から）

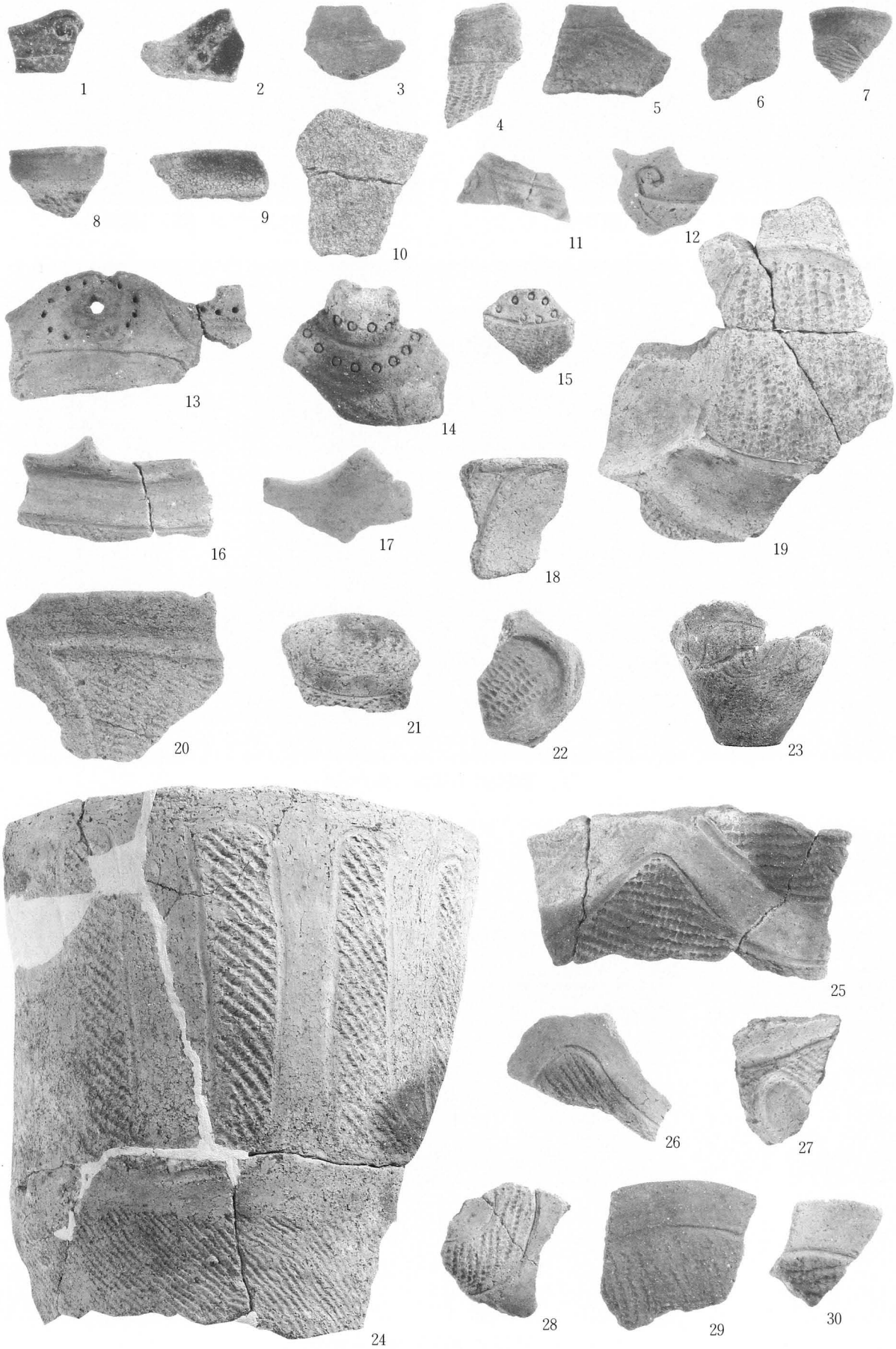
3．西区SI12住居跡
（西から）

1．SI12カマド（古）（南から）

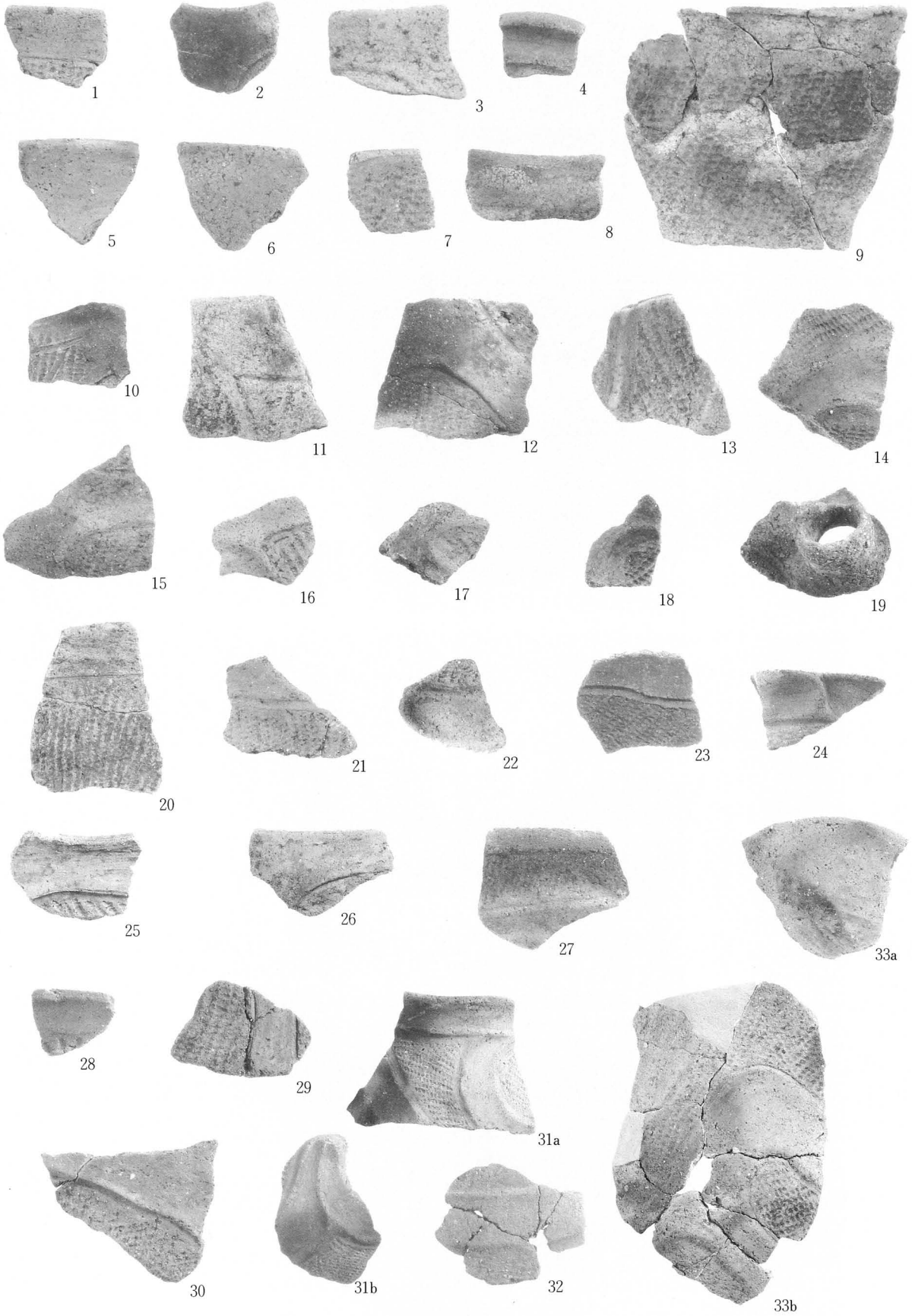
2．SI12カマド（新）（西から）

3．西区SI125溝跡（南から）

4．西区SD125溝跡断面（北から）



SI10住居跡出土土器



SI10住居跡出土土器

1a

1b

SI10住居跡炉埋設土器

1

2

3

4

5

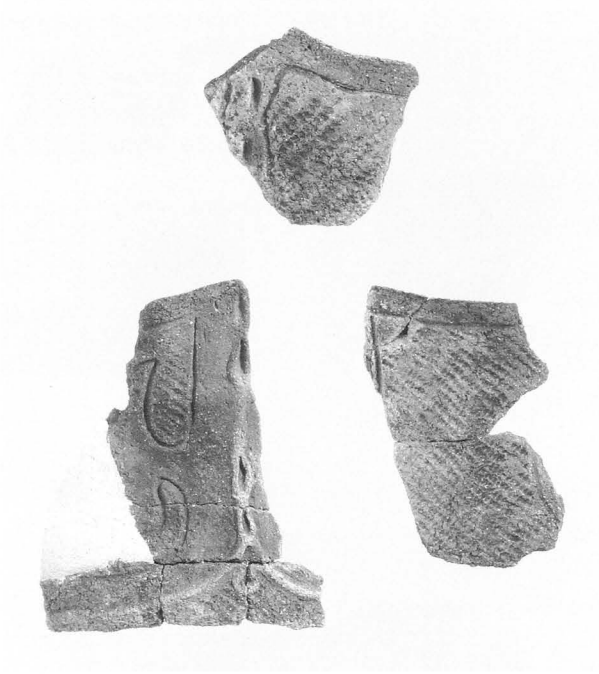
6

7

8

SI10住居跡出土土器

1



2

3

4

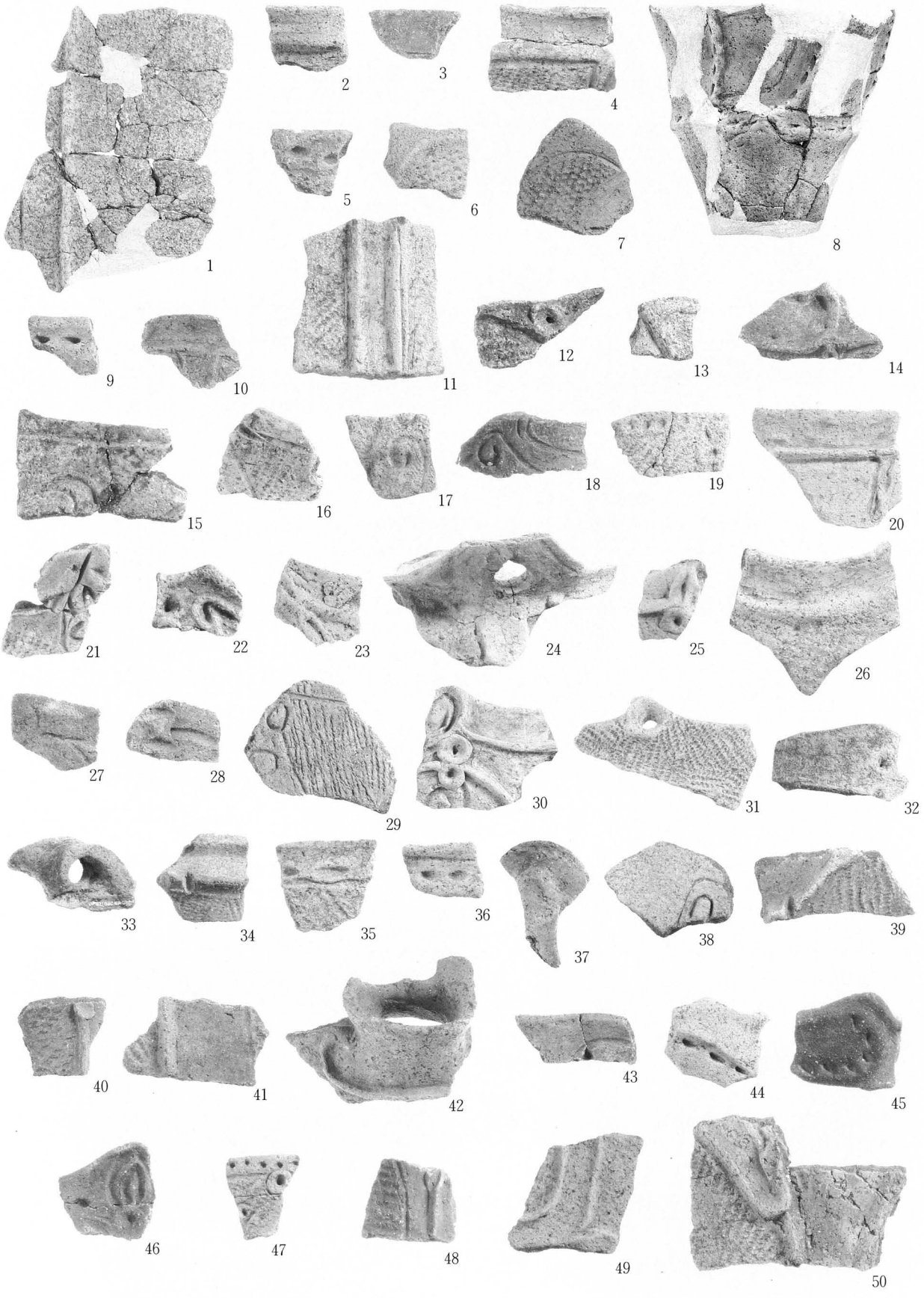
SI106、SI108住居跡炉、SX109炉跡、SK107土壙出土土器

1

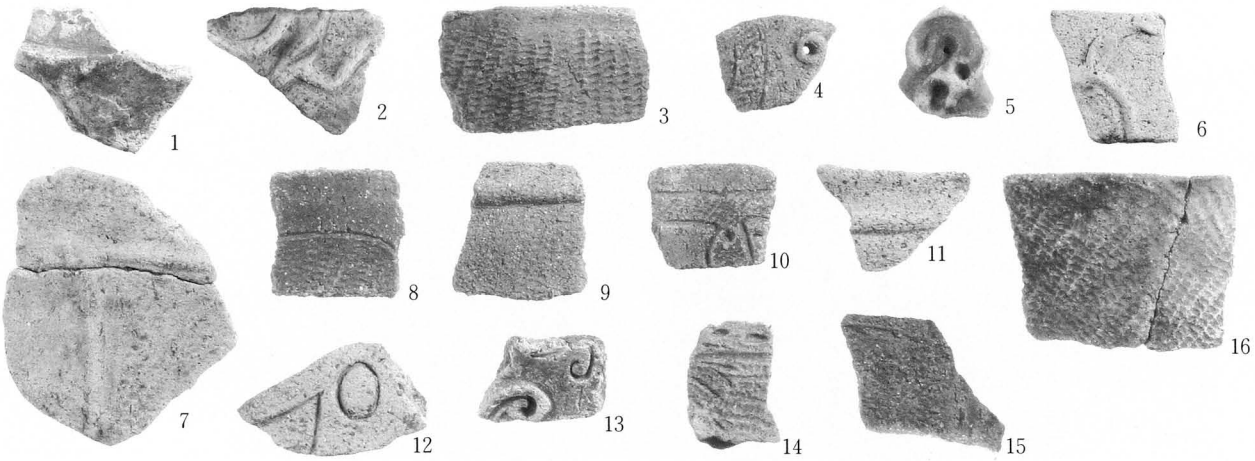
2

3

SI147住居跡、SX130、SX131炉跡出土土器



建物跡（SB）、SK86、SK110、SK27土壙出土土器



17

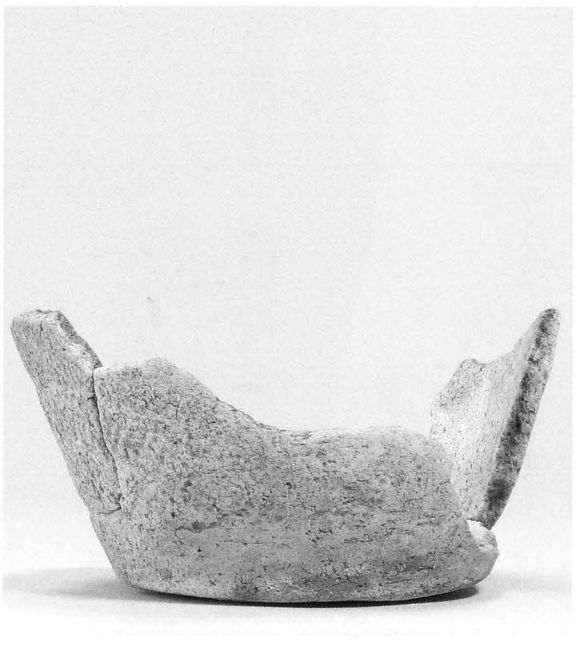
18

SK83土壙出土土器

19

1

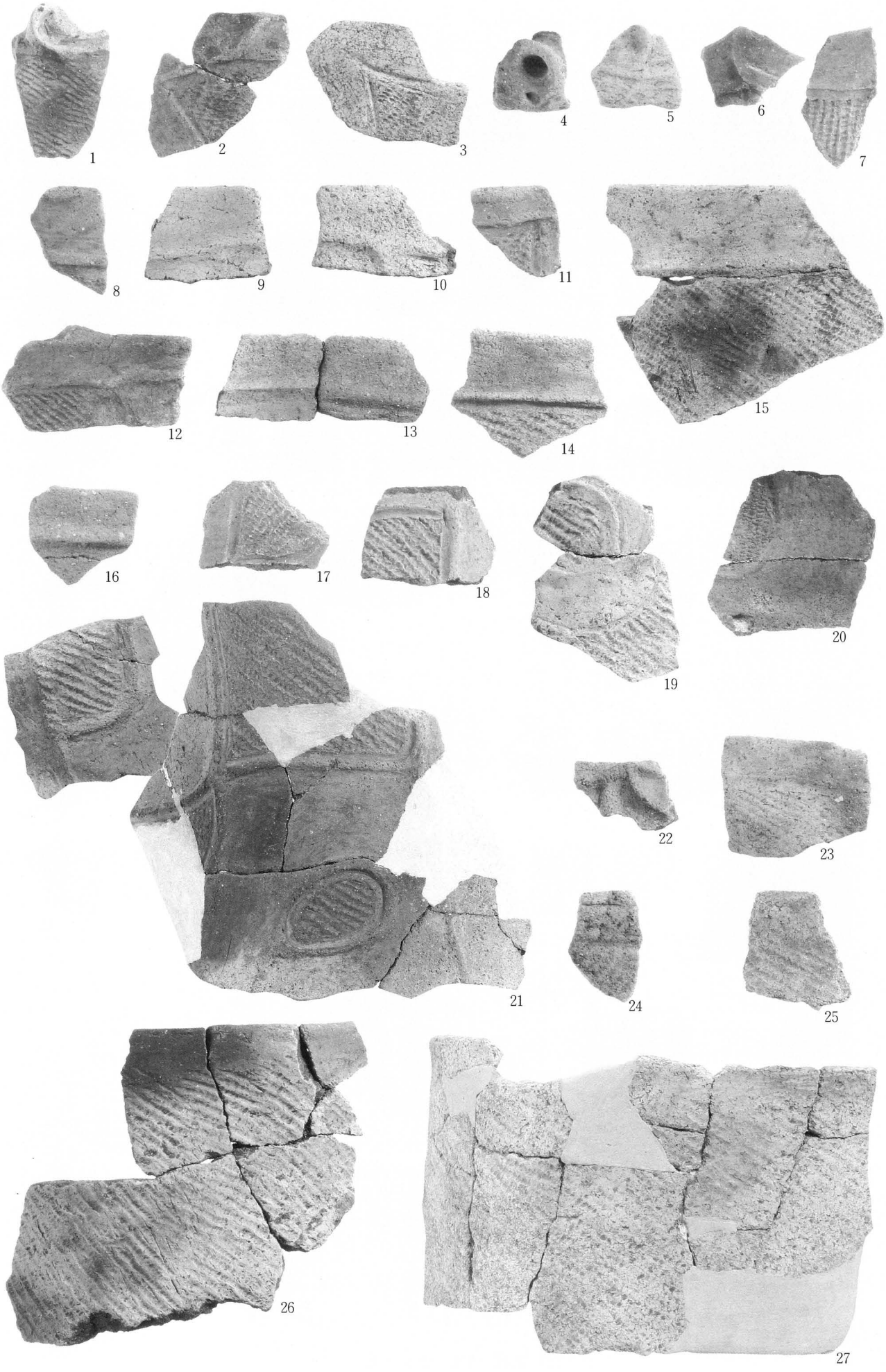
2



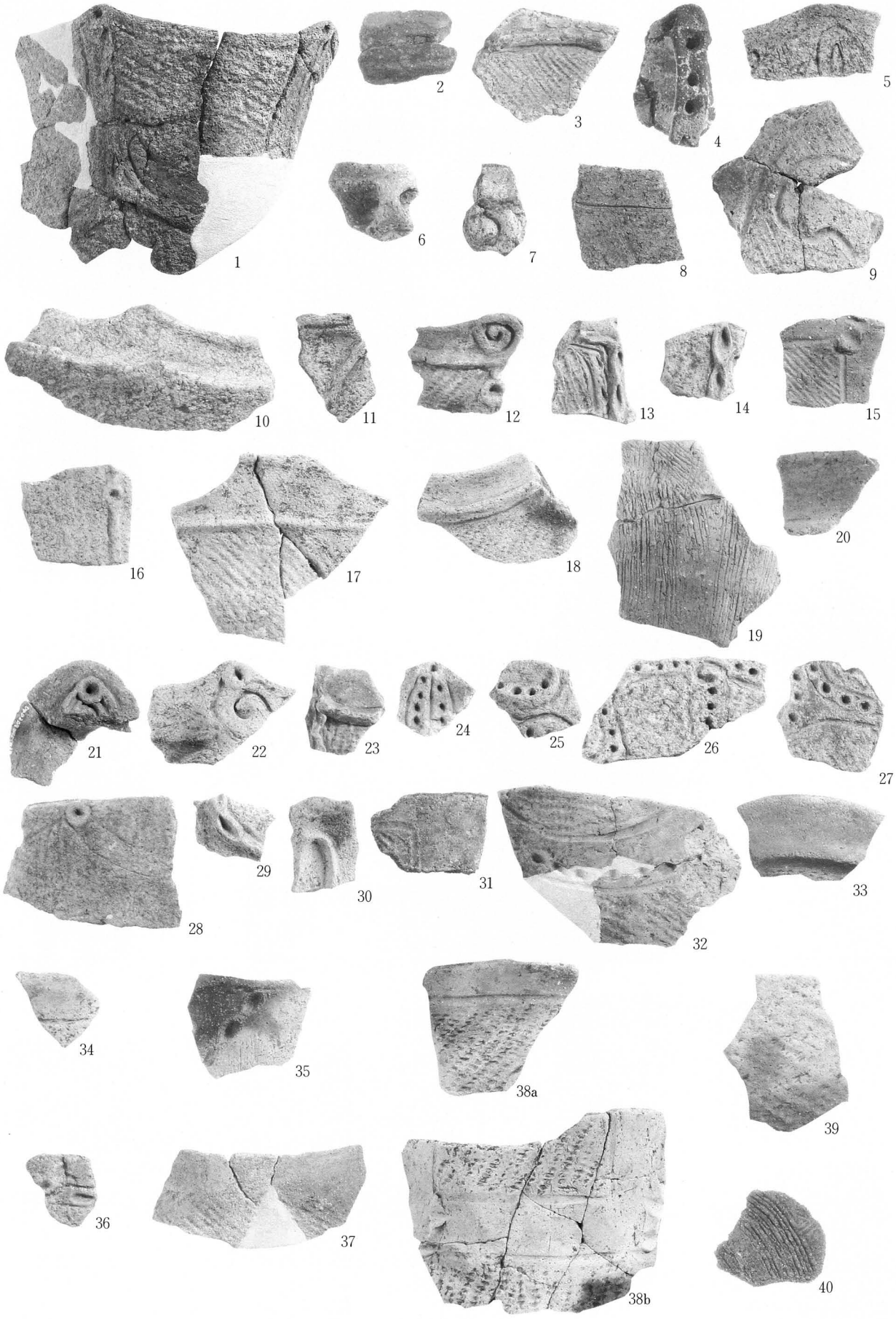
3

SK95土壙出土土器

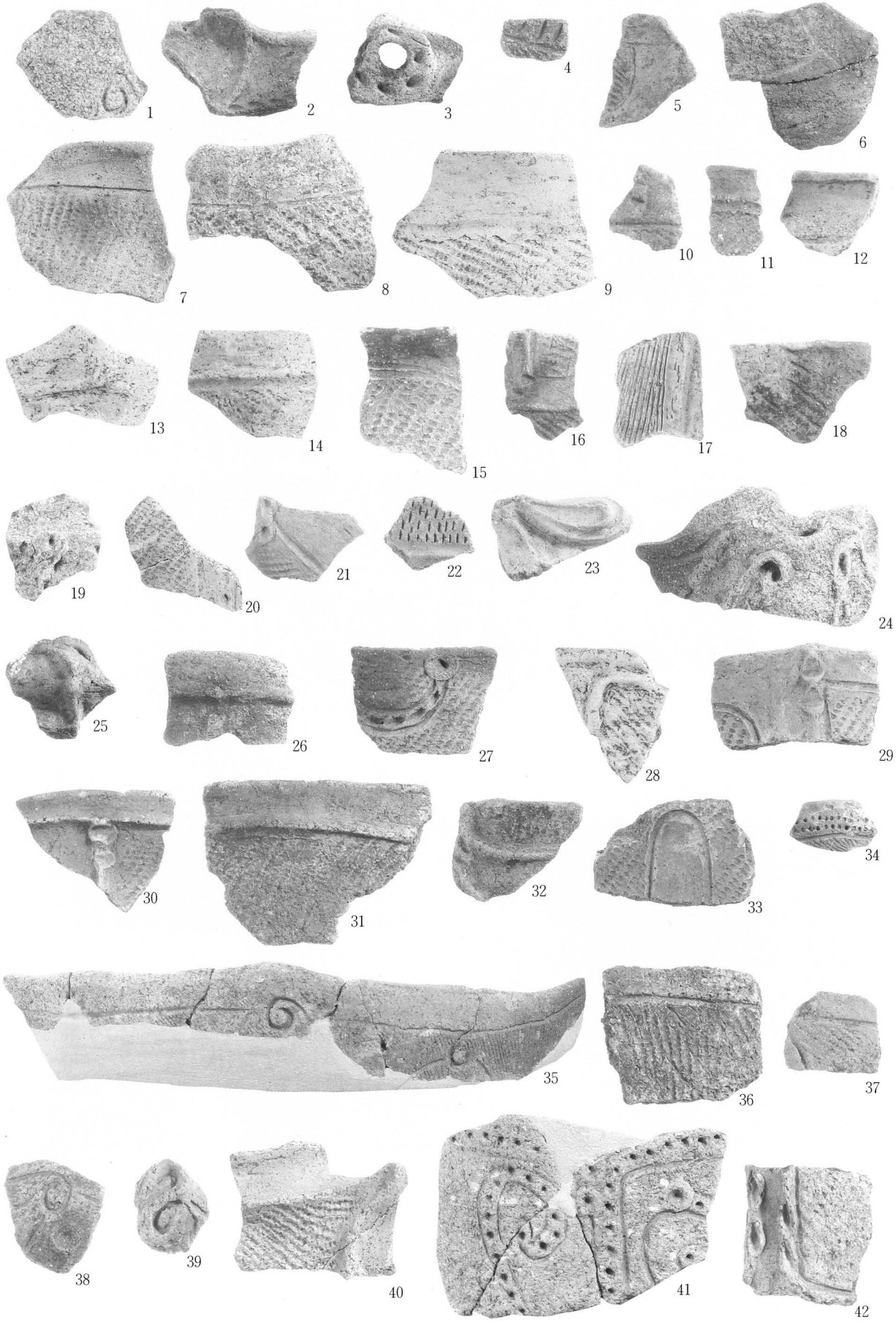
写真図版 18



SK95土壙出土土器


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
38a
39
36
37
38b
40

土壙（SK）出土土器



土壙（SK）、西区、東区出土縄文土器

1

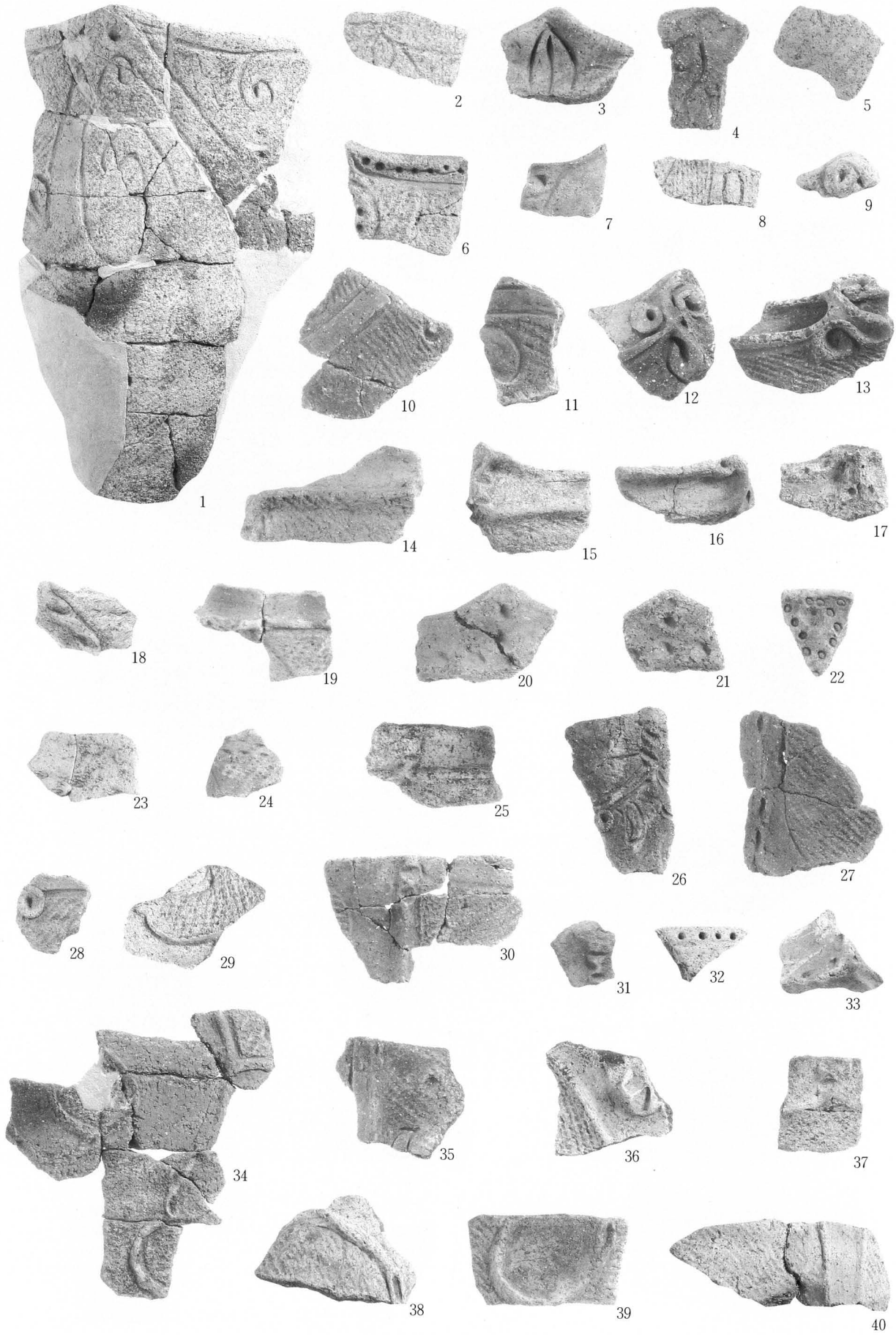
2

3

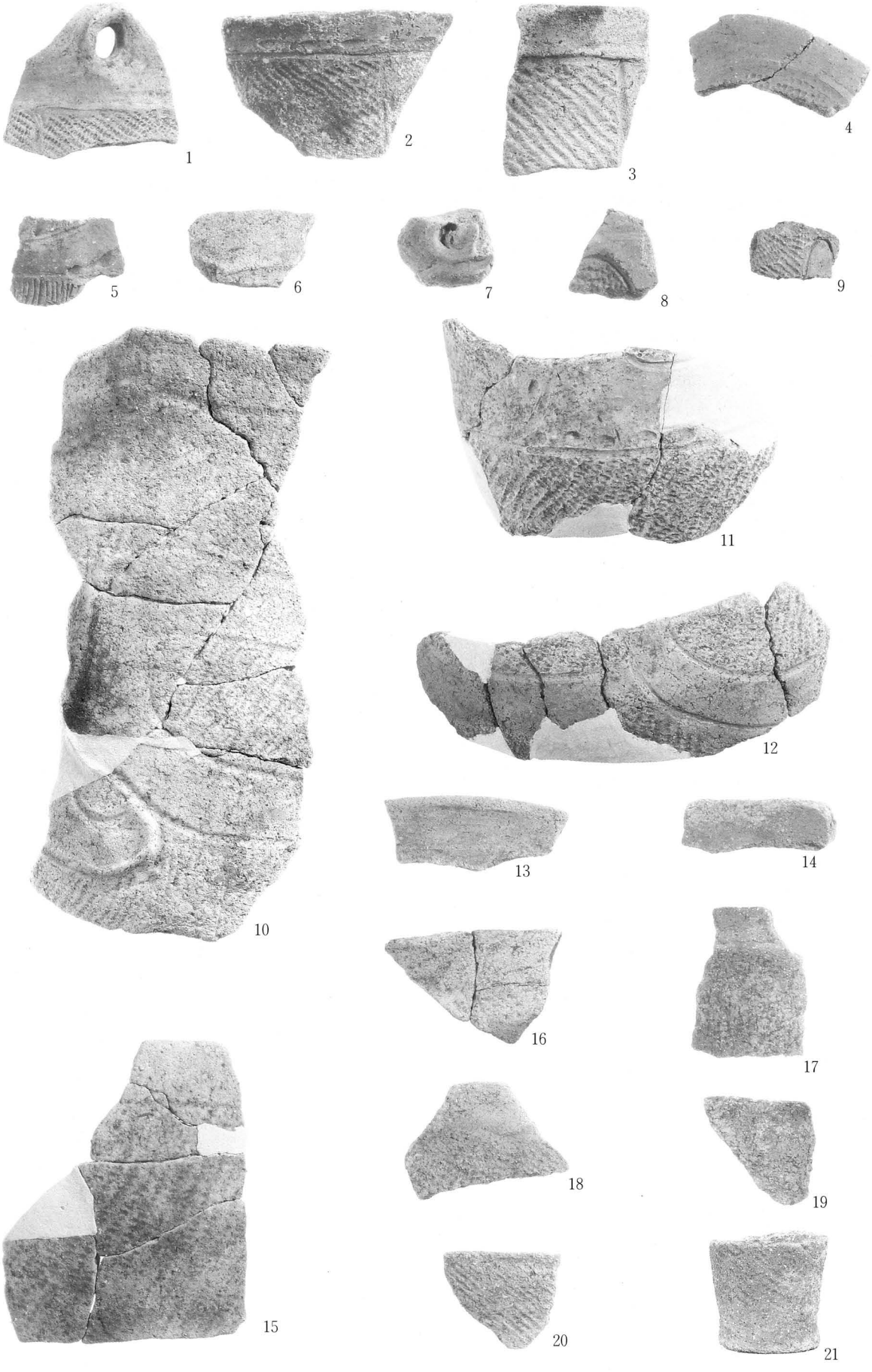
4

5

土壙（SK）出土土器



西区Pit出土縄文土器

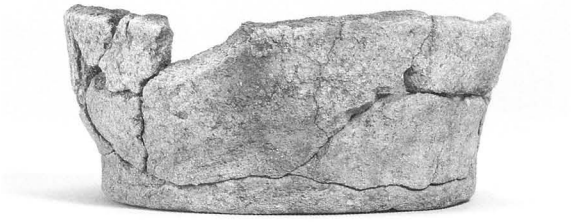


西区Pit出土縄文土器

1

2

3



4

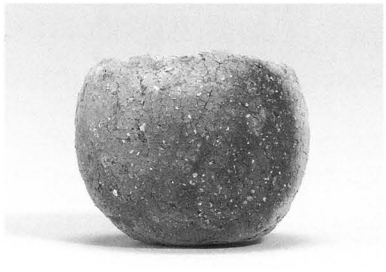
5

西区Pit出土縄文土器

1

2

3



4

5

6

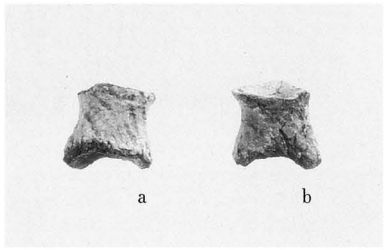
7a

8a

9

7b

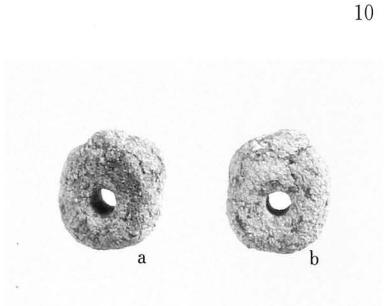
8b



10

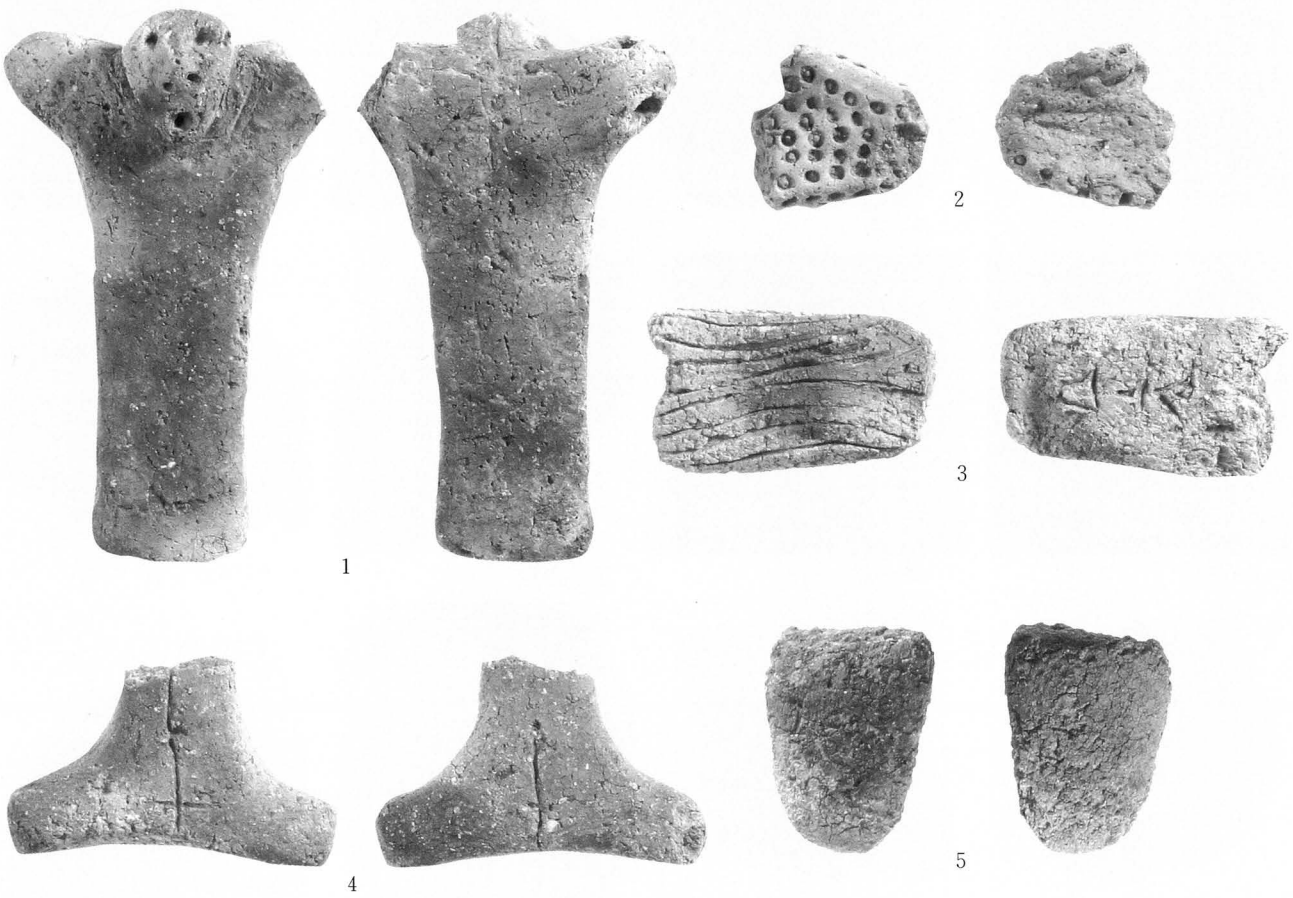
7c

8c

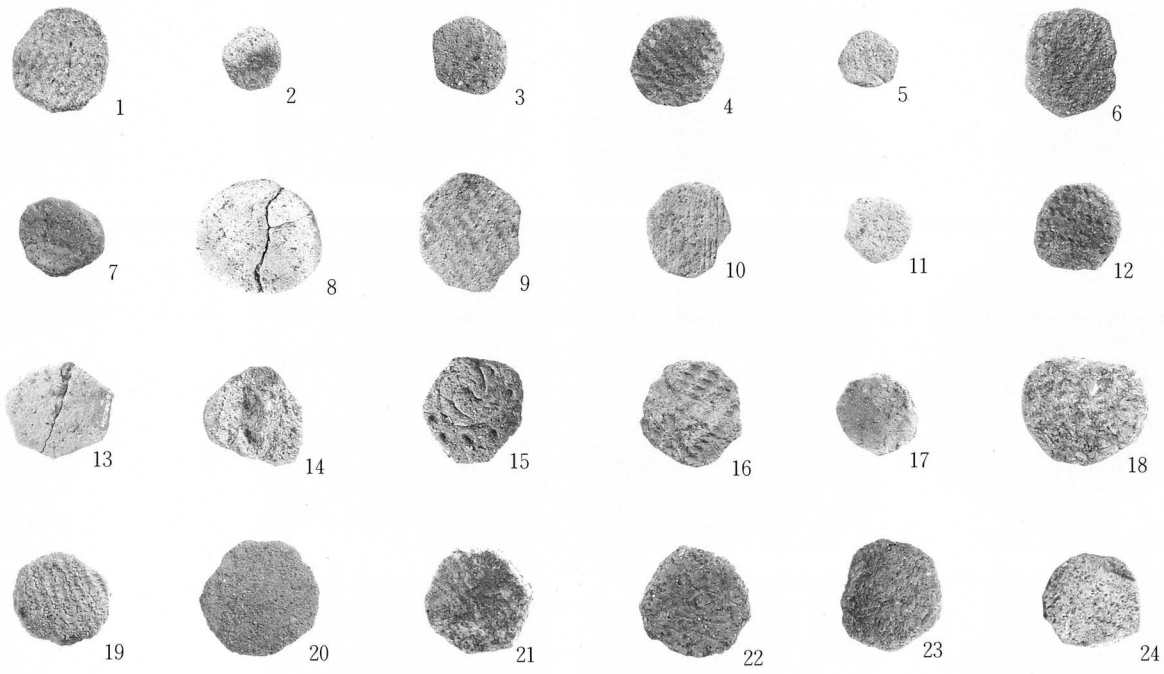


11

鰻沢遺跡出土　袖珍土器、土製品

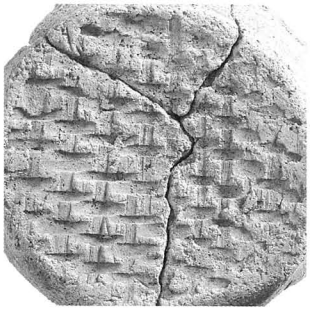


鰻沢遺跡出土　土偶、斧状土製品



鰻沢遺跡出土　円盤状土製品

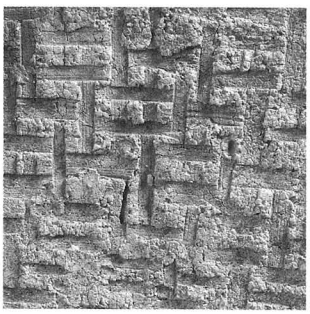
1　第33図13

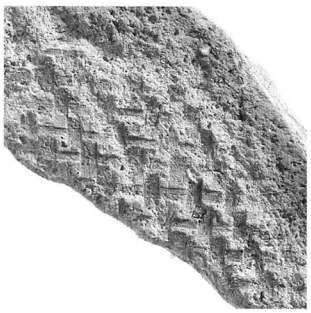

2　第48図7

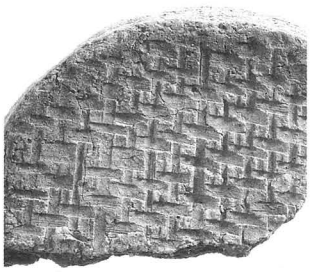
3　第42図13

4　第48図4

5　第42図14

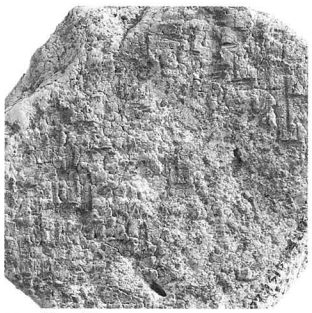

6　第43図12


7　第41図11


8　第42図12

9　第44図9

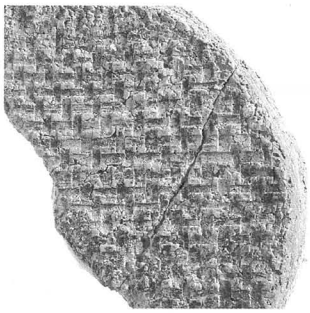
10　第44図12


11　第49図1

12　第48図6

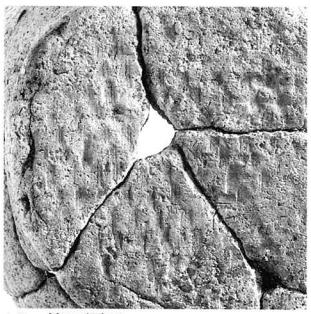
13　第48図2

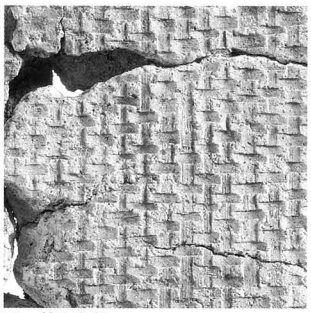
14　第48図5

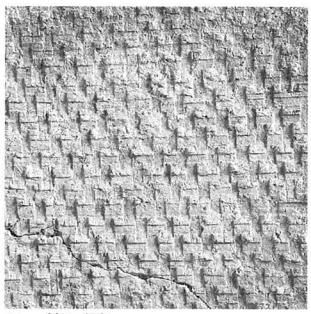

15　第48図3

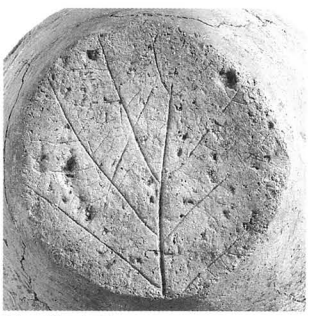
16　第33図14

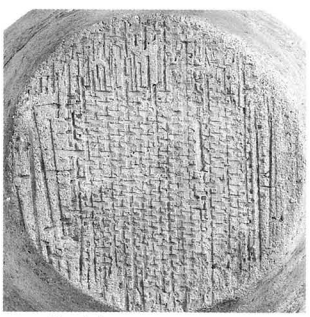
17　第48図1


18　第31図12


19　第48図8


20　第21図3


21　第17図2

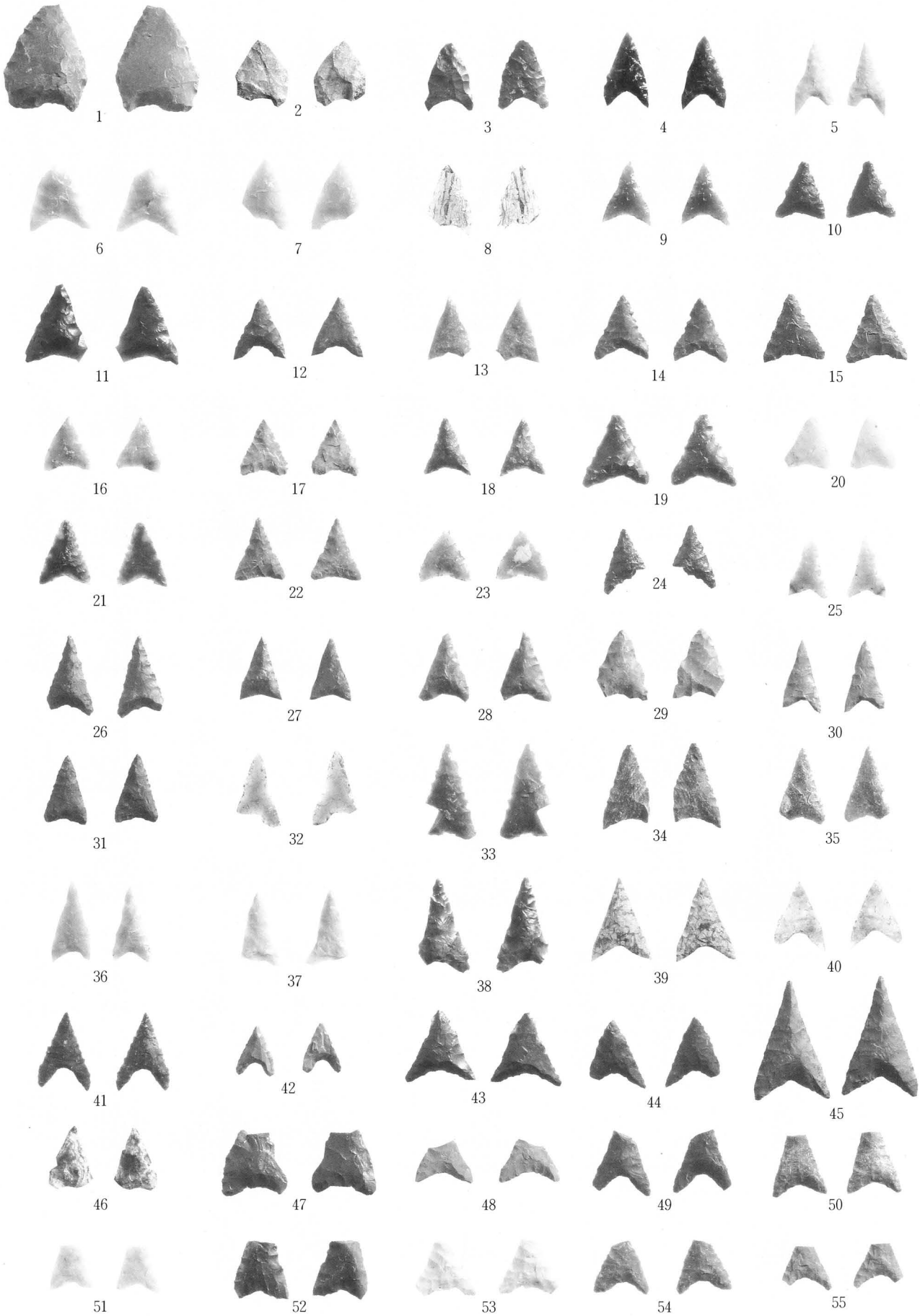

22　第21図4

23　第37図7

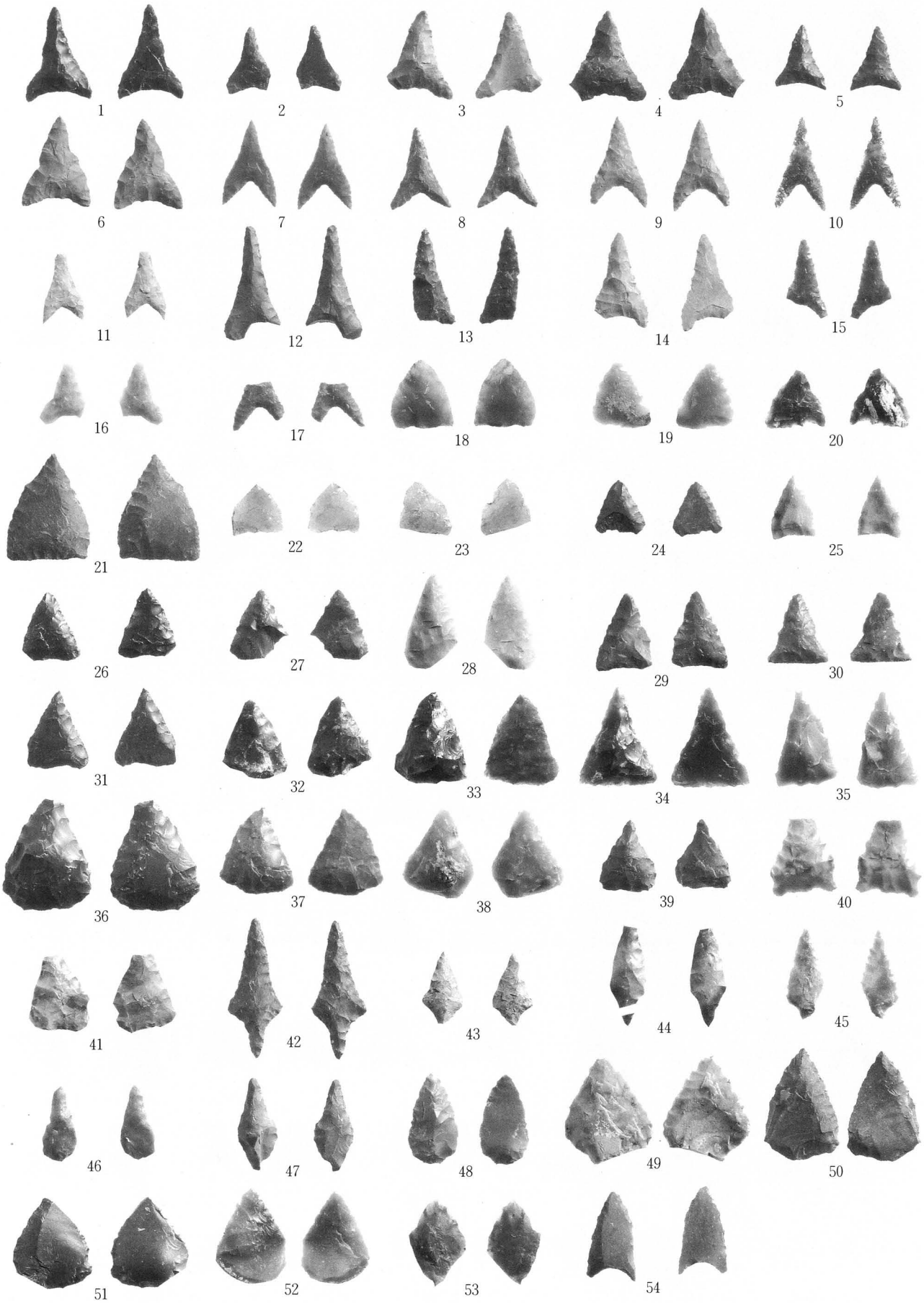
24　第44図23

写真図版 28

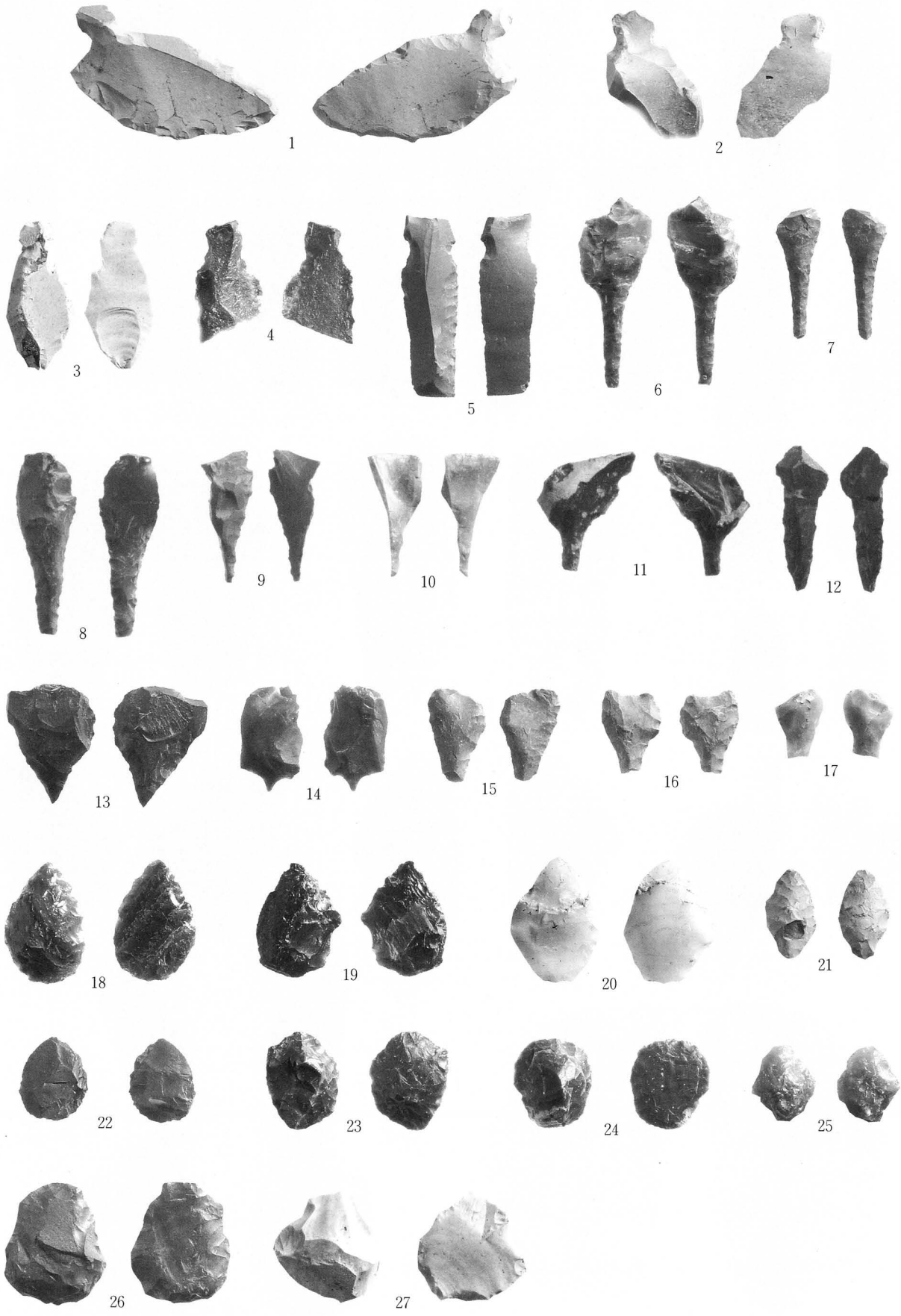
縄文土器底部



鰻沢遺跡出土剥片石器（石鏃）



鰻沢遺跡出土剥片石器（石鏃）

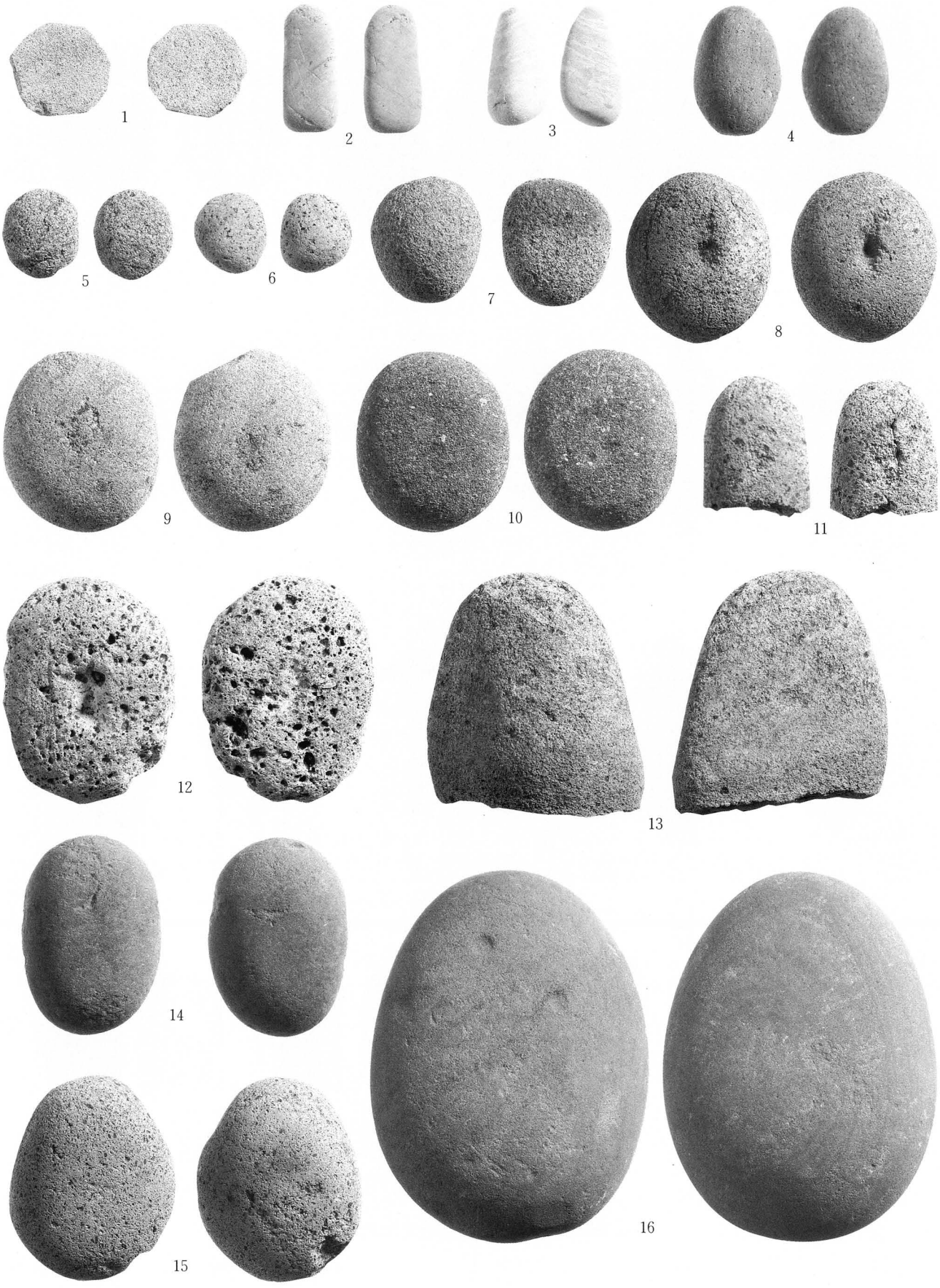


鰻沢遺跡出土剥片石器（石匙・石錘・不定形石器）

鰻沢遺跡出土剥片石器（不定形石器）

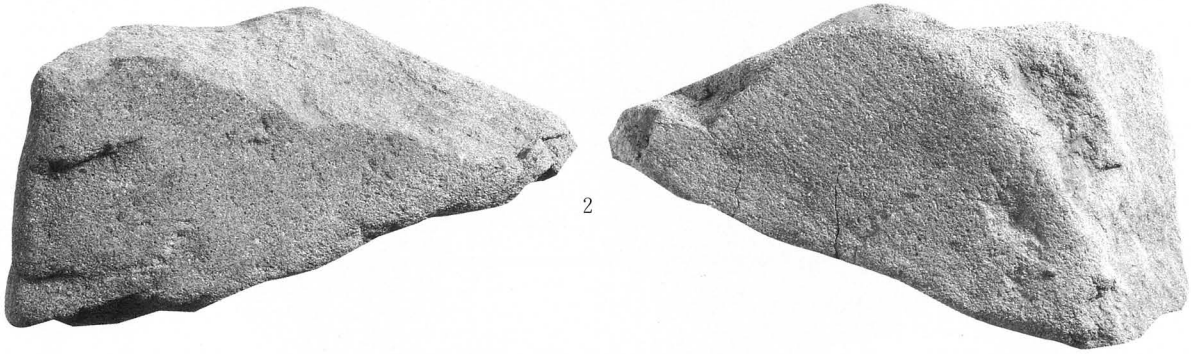
写真図版 32

鰻沢遺跡出土剥片石器（不定形石器）

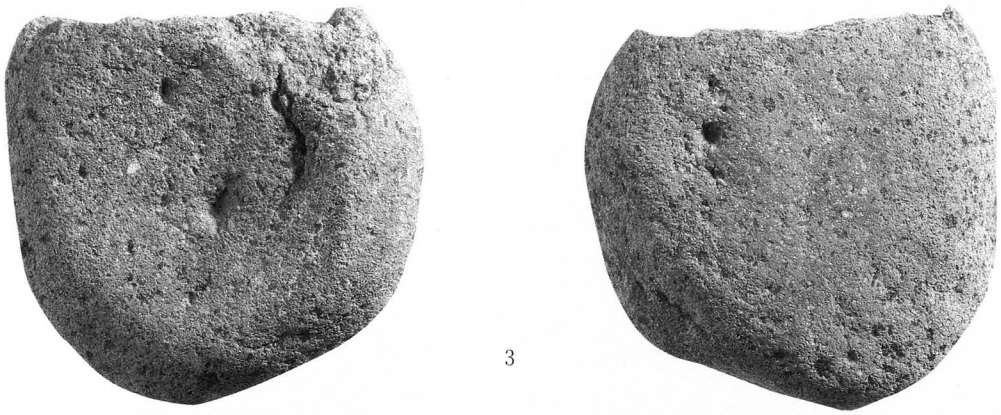


鰻沢遺跡出土　円盤状石製品、礫石器

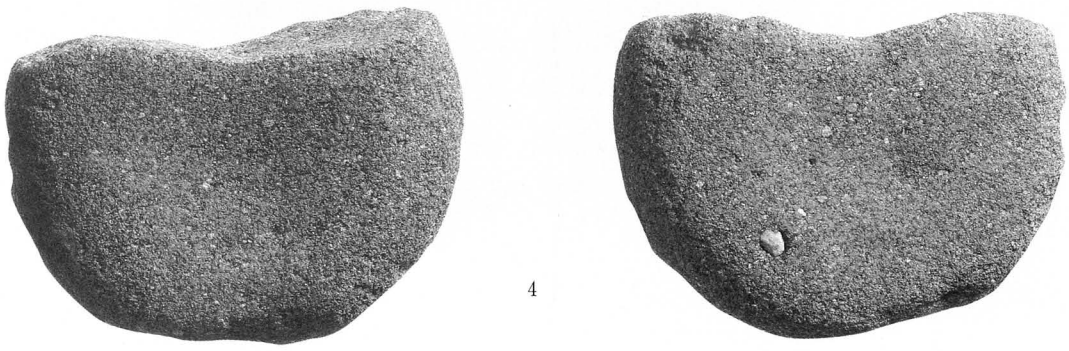
1



2



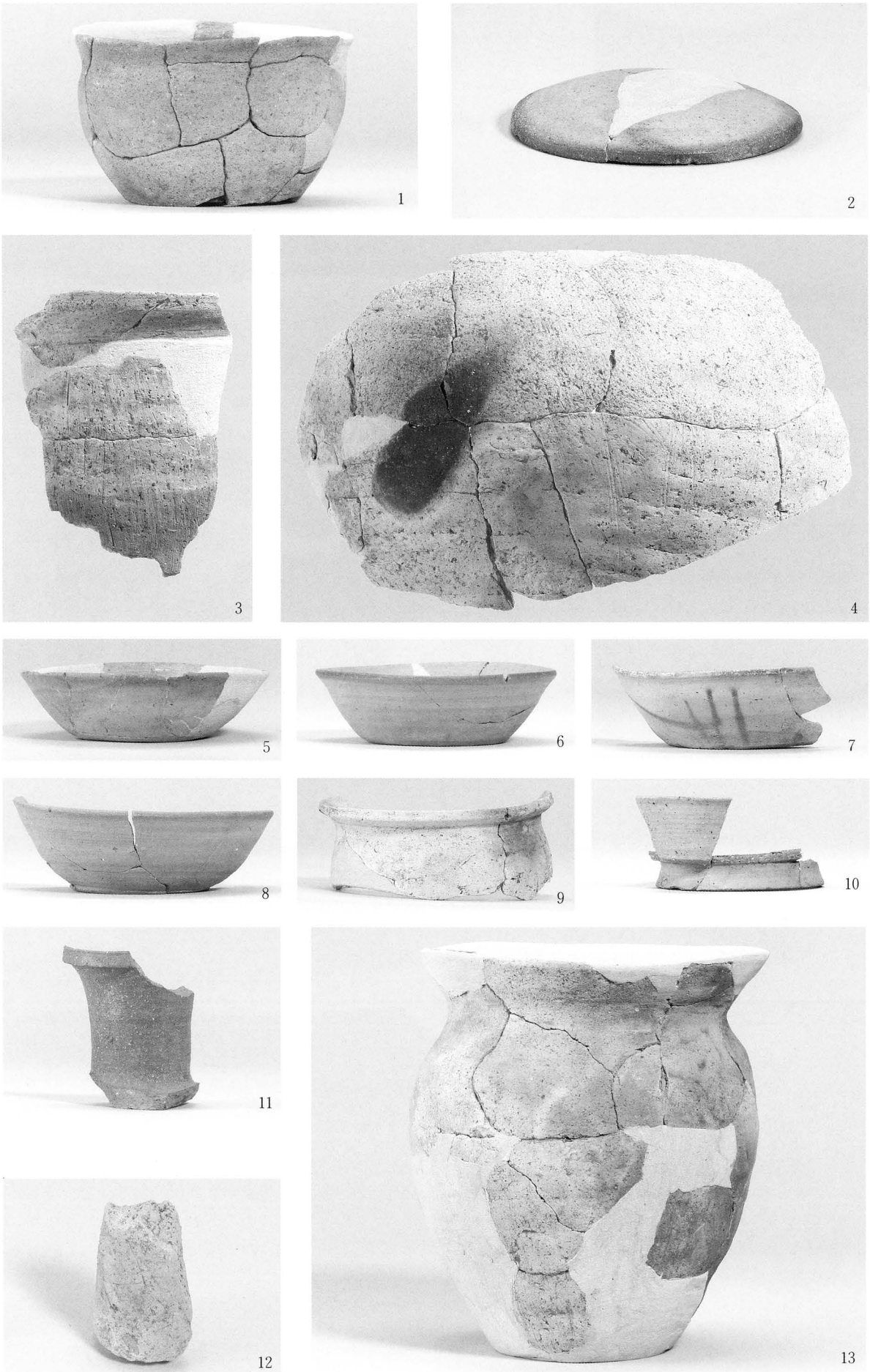
3



4

鰻沢遺跡出土　礫石器

鰻沢遺跡出土　礫石器



SI 1 、SI 2 住居跡出土土器（1～4 SI 1 、5～13 SI 2 ）

1a

1b

2

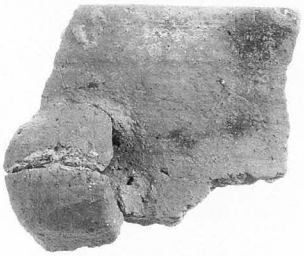
3

4

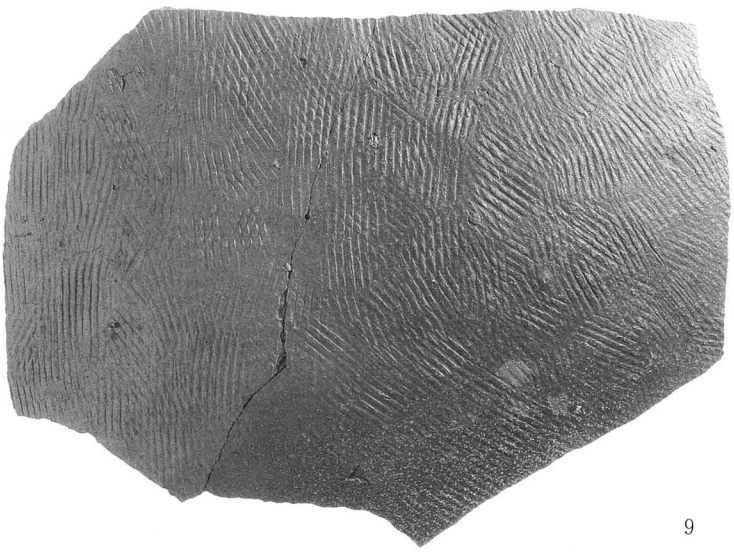
5

6

7



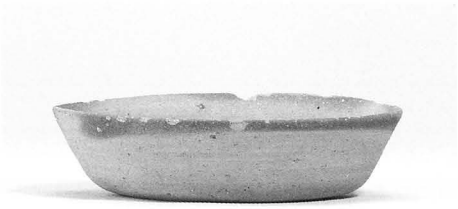
8



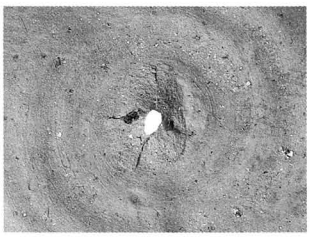
9

SI２、SI11住居跡出土土器（1 SI２、2～9 SI11）

写真図版 38



1a



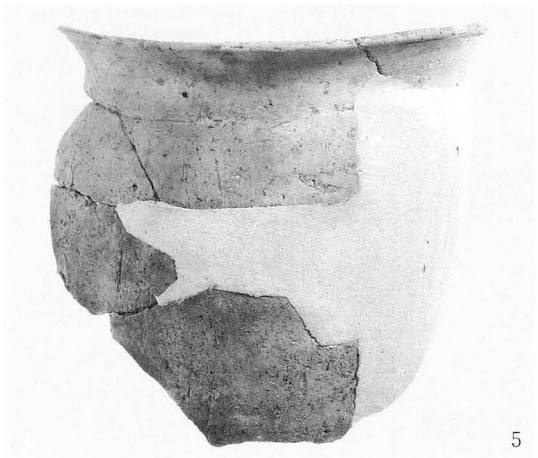
1b（底部内面）

1c（底部外面）

2

4

3



5

SI12住居跡出土土器

報告書抄録

ふりがな	うなぎさわいせき
書名	鰻沢遺跡
副書名	ふるさと農道緊急整備事業に係る町道木戸2号線改良工事に伴う発掘調査報告書
巻次	築館町文化財調査報告書第18集
シリーズ名	築館町文化財調査報告書
シリーズ番号	第18集
編著者名	千葉長彦・三浦　実・千葉直樹
編集機関	築館町教育委員会文化財保護対策室
所在地	〒987-2293宮城県栗原郡築館町薬師一丁目7-1　電話0228（22）1125
発行年月日	平成17年（2005年）2月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
鰻沢遺跡（うなぎさわいせき）	宮城県（みやぎけん） 栗原郡（くりはらぐん） 築館町（つきだてちょう） 字萩沢木戸（あざはぎさわきど）	45217	41018	38度 44分 3秒	141度 02分 44秒	2002年 6月10日～ 11月5日	約1350㎡	ふるさと農道緊急整備事業に係る町道木戸2号線改良工事
		使用測地系						
		日本測地系 （改正前）						

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鰻沢遺跡	集落跡	縄文時代 中期末～後期前葉	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土壙	縄文土器 土偶 石器	竪穴住居跡には斜位土器埋設複式炉が構築されている。
		古代	竪穴住居跡 土壙 溝跡	土師器 須恵器	
		中近世	掘立柱建物跡 土壙 溝跡		大溝は隣接する萩沢城跡の外周溝の可能性が強い。

築館町文化財調査報告書　第18集

鰻沢遺跡

印　刷　平成17年2月15日
発　行　平成17年2月25日

発　行　築館町教育委員会
〒987-2293
宮城県栗原郡築館町薬師一丁目7－1
TEL0228-22-1125

印　刷　川嶋印刷株式会社
岩手県一関市上大槻街3－11